

戦姫絶唱シンフォギア と魔神皇帝

桐野 ユウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神さまによってシンフォギア世界へと目を覚ましたが、なんと彼はマジンカイザーになっっていた。

果たしてマジンカイザーとなった彼はシンフォギア世界にてどう動くのか!!
その力は神にもなり悪魔にもなる。

目次

第一章 フィーネ編

魔神の目覚め

1

マジンカイザー、バルベルデ共和国へ

降り立つ。

8

コンサート会場に、魔神皇帝現る。

20

カイザー二課の基地へ

31

動き出した物語、新たなガングニール

40

訓練せよ立花響！魔神皇帝との特訓！！

49

現れたネフシュタンの鎧

55

デュランダル護衛任務

63

機能停止魔神皇帝

72

大決戦！！魔神皇帝たち対フィーネ！！

90

それぞれの一日。

98

第二章 早乙女博士の乱

新たな敵 その名前は早乙女

106

カイザー達言語機能を改良。

115

謎の仮面騎士

120

現れた新たな戦士！！日輪は我にあり！！

126

ゲッタードラゴン、鉄の城、偉大な勇

者、宇宙の王者現る。

135

三体の魔神 | 143

新たな敵 ネフシユタン現る!!

151

現れた剣!?最強剣士現る!! | 161

デスザラスの新たな作戦 | 170

響の新たな力。 | 182

翼の卒業式 | 188

第三章 GX編

襲い掛かってきた人形 | 198

迫りくる新たな敵、復活のガングニ

ル!! | 204

勇者復活!! | 210

イグナイトモジュール抜剣!! | 219

キャロルの正体。 | 228

カイザー達対メタルピーストドラゴン

| 237

浮上をした基地 カイザー達突撃!!

245

決戦バラオとの戦い!! | 261

第四章 コラボ小説電光戦姫シンフォギ

アSSSS

現れた赤と白の巨人とシンフォギア奏

者 | 271

新たな会合と二体の超電磁ロボ

282

ジェネシックスガオガイガーの秘策

分断作戦

カイザー達戦闘不能!? 残されたメン
バーたちの思い

303

ゼルフィールの新たな仲間

石を探せ

412

グリッドマン最大の危機

謎の敵グレートゼオライマー そして

323

同時攻撃!!

魔神がついに!!

421

合体ロボ出現!!

カリオストロの襲撃!! クリスとアリス

338

ゼルフィール出撃!!

の新たな力。

430

第五章 シンフォギアA X Z

ツヴァイウイング

444

カイザー達海外へ

繭になった響

459

錬金術師との戦い、新たな戦士たち登

アダムとの決戦!!

474

場!!

約束を果たす為に

490

マジンカイザー対カリオストロ

カイザー学園へ

496

第六章 ミケーネ帝国と恐竜帝国の襲来

!!

暗黒大將軍現る。 | 501

真マジンガーとマジンカイザー |

510 ミケーネの総攻撃！SONG基地大苦

戦 | 517

色々形態のカイザー。 | 525

色々形態カイザーその2 | 530

恐竜帝国の総攻撃。 | 539

ミケーネ帝国襲来 | 545

カイザーとブラックに異変 | 555

果たし状 | 562

第七章 ゼルフィール再び

たくさんのネフィリム | 574

グリッドマンたちがやってきた理由

583 現れたのはグリッドマン!? | 593

カイザーとグリッドマン出動不能!? 新

たな武装合体!! | 600

カイザーウエポン | 606

ガルバトロン出撃 | 613

ゼルフィールの笑い。 | 624

これからの課題。 | 633

サイバトロンとの共闘 | 642

暴走ゼルフィールを打ち砕け!! マジン

パワー!! | 648

平和な一日
第八章 シンフォギアXV編

平和な一日	657
謎の棺	662
コンサート会場を守れ!!	670
魔神対魔神	678
激突	684
ラゴウ襲来。	689
ラゴウウィルス	694
ラゴウのデータをとれ	697
兜甲児達危機!!	704
どこかの場所	707
甲児再び目を覚ます。	714
操られしカイザー。	718

第一章　フイーネ編

魔神の目覚め

アメリカにある研究所・・・そこで燃えている研究施設の中で今、二つの巨影がぶつかろうとしていた。

一つは白い体に生物のような怪物・・・名前はネフィリム。生物型完全聖機物の一体だ。そしてもう一体・・・黒い体を持ち、胸部にはの文字があしらわれた真つ赤な宝玉がはめ込まれていた。さらに両側の角は上に伸びており、その物体は有機的な見た目のネフィリムとは違い機械そのものだ。

「あ、あああ・・・ああ・・・」

それを見ている少女は震えていた。二体がにらみ合っている状態で互いに様子を見ている光景に恐怖して。

???
side

歌が聞こえ、俺は目を覚ました。あたりが暗かったので適当に手などを動かして壊してみた、なんだか知らないが燃えていたんだよな・・・

俺はあたりを見てとにかく動こうとする。だが目の前で、白い化け物が女の子に襲い

掛かろうとしていた。

(させるか!!)

俺は咄嗟に体当たりでその怪物を吹き飛ばした。俺はその少女の無事を確認し、化け物に向き直る。だがおかしい・・・何だか周りの物が小さいな。何か鏡みたいなものあるかなと思いい俺が見ていると、ガラスに姿が映る事で自分の姿がはつきりとわかった。同時に俺は、ひどく驚く事になる。

その姿は間違いなく、俺が大好きなスーパーロボット・・・マジンカイザーそのものだからだ。

(まじかよ・・・確かにマジンカイザーの力をくださいとお願ひしたけど、まさかマジンカイザー自体になるなんて思ってもみなかった・・・しかしあの女の子、どこかで・・・)俺が考え事をしていると、白い化け物が俺に襲い掛かってきた。

『ぐおおおおおおおおおおおおお!!』

(やべ!!)

避けようとしたが、あの子は先ほどから動けない状態だ。もし俺が避けたら、化け物に潰されてしまうだろう。仕方がない!!

(うおおおおお!!マジンカイザーをなめんじゃねエエエツ!!)

踏ん張って化け物を受け止め、俺は豪快に投げ飛ばした。そして俺は化け物に鋭い一

撃をお見舞いするために右手を前につきだす。

使い方が何となくわかった。腕に付いたドリルエッジ型アーマーは回転を始め、口ケツト噴射で下腕部を丸ごと一気に放つ。

(くらいやがれ!!ターボスマッシュャーパンチ!!)

これがマジンガーZでいう口ケツトパンチ、ターボスマッシュャーパンチだ。その威力はマジンガーZ及びグレートマジンガーのドリルプレッシュャーパンチを遥かに上回る。当然だ。無重力と言う特殊条件下でしか精錬できない、超合金Zを超える超合金NEW—Zαで出来た外装によって、衝撃エネルギーの許容量が桁違いに上がっているのだから。

『があああああああああああああああ!!』

その化け物はターボスマッシュャーパンチを受けて吹き飛ばされる。俺は腕が戻った後に一気にけりをつけるためこの技を使おうとしたが・・・

(まずいな、よく見たら後ろに人がいる。つまり、大きな技をここで使ったら後ろに飛び火しちまうって事だ・・・よし!)

俺は頭部についている角を前に倒し、比較的周りへの被害が少ないあの技を放つ。

(冷凍ビーム!!)

角から放たれた冷凍ビームが化け物を凍らせた。俺はそれをつかんで外へとつまみ

る。

「話せるのですか!？」

『アア、ソウラシイ。先程ノ続キダガ、気ニスルナ。俺モ、君ノ歌ガ聞コエタカラ目ヲ醒マス事ガ出来タ。アリガトウ・・・俺ハ去ルトシヨウ。元氣デナ』

俺は立ち上がって振り返り、何故かあると確信出来たカイザースクランダーを呼んで撤退しようとした。

「せめて!!名前を!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

名前、か・・・俺の本来の名前はもう使えない。なら俺が名乗る名前は・・・

『・・・カイザー』

「皇帝?」
カイザー

『魔神皇帝・・・ソレガ、俺ノ名ダ』
マジンカイザー

俺はそのままカイザースクランダーを使い飛び立つ。そういえば名前を聞いてなかったな・・・まあいいだろう。気にせずにカイザースクランダーで空を切った。

??? side

「魔神、皇帝・・・」
マジンカイザー

それが私、セレナ・カデンツアヴナ・イヴを助けてくれた人?ロボットさん?で、い

いかな。

「セレナツツ!!」

「姉さん!」

後ろからマリア姉さんやママ、調や切歌が、泣きながら私の所へとやって来た。

「ああ、良かった・・・所でセレナ、ネフィリムからあなたを助けたあのロボットは？」

「・・・行つてしまいました。でも・・・」

「でも?」

「名前は教えてくださいました、マジンカイザー魔神皇帝と・・・」

「マジン・・・カイザー・・・」

「マジンカイザー! みたかったデース・・・」

「うん・・・セレナを救ってくれた人? じゃない、ロボットだっけ」

「そう・・・私を助けてくれた・・・また会えるかな?」

そう言つて私は空を見上げた。マジンカイザー魔神皇帝さんが飛び去つた方向を。

セレナ side 終了

一方その頃マジンカイザーは・・・

(ひええエエエエエエ!)

『その飛行物体! とまれ!! 止まらなければ撃つぞ!!』

現在、アメリカの空軍から攻撃を受けていた。ミサイルなどがマジンカイザーに当たることが超合金NEW-Zαで覆われているマジンカイザーにはビクともしない。

マジンカイザー自体は人を落とすわけにはいかなないので、海の中へ突撃する事にした。そしてわざと爆発するように見せるため、ギガントミサイルを発射させて爆破する。

『なぞの飛行物体爆発！撤退する』

（ふう、危なかった。やはり、大きいままじゃ危ないな・・・せめて小さくなれば・・・）
彼がそう願うと、マジンカイザーが輝き体が人間サイズへと縮んだ。

（ほほう、すごいなこの体。そう言や、さっきの子が話してたの英語だったな。翻訳機能も付いてるとは・・・だが、問題はエネルギーだよな。この世界に光子力エネルギーがあるとは限らんし・・・ってあれ？エネルギーが減ってない？ファイアーブラスターって、確かかなりエネルギー喰うはずなのに・・・）

マジンカイザーは考えていたが・・・

（・・・まあいいか。とりあえず適当に潜水して、そのまま日本の方へと向かうとしよう）
すぐに開き直った。だが彼は知らない。自分が日本とは別方向へと向かっている事を。

マジンカイザー、バルベルデ共和国へ降り立つ。

魔神皇帝 side

アメリカの飛行機から逃れた俺は肩のカイザーブレードを抜いて木を切っていた。武器がどれくらい使えるのか試すためだ。結果として、全ての武装が使用可能となっており、胸部のファイナルカイザーブレードも使える事が分かった。

現在の大きさは180cmほどになっている。大きさまで自由に変えることが可能になっているとは思ってもなかった。

『ん？何ノ音ダ？爆発ノ音ガ聞こエキタ・・・カイザースクランダー！』

カイザースクランダーを装着した俺はすぐに現場の方へと向かう。音は、俺が向かっている方向から聞こえてきた。爆発？もしかして雪音夫妻が爆発で死んでしまったのか!?

『急ガナイトナ！』

俺は全速力で夜の空を飛ぶ。その先で、何かが光っているのが見えた。間違いない、テロが起こったんだ。という事は、雪音夫妻はその辺を逃げているはず・・・

『・・・見ツケター！』

魔神皇帝 side 終了

「はあ．．．はあ．．．」

「クリス頑張るんだ!!」

クリスと呼ばれた少女と共に逃げている男性と女性．．．だが後ろからは、彼らを狙う兵士たちが銃を持って追って来る。雪音雅律とソネット・M・ユキネは願った。

(私たちはどうなってもいい．．．娘を．．．クリスだけでも助けてください!!)

「やっど追いついた。よし子どもはつれていけ!!」

「嫌だ．．．嫌だ．．．助けて．．．助けて!!」

「無駄だ。助けを求めても誰も来ない」

確かに原作では誰も助けてくれない．．．だがこの世界にはイレギュラーな存在、魔神皇帝がいた。クリスが目をつむっていると、突然何かが体当たりで兵士を吹き飛ばす。

「え?」

クリスは目を開け、自身を支えている者の姿を見た。王冠のようなものが頭に付いた、厳ついロボットだ。

「ロボット．．．さん?」

『モウ大丈夫ダ、君ノ「助ケテ」トイウ明日ヲ望ム声ガ、コノ俺ニ届イタカラナ!』

マジンカイザーはクリスをゆっくりと降ろし、兵士の方を向く。兵士は持っている銃などを構えた。

「な・・・なんだてめえ!!」

『悪イナ。貴様等ノヨウナ下郎共ニ名乗ル程、軽イ名ハ持ツテイナイ!』

マジンカイザーは兵士たちの方へ向き直り、重々しく足を進める。兵士たちは持っている銃をマジンカイザーに向けて発砲した。

「ロボットさん!!」

クリスが叫ぶが、マジンカイザーは振り返らず弾を受け続ける。マジンカイザーの装甲を形作る超合金NEW—Zαは、弾丸の雨霰を浴びようと凹み所か傷付く事さえ無かった。

「どけ!!これでどうだ!!」

男がロケットランチャーを取り出し、マジンカイザーに向けて撃ち込む。マジンカイザーはロケットランチャーを受け、爆音と共に発生した大量の煙にその姿を隠した。

雪音親子は、自分たちのせいでマジンカイザーが破壊されてしまったと思い跪く。

「あ・・・ああああ・・・」

クリスは目から涙をこぼした。助けてくれたロボットが、ロケットランチャーを受けて爆発してしまった事に。

「はっはっはっは!!俺たちの邪魔をするからだ!!さいてさっさと・・・」

『ドウシタ・・・ソナ攻撃ガ、コノ俺二効クトデモ?』

「な!!」

「ロボットさん!!」

全員が声をした方を見る。風に飛ばされて煙が晴れたそこには、無傷で立っているマジンカイザーの姿があった。彼は両肩部に手を持っていき、現れたグリップを引き抜く。両刃の直剣を構え、彼は兵士たちに突撃した。

「撃て撃て撃て!!」

隊長と思われる人物はマジンカイザーに対して攻撃しろと指示する。兵士たちはマジンカイザーに有りったけの銃火器の弾丸を放った。

彼は気にせず、持っているカイザーブレードを振るう。彼が狙っているのは、兵士たちが持つている武器だけだ。

(流石に、人殺しをする訳にはいかないからな。ターボスマッシュヤーパンチやファイヤーブラスター、ルストトルネードは使えない。だから、カイザーブレードで武器だけ切り落とす!)

兵士たちはマジンカイザーによって武器を失っていく。誰もが次の行動をとることは出来ない。カイザーの迫力に腰を引いてしまい、誰もが恐れている。

一人の兵士はカイザーに向けてこう叫んだ。

「あ……悪魔……」

『……………』

（悪魔か……まあ、マジンカイザーは神にも悪魔にもなれるほどの力を持っているからな。だが俺は、この力で悪魔になったりはしない。たとえ悪魔と呼ばれても……そして、これがラストだ!!）

カイザーは最後の一人の武器を切り落とし、兵士の首もとにカイザーブレードを突き付ける。

「ひい!!」

『30秒待ってヤル……早く消エ口。俺が、完全二怒ル前……』

「全員退却!!逃げろオオオオオオオオオ!!」

兵士は必死になって逃げていく。カイザーは敵がいなくなったのを確認し、カイザーブレードを両肩部に収納。雪音夫妻の方へ振り返った。

「ロボットさん……本当にありがとう……」

「あなたは私たちの救世主です」

『気ニスルナ。手が届クナラ、困ッテイル人ヲ助ケルノハ当然ダ。少ナクトモ、俺ハソウ思ッテイル。ソレニ俺ハ、助ケテトイウ声ヲ聞イテヤツテ来タ。チョットマツテイロ』

「「？」」

マジンカイザーは後ろを振り返り、地面の方を向いて口部のスリット部分から強烈な竜巻を発生させた。その技はルストトルネード。威力はマジンガーZのルストハリケーンよりも桁違いに高く、カイザー自身も反動に負けて後退する程だ。

「一体、何をしたのですか？」

『コノ辺二帯二ハ、地雷ガ埋メラレテイル。俺ノ技デ腐敗サセテオイタ』

マジンカイザーは用がないだろうと、カイザースクランダーを呼び去ろうとする。

「待って!!」

しかし、待ってと呼び留められて振り返った。クリスはカイザーの所まで駆け寄り、彼の手を掴む。

「私は……私は雪音 クリス!!あなたの……あなたの名前を教えてください!!」

『………カイザー』

『カイザー?』

『……俺は魔神皇帝……ソレガ俺ノ名前ダ』

「また……会えるよね？」

『ソレハ……分カラナイ……』

その言葉を聞いてクリスは涙目になる。カイザーも泣かせるのはちよつと思ひ、

言葉を続けた。

『ダガ、クリスガ立派な大人になつた時、ピンチの時、俺ハ駆ケツケヨウ』

「本当?」

『アア・・・約束ダ』

彼はクリスと約束して、上空で待機しているカイザースクランダーの方へ振り向く。そして助走を付けジャンプし合体して、今度こそ日本の方へと飛び立った。

クリス side

「マジン、カイザー・・・」

テロで必死に逃げていた私たちを助けてくれたロボットさん・・・私たちは今、日本に戻る便の飛行機に乗っている。魔神皇帝さんが竜巻で地雷を壊してくれたおかげで、無事に戻る事が出来た。

「パパ・・・ママ・・・」

「見てクリス。あの光・・・もしかしたら私たちを助けてくれたあのロボットさんかもしれないわよ?」

「本当!?!」

「ふふふそうかもしれないわ。」

「絶対に・・・また会う!!」

私は窓から思いっきり手を振る。届かないかもしれないけど……私たちを助けられた、カツコイイマジンカイザー^ヒに。

クリスマス side 終了

マジンカイザー side

『コレデヨカッタノカナ、俺ハ……』

俺がしたのは、原作崩壊を招く行為だ。本来、雪音夫妻はあそこで死ぬ。クリスマスもテロリスト共に捕らえられてしまうのが本来の流れだ。だが俺が介入したので両親は健在、クリスマス自身も捕虜になることはなくなった。現在俺はまた飛行機とやりあうのがめんどくさいので人間サイズのまま海中を潜水している。

足の水中ロケットとカイザー スクランダーのブースターを展開させて海の中から日本へ向かっている。あれから俺自身を改良して、世界地図とGPSを付けた。これで俺がどこにいるのかがわかるという訳だ。

『サテ……ソロソロ日本二到着ダナ。原作通りナラコンサート会場デ、ツヴァイウィング ガ歌ウ筈ダ』

原作の始まりとも言える物語が始まろうとしている……俺は全速力で日本へ向かった。

数時間海の中を潜水し、俺は日本に到着した。身体は機械だから疲れなど感じないし

お腹もすかない……なんかやっぱり人じゃないってのはつらいかもしれないな……だが次に聞こえて来たのは……

『……警報?』

俺はその警報を辿り、街の方へ行く。そこでは、カラフルな化け物が人々に襲い掛かろうとしていた。俺は走りだして両手を前に構える。

『ターボスマッシュャーパンチツ!!』

下腕部を回転させ、化け物共に向かつて撃ち放つ。これで効かなかつたら俺は両手を失うことになる……だがターボスマッシュャーパンチはノイズ共を貫き撃破していった。どうやら俺の攻撃でも倒せるらしい。それが分かり俺は遠慮なく両目を光らせる。

『光子力ビーム!』

両目から放たれた光子力ビームがノイズたちに命中して消滅させた。そこからすぐに走りだし、背中のカイザースクランダーを外して投げつける。

『スクランダーブーメラン!』

ブーメランのようにノイズたちを撃破していくカイザースクランダー。俺は次々に現れるノイズたちを撃破するため、胸部の放熱板に光子力エネルギーを集める。放熱板の色が白くなっていき、ノイズたちにこの技を放った。

『ファイアーブラスタアアアアアア!!』

成る可く街に被害を出さないため、出力を落としている。だが道路が溶けてしまう程、威力は絶大みたいだ。俺が頬をかいていると、何処からか警報以外の音が聞こえてきた。

『・・・歌?』

「Croitzal ronzekk gungnir zizzl」

「Imyuteus amenohabakiriron」

この音・・・いや歌は、俺がセレナの声で目を覚ましたのと同じ歌だ。上から降って来た槍を咄嗟に回避する。

二人の女の子たちが俺の目の前に立っていた。天羽奏と風鳴翼だ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「お前に聞きたいことがある。ここにいたノイズたちはお前が倒したのか?」

『・・・・・・・・アア、ソノ通りダ。ソレガ何カ、悪イノカ?』

「喋った!?おい翼!あのロボット喋ったぞ!」

「奏、今はいいから武器を構えて!未知の相手、油断は禁物よ!」

「そうか?アタシには、このロボットが悪い奴とは思えないぜ?なんせノイズを倒してくれたんだからよ」

天羽奏の方は、俺を怪しい奴とは見ていないようだな。まあ、風鳴翼の方は俺の姿を

見て怪しき満々なのがわかるわな。だが悪いな、今はお前たちにかまっていない暇は無い。

『ギガントミサイル!』

「!!」

二人は武器を構えるが、君たちを狙う訳じゃない。地面に放って、怯んだその隙に逃げる訳さ。

『カイザースクランダー!』

投げたカイザースクランダーが戻り、助走を付けて飛んだ。

『スクランダークロス!』

合体した俺はそのまま彼女たちから逃走した。今つかまるわけにはいかないからな。

カイザー side 終了

「あー行っちゃった。翼が武器を構えるから」

「わ、私のせいだっけ言うの!?!」

『二人とも、逃げられてしまったみたいだな』

「ああおっさん。翼が武器を構えて脅すもんだからよ、逃げられちゃった」

「奏!」

「冗談だよ。とにかく、ノイズをやったのはあの黒い機体みたいだ。ロボットみたいな

格好をしていたぞ」

『………わかった。こちらでも探してみる。お前たちは帰投しろ』

「わかりました」

「あいよ」

これが魔神皇帝とツヴァイウイングとの最初の出会いであり、物語は今始まる。

『クシユン』

コンサート会場に、魔神皇帝現る。

マジンカイザースide

天羽奏と風鳴翼と出会ってからも、俺はノイズが現れては奴らを倒す。カイザーブレードやルストルネードなどを使い撃破。もちろん彼女たちが来る前にカイザースクランダーで飛んで逃げたり、体を小さくして逃げたりしている。

ある日の昼頃、俺は空を飛んでいると声が聞こえてきた。誰かの声だが……どこかで聞いたことがある。俺はその場所へと行きターボスマッシュパンチではなく回転させないロケットパンチを放って女の子を狙う不屈者を後退させ、その子を後に庇うように降り立った。目の前の不屈き者は女か？

「貴様は……」

『……』

女は俺の後ろにいた女の子に用があつたみたいだが……人攫いを見過ごすわけにはいかないな。俺は新武装を使うことにした。脚部から剣を引き抜き、構える。マジンエンペラーGが使っていたエンペラーブレードだ。あれから俺は自己強化し、マジンエンペラーGのようにカイザースクランダーも変わるように改良している。さらに

武装として、サンダーボルトブレイカーに先ほどのエンペラーブレイドを出せるように改良した。あとは武器としてマジンカイザーSKLのブレストトリガーと次元からエンペラーソードと牙斬刀が呼べるかなとやってみたらできた。

話を戻して、女は俺という相手に不利と考えたのか姿を消した。俺はエンペラーブレイドを戻して後ろの少女に声をかけようとしたが……

「マジン……カイザー？」

『……マサカ、コンナスグニ再会ヲスルトハナ……クリス』

そう。俺が助けたのはクリスだった。まさかあの女はフィーネか……ん？　そういうえぼロケットパンチで飛ばした時にあいつから何かを盗んでいたつけ？

『ペンダント？』

「……何だろう、これ」

『……クリス、コレハ君ガ持ッテイルトイイ……』

「え？」

クリスは驚いているが、もしあれがフィーネならイチイバルで合っているだろう……ん？

「ノイズ!？」

『……』

俺は振り返り、彼女を守るためにノイズたちに向かって走りだす。俺はカイザーキックをかましてノイズたちを吹き飛ばし、左手のエッジを回転させてターボスマッシュャーパンチを放った。その拳はクリスを狙っていたノイズを吹き飛ばす。

『オカシイ………イツモヨリ数方……グオ?!』

俺は突然何かに体当たりされて吹き飛ばされてしまう。どうやら原因は別の新たなノイズの突進のようだ。だが俺はすぐに体勢を立て直して構える。

『歌?』

俺は聞き覚えがある声があった。その方角を見ると、そこには赤い鎧を纏っているクリスの姿があった。

「なんだよこれ!!」

マジンカイザー side 終了

クリス side

「カイザー………」

カイザーと再会した。あんたは私と約束してくれて、助けてくれた。けどカイザーでも、あの数のノイズ相手に戦うのは……せめて……せめて私に力が!!

「力がほしい!!」

私は願ったとき、カイザーがくれたペンダントが光っているのを感じた。歌が聞こえ

てきた。

「これを歌えばいいのか? . . . Kill t e r I c h a i v a l t r o n ♪」

突然ペンダントが光りだし、私の体に何か装着されていく。私が目を開けると、カイザーがこちらを見て驚いていた。私も何があつたのか驚いている。

「やばい!!」

ノイズが私めがけて攻撃してきた、何か武器を . . . あいつらが使っていたような武器!!

「ツッ銃!! . . . よしっ、これなら!!」

私は出てきた銃を構える。その銃はガトリングに変形し、ノイズめがけて弾丸の雨を放った。ノイズはそれを受けて消滅した . . . 私が倒したのか?

『 . . . シンフォギア 』

「シンフォギア?」

ノイズを倒した後、私はカイザーと再会したことを喜んで近寄ろうとした。そのとき . . . 声が聞こえてきた。私が歌つたのと一緒に。

「反応があつて来てみれば . . . カイザーに、未確認の装者がいたとはな . . . 」

あの顔 . . . どこかで見たような、あれ? カイザーは後ろを振り返ってどこかに行こうとしている。どこに行くの?

「待てカイザー!! 今日こそは一緒に来てもらおうぞ!!」

『悪イガ、ソレハデキナイ相談ダ。スクランダークローズッ!』

カイザーは、スクランダーとかいう翼と合体して空を飛んで行った。私たちを救った後に風のように去っていく。またカイザーと会えなくなっちゃった。

「さて、あなたには一緒に来てもらおうよ?」

「・・・分かった。その代わり、教えてくれ・・・この力のことも・・・そして、カイザーのことも」

「あなたもカイザーのことを知っているのね?」

「ああ、カイザーは私たちを救ってくれたロボットだから」

私はカイザーが飛んで行った方向を見ながら、風鳴翼つて人の後に付いて行った。

クリス side 終了

カイザー side

俺は現在ビルの屋上にいた。最近はず段の大きさではなく、人間と同じような身長でいることが多い。まあ大きいばかりではだめだからな。まさかクリスと再会するとは思ってなかった。原作通りじゃないってのも気になったが・・・まあいいだろう。

『ソウイェバ、コンサートハイツヤルンダ? ヨシ、イマノ身体ヲサラニ小サクシヨウ』

俺は人間と同じ身長だったのを、虫サイズ程まで縮小した。カイザースクランダーで

飛び、ポスターが張っているのを探す。

『アツタ。何々………5日後力。コノ日ガ物語ノポイント二ナル所力』

この事件でたくさん死人が出てきて、立花響が生き残ったと言う事だけでいじめられるのを阻止しようと思う。

『………実行二移ソウ』

この5日間は、ツヴァイウイングたちがいる会場に侵入して待機した。彼女たちがここで何かの実験を行うためのコンサートを行うことも………俺は小さくなった身体で聞いていた。

実験のためとはいえ、翼や奏が歌を歌うのはいい事だ。彼女たちの歌は綺麗だと言う事を俺はわかつている。前世でもCDを買って聞いたぐらいだ。

5日後つてのはあつという間にくる。俺はその間は会場の中におり中ではツヴァイウイングの歌で会場は盛り上がっていた。俺も近くで聞いているので盛り上がっている……エネルギーが上がってきた。やはり彼女たちの歌で、光子力エネルギーが増幅している気がする。彼女たちの歌には何か秘密があるのか？

突然爆発した音が聞こえてきたので俺はすぐに出ると、そこにはノイズたちが現れた。

『サセルカ!!マジン・ゴオオオオオオオオ!!』

俺は人間と同じ大きさへと変わり襲おうとしていたノイズに蹴りを入れる。ノイズは俺に気づいたのか人を襲うのをやめてこちらに襲い掛かってきた。

「あ………あれは!!」

「聞いたことがある………ノイズをひそかに倒しているという黒いロボットがいるってのは………」

「あれが!!」

「っておい!!こいつら………仕方がない。」

『ターボスマツシャーパンチ』

俺は観客のドアを破壊するために左手を飛ばして扉の方を破壊した。

『ハヤク逃ゲロ!!』

俺の声を聞いた観客たちは急いで逃げていく、ターボスマツシャーパンチでドアを次々に破壊したため原作よりも人の避難は速く済みそうだ。

『邪魔ヲスルナ、ルストトルネード』

スリット口から強烈な竜巻を発生させてノイズたちを腐食させていく、この技は俺自身も後退するほどだからな、足に力を踏ん張らせて耐えている。ステージの上ではツヴァイウイングの二人もシンフォギアを纏っており俺は自分のところのノイズヘギガントミサイルを放ち撃破した後には彼女たちがいる場所へと向かう。

「カイザー……あなたが観客たちを？」

『アア、天羽 奏大丈夫か？イツモヨリ動キガ不安定ナ気ガスルガ？』

「大丈夫だ、いくぜ!!」

『……』

俺はエンペラーブレードを出して、二つを連結させて投げつける。ノイズたちを切り裂いていき帰ってきたのをキャッチして、二刀流にしてノイズたちを切っていく。

『ン？』

俺は瓦礫が動いたのを見つける、そこには主人公である響がいた。

「まずい!!」

奏がその場所へ行きノイズたちから彼女を守るために槍を振り回しているが……彼女の持つているアームドギアが罅が入っていき砕ける。

その破片が彼女の心臓付近に突き刺さるのを見た。奏は彼女に声をかけている。

『……』

彼女は何かを決意をしたのかアームドギアを持っていた、俺は走っていき彼女のところへと向かう。

「なあ、あんたの名前さ、クリスから聞いたぜ？魔神皇帝さん」

『……天羽奏……オ前ハ、マダ生キルベキ女ダ。ココハ俺ニ任セロ』

俺はカイザースクランダーを合体させて力を込め、光子力エネルギーを全開に解放させた。

『マジンパワーアアアアアアアア!!』

纏っている光子力エネルギーを全開にして、カイザースクランダーも形を変えていく。これこそマジンカイザー最大の必殺技、カイザーノヴァだ。全開にした俺は一気にノイズたちの群れに突っ込んでいき、次々に倒していく。さらに腕部を回転させてスマッシュパンチとしてノイズたちを殴っていき撃破。

『ウオオオオオオオオオオオオ!!』

巨大ノイズが現れようと、今の俺に貴様らの攻撃は効かない!!くらいやがれ!!俺は突撃し、巨大ノイズを倒して着地する。

『・・・・・・・・グッ』

膝をつけて身体を休ませる。冷却装置が強制発動し、俺の体を冷やし始めた。カイザーノヴァは俺の体内にある光子力エネルギーを解放させる技だ。この技を使った後は、しばらくの間オーバーヒートしてしまう。

「おい、マジンカイザー!!」

奏と翼が近づいてきたので俺は手をあげる。

『来ルナ!!』

「!!」

二人は俺の声を聞いて止まる。今の俺に近づくのは危険だからな……二人には理由を話しておくか。

『サツキノ技ヲ使ツタ後ハ、俺ノ身体ガ一気ニ オーバーヒート スル。近ヅクト火傷
ジャスマナイ』

「そうだったのかよ……悪かった」

「ありがとうマジンカイザー……あなたがいなかったら人がたくさん死んでいた。
感謝します。」

『気ニスルナ。オ前達ガスグニ動イテクレタカラ、俺モノイズ達ヲ倒スコトガデキタ。
感謝スル』

俺は立ちあがりカイザースクランダーも装着しているので、すぐに飛び立とうとした。

「待てよ。あんたには本当に世話になったんだ。だからさ……あたしたちの仲間
になつてくれないか？」

『……………』

俺は少しだけ考えてから答えを言う。

『ワカッタ。コレマデハ、一人デ戦ツテキタカラナ……天羽奏と風鳴翼……』

ヨロシク頼ム』

俺は冷却が終わった手を伸ばし、彼女たちと握手した。

マジンカイザー side 終了

「マジンカイザーか、ふふふふふふふふ……面白いデータが手に入りそうだわ。クリスを奪うことは失敗したけど、彼女のクローンならどうかしら？クリスがイチイバルを纏った際に抜けた髪を使い、復元させたクローン。そして謎の魔神皇帝の力も使えば……私の計画はさらに!!あつはつはつはつはつはつはつはつは!!」

彼女はマジンカイザーの戦闘を見て笑っていた。カイザー自身も気づかれずに戦闘シーンだけ撮られていた事。その正体が、彼が行く二課にいる事……いずれもまだ、誰も知らないお話。

カイザー二課の基地へ

コンサート会場で起こった実験は失敗に終わった、カイザーがいなかったら被害はさらに増えていた、現在そのカイザーは天羽 奏たちと一緒に二課の基地へと向かった。た。

彼の手には手錠などはされていない、理由は彼のサイズに合う手錠がなかったのだ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・奏、質問ガアルノダガ』

「なんだ？」

『ナゼ俺たちハ学校二向カツテイル？』

カイザーが疑問に思ったのは車の窓から見えた景色が学校に近づいていることに驚いていた、そのため近くに座っていた奏に質問をする。

「ああそういうことか、まあ着けばわかるさ。」

車が停止をしたので全員が降りたちマジンカイザーは彼女たちの後をついていく、現在彼の大きさは人間サイズになっており彼女たちの後をついていく。彼はあたりを見ながら学校の中を歩いていきエレベーターが開いた。

『・・・・・・・・地下二アルワケカ。』

翼は手すりにつかまっつてと言ったが彼は問題ないといいエレベーターは急降下をしていくがカイザーは手すりなどを使わずに自身の体で耐えていた。地下に到着をしてエレベーターからカイザーは降りたつ。

そして扉が開いて……クラッカーなどの音が聞こえてきた。

「「ようこそ特異災害対策起動部二課へ」」

『……ナンダ今ノハ?』

「すまない……」

「あははははははは」

翼はカイザーに謝り奏は苦笑いをしていると一人の女の子がカイザーの姿を見て走ってきた。

「カイザー!!」

『クリス?』

カイザーに抱き付いてきたのはクリスだった、彼女は涙を流しながら彼に抱き付いていた。

「すまない魔神皇帝……改めて俺は風鳴 弦十郎。こここの司令官を務めている。」

『名前ハ知ラレテイルカラ俺ハ名乗ラナイデイイナ? 教エテクレ……アノ化物タチノコトヲナ。』

「わかった、俺たちも詳しくはわかってないのだが……」

弦十郎説明中

マジンカイザー side

『ナルホドナ、ノイズヲ倒ス為ノ力……ソレガシンフォギアトイウワケカ。』

俺は弦十郎さんの説明を聞いて、ならどうして俺は炭化をしないんだ？

この間放ったターボスマッシュヤーパンチは奴らを貫通をして炭化したしファイヤーブラスタールストトルネードなどもやつらには効いていた。俺自身もやつらの攻撃を受けたことがあるが……やはり超合金NEW-Zαにはノイズの炭化能力は通じないってことなのか？

「確かにマジンカイザー、君の力はシンフォギアとは違うみたいだが……なぜノイズを倒すことができるのか……君自身もわからないのか？」

『ソノトオリダ、ヤツラトハ何度モ戦ツテイルガナゼ倒セルノカ俺自身モ分カリキツテイナイ……』

俺は事実のことを言い、俺の力……マジンカイザーとしては驚いていることばかりだな、ノイズのこともあるが……いずれにしても俺のことはバラバラされるだけはやだな。

『弦十郎……スマナイガ俺ノ体ニ関シテハ何モ触レナイデホシイ。俺ノ体ハ調ラ

レルノハゴメンノダガ。』

「わかった、お前の体に関しては何もしないことを約束をしよう。」

『アリガトウ。オレモデキルカギリノコトヲシヨウ。』

こうして俺と弦十郎は握手をして契約が完了をした、さて早速翼と模擬戦をすることになった。

現在俺はカイザースクランダーを外している、翼は武器を構えており俺は彼女と戦うために両肩部から持ち手が現れて俺はカイザーブレードを抜いて構える。二刀流にして俺は突撃をする。

「参る!!」

彼女は突撃をして俺に剣をふるってきた、俺はカイザーブレードを使い彼女が放った剣を防ぐ。力はこちらの方が上だが……素早さなら向こうの方が上になる。

『デアア!!』

俺はカイザーブレードを彼女に対してふるっているが彼女の素早さにかわされて彼女は距離をとり辺りにエネルギーの剣が発生をしている。

(あの技は!!技に対してなら武器を使える!!)

放熱板に光子力エネルギーをためていく、力は最小限でいいだろう……翼が放つ攻撃をこの技で相殺をする!!

『ファイヤーブラスター』

胸部から放たれた高熱のエネルギーが翼が放った技と激突をして煙が発生をする、ほかの技を使うわけにはいかないから彼女と戦うにはカイザーブレードでしか戦えない。俺はカイザーブレードを戻して煙が消えるのを待つおそらく彼女は次の一撃で俺を倒すために決めようとしている、大きくなったギアが見えている。

「はああああああああああああああああああ!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

俺は彼女が放つ蹴りを両手で受け止める真剣白羽取りってやつかな？本来は超合金NEW—Zαなら受け止めることができるが一度やってみたかったつてもあったな。俺は彼女を降ろすためにギアを投げ飛ばす。彼女は着地をして膝をついている。

『ドウヤラココマデミタイダナ?』

すでに戦闘態勢を解除をしていた俺は翼のところまで行き膝をつく、彼女の手を引つ張り起こす。訓練を見ていた人たちも俺という存在に驚いている・・・・まあ本来だったらいはないはずのロボットが自分で話しをしたりノイズを倒したりしているからな。

俺は当面はこの基地で過ごすことになる、出動の時は裏口から出動をすることになる表だと人に見られる可能性があるからといわれた。

次の日から俺は出動をする、カイザースクランダーと合体をして俺が強化をするようにカイザースクランダーも強化されていた。では早速お見せしようマジンガー乙で使われていた。

『サザンクロスナイフ』

大きな手裏剣が連続で放たれて行きノイズたちに命中をする、威力はマジンガー乙をも超える威力みたいだ、俺はスクランダーを外して地上へ落下をしてカイザーキックでノイズの一体に攻撃をする。

後ろからクリスと奏、翼が駆けつける。俺は振り返らずに両手を前につきだして回転をさせる。

『ターボスマッシュヤーパンチ』

ロケット噴射をして下腕部が外れてノイズたちに飛んで行く。威力はグレートマジンガー（試作型）の装甲をえぐるほどの威力だノイズに当たれば木っ端みじんに吹き飛ばす。

「おうおうすごい威力をしているじゃねーか!!」

「ああ………私生きているよね?」

「先輩生きているから安心をしてください。とりあえず私たちも!!」

クリスは持っているギアをボウガン状に変えて追撃をする、俺は走っていきノイズた

ちに向かつて体当たりをする。

『クラエ、カイザータツクル』

カイザータツクルを噛ますが、躲されてしまい俺はこけてしまう。後ろからノイズたちが俺に襲い掛かろうとしていた。

だが攻撃はミサイルが飛んできてノイズたちに命中をする。

『クリスカ、助カル。』

俺は起き上がり両目を光らせてノイズたちの方へ振り返る。

『光子カビーム』

両目から放たれた光子カビームがノイズたちに命中をして彼らは爆発をする、辺りにノイズたちがいなくなったのを見て翼たちはギアを解除をする。俺はそんなことができないから普通に立っている。

「お疲れ様カイザー!!」

『アアクリス、先ホドハアリガトウ。』

「えつと気にしないでくれ、私はあなたには感謝をしているから……」

『……ソウカ。』

俺は振り返りあんなクリスの顔を見たのははじめてかもしれない、まあ俺が人間だつたら顔が真っ赤になっているが……俺は今ロボット生命体だから、涙は流

ささいし顔を真っ赤になることはない。

『ロボットダカラマシンダカララッダッダ』

「[?」

俺はグレートマシンガールの歌を気づいたら歌っていた、歌詞にロボットだからマシンだからという歌詞があったのを思いだした。だがなんでいきなりその言葉を言ったのか……まあ今はロボットだしな。お腹や喉が渴くことがないから楽かもしれないな。

『……………』

俺はカイザースクランダーを装着をして先に基地の方へと戻っていく。了子さんが目を光らせていた。

「あー待っていたわよー……カイザーちゃん……」

『……………櫻井 了子……………メンテナンスハイライゾ?』

そうこの女はいつも俺を調べようとしているが、俺の体を調べられるわけにはいかないのだ。めんどくさいなと思えば彼女はあまり関わりたくないのだが……………最近はしつこいほどに俺に関わりようとしている。

(おそらく俺の体を調べようとしているな、やれやれ……………弦十郎さんに言われているでしょうが……………)

俺は呆れて彼女のをスルーをして歩きだすのであった。

了子 side

「マジンカイザー、ふっふっふっふっふお前の戦闘データは集まってきたり……
だがまだ足りない……ノイズではマジンカイザー相手では不足すぎる……
やむを得まいあの機械を導入をしましょう。」

私はパソコンであるコードをうちこんでいく。

動き出す了子の怪しい行動、マジンカイザーを狙う理由とは!!物語は二年後へと進む

!!

動き出した物語、新たなガングニール

魔神皇帝 side

やあ諸君、俺はマジンカイザーだ。この二年間は俺は奏たちと共にノイズたちを倒してきた、ブレストトリガーやエンペラーソードなどを使いノイズたちを切ってきた。

今俺は翼と一緒にノイズが現れた。彼女を手に乗せて俺は空を飛んでいる。

「カイザーは大きさを自由に変えることが可能なんだな？」

『アア、普段ハオ前達と同ジサイズで過ゴシテイルカラナ。』

現在の大きさは元のサイズに戻っており翼は俺の手から下の方を見ている。ノイズの姿が見えたので彼女はギアを纏い俺の手から降りる。翼は持っているギアを大剣状態にして蹴りを入れてノイズたちを倒す。

俺はサイズを人の大きさになりカイザースクランダーを外して地面に着地をする、両肩部からグリップを出してそれを抜いてカイザーブレードを構えて俺は突撃をする。

『ハアアアアアアアアアアアアアアア！』

振るったカイザーブレードがノイズを縦一閃して倒されて行く、俺は襲い掛かるノイズたちにカイザーブレードを投げつけてノイズたちに突き刺さる。

『クラエ、光子カビーム!』

両目に光子カエネルギーをためて放つ技、光子カビームを放ちノイズたちを爆散させる。翼は隣の方で俺が突き刺したカイザーブレードを見てる。

『使ツテミルカ?』

「いいのか!!」

『ア・・・アア。』

翼の顔が明るくなり刺したカイザーブレードの方へと走っていき彼女は剣を抜いたがすぐに後ろの方へ倒れてしまう。

『ヤハリ、人間サイズトハイエ超合金NEW—Zテ作ラレテイル剣ヲ人ガ持ツノハ難シイカ。』

ノイズたちを回転させた拳で殴りながら俺は翼の方を見ていた、仕方がないスリット部分に力を込めて強大な竜巻を発生させますか!!

『ルストトルネード!!』

強烈な竜巻がノイズたちを巻き込んでいき炭化させていく、ノイズたちがいなくなつたのを確認をして俺は持ちながら倒れている翼の方へ歩いていく。彼女はなんとか立ちあがろうとしたがカイザーブレードの重さに体が支えれない状態になっているため起き上がれない。

『翼、大丈夫か?』

「……防人として重さに耐えれないとは不覚!」

いや不覚と言っているが、元々俺用に作られている剣だからな人が持ったりするものじゃないからな!! サイズが人間サイズだからもてるかなと思っただがやはりだめだったか。

事実ギアを纏っているとはいえ翼が持った瞬間後ろに倒れるのを俺はノイズを殴りながら見てしまったからな。カイザーブレードを翼から返してもらい両肩部に再び収納をする。翼は弦十郎にノイズを倒したと報告をするために通信をしている。

『ン?』

「どうしたマジンカイザー?」

『……気ノセイカ、誰カ二見ラレタ感ジガシタ。』

「一体誰が!!」

翼はギアを持ち構えているが、俺のセンサーでも見つからないとは一体何者なんだろうか。

『今ハ基地ノ方へ帰還シヨウ、マタ大キクナルカ。マジン・ゴオオオオオオ!!』

掛け声で俺は元のサイズに戻り彼女を手に乗せてカイザースクランダーを呼び合体をして基地へと帰還する。もちろんばれないように俺はステルス機能を新たに装着を

して飛んでいる。

これさえあれば前にアメリカの戦闘機にミサイルを放たれることがないため大きくなって飛ぶことができる。基地近くに着地をして俺は翼を降ろして人間サイズに戻る。(だが何かを忘れている気がする、了さんが誰かだったことは覚えているが……記憶が抜けている気がする。)

この世界で目を覚ました時からクリスやセレナのこととはわかっている、だが了さんなどはわからないが気を許すことができない。普通に話しかけてくるが体が拒否反応を起こしている。

俺自身はそんなつもりはないが、何か警告をしているかのように了さんに対して発動をしている。抜け落ちている記憶の中に了さんに関わることがあったのだろうか。そういうえば俺の前世の名前なんだっけ？それさえも思いだせない状態だ。

『フーム。』

「マジンカイザー?」

『何デモナイ、翼ヨ、ロボットノ俺ガ言ウノモ変ダガ部屋ヲ片付ケルヨウニシトケ。』

「う!!」

そう翼は原作と同じで片付けられない女性だった、一度俺は緒川さんに連れられて彼女の部屋に行った、とても汚かったとだけ言っておくさ。俺はかなりの出力を抑えたル

ストトルネードを使い腐食しない程度にほこりなどを吹き飛ばして部屋から追い出した後に力加減をしてお皿洗いや洗濯を干したりして彼女の部屋をきれいにした。

もちろん人に見られないようにステルス機能をONにして片づけした。

『ヤレヤレ仕事ガ忙シイデハ理由ニハナラナイゾ。』

「わかつている・・・わかつているが・・・つい緒川さんに頼んでしまい最近はいカイザーに頼んでしまうんだ。」

彼女は顔を俺の方を見ないで言葉が続けているが魔神皇帝が洗濯に皿洗いなど普通はしないからな?といいながら俺は現在は彼女の下着を畳んでいた・・・あれ?魔神皇帝が女の子の下着を畳んでいるってのもおかしいかな?

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「カイザー!!あなた頭から煙が出ているわよ!!」

『エ?』

俺はかなり悩んだりすると頭から煙が発生をしてしまう。コンピューターが処理できない感じになっていいのかオーバーヒートを起こしてしまう。女の子の下着を畳む魔神皇帝はいないからな!!

翼の部屋を片付けてからカイザースクランダーで空からパトロールをしている、ステルス機能を指導させて俺は大空を飛んでいた。

『異常ナイナ、平和ガアルツテコトハ俺ノ力ガ必要ナイトイウコトダ。』

空を飛びながら俺はそう思っていると工場地帯まで飛んでいた、何かの歌と共に光が発生をした。

『ナンダ?』

ぴびぴという音が聞こえてきた、俺は通信に出る。

『カイザー、今お前はどこにいる?』

『現在、工場付近ヲパトロールヲシテイタラ、強力ナ光ガ見エタ。』

『やはり、現場にお前がいたか……カイザー!!直ちに現場に急行をしてくれ!!そこに新たなガングニールの奏者がいる!!』

『ガングニールノ奏者?天羽奏ガイルノニカ?』

『ああ間違いない。』

なるほど原作が始まった証拠ってわけか、俺は了解と通信を終えて光が収まる前に現場に到着をしてステルスを解除をする。

「ロボット!?!」

「かつこいいいいいいいい!!」

『……』

ガングニールを纏っている女の子はいいが、隣にいる女の子は俺を見てかつこいい

てなんだか照れるな。俺はカイザースクランダーを装備したままノイズたちの方を向く。

『君ハソノ子ヲ守ツテクレ。ノイズハ俺ガ倒ス。』

俺は両手を前につきだしてエッジなどが回転していき必殺の拳を放つ。

『ターボスマッシュャーパンチ!』

下腕部が外れてノイズたちに向かって飛んで行く。

「腕が飛んだああああああああ!!」

「すこいすこいすこいすこい!!」

『.....』

後ろの方で大声で腕が飛んだあああとすこいすこいすこいすこいって聞こえたな、女の子ですこいってことあるのか?女の子ってかわいい系が好きじゃなかったか?例えば.....

『プリキュアトカ?』

「プリキュア?」

あーそういうことか、この世界はプリキュアがない世界か。俺という存在自体もない感じだからな。

おっとターボスマッシュャーパンチで飛ばしていた腕が戻ってきたな合体させた俺は

胸部を光らせる。

『グオオオオオオオオオオオ!!』

胸部からグリッブが発生をして俺は両手でつかみそれを一気に抜く、ファイナルカイザーブレードを構えてノイズたち向かってカイザースクランダーを起動させて一気に接近をしてノイズたちを切り裂く、翼たちはまだ到着………したみたいだな？ミサイルが飛んできて俺は回避をしてノイズたちに命中をする。

「カイザー待たせたな!!」

『アア、遅イグライニナ。俺ガ全部倒ストコロダツタゾ?』

「すまない、だがここから防人として果たす!!」

翼はギアを展開をして奏もやれやれといい槍を構えて突撃をする。クリスはギアをガトリングからボウガン状に変えて光の矢を放つ。

俺は腰部を開いてギガントミサイルを放ちノイズたちを爆散させる。ノイズたちは合体をして巨大ノイズに変身をする。

「でかいな!!」

『ナラ、スクランダーオフ』

スクランダーを外して手に持ち俺はスクランダーブーメランを投げて巨大ノイズが真つ二つになり爆散する。スクランダーが戻り俺はキャッチをして背中に合体させる。

ノイズたちがいなくなったのを確認をして俺は少女に近づく。

「あ、ロボットさん!!」

『大丈夫か?』

「うん!!お姉ちゃんが悪戦してくれたか怖くないよ!!それにロボットさんが上から助けてくれたから!!」

『ソウカ。』

俺は魔神皇帝としてノイズたちと戦ってきた、こうしてお礼を言われたのははじめてかもしれない。

俺は緒川さんが彼女と話をするといいい俺はその場を離れていた。奏とクリスが俺に気づいて走ってきた。

「どうしたカイザー、なんかお前嬉しそうだぞ?」

『ソウカ?』

「そうだな、私から見ても嬉しそうに見える。」

『ナーニ、アリガトウト言ワレタカラナ。ソレガ嬉シイダケダ。』

俺は振り返りあの子が母親と再会をしたのを見て助けてよかったと思う、それぐらいしか俺がやれることはない。ノイズたちから人々を助ける。

それが魔神皇帝として生き返った俺の使命だから。

訓練せよ立花響！魔神皇帝との特訓！！

カイザー side

俺たちはガングニールを纏った少女、立花響を連れて基地へ帰還する。俺は司令室の方へ帰還をしている。中では彼女を迎えるために準備をしている。

「カイザーそれをあっちにつけてください!!」

『了解。』

あおいさんの指示を受けて飾りをつけた。朔也の方は苦戦をしているみたいだがほかの人たちが手伝いをして奏たちが彼女を連れてここに来るエレベーターの音が聞こえた。

弦十郎たちはクラッカーを持ち扉が開いた。音がパーンパーンと鳴り響く。

「「ようこそ!!特異災害対策起動部二課へ!!」」

見てみる、少女はポカーンと口開いたまま固まっているし、翼たちは苦笑いをしている。これは完全に滑っているな。

『弦十郎、一言ア言エバスベツテイルゾ。』

「改めて立花響君、俺はこの二課で指令をしている風鳴弦十郎だ。」

あ、おっさんなかったことにしようとしているな。甘いぞ俺のカイザーアイは録画しているから問題ない。これは楽しみでとっておくでしょう。俺はクリスが近くにいるので話をしてる。

「なあカイザー、あいつどうするかな?」

『……ソレハ彼女ガ決メルコトダ。俺達ガ色々言ウノハダメダ。』

両手を組みながらクリスに対して返事をする、原作通りなら彼女は戦う道を選ぶはず。翼が部屋を出ていくのを見て俺は追いかける。

『翼。』

「カイザー……」

『才前ノ気持チハ分カツテイル、彼女ハ先ホドマデ一般人ダカラナ。戦イ関シテハ素人当然ダ。ソレガノイズト戦ウコトヲ教エナイトイケナイ。』

俺は翼に言っただけで立ち去り用意をしてくれた部屋へとはいり座り込む、原作通りに言ったら翼と響が戦うことになってしまう。だがこの世界ではクリスや奏がいる。ならその役目はこの魔神皇帝が引きうけよう。

響ちゃんはあるから考えて仲間となり弦十郎が鍛えたりしていたある日、俺たちは行動をしてノイズたちを倒す。

そしてその時がやってきた。翼はアームドギアを彼女に向けていた、俺はその間に入

る。

「なら私と『待テ。』カイザー？」

『構エ口、立花響。』

俺は戦う構えて彼女に拳をふるう、響は回避をしたので俺は両目を光らせる。

「カイザー!!」

『光子カビーム。』

響に向かって光子カビームを放つ。彼女は回避をしているが攻撃をしてこない。やはり君は優しすぎる。

『ナゼ攻撃ヲシテコナイ?』

「どうして戦う必要があるのですか!!」

『……立花響、才前ハ優シイ所ガアル。ダカラ今モ攻撃ヲシテコナイ。』

「ツ！」

『コレデ終ワリニシヨウ。』

俺は胸部にエネルギーをためて彼女に向けて放とうとする。

「やめろカイザー!!」

「カイザー!!」

奏たちが叫んでいるが、俺はやめるつもりはない。胸部が白く発光をしていき俺は上

空に向ける。

『ファイヤーブラスタ―!』

上空にファイヤーブラスタ―を放ちエネルギーが収束されてファイヤーブラスタ―を止める。そのあとに雨が降ってきた。俺は響の方に向けて話をする。

『……俺ハ兵器ダ、人ヲ簡単ニ殺セル殺人機械ダ。立花響……戦イトハコウイウノヲ言ウ。俺ハ壊レテモ修理サレレバ戦ウコトガデキル。ダガ人間ハ違ウ。命ガ失エバ最後死ヌ。オ前ヲ思イ泣ク奴ガイル。』

「カイザー……泣いているのか?」

翼が俺に聞いてきた、泣くか……この台詞はお前が本来言うことだが……

『泣クモノカ、俺ハ翼ヤ奏ノヨウナ人ジャナイ……ロボットダカラナ。』

俺は後ろを振り返り基地の方へと帰還する。

クリス side

カイザーが後ろを振り返り歩いていく、私には悲しそうな背中を見たのははじめてだ、響はへなへなと力が抜けていく。怖かっただろうな……カイザーに殺されるかという思いが。奏先輩が響のところへ行く中、あたしは翼先輩のところへ行く。

「先輩。」

「雪音……カイザーは機械じゃないと私は思う。あんな悲しそうに去っていくの

を見てカイザーはただの機械じゃない。」

「ああ、私も同じ意見です。」

カイザーは人間のように話をするし片言だけど訓練後にもアドバイスをくれたりする。だがカイザーは翼先輩や奏先輩、私の顔を見て悲しそうにしているのを見たことがある。顔が変わったりしないけど雰囲気でわかる。今回の響に対しての攻撃でもあいつが当たらないようにしていたのを私たちはわかっている。

人に対してカイザーは光子カビームやファイヤーブラスターを撃つはずがない、威力も最低限に抑えて放ちファイヤーブラスターも上空に放つなどだ。

「カイザー………」

あんたは私を助けてくれた、だから今度は私があなたを助ける番だ!!

クリス side 終了

カイザー side

『……………』

俺は廊下の椅子に座っていた、翼がやろうとしたことを俺がやったからな、彼女は俺に対して恐怖を感じているだろうな。

『ハア……』

「ここにいたかカイザー。」

俺は声をした方を向く、赤いパーカーを着た腕の筋肉がすごいOTONAの人風鳴弦十郎が立っていた。彼はオレの隣に座り話しかける。

「見ていたぞ、お前が響君を攻撃をするとは。」

『・・・・・・・・』

「だが、お前が彼女に対して攻撃をしたのは戦いの厳しさを教えるためにやったことだろ?」

『ソノ通りダ、アノ子ハ奏ノガングニールガ刺サツタ子デ間違イナイ。アノ小サキ命ヲ守リタイ思イガ強クナリガングニールヲ纏ウコトガデキタ。』

「カイザー・・・・・・・・」

『ダガ彼女ハ翼ヤクリスト同ジデ若イ、ノイズトノ戦イデ命ヲ落トス子ジャナイ。弦十郎・・・・・・・・モシ俺ニ何かアツテ敵ニナツタ時ハ・・・・・・・・容赦ナク俺ヲ破壊シテクレ!!』

「カイザー何を言っている!!」

『モシモノ話ダ。』

立ちあがり俺は歩いていく、原作通りなら数日後にネフシユタンの鎧をきたクリスが現れるはずだが、今彼女は仲間になっているからな。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

だがそれは現実となりネフシユタンの鎧を着た敵が現れる。

現れたネフシユタンの鎧

カイザー side

響ちゃんを攻撃をしてしまった後、彼女は俺に謝ってきた。彼女はあの後ずつと考えて俺に話をかけてきた。

「カイザーさん、私あの後ずつと考えて来ました。確かに力をふるうのは怖いですが、でも最も怖いのはノイズによって殺される人を見るのはもつと怖いです!! だから私は戦います!! 戦えない人たちのために!!」

（あれ? どの仮面ライダーが言っていた気がするが、だが彼女の目は前に見たときよりも輝いているな。『立花響、改メテ仲間トシテ共ニ戦オウ。』

俺は手を差し伸べると彼女も右手を出して俺たちは握手をするが……

「あ、あの……カイザーさん力緩めてくれませんか? 手が痛いです!!」

『ア、スマン。』

どうやら力かげんを間違えてしまい彼女の右手に力を入れてしまった。反省反省……現在俺たちは出動をしてノイズたちが現れたと連絡を受けて到着をした。

俺はカイザースクランダーを装備したまま上空へとびサザンクロスナイフを発射さ

せてノイズたちを撃破していく。カイザース克蘭ダーを外して地上へ落下をして俺は右手を掲げる。

「カイザー何をやる気だ？」

『轟ケ雷鳴！必殺サンダーボルトブレイカー！』

雷鳴が角部分に集まり右手に移されてサンダーボルトブレイカーを放ちノイズたちを次々に消滅させていき俺は右手を振っている。

「カイザーさーん。」

響がこちらに向かって手を振りながら走ってくる、俺は響に迫りくる何かを見つけて急いで彼女を突き飛ばして体で受け止める。

『グウ！』

「カイザー!!」

「誰だ!!」

奏とクリスはアームドギアを構えている、俺の超合金NEW-Zαの装甲じゃ貫けないためか鞭が戻っていく。上から着地をしてきた女性を見て全員が驚いている。

『クリス？』

「私!?!」

「ええええええええええええええええええ!!」

「雪音が二人？」

「しかもあいつがつけているのネフシユタンの鎧じゃねーか!!」

そう俺たちの前に現れたのはクリスだ、だが彼女はこちらに居るのにあれはいったい。

「つたくまさかオリジナルと出会うことになるなんてな、まあいいやあたしの目的は……. せいっだ!!」

彼女はネフシユタンの鎧の鞭を使い狙いは響ちゃんだ、俺はそうはさえないと走りだして右手を構える。

『ターボスマツシャーパンチ!』

右手の下腕部がロケット噴射と共に飛んで行き鞭を粉碎をする。左手で右肩部のグリップが現れてカイザーブレードを抜いて響の前に立つ。

「カイザーさん!!」

『無事ダナ?』

俺は戻ってきた右手を接続させて左手に持っているカイザーブレードを彼女に向ける。

『才前ハ何者ダ? センサーナドデ調ベテモ貴様カラクリスト同ジ結果シカ出テコナイ。』

「ち、フィーネが言っていた魔神皇帝かよ、確かにてめえにはネフシユタンの鎧じゃ勝て

ないかもな。」

「フイーネ？」

「なぜお前は私と同じ姿をしているんだ!! 答える!!」

クリスは持つているギアをガトリングにして構えているとネフシュタンの鎧を着た彼女が突然笑い出した。

「まだわかんねーのかよ!! あたしはな、お前から生み出されたクローンなんだよ!!」

「!!」

『ヤハリカ。』

俺は予想をしていた、クリスの細胞か何かを手に入れたフイーネとか言うやつが自身のデータのために偽クリスを作りだした。だがその目的はなんだ？

『悪いガ一気二決メサセテモラウ。ルストトルネード!!』

「へ!! ならあたしはこれを使わせてもらうぜ!! ノイズども!! 合体してあたしの盾になりな!!」

俺が放ったルストトルネードは彼女が持つている杖から発生をした合体ノイズにふさがれて合体ノイズが腐食して溶けていった。翼たちもネフシュタンの鎧に攻撃をしていたが。

「しやらくせ!!」

彼女が放つ連続した鞭が翼たちを吹き飛ばす、俺は接近をして持っているカイザーブレードを構えて切りかかる。

『デアアアアアアアアアアア!!』

「ちい!!お前は厄介なんだよ!!くらいやがれ!!」

偽クリスが放ったエネルギー弾がマジンカイザーに命中をして爆音と大量の煙が発生をして姿を消す。

「どうだ!!」

「カイザー!!」

クリスは叫ぶ、かつてロケットランチャーを受けても無事だったカイザーが爆音と大量の煙が発生をして涙が出ている。

『心配スルナ!俺ハ無事ダ!!』

「なに!?!」

煙が晴れると無傷で立っているカイザーがいた、偽クリスは彼の両手に鞭を巻き付ける。

『見セテヤロウ、マジンカイザーノカラ!!マジン・パワーアアアアアアアア!!』

俺は全力を解放させて両手に巻き付けていた鞭を引きちぎる。

「嘘だろ!!」

『ヤレ!!』

「はああああああああああああああああ!!」

奏と翼が走りだして偽クリスに剣と槍で攻撃をしてダメージを与えてクリスがミスイルを連続発射させる。

「が!!」

偽クリスは吹き飛ばされて立ちあがる。ネフシユタンの鎧が再生をして彼女は舌打ちをする。

「ツッてめえら覚えておけよ!!」

偽クリスは地面に鞭を連続して叩き煙を発生させて撤退をする、俺たちはあたりを見回してノイズたちが消えたのを確認をしてギアなどを解除をする。

俺はカイザーブレードを両肩部に収納をして彼女たちのほうへ歩いていく。

(しかし原作とは違うとはいえまさかもう一人のクリスと出会うことになるとはな、性格も原作に近い感じは向こうだ。そりゃあそうかこっちのクリスは両親は健在だしガサツはないし胸は大きい……)

俺は考えながら彼女たちを見る、この中で一番小さいのは翼か……ん?

「カイザー、なにか私をみて考えていなかったか?」

『イヤ何モ。』

小刀飛んできて俺に当たるが、超合金NEW-Zαには効かないため地面に落ちる。危ない危ないということはこの後は何かを護衛するはずだが何だっけ？

『……………トリアエズ基地へ戻ルカ。』

「だな、あたしお腹すいちまったぜ。」

「奏つたら、立花と雪音も帰投をするぞ。」

「はい!!」

「……………」

「雪音？」

「あ。ごめんなさい……………後で帰ります。」

「しかし。」

『ナラ俺モ一緒ニ残ルサ。』

「いいじゃねーか、カイザーと一緒にならよ。」

「わかった、カイザー頼む。」

『任せロ。』

俺にクリスを任せてメンバーたちは基地の方へ帰投をした、俺はクリスの近くに座り彼女と話をする。

『クリス、モシカシテ先ホドノ敵ノコトヲ考エテイタノカ?』

「ああ、もしあの時カイザーが助けてくれなかったら私があーなっていたのかなって。」なるほどな、原作のクリスは両親を失いさらには捕虜になっていた時期があった。そのせいで性格が原作のようになってしまった。この世界では両親は健在だから音楽も大好きなのは変わらない少女だ。

「……私は次にあったときは話をする!!あいつは一人にしちやいけないんだ!!」

(まるで響のようなクリスだな、だがおそらく響も同じことを言っている気がするな。)
俺は空を見ながら寒いからそろそろ戻るぞといい、巨大化をして彼女を手に乗せて基地へと帰還する。

一方である屋敷にある部屋。

「やはりマジンカイザーはまだ力を隠していたか、だが合体ノイズでも奴の攻撃を完全に防ぐのは難しいか、まあいいデュランダルさえ覚醒をすれば私の計画はさらに進む。そしてクリスのクローンも役に立つわね、ネフシュタンの鎧と力とさらに立花響のデータが集まってきているわ。あと少しだ!!デュランダルの起動をするにはまずは。」

フィーネは笑いながらパソコンをかまっていき姿を了子の姿になり基地の方へと戻るのであった。

デュランダル護衛任務

クリスを連れて基地へと戻ったカイザー達は司令室にて先ほど現れたネフシユタンの鎧を着たクリスに似た人物のことを考えていた。

「しかしどう見てもクリス君に似ているな。」

『奴ハ自分ノコトヲクリスノクロイント言ツテイタ。弦十郎……奏ト翼ハ奴ガ着テイタ鎧ノコトヲ知ツテイタ、アノ鎧ハナンダ?』

「あれはネフシユタンの鎧、カイザーお前はコンサート会場のことは知っているな?」

『アア、アノ時ニイタカラナ。ドウシテコンサート会場ナンダ?』

「それはあの時会場でネフシユタンの鎧の起動実験を行った、だがそれは失敗に終わりノイズたちが現れてしまい、ネフシユタンの鎧も行方がわからなくなってしまった。それがコンサート事件の真実だ。」

全員が説明を受けてカイザー自身も両手を組んで壁に背もたれしていた、彼が気になっただけなのはクローンのクリスのことだ。

(だがいつどこでクリスの細胞を手に入れたんだ?それを二年間……まさか!!イチイバルを起動をした際に彼女の細胞を転送をしてそれを元に彼女は作られたってこ

となのか!!)

俺はそう考えていると、弦十郎は口を開いた。彼からの口から完全聖機物「デュランダル」と呼ばれる剣がこの二課にありそれを山口にある岩国基地へと運ぶために俺たち奏者たちが守ることになる。

数日後デュランダル護衛任務は朝早くから始まり、俺はカイザースクランダーを背中に装着をして空からデュランダルが乗っている車を護衛にする、奏やクリス、響は車の中。翼はバイクに乗り前方を走るようになった。

「それでは!!デュランダル護衛任務を開始する!!」

了子さんが運転をする車が出発をしたのを見て俺は空へと飛び上空から車を見ていく。クリスたちもギアを纏いあたりを見ていくと先方を走っていた車にノイズが現れた、俺はカイザーキックを噛まして車に襲い掛かっていたノイズたちを蹴り落とす。

ノイズたちはたくさん現れて俺は車を逃がすために翼に指示を出す。

『翼、ココハ俺ガ引キ受ケル。翼達ハ別ノルートヲ使イ向カツテクレ。』

「分かった、カイザーすまない!!」

翼たちは別のルートを使いデュランダルを輸送をする、俺は前を向いてノイズたちに向かつてターボスマッシュャーパンチを放ちノイズたちを粉碎する、両手が戻りブレストリガーを構えてトリガーを引いて弾が放たれてノイズたちに命中をする。

『モラッタ。』

後ろから現れたノイズにギガントミサイルを放ち破壊する、ノイズたちの数が多いな……ならばこの技だ。

俺は上空に飛び両目、胸部を光らせてギガントミサイルを構える。

『一斉射撃だ!!』

光子カビーム、ルストトルネード、ファイヤーブラスター。サザンクロスナイフ、サندانポルトブレイカーを一斉射撃で放ちノイズたちを撃破する。

俺はノイズがいなくなつたのを確認をして彼女たちの方へと飛ぶ。

カイザー side 終了

カイザーがノイズに引き受けて翼たちは工場のところを追い込まれていた、彼女たちも戦うために車から降りて了子は安全な場所へ移動をする。

「おりやああああああああああああああああああ!!」

奏は槍を振り回してノイズたちを突き刺していく、翼は持っている剣を二刀流にしてノイズに切っていく。

響はアームドギアを出せないため拳でノイズへ蹴りを入れたり殴ったりする、クリスは援護をするためにガトリングやミサイルを放ち撃破していく。だがノイズの数は増えていく一方で響に向かって鞭が放たれて彼女は吹き飛ばされる。

「立花!!」

「今の鞭は。」

奏たちは鞭が飛んできた方向を見る、そこにはネフシユタンの鎧を装着をした偽クリスが現れた、彼女は着地をしてネフシユタンの鎧を鞭を振り回している。

「隙を見せたな!!融合事例一号!!今度こそためえをさらわせてもらう!!」

「させない!!」

響を守るためにクリスはギアをハンドガンにしてネフシユタンの鎧に向けて発砲をする、偽クリスは鞭を回転させてクリスが放った弾を落としていく。

「どうして戦うの!!」

「ああ!!それがあたしが生きる理由だ!!」

「それが理由なんて!!私たちが戦う必要はない!!」

「うるせえ!!」

偽クリスは鞭を回転させてエネルギーの刃を投げつける。

「雪音!!」

「クリス!!」

「クリスちゃん!!」

(まずい……今躲したら響に当たってしまう!!避けるわけには!!)

クリスは攻撃を受けるためにギアをクロスボウ形態にして受け止めようとしたが、彼女に攻撃が当たるとはなかった、エネルギーの刃に何かが当たり消滅をする。クリスは自分に攻撃が当たらなかったのどうして?と思いい目を開けると回転をしたものが魔神の手に戻る。

魔神皇帝は背中にスクランダーを装着をして着地をする、偽クリスは舌打ちをして現れた魔神皇帝を睨んでいる。

「てめえ………」

『ヨセ、ナゼ君ハ戦ウ必要ガアル。』

「うるせええええええええええ!!」

偽クリスは鞭をふるいマジンカイザーに襲い掛かる、彼女は鞭を振り回してマジンカイザーに攻撃をするが、超合金NEW-Zαにはネフシユタンの鎧の鞭は効いてない。鞭はカイザーの装甲にはじかれて彼女は鞭を振り回してエネルギーの刃を作りカイザーに放つ。

「くらいやがれえええええええ!!」

放たれたエネルギーの刃がカイザーに命中をして大量の煙が発生をしてカイザーを包み込んでいく。

「カイザー!!」

全員がカイザーが攻撃を受けて爆発が発生をして大量の煙が包まれる。

「へ!! エネルギーの刃を受けたらいくら魔神皇帝『ドウシタ?』なに!!」

四人も声をした方を見る、煙が晴れていき魔神皇帝は立っていた。偽クリスは驚きながらも連続してエネルギーの刃を作りカイザーに向かって放つが彼は攻撃を受けながらも彼女に向かって歩いていく。

「くそくそくそくそおおおお!!」

偽クリスはソロモンの杖を使い、合体ノイズを使いカイザーに襲い掛からせる。カイザーは腰部からエンペラーブレードを出して襲い掛かってきたノイズを切っていく。連結させて双剣形態にして合体ノイズを切りさいて偽クリスに近づいていく。

「来るな……来るな来るな来るな!!」

偽クリスは鞭を使いカイザーへ攻撃をするが彼女はおびえており鞭が効かないのにふるっている。

カイザーのあちこちに鞭が当たるが、歩みを止めない。だがカイザーは突然振り返り空の方を見ている、デュランダルが起動をして空中にとまっていた。

『アレハ……』

「ツ!! 今だ!!」

偽クリスはカイザーが後ろを振り返ったのを見てデュランダルをとるために彼の肩

を踏み上空へとび手を伸ばす。

「させるかああああああああああ!!」

その前に響が偽クリスをさらに踏み台にしてデュランダルをつかむ、だが突然として彼女の体が黒くなっていく。

『イカン!!』

カイザーは響の様子がおかしいことに気づいて胸部を光らせて真ん中のZマーク部分からグリップが発生をして両手で持ち一気に抜く。

『ファイナルカイザーブレード』

ファイナルカイザーブレードを構えてカイザーは上空へとび偽クリスにデュランダルを振ろうとしている響の前に立ち彼女が放つデュランダルを前面から受け止めている。

『グウ!?!』

だがデュランダルの強大な力はマジンカイザーにダメージを与えていた、受け止めていたカイザーの関節部分などから火花が散らしており、彼自身も体に痛みが走っている。

(なんて威力だ、超合金NEW—Zαにダメージを与えている!?!このままでは俺自身も壊されてしまう!!だが!!それでも俺は!!)

彼はマジンパワーを発動させて響に力で対抗してデュランダルをはじかせる、響はそのまま地面に倒れかかるがマジンカイザーが急いで彼女を抱えて地面に着地をする。が……彼も膝についてファイナルカイザーブレードを地面に突き刺していた。彼の関節部分からは火花が散っており、装甲も削れるほどのダメージを受けていた。全員がカイザーのところへ行き声をかける。

「カイザー、大丈夫か!!」

『大丈夫……トイタイガ、アノデュランダルノ威力デ体ノアツチコツチガダメーゾヲ受ケテイル。正直驚イテイル。』

「しかし、奴には逃げられてしまいました。」

翼が悔しそうに言うが、今は被害が工場で留まっていることに……だが一人この状況で笑っている人物がいた。

「ふっふっふっふ、デュランダルが覚醒をした。計画が進んでいるわ……そしてカイザーはデュランダルの強大な力には勝てないことがわかった、奴に勝つにはガ・ディングルが必要だわ。これでピースはそろったわ。後は完成をするまで時間を稼ぐとするわ。」

了子はニヤリと笑い、誰にもばれないように彼女たちのところへ行き中止を宣言をする。デュランダルは二課に再び保存されることになり撤退をする。

カイザーはダメージを受けており空を飛ぶことができないため、現在はトラックに運ばれて座っていた。カイザースクランダーも外されてトラックの上にセットされる。

カイザーは両目を消灯させており体の修復をするために機能を停止をしている。こうしてデュランダル護衛任務は失敗に終わった。

機能停止魔神皇帝

基地の格納庫、ここにはトラックなどが配備されているところに魔神皇帝が立っていた。彼は現在は機能を停止している状態で立っている。

理由は先日のデュランダル護衛任務の時暴走をした響を止める際にデュランダルの強大な威力により彼の超合金NEW-Z α や各関節などがダメージを受けてしまい自己修復をするために全機能を停止をしている。

「カイザー……」

様子を見にシンフォギア奏者たちや弦十郎たちがやってくるが、彼の両目に光る様子はなかった。響もカイザーに涙を流しながら謝罪をしたが彼に聞こえていたのかはわからない。

カイザーが自己修復をするために機能を停止をしてから5日がたった、クリスはいつも通りにカイザーのところへやってきた。

「カイザー、私は自分のクローンと話をしたんだよ？響と一緒に、私の拳と響の拳であの子の殴った、自分の思いを伝えてね？彼女はネフシユタンの鎧を解除をして私たちに襲い掛かってきたの先輩たちが駆けつけて彼女は何をしたらと思う？ネフシユタンの鎧

たと思う。

顔が真っ赤になるじゃないか!! やだああああああ!! とりあえず彼女が涙を流しているのもわかり俺は左手を彼女の頭を撫でることにした。

『聞こエテイタゾクリス、俺ガ眠ツテイル時ニソソナコトガアツタンダダナ?』

彼女はこちらに顔をあげてから再び抱きしめてきた。落ち着くまで彼女の頭などを撫でている……言っておくがこれは彼女をなだめるためにしていることであつて下心はないからな?

しかし偽クリスがゲームのアサルトギアとネフシユタンギアを纏うとは思つてもなかつた、クリスから話を聞いてまさかねと思つたが彼女たちがそれを見ていると聞いた。イチイバルはクリス自体が使っているからな。パーズをしたネフシユタンの鎧の欠片を使いギアとして使用をするとは……状況によってアサルトギアとネフシユタンギアに変わることが可能つてわけね。

『ソウカ。』

俺はクリスに離れるように言い歩きます。

「カイザーどこに行くの?」

『弦十郎達ノトコロダ、回復シタコトヲ報告シナイトナ。』

俺は歩きだしていきクリスは俺の後ろをついてくる。司令室までの場所はわかつて

いるので扉が開いて中へ入ると弦十郎達が俺を見て驚いている。

「カイザー!?!お前直ったみたいだな?」

『アア、迷惑ヲカケテシマッタナモウ大丈夫ダ。翼達ハ?』

翼たちの姿が見えないので俺は弦十郎に彼女たちはどこにいるのか聞いた、彼女たちはノイズが現れたので出撃をした、クリスは念のために待機をして俺のところに来たわけだ。全員が出動をする必要がないってわけか……それと新たに協力者として小日向未来という女性の名前を聞いた。

(ということとは未来に響はばれてしまったってことか、俺は機能を停止をしていたからその現場を見ていないからな。ふうむ原作と違うからシンフォギアXDで登場をしたアサルトギアなどが偽クリスが装着をすることになったわけか。いずれにしてもフィーネ……どこかで聞いたことがある名前だがなんだっけな。)

俺は両手を組んで考えていると声が聞こえてきた、奏たちがノイズたちを倒して戻ってきたみたいだ。

「あー疲れた。カイザー!?!」

「え?」

「カイザーさん!!」

『ヨウ。』

俺の姿を見て彼女たちは驚いている中、響ちゃんは涙を流しながら俺に抱き付いてきた、クリスよりは小さいがなかなか大きいものが俺の体に当たっている。

「カイザーさん……カイザーさん!!ごめんなさいごめんなさい!!」

『立花響、アレハオ前ガ悪イワケジャナイ。気ニスルコトハナイゾ。』

「けど!!あの時私が暴走なんてしなかったら!!カイザーさんが機能を停止することはなかったんです!!私が……私が……私……私……」

『……………』

俺は彼女の頬を引っ張った、柔らかいな彼女の頬は。

「ふえ?」

『スマイルスマイル。笑顔ガ一番ダ。』

「カイザーさん。」

『気ニスルナトハ言ワナイガ、一人デ抱エヨウトスルナ。ココニハ頼レル友達ヤ仲間ガイル、ソレヲ忘レテハイケンナイ。』

「はい!!」

彼女が笑顔になったので俺は頬を引っ張るのをやめて後ろに下がる、俺は了子さんの姿が見えないことに気づいた、俺の記憶に何かが引っかかってきた。

（待てよ、了子さんの姿が見えない……あの人は何かを企んでいる感じがしたこ

とがあつたが……まさか!!彼女がフィーネだといふのか!?)

俺は了子さんがフィーネと言うことに気づく、そうだ彼女は了子の姿である場所に向かおうとするためにノイズを大量に……

びーびーびーびー!!

「どうした!!」

「これは……ノイズ反応です!!大量に!？」

「全員で出動だ!!」

『イヤ俺ハ残ラセテモラウ、起動ヲシタバカリダカラナ。』

「わかつた、カイザー以外は出動をしてくれ!!」

「[[[了解!!]]]」

四人が出動をしていく、俺は弦十郎からデュランダルがどこに保存されているかを聞いてその場所へ走っていく。

フィーネ side

私は緒川真二が小日向未来を連れているのを見て笑っていた、奴らは今はノイズどもを相手に戦っているはず奴如きに私に勝てるはずがない、私はデュランダルが保存されている扉を破壊して中にあるデュランダルをとろうとしたとき拳が飛んできた。まさか!!

私は振り返るとそこに立っていたのは奴だった。

『見ツケタゾ、櫻井了子……イヤファイーネット呼ンダ方ガイイダロウカ?』
「な!!」

なぜ私がファイーネだとわかった!? 魔神皇帝……やはり私の計画で一番邪魔なのは貴様のようなだ。

私はネフシタンの鎧の鞭を奴に放つ。だが私が狙ったのは奴じゃないからだ!!

『ソウイウコトカ。』

奴は後ろを振り返り私が放った鞭を両手で受け止める。馬鹿め!! 私はさらに二本はやしてエネルギーの棘を放つ。

『光子力ビーム!!』

私は奴が放った光子力ビームという奴を出すとはわかっていた、この狭さでは胸部の放熱板は使えないからな、私はその隙にデュランダルをとろうとしたが……

「そうはさせないぞ了子!!」

やはり私の前に立つか……風鳴弦十郎!!

「女に手をあげるのは気が引けるが……二人に手を出せばお前をぶつとばす!!」

ちい、貴様はいつから私のことを気づいていた。

「調査部だつて無能じゃない、あえてお前の策に乗りシンフォギア奏者たちを全員出撃

を動かして見せたのだ、カイザーは気づいていたみたいだがな。」

まさか!!カイザーの方を見ると放った鞭を引きちぎり奴の隣に立っていた。

『ダガ最初二気ツイテイタノハソツチダケドナ?』

「ちい!!」

私は鞭をふるい奴らに攻撃をする。

『サセン!!』

魔神皇帝が私が放った鞭を持ち弦十郎がカイザーの肩を踏み私に攻撃をしてきた、回避をするが左肩部分に罅が入るだ?!馬鹿なカイザーならまだしもただの人間である奴がネフシユタンの鎧に罅を入れるとはな。

『アアアアアアアアアア!!』

「ぐああああああああああ!!」

私を投げつけてさらに弦十郎の拳を受けてしまい私は吹き飛ばされる。

「どういうことだ、私が押されているだ?!」

『俺ハ魔神皇帝ダガ?』

「俺は映画などを見て鍛えているだけだが?いくぞ!!」

弦十郎は私に向かってきた、仕方がない………

「やめて弦十郎くん!!」

「ッ!!」

動きを止めたな!!

「馬鹿め!!」

私は鞭を使い奴を吹き飛ばしてカイザーが彼をキャッチをしてデュランダルをつかんで脱出をする。

ファイネ side 終了

カイザー side

『大丈夫カ弦十郎?』

「ああすまない。了子君の声を聞いてしまつて動きを止めてしまった……」

まずいデュランダルを奪つていきやがった、彼に弦十郎を任せて俺はファイネが飛びだした場所を飛び走っていく。

『カイザースクランダー!!』

俺の声と共にカイザースクランダーがやってきて俺は空を飛ぶ。

『スクランダークロス!!』

背中にカイザースクランダーを装備をして何かの砲塔が見えてきたので俺はその場所へ向かい飛ぶ。

すでに五人がいた、偽クリスも一緒なわけか。

「カイザー!!」

『奴ノ正体ヲ知ツタナ?ナルホドナ、デユランダルヲ奪ツタノハコノ砲塔ノエネルギー
ニ使ウタメカ。』

「そのとおりだ、これが私のガ・ディングルだ!!これを使いあの月を壊す!!」

「月を壊すだ!!」

偽クリスが言うが、あー名前がないと困るよな？

「大丈夫ですよカイザーさん!!名前ならありますよ!!」

『アルノ?』

「………あああたしは雪音 アリスだ。クリスが付けてくれた名前だ。」

彼女は顔を赤くしているが照れているようだな、話を戻して俺たちはガ・ディングル
を壊すことが必要だな?

カイザー side 終了

全員が砲塔を壊すために動こうとしたがフィーネは壊させないためにノイズを発生
させて襲い掛かってきた。

「させん!!」

「おら!!」

アサルトギアを纏ったアリスは銃口についている鋸を回転させてノイズたちを切り

裂いていく、翼は小型を投げつけて撃破する。

「いくぜ響!!」

「はい!!」

響が上空に浮かび奏は彼女の足に槍を横にしてバットを振るように響が勢いよく飛びノイズたちに拳を突き付けて突破する。

クリスはバイザーを展開させてギアをロングライフルに変えて長距離射撃で援護をする。

『クラエー!ファイヤーブラスタ―!!』

放熱板が光りだし、ファイヤーブラスタ―が放たれてノイズたちを撃破して左肩部からグリップが現れて抜いてカイザーブレードを構えてフィーネに攻撃をする。

『ハアアアアアアアア!!』

「甘いわ!!」

カイザーブレードを鞭で受け止めてノイズたちがカイザーに抱き付いて自爆をした。

『グア!?!』

ノイズが自爆をするとは思ってもなかったでカイザー自体も驚いている。フィーネはその隙について鞭を合体させて巨大な鞭にしてカイザーを吹き飛ばす。

『グウ!!』

「ノイズたちを相手をしているのはいいが、見るがいい!! デュランダル膨大なエネルギーを得てガ・ディングルの充電が完了をした!!」

全員が砲塔にエネルギーが充電されて行く。アリスはその様子を見てネフシユタンギアに変えていく。

彼女はそのまま飛び立ち砲塔前に立つ。

「アリス!! 何をやる気なの!!」

「決まっているだろ!! 元の原因はあたしだ!! あたしがあれを破壊する!!」

彼女は何かを決意をして歌を歌いだす。

「おい!! 絶唱を使う気なのか!!」

「よせ雪音!!」

「馬鹿め、やはり貴様は愚かだな……さあ忌々しい月を破壊しろ!! ガ・ディングル!!」

ガ・ディングルはその砲塔からエネルギーが放たれてアリスは相殺をするために絶唱を放とうとしたが……彼女が撃つ前に誰かが彼女を突き飛ばした。

「な!!」

彼女を突き飛ばしたのはカイザーノヴァを発動させた魔神皇帝だった。彼はマジックパワーを発動させてカイザーノヴァプラス光子力エネルギーを解放させていた。

「やめろおおおおお!!カイザああああああああああああああ!!」

アリスは叫ぶが魔神皇帝は砲撃に突っ込んでいく。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

彼はゲッタードラゴンが使うシャインスパークのように突撃をしていき……爆発が起こった。

煙が発生をして全員が目を閉じてしまう、目をこすり煙がなくなつたがガ・ディングルの砲塔が破壊されていた。

「やった……のか?」

「カイザー!!」

クリスはあたりを見るが、魔神皇帝の姿が見えない。

「うそ……だろ……」

アリスは膝について涙をこぼす、自分のせいでカイザーが死んだことにショックを受ける。アリスだけじゃないクリスに響き、奏や翼も涙を流す。

「おのれええええええええええええええええ!!」

フィーネは怒り心頭だ、自分の野望であるガ・ディングルが魔神皇帝によって破壊されてしまったことに。

「だが……奴は死んだ。ふっはっはっはっはっは!!」

ぶち。彼女が笑っている時に誰かが切れた音がした。

「今……なんていいやがった!!ファイネ!!」

アリスはネフシユタンギアのアームドギアの砲塔を構えていた、彼女だけじゃないクリスや響たちも立ちあがり涙を流している。

「カイザーを殺したあなたを許すわけにはいかない!!」

「許せない……許せないです!!了子さん!!」

「ああ……あんたはあたしの家族を殺しただけじゃなく……あたしを救ってくれた魔神も殺しやがった……絶対に許せねえ!!」

「私もこんなに怒りを灯したのは初めてです。だからこそあなたを倒します!!」

「貴様たちが私を倒すだ!!無駄だあああああああああああああああああああああ
あ!!」

ファイネはデュランダルを持ちさらにはソロモンの杖を使いノイズたちがファイネに集まっていき彼女は大きな姿に変わっていく。

「で……でかい!!だけ!!」

全員が彼女に向かって戦うが、ファイネは持っているデュランダルにエネルギーをためて彼女たちに向かって放たれる。

「「「「「きやあああああああああああ!!」」」」」

五人はデュランダルの攻撃を受けて吹き飛ばされていきギアが解除されてしまうほどに大ダメージを受けてしまう。

「くそ……つたれ……」

「ち……力が……」

「……ま……で……なの……かよ。」

「う……うう……」

「か……かい……ぎ……」

五人は気絶をしてしまう、ファイーンは高笑いをしていた。

「ふっはっはっはっは!!無駄だ!!ネフシユタンの鎧にデュランダルを手にした私に貴様たちの力で勝てるはずがないだろうが!!」

彼女は笑いながらデュランダルをふるっていた。

カイザースide

『クライ……マルデ地獄二落ちル感じダナ、ガ・ディンギルナドハ。』

『魔神皇帝ノ名ガ泣クゾ!!』

『誰ダ?』

俺は光らせると二つの光がこちらにやってきた。光が収まると俺は驚いた。

『マジンエンペラーG……真ゲッターロボ?』

「アア!!」

これこそ奇跡の歌の形態エクストライブモードだ!!ファイネは驚いているギアの限定解除する歌などがあつてたまるかと!!

「ならば再び倒れるがいい!!デュランダルの力でな!!」

ファイネはデュランダルの握りエネルギーを込めようとしたが、上空から雷が落ちてダメージを受ける。

「なんだ!!誰だああああああああああ!!」

ファイネは声を荒げると上空から着地をする三体の機体だ、一人は偉大なる魔神皇帝、マジンエンペラーG。

もう一機は三体の戦闘機が合体をして3形態に姿をとることができる真・ゲッターロボ。

最後の機はマジンガーZ、グレートマジンガーをも超える魔神皇帝、マジンカイザーだ!!

「か・・・カイザー?」

クリスは涙を流しながら彼の名前を呼ぶと振り返りクリスのところに歩いていく。

『アア、クリス。俺ハ魔神皇帝・・・タダイマ。』

「馬鹿野郎!!生きていたならさっさと出て来いよ馬鹿!!」

『スマナイ、二人二助ケテモラッタノサ。』

「あなたたちは。」

『俺ハマジンエンペラーG!!』

『俺ハ、イヤ俺達ハ真ゲッターダ!!話ハアイツヲブンナグツテカラダ!!』

全員がフイーネの方を向いて構える。

「おのれおのれおのれええええええええええええええええ!!マジンカイザー!!やはり貴様は最後まで私の邪魔をするか!!」

『フイーネ!!才前ノ野望ハ俺達ガ粉碎スル!!イクゾ、コレガ俺達ノ最後ノ戦イニナル!!』

「[[[[[[[[おう!!]]]]]]]]」

大決戦!!魔神皇帝たち対フィーネ!!

「やれええええええええええええええええええええええ!!」

フィーネの言葉にノイズたちがたくさん現れて全員に襲い掛かる。

『イクゾ!!』

「「「「「おう!!」」」」」

真ゲッターロボはオープンゲッターをして三機の戦闘機に分離をする。

『チエエエエンジ!!ゲッター2!!』

白い戦闘機が戦闘に黄色と赤と合体をして真・ゲッター2に合体をしてブーストをしている。

『ドリルハリケーン!!』

右手のドリルが回転をして真ゲッター2は突撃をしてノイズたちを粉碎をしていく、奏は持っている槍を巨大化させて投げつけると分身をした槍がノイズたちを次々に命中にして撃破していく。

『ウナレ!!グレートスマッシュャーパンチ!!』

マジンエンペラーGの両腕部が回転をして勢いよく放たれてノイズたちを撃破して

いく、翼は剣を大剣状態にして衝撃刃を出してノイズたちを次々に切り裂いていく、クリスとアリスはギアをガトリングとライフル形態にして回転をしながらノイズたちを次々に撃ち貫いていく。

『チエンジ!!ゲッター3!!』

真ゲッター2は分離をして第三形態真ゲッター3へと変わり両手がらせん状に伸びていきノイズたちを大量につかんで上空に螺旋の腕が絡ませていく。

『大雪山おろしいいいいいいいいいいいいい!!』

上空でノイズたちは爆発をしていき、後ろのコンテナが開く。

『ミサイルストーム!!』

たくさんミサイルがフィーネめがけて飛んで行くが彼女は持っているデュランダールを使いミサイルを叩き落とす中横からマシンカイザーと響が同時に拳をうならせて殴りかかる。

「ちい!!」

フィーネはネフシユタンの鞭を大量に発生させて二人を叩き落とした。

『ドア!!』

「うう!!」

『チエエエエンジ!!ゲッター1!!ゲッタートマホーク!!』

真ゲッターになりゲッタートマホークを出してフィーネに切りかかる。

「おりやああああああああああああああ!!」

「はああああああああああああああああ!!」

奏と翼もフィーネを倒すために真ゲッターと共に切りかかる。フィーネは一気に追いついたためにデュランダルの使い攻撃をしようとした。

『サセン!!必殺!!サンダーボルトブレイカー!!』

エンペラーGはサンダーボルトブレイカーを放ち彼女が持っている右手に絡ませて電撃を浴びさせる。

「ぐああああああああああ!!おのれええええええええええ!!」

フィーネが落としたデュランダルのマジンカイザーが拾い。

『立花響!!』

響めがけてデュランダルの投げつける。

「はああああああああああああああああああ!!」

響は空を飛びマジンカイザーが投げたデュランダルのキャッチをする……だが。

「ぐ……ぐうううううううう!!」

彼女にデュランダルの力が交わっていきどんどん体が黒くなっていく、それに気づい

「たいだ。」

「見ろ!!」

奏の言葉に全員が歩いていく。全裸の状態でフィーネは倒れていた。

『天羽奏。』

「止めるなよカイザー、あいつはあたしの家族の敵だ!!」

奏は持っている槍を構えて倒れているフィーネのところへ歩いていく。

「天羽奏か、貴様にやられるとはな……」

「……ああ、両親と妹の敵だ!!」

「奏!!」

翼は声を出す。奏は持っている槍をフィーネに向けて降ろす。全員が奏がフィーネをやったんだと思っただが。

『ドゥヤラヤレてナイミタイダ。』

真ゲッターの言葉に全員が見ると奏の槍はフィーネの真横に刺していた。フィーネもなぜやらないという。

「やれねーよ、あんたは確かにあたしの家族を殺した、だがそれでもあたしに力をくれたことには感謝をしている。それだけだ。」

槍を抜いて彼女は後ろを振り返り翼たちのところへと戻っていく、響達のギアが元の

形態に戻りフィーネは彼らを見ていた。

「お前たちがいたから・・・奴らは戦えたのか?」

『ソレハ違ウゾ、俺達ガイナクテモ彼女達ハ貴様ヲ止メテイルサ。諦メナイ人ノ心ツテモノダ。』

「そうか・・・ならお前にプレゼントをやる頭を出せ。」

カイザーはフィーネの言う通りに頭を差し出すと彼女は手を乗せて光が発生をする。

『コレハ・・・』

「お前に託したのは「LINKER」の作り方だ、私はもうじき消滅をする。」

『ソウカ・・・フィーネ安ラカニ眠レ。』

「その通りだな・・・はっはっはっはっは・・・」

彼女はそういつて灰化をしていき消滅をした。こうしてフィーネが起こした戦いは魔神皇帝たちとシンフォギア奏者たちの活躍によつて戦いは終わった。

カイザースide

フィーネとの戦いが終えてほかの二体の機体も俺たちの仲間となった、現在俺はフィーネが残したシンフォギアのことや天羽奏が使うLINKERを作っている状態だ、俺の頭脳は彼女の知識をさらに解析をして彼女が使うのを改良型を現在作っているところだ。

真ゲッターは響達と訓練をしておりマジンエンペラーGも一緒に監督をしている。

『フーム。』

「どうだカイザー。」

弦十郎が入ってきたので俺は今の感じを報告をする、彼も苦笑いをしながら俺の方を見ていた。

「お前はすごいな、了子君が残してくれたものをさらに改良をするとは。」

『マアナ、コレガ完成ヲスレバ天羽奏ガギアヲ纏ウ時間ガ増エルノハ間違イナイ。』

「だな、すまないな。」

『気ニスルナ、イズレニシテモノイズノ原因ガコノ杖ツテノモアルシナ。』

ソロモンの杖を出して俺はセットをしてパソコンにつなげてキーボードにデータなどを確認をしている。

各データなどを取りソロモンの杖の解析をしている。

「不思議なものだな、了子君が持っていたとはな。」

『ダナ。』

そういつて俺達は調べるのであった。

それぞれの一日。

フィーネとの戦いはシンフォギア奏者と魔神皇帝たちの活躍により阻止されてから数週間が立った。メンバーたちもそれぞれの仕事や学校などに行く。

さてまずは雪音姉妹を見てみよう。

「……………なあ、今更なだけだよ。」

「どうしたの?」

「いいのか? あたしまであんたのところの家族になってもよ。いくらクローンだからってよ。」

「いいんだよ、パパやママも嬉しそうにしていたでしょ?」

「……………まあな。」

アリスはあの時の光景を思いだしていた、クリスに連れられて彼女の家まで行き出してきたソフィアたちは驚いたが、クリスの言葉を聞いて二人はアリスのところへ行く。

ソネットは彼女の近くに行き抱きしめる。

「え?」

「あなたがクリスのクローンなんて関係ないわ、あなたは私たちの娘になってもいいの

ためアリスは髪をポニーテールにしてクリスとわかるようにしていた。

「まあ私はどつちでもいいんだけどね。」

笑いながら学校に行くよといい彼女の手を引っ張っていく。

「おい!! 引っ張るなよ!!」

「しようがないでしょ!! アリスが二度寝するからほら急ぐ!!」

「つたく!!」

「気を付けていくのよ。」

「はーい!!」

ソネットの言葉を聞いて二人は返事をして学校の方へ走っていく。その姿は本当の双子のように。

さて場所が変わり響は現在寮にてある人物を待っていた。

「未来、まだ来てない?」

「まだだよ?」

「そうか……」

こんこんと音が鳴り未来は来たと思ひ、扉の方へと歩いていく。

「はい今開けますよ?」

彼女はきた人物を部屋へ上がらせる、そこにいたのは魔神皇帝だ。現在の大きさはば

れないように普通のサイズよりもさらに小さくなっておりステルス機能を作動させてこの部屋へとやってきた。

『ヤア二人トモ。』

「カイザーさん!! まっていましたよ!! さあどうぞどうぞ!!」

魔神皇帝がこの部屋に呼ばれたのはある理由があつた、それは響自体が彼を呼んだのがきっかけで今はこの部屋にお邪魔をしている。

未来はお茶を出したがカイザーは飲めないことに気づいた。

「ご、ごめんなさい・・・カイザーさんは飲まないでしたよね?」

『大丈夫ダ、モラウサ。』

未来が入れて呉れたお茶を彼はスリット部分の方へと持っていきそれを飲んでいる、彼は自己強化をしてご飯などを食べられるようにしているが普段は食べなくてもエネルギーが回復をするため不必要なのだ。

『上手イ、トコロデ立花響。ドウシテ俺ヲ呼ンダ?』

「それはですね、あなたにお礼を言いたかつたんです。」

『オ礼?』

彼は首をかしげていると彼女は目を閉じていた、そこから思いついたことを話す。

「カイザーさんには何度も助けてもらいました、最初はコンサート会場で襲われたとき

私は一つの光を見たんです、気絶をする前だったんですけどあれはカイザーさんがカイザーノヴァを発動をさせたところでした、あの綺麗な光だなど思い私は気絶をしました、二度目はガングニールを始めて装着をしたときでした。ノイズに襲われていた私たちをあなたは助けてくれた。二年前に助けてもらったのに再び助けてくれたことが嬉しかったです。そして私がこの力をどうしたらいいのかって時もあなたは支えてくれた。本当に感謝をしているんです魔神皇帝。」

「私からもありがとうございますカイザーさん!!」

『二人トモ、俺ハアドバイスヲシタダケダ。ソノカラ發揮サセタノハ君ダ、立花響。』

「カイザーさん。」

『小日向未来。』

「はい。」

『コレカラモ彼女ヲ支エテヤツテクレ。コノ馬鹿ハ何ヲシテカスカワカラナイカラナ。』

「ふふ分かっていますよカイザーさん。」

「ひどいですよカイザーさん!! 未来もそこは助けてくれてもいいじゃん!!」

響が二人にぶーぶーというが彼らは笑いながら楽しむのであった。

一方基地では。

『ゲッタートマホーク!!』

『エンペラーブレード!!』

真ゲッターロボとマジンエンペラーGがお互いの武器と武器がぶつかっていた、模擬戦の様子を奏と翼は見ていた。

「すげーなあいつら、マジンカイザーと同じように。」

「ええ、真ゲッターロボは三形態を自由に合体することで戦い方を変えているわ、一方でマジンエンペラーGの方はマジンカイザー同様に武器が多数持っているわ。どちらが勝ってもおかしくない。」

マジンエンペラーGはルスタイフーンを放つが、真ゲッターロボは分離をして姿を変える。

『チエエエエンジ!!ゲッター3!!』

真ゲッター3へと変わり後ろのコンテナが開いてミサイルを発射させる。

『ミサイルストーム!!』

ミサイルがマジンエンペラーGに向かって放たれる、エンペラーは胸部の前面が下がり後方部分の放熱板が延長をしてエネルギーが充電された。

『燃エツキロ!!グレートブラスタァ!!』

グレートブラスタァがミサイルストームを撃破して真ゲッター3に放たれるが。

『オーブンゲッター!!』

すぐに戦闘機に分離をして回避をして合体をする。

『チエエエンジ!!ゲッター2!!ミラージユドリル!!』

ドリルが回転をしてそこから七つの光線がエンペラーGに命中をしてダメージを与えるが、エンペラーGも受けながらも実は技を放っていた。

『ドア!!』

真ゲッター2は何かが当たりバランスを崩してしまふ、彼はすぐにエンペラーGの左手がないことに気づいた。

『マサカ、ミラージユドリルヲ受ケタ際ニグレートスマッシュヤパンチヲ放ツテイタカ。』

『ソウイウコトダ。』

お互いに着地をして真ゲッター2は真ゲッター1に戻りお互いに握手をして模擬戦は終わった。

奏たちもその中に入りすげーなとか言いながら話をする。

その夜

マジンカイザーは空を見ていた、彼がこの世界に転生をして数年は立っている。原作ブレイクなどが発生をしたりして色々であったなと思っていると彼に近づいていく人物がいた。

「こんなところで何をしているのですか？」

『風鳴翼カ、少シダケ夜空ノ空気ヲ吸ツテイルダケダ。』

彼女はマジンカイザーの隣に座り彼の手を触っていた。

『俺ハ人ノヨウニ暖カクナイゾ？』

「それはないかな、あなたはロボットにしては感情的だから。人のために怒り喜ぶことをあなたはしているわ？」

『ソナツツモリハナイガ？』

「でもあなたには感謝をしている。奏を助けてくれてありがとう。」

『前二モ言ツタガコレハ俺ノ役目デモアル。戦エナイ人ノ為ニナ。』

彼は夜空を見ながら右手を上げて拳を握りしめる。これから起こるであろう戦いに備えて。

第二章 早乙女博士の乱

新たな敵 その名前は早乙女

カイザースィド

ファイネとの戦いが終わり三か月たった。ツヴァイウイングはある歌手と合同コンサートを行うことになった。マリア・カデンツァヴァ・イヴ……かつて俺がアメリカにある研究所で助けた少女がきれいな女性になっていた。

彼女と再会したのはコンサートをすることになった打ち合わせの時だった。翼のポケットに入っていた俺は翼に机の上に置いてもらったとき、彼女が俺を見ていた。

「風鳴翼、その人形は？」

「ああ、これは私が普段から持っている人形だ。」

彼女はへーといいながら俺を触っているがくすぐったいんだよな。彼女は俺を抱きしめる!? 待て待てでかいなーおい!!

(会いたかったわ、魔神皇帝……)

「!!」

彼女は小さい声で俺の名前を呼んでいた、やはりばれていたのか? 彼女が俺の名前を

呼んだってことは間違いなくばれている証拠だ。

話が終わるまで俺は彼女に抱きしめられていた。顔の後ろに彼女の大きな胸が当たっているが俺はロボットなので性欲がないみたいだ。シヨックだが顔が真っ赤にならないだけよかったと思う。

彼女は嬉しそうに俺を抱きしめながら話を聞いているみたいだな、話が終わり彼女は俺に大きくなってくれないかしらといってきた。

俺はあたりを確認をして翼たちの方を見る。

「カイザーしようがないじゃないか？お前も知っている奴ならあたしたちもかまわな
ぜ？」

『感謝ヲスル。マジン・ゴー』

俺は体をマリアたちと同じ大ききにして、改めて彼女と言葉を交わす。

『久シブリダナ、マリア・カデンツァヴナ・イヴ。』

「ええ、あなたとあったのはもう何年前になるかしら……あの時は助けてくれて
ありがとうございます。」

マリアは俺に頭を下げるが、元々俺は機能を停止した状態である研究所にいた。その
時に聞こえた歌が俺の光子力エネルギーを動かした。

『感謝ヲスルノハ俺ノ方ダ、妹の歌ガ聞コエテキタコトデ俺ハ動クコトガデキタ。ソウ

「イエバ妹ハ？」

「ふふ、もうそろそろ来るわよ？」

『？』

彼女の言葉に俺は首をかしげていると、茶色の髪をしたマリアと同じような胸をした女性が入ってきた。そうか……彼女もあの時よりも大きくなって立派な大人になっっているからな。

「姉さんどうしたの？つて……カイザー……さん？」

彼女は俺の方を見て目を見開いている。まるで信じられない、どうしてここにいるの？みたいな顔をしている。

『久シブリダナ、セレナ・カデンツァヴァナ・イヴ。』

「カイザーさん……カイザーさん!!」

『オット。』

彼女は俺に向かって走ってきて抱き付いてきた。暖かいものを感じて彼女の方を見ると涙を流していた。

「カイザーさん、あなたに会いたかったです。あの時は何も言えなかったことを……」

『スマナイ、俺毛色々トアツタカラナ。ダガ元氣ソウデ何ヨリダ。』

「はい!!」

彼女は元気な笑顔を見せてきた。俺は本当に守れたんだなと思いい彼女の頭を撫でて
いる。それから数週間が経ち彼女たちのコンサートが始まる。俺とエンペラー、真ゲッ
ターもコンサートを見ていた。

『スゴイナ。』

『アア、歌ヲ聴イテイルト体ニ力ガ湧イテクルゼ!!』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『ドウシタカイザー?』

『何デモナイ。』

俺は両手を組んで考えていると、爆発が起こった。

『!!!』

俺達三人はステージの方を見ると一人の男性が立っていた。

『聞くがいい!! 愚かな人間どもよ!! 我が名は早乙女!! この世界を破壊するために私は
やってきた!! いでよ!! ノイズどもにゲッター軍団!!』

早乙女の合図にノイズとゲッタードラゴンやライガー、ポセイドン、1, 2, 3が現
れる。

『アレハゲッターロボ!?!』

『イクゾ!!』

俺はカイザースクランダーを装備して奴らのところへと降りたつ。

『ゲッタービィィィム!!』

真ゲッターから放たれたゲッタービームがノイズたちを撃破して俺達は着地する。

「ぬ!!馬鹿な!!真ゲッターだど!?!」

『ナンダジジィ!!ツタク御託ハイイカラヨ、覚悟シヤガレ!!』

真ゲッターはゲッタートマホークを構えているとノイズたちが襲い掛かってきた。

『遅イ!!』

エンペラーはエンペラーブレードを出してノイズたちを切り裂いていき、俺はその間に観客たちを避難させていた。彼女たちも避難しているといいがって戦っている!?

カイザー side 終了

カイザーはステージでゲッターたちと戦うマリアとセレナを見つめる。すぐに飛び立ち彼女たちに襲い掛かろうとしていたゲッターポセイドンにターボスマッシュパーパンチを放ち撃破する。

両手を戻して彼女たちの近くに立つ。マリアは奏と同じガングニールを装備しているが黒かった。マントも装備している。

一方でセレナは白銀のアガートラームを装着して短剣を装備していた。カイザーは驚きながらも奏と翼も駆けつける。

「あたしたちも驚いているぜ？まさかシンフォギアを纏うなんてよ。」
『話ハ後。マズハ敵……イヤ援軍ガ到着ヲシタ。』

カイザーが言うのと上から強大なビームが放たれてドラゴンを始め撃破される。真ゲッターたちの方にも鎌や鋸などが飛んできてゲッター軍団やノイズたちを撃破していく。

「ぬお!!」

「上からあたし参上!!」

アリスはかっこつけて着地をして仮面ライダー電王がする登場ポーズをする、クリスと響も同じように着地する。

「何やっっているのよアリス。」

「いやー仮面ライダーにはまっちゃまってよ、一番が電王なんだけだよ、あたしのギア電王みたいにならねーかな?」

「アリスちゃん、それは難しいってあれ?」

「おや?アリスのギアの様子が!!」

「なんだなんだ!!」

「デース!!」

「光ってる。」

光が収まると彼女のギアの姿は電王のような姿に変身していた。

「よっしやああああああああああ!!あたし参上!!」

アリスは発現した電王ギアを纏いデンガツシャーを構えてゲッター軍団に切りかかる。

「アリス!!全く、響悪いけど。」

「分かっているよクリスちゃん!!」

クリスは援護をするためにガトリングを放ちライガーを撃破する。響はアリスと共にポセイドンやゲッターを殴ったり切っていく。

「あたしの必殺技!!パートー!!」

刀身を飛ばさずにエネルギーがたまり次々に切っていくアリス、響は苦笑いをしながら彼女を見るのであった。

『ルストトルネード!!』

『ルストタイフーン!!』

マジンカイザーとマジンエンペラーGの二人の竜巻がゲッター軍団に襲い掛かり風化させていき破壊していく。

『チェンジ!!ゲッター2!!ドリルハリケーン!!』

真ゲッター2になった真ゲッターロボは右手のドリルを回転させて突撃をして次々

に撃破していく。

「おのれ……だがまあいい、今回は撤退をさせてもらうぞ!!全機オープンゲットじゃ!!」
全機がオープンゲットなどをして戦闘機に変わり早乙女はイーグル号に乗り撤退する。

全員が武器を収めたりすると二人が走ってきた。

「カイザああああああああああああああああああ!!」

「カイザー!!」

調と切歌が走りだしてマジンカイザーに抱き付いてきた。彼女たちも魔神皇帝と会ったのはあの時以来だ。

『……………』

彼は抱き付いてきた二人の頭を撫でていた。

『本当二元気デヨカツタゾ。』

「はい!!」

『シカシ早乙女カ……………』

全員で話そうとしたが。

「やっぱりカイザーさん達の声、聞きずらいですね。」

『……………』

三人はそう言われてもなと思い、どうするか考えるのであった。

カイザー達言語機能を改良。

早乙女博士が宣戦布告をして戦いを終えたカイザーたちは臨時基地となっている潜水艦へと戻ってきた。

現在のはほかのメンバーたちは紹介などをしている中カイザーたちの姿が見えない、彼らは何をしているかというところ？

『ヤハリ機械音声デハ、ヤリズライミタイダナ。』

そう前回セレナに声が聞きとりずらいといわれたので彼らはどうするか考えていたところである。

『トリアエズ改良ヲシテイコウ。』

二人もカイザーが言った言葉に同意をして声の回路をいじるのであった。一方でアリスは上機嫌だった。

「いいじゃんいいじゃんすげーじゃん!!」

電王のクライマックスジャンプを歌いながら歩いてきた、クリスも苦笑いをしていた。現在はアリスは電王ギアとアサルトギア、さらにネフシユタンギアを纏うことが可能となっている。自身が好きな電王になれたことにうれしさが半端なかったのだ。

「アリスうれしそうだね（苦笑）」

「おうよクリス!!電王だぞ!!あたしの大好きな電王になれるだけでもうれしいんだぜ!!」

「う、うん……」

アリスが目キラキラさせて言うのでクリスは苦笑いを浮かべるしかなかった、彼女たちは歩いているとカイザー達はどこかに行こうとしている姿を見つめる。

「カイザー達だ。」

「本当?」

クリスはカイザーという言葉を聞いて彼女の隣に立つ。二人は追いかけるとカイザー達は移動をしながら話をしている。いったいどういう内容で話しているのか気になっていた。

二人はばれないようにカイザー達の後を追いかけることにした。

「抜き足差し足のびあ『何しているんだ?お前ら。』ふえ!」

声をした方を見るとカイザーが二人を捕まえていた、彼女たちはカイザーの声が機械音声じゃないことの驚いている。

「カイザー?」

『どうしたクリス?』

『おいおい何を捕まえたんだ?』

『なるほどな、カイザーが捕まえたのはこいつら二人つてわけか。』

真ゲッターとエンペラーが近づいてきた、カイザーが突然消えたので気になり後ろを振り返り歩いてきたのだ。

「うええええええええええええええええ!!」

司令室

「なるほど、自分たちの回路をいじってその声を出せるようにしたわけか。」

『そういうことだ、これからはこっちで話すことになるからよろしくな!!』

カイザー達の声は翼たちにとつてはどこかで聞いたような声だなど思った、特に真ゲッターの声は弦十郎に声が似ているなど誰もが思った。

新たな声を手に入れたカイザーは模擬戦をする前に三人にあるものを渡していた。

『ほら三人ともこれを使え。』

「これつて!? LINKERじゃないの!!」

『おうよ、俺が奏が使っていたのを改良をして戦闘時間を増やしたものだ。LINKERを使っているお前らには言いかと思つてな。』

「ありがとうデース!!」

「ありがとうカイザー。」

「大事に使わせてもらおうわ。」

三人は受け取り、マジンエンペラーGは彼女達の訓練に付き合っていた。

『響!!それでは俺に当てることはできないぞ!!』

「ご、ごめんなさい!!」

響は謝りながらマジンエンペラーGが放つ攻撃をはじめさせていく。一方で真ゲッター3となつた真ゲッターロボに奏と戦っていた。

「どりやああああああああああああああ!!」

『おっと、この形態はなパワーが強くなるからな!!大雪山おろしいいいいいいいいいいい!!』

「どああああああああああああああああああああああああああ!!」

大雪山おろしを受けて奏は目をまわしていた、真ゲッターもやりすぎてしまったぜと笑っている。

『やれやれ、あいつらもやり過ぎにはきをつけてほしいぜ。』

二人の様子を見ながら彼は見ていると突然警報が鳴りだした。

「!!!!」

全員が司令室の方へ行くと弦十郎が腕を組んでいた、先ほどの警報はノイズが出現をしたという連絡だ、カイザーたちはいつでも出撃ができるように待機をしている。

「全員出動だ!!」

『行くぜ!! マジンゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

『グレートオレオール!!』

『バトルウイング!!』

彼らは空を飛べるために先に向かうのであった。

謎の仮面騎士

カイザー達はシンフォギア奏者たちよりも先に現場に到着をして暴れているゲッターロボ軍団にノイズたちを見つける。

『どうやら見つけたみたいだぜ？』

『ああ!! 一気に決めてやろうぜ!!』

『なら俺から行くぜ!! くらえ!! グレートスマッシュヤーパンチ!!』

マジンエンペラーGの両手下部が外れてノイズ達に次々に命中をして撃破していく、両手がエンペラーGに戻り三機は着地をする。

『さーてお前らにも見せてやるぜ!! この魔神皇帝の力をな!! 光子力を熱エネルギーに変えて放つ!!』

マジンカイザーの放熱板が光りだしていき白くなっていく、彼は襲い掛かってきたゲッターロボ軍団の方に向けている。

『受けてみる!! ファイヤープラスタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!』

ファイヤープラスタアが放たれて命中をしたゲッターロボ軍団の体が溶けていく、破

壊されていく。

『ゲッタービィビィイム!!』

真ゲッターはゲッタービームが放たれてゲッタードラゴンたちを薙ぎ払い撃破する、ゲッタートマホークを出してノイズに攻撃をしようとしたとき。

『ファイルロード ユニコーンドリル！レオサークル!』

『なんだ？どあ!!』

真ゲッターは突然現れた青い馬の体当たりを受けて吹き飛ぶ。二体は一体何があったのかと見ると白いライオンがカイザーの右手にかみついていた。

『なんだこいつは!!』

『ブルドライブインストール!!』

音が聞こえてエンペラーが向くとウシ型の角が当たり吹き飛ばされる。

『何だお前は!!』

カイザーはライオンを投げ飛ばしてユニコーンも右手に牛を装備をした謎の戦士のところに戻っていく。

現れた姿は両腕と両足にタービンが装備されており仮面はフェイスガードされている姿だ。

『我は騎士凰牙……お前たちを倒す為にやってきた。』

『騎士風牙だ!?へ!!おもしれえ!!ゲッタートマホーク!!』

『おいゲッター!!』

カイザーの言葉を聞かずに真ゲッターはトマホークを出して風牙に切りかかる。シンフォギア奏者たちも現場に到着をして真ゲッターがゲッタートマホークを振り下ろすところを見ている。

『くらいやがれ!!』

トマホークが振り下ろされて風牙は避けようともせずに両手で受け止めた。

『何?!』

『ふん!!』

左足のタービンを回転させて真ゲッターの胴体に蹴りを入れてマジンカイザー達の方へ吹き飛ばした。

『よつと』

二人は真ゲッターをキャッチをして着地をする。

『すまん、助かった。』

『なんて奴だ!!』

風牙は左足に赤いドラゴンが装着されていた。

『見せてやろう!!我が力を!!』

両手両足のタービンが回転されて左足のドラゴンフレアにエネルギーがためられて行き背中のパックが開く。

『ドラゴンフレア！ファイナルアタック!!』

左足から放たれる高エネルギーの高熱が彼らに向けて放たれる。

『エンペラー!!』

『おう!!』

二人は放熱板にエネルギーをためて相殺をするために放つ!!

『ダブルバーニングファイヤー!!』

エンペラーとカイザーはダブルバーニングファイヤーを放ち凰牙が放ったファイナルアタックを相殺をしようとしたが、その威力は彼らが予想をはるかに超えてダブルバーニングファイヤーを打ち破り彼らにダメージを与える。

『ぐああああああああああああああ!!』

『カイザー!!』

『エンペラーさん!!』

二体は地面に落ちていく、ダメージはかなりのもので体から火花を散らしている。

『く、エネルギーが切れたか。戻るとしよう。戻れ!!ユニコーン、レオ!!』

凰牙は後ろを振り返りゲッター軍団は彼の後をついていくように撤退をする、真ゲッ

ターは着地をしてカイザー達に声をかける。

『おい!!二人とも大丈夫か!!』

『うぐぐぐ……』

『か……体が……ダメージが思った以上に受けていやがる。』

二人は立ちあがろうとしたが、ファイナルアタックの攻撃は二人の体に大ダメージを与えていた。

「騎士凰牙つて言ったのよね?」

『ああ、奴は動物?みたいなものもついていたな。俺が見たのは馬と獅子と牛だったな。そして最後の龍みたいなのが奴の左足についていたな。』

「馬?」

「獅子……」

「牛。」

「龍デース?」

シンフォギア奏者たちもゲッターの言葉を理解しようとしたが、なにせ出てきた単語が馬、獅子、牛、龍だからだ。いったいどういう意味なのかと思う。

一旦基地の方へと戻りカイザー達を治すために運ばれる。

一方で凰牙は背中のバックパックから電池が抜かれて新たな電池が入れられる。

「凰牙さま、新たなハイパーデッチになります。」

『ふむご苦労、早乙女博士は例のゲッターのところだな?』

「は!!その通りでございます。」

(やはりか、あの真ゲッタードラゴンというのを博士は作っているが、まだ起動をしないと云っていた。それはなぜ?)

凰牙が考えていると彼の中から六体の動物たちが出てきた。

『心配をしてくれるのか?お前たち。』

その言葉に全員が首を縦に振っている。

『ありがとう、ユニコーン、レオ、ボア、ドラゴン、バイパー、ブル。私は大丈夫だ戻ってくれ。』

光が再び彼の中に入り、凰牙は歩くのであった。

現れた新たな戦士!!日輪は我にあり!!

二課の潜水艦の中、現在カイザーとエンペラーが運ばれており修理場所にと運ばれる、彼らは先ほどの戦闘で現れた騎士凰牙の攻撃を受けて大ダメージを負い運ばれた。

真ゲッターはその様子を見ていたときマリアたちが彼のところへやってきた。

「カイザーたちは？」

『今は自己修復をしているが、あのダメージだ当分は戦えないだろうな。』

「私たちをかばったせいで……」

『気にするな、俺達はお前らよりは頑丈にできている。だから体が動いたからな。だが今戦えるのは俺達だけってのはつらい方だ……』

真ゲッターは涙を流しているセレナとクリスやアリスを見ながら言っている、彼女たちは彼に救ってもらった。その彼が傷ついているのを見て涙を流していると、警報が鳴りだした。

「くそ!!こんな時に!!」

全員で出撃をしていき、真ゲッターは真ゲッター3にチェンジをする。

『ここは俺に任せろ!!ミサイルストーム!!』

真ゲッター3の後ろのコンテナが開いてミサイルがたくさん発射されてノイズたちを次々に撃破していく、ゲッター1たちがトマホークブーメランを投げつけてきたが、翼が剣を大剣にして蒼ノ一閃でトマホークをはじかせていき、その間に真ゲッター2になつた。

『くらえ!!プラズマドリルハリケーン!!』

右手のドリルが回転をして電撃を帯びた竜巻がゲッターロボ軍団に当たり次々に撃破していく。

「はあ・・・はあ・・・」

響はノイズたちを戦いながらも体がいつも以上に動けない、クリスは彼女の様子を見ていた。

「響?」

「クリス!!」

「しま!!」

響に気をとられて後ろからゲッターライガーが左手を展開をしてドリルを使い彼女に攻撃をしようとしてきた。

クリスはガードをしようとしたが・・・

『ダイターンスナッパー!!』

声と共に鞭が飛んできて先端がゲッターライガーの首をに巻き付けて投げ飛ばす。クリスは一体誰がやったのかと方角を見るとその戦士は着地をする。

「あなたは……」

『世のため人のため!!悪を倒すダイターン3、この日輪の輝きを恐れるのならばかかってこい!!』

無敵鋼人ダイターン3が現れた、彼はいつも通りの台詞を言うとゲッタードラゴンがダブルトマホークを出して彼に襲い掛かってきた。彼は冷静に扇を出した。

『ダイターンファン!!』

ダイターンファンでゲッタードラゴンが放つダブルトマホークをはじかせていきそのまま殴りつけてゲッタードラゴンを撃破すると左足をあげてゲッターポセイドンに向けていた。

『ダイターンキャノン!!』

足裏からダイターンキャノンが放たれてゲッターポセイドンに命中をして爆発をした後に鉄球を出して振り回していた。

『ダイターンハンマー!!えい!!とう!!』

ダイターンハンマーを振り回してノイズやゲッターたちを破壊していく中、真ゲッ

ターは1にチェンジをしてゲッタービームを放ちクリスはミサイルを同時に発射をして撃破していく。

「響ちゃん大丈夫?」

「セレナさん…….はい、大丈夫です。」

「セレナ!!響!!前!!」

マリアの声で二人が前を向くと二体のノイズが彼女たちに襲い掛かろうとしていた。

(響ちゃんだけでも!!)

セレナは響を守ろうとしたとき!!

『ムーンアタック!!』

『バードアタック!!』

三日月と鳥型のエネルギーが飛びノイズたちを吹き飛ばす、ダイターンはハンマーを振り回すのをやめた。

『どうやら君達も到着をしたみたいだね?ザンボットにトライダー。』

二体の巨人も着地をしてダイターンのそばに立つ。

『ダイターンの兄ちゃんの頼みだから!!断れないぜ!!』

『さあ見せてあげようよ!!僕たち無敵のロボットの力を!!トライダーセイバー!!』

トライダーG7はトライダーセイバーを出してノイズたちを切っていく、ザンボット

は脚部の外す。

『ザンボットバスター!!』

ザンボットバスターを投げつけてノイズたちを次々に撃破していく、彼はクラップを出して連結させて片方が縮み、片方が伸びたザンボットカッターを構えて切りつけていく。

「す……すごいデース!!」

「うん……」

切歌と調は彼らの戦いを見て驚いている、ゲッターの方もあんな奴らがいるんだなと思えば必殺技を出すことにした。

『おめーらは下がっていないな、今から使う技はゲッタービームよりも強力だ、いくぜ!!』

真ゲッターは両手にゲッターエネルギーを集中させていく、光球ができていきそれを投げつける。

『ストナーアアアアアアアアアアアサンシャイイイイン!!』

ストナーサンシャインを放ちゲッター軍団を撃破していくのを見てダイターンたちも見ていた。

『なかなかやるじゃないか、なら僕たちも見せようじゃないか。』

『おうよ!!』

『よーし!!』

三人は上空へとび構えをする。

『日輪の力を借りて!!今必殺の!!』

『ザンボット!!』

『トライダー!!』

ダイターンは頭部の太陽のような部分が、ザンボットは頭部の三日月部分がトライダーは胸部の鳥のマークが光りだしていく。

『サン!』『ムーン!』『バード!』

『アタック!!』

三体のロボットから必殺技が放たれてゲッター軍団は動きを止めてしまふ、三体はそれぞれ蹴りをお見舞いして貫通をして一気に撃破した。

『よっしゃ!!』

『決まったぜ!!』

トライダーとザンボットはハイタッチをしているが、ダイターンだけは喜んでいなかった。

『ボアドライブインストール!!』

『来る!!』

ダイターンはすぐにファンを展開をして光弾をはじかせる。全員が光弾が飛んできた方を見る。

「てめえは!!」

「凰牙!!」

『見たことがないロボットだな、まあいい。バイパードライブインストール。』

彼の左手に蛇が現れて装着をする、ザンボットたちも構えているとゲッターが割り込んだ。

『悪いな、こいつは俺が戦う。こいつに俺の親友たちがやられたんでね!!』

『ほう貴様か、なら受けよ!!』

凰牙は左手のバイパーウィップを振り回して真ゲッターに攻撃をしてきた。

『オーブンゲット!!』

三機の戦闘機に分離をして凰牙を翻弄をする。合体をして真ゲッター3となり彼の体に巻き付ける。

『ぬ!!』

『必殺!!大雪山おろしいいいいいいい!!』

『ぬおおおおおおおお!!』

上空へ上げたのを見て真ゲッター3は合図を出すと、横から奏とマリアが現れた。

「くらいやがれ!!」

「はああああああああああああ!!」

二人の槍が風牙のボディを切りつける、ガトリングボアたちを分離させて右手にユニコーンが合体をして左手にはブルホーンを出して二人の槍をさばいていると!!

『ドリルミサイル!!』

真ゲッター2になった真ゲッターのドリルミサイルと切歌は鎌を分裂させて投げつけて、調はギアから鋸を発射させて風牙にダメージを与える。

「とどめはあたしに任せろ!!あたしの必殺技!!ワイルドショット!!」

電王ギアに変わったアリスのワイルドショットとクリスのガトリングの雨が風牙に命中をして彼は吹き飛ぶ。

『思ったよりやるではないか………まあよいここは撤退をする。』

風牙は撤退をしていきノイズたちは崩壊をしてゲッターロボは分離をして撤退をする。真ゲッターたちも着地などをしてしていると響が倒れた。

「響!!」

「立花しつかりしろ!!」

翼とクリスは彼女に近づいていき、基地の方へとダイターンたちを連れて戻る。彼らの大きさは人間サイズに最初からなっていた。

彼らが戻るとカイザーとエンペラーが迎えてくれた。

『みんな大丈夫か?』

『俺達が気を失っているうちに色々とあつたみたいだな。さあ早く!!』

ゲッタードラゴン、鉄の城、偉大な勇者、宇宙の王者現る。

カイザースide

体を回復させた俺とエンペラーは起き上がりメンバーたちが帰ってくるのを待っていた、全員が新たな戦士たちと共に倒れた響を連れて帰ってきた。

『急いで医務室に運ぶんだ!!』

響を急いで運んだのをみて、俺はすぐにメンテナンスの機械を起動させて彼女の体を調べている。彼女の体をレントゲンで写真を取り確認をする。

『これは!?!なんだこれは!!』

俺は驚いている、彼女が刺さったであろう GANG ニールの破片から彼女の体に浸食をしていくレントゲン写真が写っていた。おそらく彼女は奏のアームドギアが刺さってしまい GANG ニールを纏っていた。

体の浸食率が上がってしまい、倒れてしまった。俺は急いで眠っている響以外を集めさせた。全員が俺がいる医務室に集まり、俺はレントゲン写真を見せる。

『おいカイザー、なんだこれは!!』

真ゲッターが写真を見て声を荒げるが、ほかのメンバーも写真を見て驚くメンバーが

多い。

『これはガングニールが彼女の体を浸食をしている。おそらくこの現象は彼女が戦い続けるで大変なことがわかった。それは……』

『響の命がなくなるってことか。』

エンペラーが答えたので俺は首を縦に振る、事実なので何も言えない彼女が助かるには戦いを止めるしかない。

びー……びー……!!

「この警報は……敵が現れたのか!!」

響以外のメンバーで出撃となり俺とエンペラーも修理が完全に終わったので出撃をする。

「カイザー大丈夫なのか?」

『ああ心配をかけたなクリス、もう大丈夫だ。』

俺たちは空を飛んだりして現場に到着をする、だが俺達が見ているのはゲッタードラゴンがゲッタードラゴンを攻撃をしていた。

「これはいったい……」

翼たちも驚いていると、上空から雷が二つ放たれてゲッター軍団を撃破していく、俺は驚く。

その降りてきた四体の姿を。

『あれは………』

『ん?』

俺はその姿を見たことがある、あれこそ元祖スーパーロボットと呼ばれていた、マジンガーZにグレートマジンガー、グレンダイザーにゲッタードラゴンだ。

色的にテレビ版の方が?

『なんだありゃ!!俺の知らないマジンガー!?!』

『Z後ろだ!!』

グレンダイザーの言葉で振り返りゲッター2のドリルを回避をしてアイアンカタールをだして切り裂く。

『へ!!俺に当てようなんて甘いんだよ!!』

『あたしたちも参戦をするぜ!!』

『だな!!』

いつたいこの世界にどれだけのスーパーロボットが……俺も戦闘態勢をとり攻撃をする。

カイザーside終了

ノイズはグレートマジンガーに攻撃をしてきた、彼はマジンガーブレードをとり彼ら

が放つ攻撃を切り裂いていく。

『そんな攻撃でグレートマジンガーをやれると思うな!!』

『スクリュークラツシャーパンチ!!』

グレンダイザーの両手下部が飛びゲッター軍団を貫いていく、ゲッタードラゴンはスピンカッターを使い襲い掛かってきたゲッターを切り倒す。

(このゲッターロボたちはいったいなんだ、俺と同じドラゴンやライガー、ポセイドンまでいったい……)

『ゲッター!!考えるのはいいけどよ!!後にしな!!光子力ビーム!!』

マジンガーZの両目が光りだしてビームが放たれてドラゴンを撃破した。

『すまない!!ダブルトマホーク!!』

ドラゴンはダブルトマホークを構えてノイズを次々に切っていく、真ゲッターはゲッターサイトを構えながらドラゴンを見ていた。

『あのゲッタードラゴン、量産型とは違うみたいだな。』

『ああ俺もそう思う。それにあのマジンガーの姿……どこかで。』

『……』

三人はマジンガーZたちの姿を見ながらノイズたちを攻撃をしている、翼たちもギアを展開をして次々にゲッター軍団やノイズたちを撃破していく。

『一気に決めてやろうぜ!! ブレストファイヤー!!』

『くらえ!! ブレストバーン!!』

『反重力ストーム!!』

『ゲッタービーム!!』

四体の技が放たれてゲッター軍団やノイズたちを撃破した、ダイターンたちも彼らの力を見て驚いている。

『さーて、お前らはなんだ!? 俺達以外のマジンガーなんて知らねーぞ!!』

乙がマジンカイザーたちを見て驚いている、ダイザーやドラゴンも彼らの方を見て思っているとグレートマジンガーが彼らに近づく。

『君たちはいったい何者だ?』

『俺はマジンカイザー。』

『俺はマジンエンペラーG。』

『俺は真ゲッターだ。』

『僕はダイターン3だ。』

『俺はザンボット3!!』

『おいらはトライダーG7だ!!』

乙達は彼らの話を聞きながら自分たちがいる世界とは違う世界だとわかった。

「なるほど、あなたたちもこの世界とは違うものなのですか？」

『ああおそろく間違いないと思うぜ？』

乙は両手をあげながらあたりを見ている、現れたノイズたちを倒したときに変な気分を感じた。

『いずれにしてもゲッターロボがこの世界では暴れているのか？』

『だがあのゲッターたちはいったい何者だ？俺が知っているだけでも量産されているなんて聞いたことがない。』

ゲッタードラゴンは破壊をしたゲッターたちを調べている一方で。

「早乙女博士。」

「どうした!!」

「あの方がお呼びです。」

「わかった。」

早乙女博士は真ドラゴンを見ながら部屋を出ていき、例の場所へと向かっていく。そこには玉座があり、一人の戦士が現れた。

「レオザック副官じゃないですか。」

「早乙女!! 貴様呼ばれたらさっさとこんか!!」

「申し訳ございません、真ドラゴンのことありまして。」

「まあいい!!」

恐龍戦隊も集まっております早乙女博士が最後みたいだ。音が聞こえてきて玉座に人物が現れる。

「デスザラス大帝!!」

ドラゴン型のロボットが現れる。

「トランスフォーム!!」

人型へと変形をした彼はかつてデストロン破壊大帝と名乗っていたデスザラスであつた。

「見ろ!!我らはこの星で復活を遂げた!!この星では我らを邪魔をするものがある!!ゴウリュウ!!」

「は!!」

「お前たち恐龍戦隊の力を使い奴らを叩きのめせ!!」

「はは!!」

「レオザック、お前はドリルホーンたちを率いてエネルギー探索を行え、この基地を動かすためのエネルギーを手に入れるのだ!!」

「お任せを!!」

「早乙女!!貴様のゲッター軍団にも動いてもらおうぞ!!」

「もちろんでございませすデスザラス大帝さま。」

「ふっはっはっはっはっはっはっは!!」

そう早乙女博士の上にいるもの、それがデスザラスであった。彼は生き残りこの世界へとやってきてひそかに力を蓄えていたのだ。

一方で日本の山奥で三つの魔法陣が現れた、その中から現れたのは魔神……炎、水、風を纏う魔神がこの世界へと降りたつた。

三体の魔神

ある場所にて、魔法陣が現れてそこから赤と青、緑の魔神が現れた。彼らの目に光が灯りあたりを見ていた。

『・・・・・・・・ここは？』

『おかしいなぜ我々は実体化をしている？』

『この場所は・・・・・・・・』

三体の魔神はかつてマジックナイトたちと共にセフィーロを守るために戦っていた、炎神レイアース、海神セレス、そして空神ウィンダムの三体だ。

『彼らを倒した後、我々は眠りについていたはずだ・・・・・・・・それなのに光たちが乗っていないのになぜ起動をしている。』

『レイアース考えるのは後にした方がいい。』

『ああ、敵が来たみたいだ。』

セレスとウィンダムの声を聞いてレイアースはあたりを見る、そこに現れたのはゲツタードラゴンたちだ。彼らは武器を構えて魔神たちに襲い掛かろうとしていた。

『そのようだな、行くぞ二人とも。ここがセフィーロじゃなくても我々の敵がいるよう

なら!!』

『我ら魔神が相手をしてくれる!!』

『いくぞ!!』

三人は剣を構えてゲッター軍団に切りつける、レイアースは走りだしてドラゴンを切り裂いて爆発させる、ポセイドンはストロングミサイルを放とうとしたが……『させん!!炎の矢を受けてみる!!』

左手から放たれた炎の矢がストロングミサイルに命中をして爆発をする、セレスはライガーたちがチェーンアタックが放たれて体を動けなくさせる。

『ぬ!!』

セレスにゲッタードラゴンたちがゲッタービームを放ってきた。

『防りの風!!』

守りの風がセレスを守り、セレスは動かしてライガーたちを激突させる。

『助かったウインダム。』

『気にするな、ならお前の力見せてもらおうか?』

『ああ!!さつきはよくもやったな!!受けてみる!!水の龍!!』

セレスの手から水の龍が発生をしてゲッター軍団を撃破していく。彼らは着地をして辺りを見ている。

『どうやら敵がいなくなつたみたいだな。』

『いやレイアースまだ六体こちらに向かつてきているぜ?』

『ああ俺も同じく感じるぞ。』

「隊長!!あれなんつすかね!!」

「あ?」

カクリユウの言葉を受けてゴウリュウは見ている。

「なんだあれは、野郎ども!!リーダーは誰だ!!」

「「「ヘーいゴウリュウさまです!!」」」

「なら俺の言うことはきくんのだ!!あの敵を倒すぞ!!」

「親分!!前にそういつてビクトリーレオにやられたじゃないですか。」

「.....」

ゴウリュウは少し考えたが.....

「野郎ども突撃だああああああああああ!!」

全員で突撃をしていくのであった。地上に降りたちトランスアウトをして人型に変

わった。

『何者だお前たち。』

「お、親分!!あいつの声スターセイバーに似てませんか!!」

「お、おのれ!!俺さまが嫌いなスターセイバーのこえをしおって!!野郎どもかかれええええええええええ!!」

『スターセイバー?』

レイアースはスターセイバーという言葉聞いて何のことだろうか?と思いつつながらも襲い掛かってきた敵たちに剣を構える。

「この野郎!!」

『甘い!!』

「くらえ!!」

襲い掛かってきた恐竜戦隊の攻撃を三人は剣ではじかせる。

「いくぞ!!俺のブーメランを受けてみるおおお!!どりやああああああ!!」

カクリユウが投げたブーメランはレイアースに向けて放たれる、だがレイアースは持っている剣でカクリユウに投げ返す。

「ん、よいしょ。」

「どええええええええええ!!」

カクリユウは投げ返されたトマホークをかわしてゴウリュウに頭に命中をする。

「(こ)は(ど)こー私(は)だ(ー)れー」

「あなたは隊長(ー)ー(ー)ー」

ばき!!

「ふざけている場合か!!」

「すみません隊長!!」

『なんだこいつら。』

レイアースは彼らのを見ながら、そう思い剣を構えている。

『は!!』

『どあ!!』

『が!!』

『せや!!』

『どあああ!!』

「あう!! た、隊長!! こいつら強いです!!」

「かないっこありませんよ!!」

「ええい野郎ども!! こうなったら合体だ!! 合体をしてダイノキングになるんだ!!」

『合体?!』

『合体ダイノキング!!』

六人が合体をしてダイノキングへと合体をした。彼は持っているジャベリンを振り回してレイアースたちを吹き飛ばした。

『どあ!!』

『なんて力をしているんだ!!』

『どうするレイアース!!』

『ああ魔法で対抗だ!!いくぞ!!紅い稲妻!!』

『蒼い竜巻!!』

『翠の疾風!!』

三体の魔神の攻撃がダイノキングに命中をして吹き飛ばされる。

『どあああああああ!!』

『どうだ?』

セレスが確認をしているとダイノキングは立ちあがり彼らも驚いている。

『俺様をなめるな!!くらええええええええええええ!!』

『『ぐああああああああ!!』』

三体の魔神たちは吹き飛ばされて膝をついた、ダイノキングは接近をして彼らにとどめを刺すために持っている槍を振り回している。

『さあ覚悟はいいな!!これでおしまいだ!!』

『……までなのか……』

だがダイノキングは突然後ろに吹き飛ばれた。レイアースたちは一体何があったの

かと思いい上の方を見ると黒い腕が戻っていき着地をする。そうこの世界にとつてもイレギュラーでもある存在魔神皇帝ことマジンカイザーがダイノキングの前に立ちふさがる。

『大丈夫か？俺は君達の味方だ。カイザーブレード!!』

両肩部からグリップが現れてカイザーはそれを抜いてダイノキングに攻撃を開始をする、ダイノキングはその力でカイザーに攻撃をするが彼はカイザーブレードで受け止めて左手に持っているカイザーブレードでダイノキングのボディを切りつけた。

『ぐああああああああああ!!』

ダイノキングは分離をした。

「撤退だああああああああ!!」

「待ってええええええええええ!!」

恐竜戦隊が撤退をしたのを見て、カイザーもカイザーブレードを収納をして魔神達の方に振りかえる。

『大丈夫か？あんたたちは。』

『私は炎神レイアース。』

『俺は海神セレス。』

『空神ウインダムだ、我らはマジックナイトたちと共に戦った後は眠りについてたのだ』

が……気づいたらこの世界へとやってきていた。』
『とりあえず案内をするからこちらに来てもらえないか?』
『そうだな。』

カイザーは彼らを連れて潜水艦の方へと向かうのであった。

新たな敵　ネフシユタン現る!!

カイザー side

新たな反応が出て俺は出撃をした、全員で出撃をすることは無いと思いきいカイザースクランダーを装着をして俺は上空からその場所へ行くと、まさか魔法騎士レイアースの魔神たちとトランスフォーマーVの恐竜戦隊が戦っていた、俺は彼らを助けるためにターボスマツシャーパンチを放ちダイノキングを吹き飛ばして魔神たちを助けた。

彼らの話を聞いた俺は共に潜水艦がある場所へと連れていく。

『なんだあれは。前に海が言っていた潜水艦って奴か?』

『なるほどここが風たちがいた世界なのか?』

『いやそれだったら私たちでも光たちがわかつているはずだ、それなのに彼女たちの魔力を感じる事ができないということとはここは彼女たちがいる世界とは違うということだ。』

三人が何かを言っているが、弦十郎たちは響に報告をしているはずだ。もしこのまま戦えば彼女の命は……。新たな仲間魔神達を連れて戻りゲッターたちに紹介をした。

『俺はマジンガー乙だ!!よろしくな!!』

『俺はグレートマジンガーだ。』

『僕はグレンダイザーだ。』

『俺はゲッタードラゴン、まあそのなんだ俺のことは気にしないでくれ。』

『大丈夫だ、君からは先ほどの奴らのようなものを感じられないからな。』

『助かる。』

『俺は真ゲッターだ。』

『俺はマジンエンペラーG。』

『僕はダイターン3だ。』

『おいらはザンボット3だ!!』

『僕はトライダーG7だ!!』

『これは頼もしい仲間だ。あの子たちもかい?』

『ああ彼女たちが我々よりも前からここを守ってきた女の子たちだ。』

彼らが紹介をして話をしている、クリスは俺の近くに来た。

『どうしたクリス?不安そうな顔をして。』

「え、カイザーならいいかな。響のことだよ。あいつまた無茶をしそうな気がするんだ。」

『あの子の性格だとな無茶をしそうだな、やれやれだぜ。』

「そうだな。」

クリスとは考えが似て話を通じるから楽だ。俺達が話していると警報が鳴りだした。

『!!』

俺達は全員で出動をしてその場所へ行く、翼たちはダイターンが大きくなりダイファイターでこちらに向かってきているため俺達は先に先行をする。

『あれのようだぜ!!』

マジンガーZの言葉を聞いて俺達は着地をする。ダイファイターも着地をして中からシンフォギア奏者たちが降りてきた、ダイターンも人間サイズになりダイターン3へとチェンジをする。

「あれは!!」

「うそ………でしょ。」

「なんで………」

『まさか生きていたのか。ファイヤーブラスターを放ったのに溶けきれなかったのか。』

『カイザー知っているのか?』

『ああ、俺がこの世界で最初に戦って倒した敵だ。』

俺の目の前にいる奴は倒した時は白かったが現在は黒色になっている、だがその姿は

俺が間違えるはずがない。

「『ネフィリム』」

「ふっはっはっはっは!!」

「『!!』」

全員が笑い声が聞こえてきたのでどこだと向いているとターボスマツシャーパンチが笑っている人物に命中をしてそのまま落下をしていく。

ゲッター3がそれに気づいてゲッターアームで回収をして地面に着地をする。

「貴様ああああああああああ!!この僕に何をするんだああああああああああああ!!」

『悪い悪い、うるさかったらターボスマツシャーパンチを放ちました。』

あいつはウエル博士だな、なるほどノイズの杖が行方不明になったと聞いていたが奴が奪っていたのか、クリスとアリスと響が護衛任務についていたな、終わった後に行動を開始して奴らと合流をしたわけか。

ん?ネフィリムの様子がおかしいな。

『マジン………カイザー………』

あれ?あいつしやべれたっけ?

「おいネフィリム!!何をしているんだ!!」

『うる……さい!!』

ネフィリムはウエル博士を吹き飛ばしやがった!!あれ?なんか原作と違う気がするが…….とりあえず奴は俺が指名してきたからな俺は前に立つ。

『マジン…….カイザー!!お前……倒す!!』

『まさか言葉をしやべるとはな、いいぜ…….みんなは手を出さないでくれ。奴は俺が倒す!!』

俺はカイザースクランダーを外してエンペラーたちに渡して俺は奴の前に立ちフアイティングポーズをとる。

『ぐるぐるるる!!いくぞおおおおおおおおおおおお!!』

ネフィリムは俺に襲い掛かってきた、剛腕が俺に向かってふるってきた。その剛腕を俺は左手でキャッチをする。

(前よりもパワーアップをしている!!)

剛腕を受けて止めた際に俺の左手は痺れてしまうが、動けないってわけじゃないので俺は離れて両目を光らせる。

『光子カビーム!!』

『ぐおおおおおおお!!』

奴は口から光弾を放ち俺が放った光子カビームを相殺をした。原作よりも強くなっ

てないかこいつ。

するとゲッター軍団が現れて俺に攻撃をしてきた。だが。

『マジンカイザーは俺が倒す!! 邪魔をするなああああああああああ!!』

ネフィリムはゲッタードラゴンたちを口に放り込んで食べてしまう、奴はむしやむしやと食べているが確かにノイズたちを食べていたのはあったが、原作以上にこいつ知識あるんじゃないか?

『くらえ!!ゲッタービィィィム!!』

『!!』

ゲッタードラゴンたちを食べたからか!!俺は回避をしてゲッタービームをかわす。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおお!!』

ネフィリムの両手が伸びて俺をつかむために手を巻き付けようとした、これはゲッター3か!!

すると上から何かが当たり俺は吹き飛ばされる。

『ぐあ!!』

「カイザー!!」

『凰牙!!』

見ると凰牙がバイパーウィップを装備をしていた、なるほど先ほどの攻撃はバイパー

ウィップの頭部ってわけか。

俺は瓦礫をどけようとしたが、右足の方を見ると挟まっていた。

(しまった、奴はファイナルアタックを使おうとしているのか!!)

『バイパーウィップファイナルアタック!!』

奴の頭部が俺に向かって放たれる、全員が俺の方へと走ってきているが間に合わない。

『させるかああああああああああああ!!』

『な!!』

全員が驚いている、俺を助けたのはなんとネフィリムだからだ。

『貴様!!何を!!』

『マジンカイザーを倒すのは俺だ!!だからこそ……俺は貴様と一緒に戦おう!!う

おおおおおおおおおおおおおお!!』

『ネフィリム!!』

ネフィリムの体が光りだしてバイパーウィップをつかんでいた手などが変わっていきそのまま投げとばした。

『どあ!!』

全員が驚いている、ネフィリムの姿は黒い姿だが形はゲッタードラゴンになっている

からだ。なるほど先ほど食べたのはゲッタードラゴンたちが多かったからな。姿がゲッタードラゴンいや。

『ブラックドラゴン。』

ネフィリムは新たな姿に驚いている。

『これは……俺なのか?』

彼は鏡に映っている自分自身を見て驚いている、当たり前だろうな姿が機械的な姿に変わっているからな。

『お前はブラックドラゴンだ、俺達と同じように戦う戦士に生まれ変わった!!』

『ブラックドラゴン、気にいった!!俺はブラックドラゴン!!マジンカイザーを倒すものだ!!』

ネフィリム改めてブラックドラゴンは宣言をした、鳳牙は立ちあがりエネルギー切れを起こしかかっているため撤退をした。

残っていたノイズたちが襲い掛かってきた。

「いくぜ!!」

奏を筆頭に戦うことになる。

カイザーside終了

『いくぜ!!ロケットパンチ!!』

マジンガーZの拳が飛んで行きゲッター軍団を撃破していく。

『グレートブーメラン!!』

『シオルダーブーメラン!!』

グレートは放熱板を外してグレートブーメランをグレンダイザーは肩のシオルダーブーメランを放ち切り裂いていく。

『ダイターンジャベリン!!』

『ザンボットブロー!!』

『トライダージャベリン!!』

三体はジャベリン形態を使用してノイズや襲い掛かってきた敵を切りつけていく。

『いくぞ!!我々魔神の力を見せる時!!』

『おう!!』

レイアースたちもシンフォギア奏者たちと一緒にノイズたちを切り裂いていく、アリスはネフシユタングアにチェンジをして周りに飛ぶギアをノイズたちに砲塔を出して砲撃をする。

『いくぞ!!真ゲッター!!ブラックドラゴン!!ゲッタービームを使うぞ!!』

『おうよ!!』

『いくぜ!!』

三体のゲッターは上空へ上昇をして構える。

『『トリプルゲッタービーム!!』』』

彼らが放ったゲッタービームが放たれて命中をして撃破する。

『エンペラーソード!!』

エンペラーもソードを振り回して切り裂いていく、クリスとセレナはカイザーの瓦礫を撤去をしていた。

『助かったぜ。』

「大丈夫ですかカイザーさん、でもネフィリムがまさかゲッターさん達と同じ姿になるなんて。」

『俺も思わなかったな。おそらく量産型を食べたときに変化が起きたんだろうな。』

彼らは話をしていると通信が鳴りだした。

『大変だ!!響君が……』

「立花がどうしたのですか?」

『……小日向君が行方不明となったと聞いて敵から情報を得て一人で向かった。』

『!!』

現れた剣!?!最強剣士現る!!

セレナ side

あのネフィリムがゲッタードラゴンさんと同じ姿になるなんて思ってもなかった、今私たちは響さんを探すために移動をしていた、私のチームはカイザーさんとクリスさん、そしてネフィリムだ。

『……セレナ・カデンツァ・イヴ。』

「な、なんですか?」

『俺たちは先に行っているから話はしておけよ?』

カイザーさん達は先に行く、って私ネフィリムと二人きり!?

『……』

「……」

私はあの時の光景が蘇ってきた、あの燃え盛る研究所でネフィリムと対峙した時のことを。

『セレナ・カデンツァ・イヴ……』

「なんですか。」

『すまなかつた。』

彼は突然頭を下げてきた、私は驚いてしまう。

「えつと?」

『あの時の俺は意識も今のようになく、ただ暴れるだけの存在だった……カイザーに倒されたとき俺は奴に勝ちたいという思いが出てきた、だがそれと同時に前に対して謝罪をしたいとずつと思っていた。』

ブラックドラゴンさん……そんなことを思っていたのですか。そういえばあの時ネフィリムの時にカイザーをかばっていた。それはいったいどうして?

「どうしてあの時カイザーさんを助けたのですか?あなたはカイザーさんを倒すのが目的なんですよね?」

『それは違うぞセレナ・カデンツアヴナ・イヴ、カイザーを倒すのは俺自身だ、ほかの奴らに倒されるのが嫌なだけだ。といってもまさかロボットになるとは思わなかったが……』

「そうなのですか。とりあえず行きましよう!!ブラックさん!!」

『ああ……』

今の彼なら怖くないです姉さん、ネフィリムいやブラックドラゴンさん……

セレナ side 終了

響は走っていた、寮に戻っても彼女の姿が見えないかった、そこには一つの手紙が置いてあった。

『貴様の親友は預かった!!返してほしければ一人でこの場所にこい!!通信などで仲間を呼んだ時は親友の命はないと思え!! デストロン』

「デストロン……未来……無事でいて!!」

彼女が走っていくと突然砲撃が降ってきた、彼女は GANG ニールを纏い襲い掛かってきたロボット動物たちに蹴りを入れる。

「であああああああああ!!」

六体の動物ロボットを撃破したが、槍が降ってきた。

「ぐ!!」

「ほーうやるじゃねーか。」

「誰!!」

響の答えに六体の影が現れた、デストロンブレストフォースのメンバーだ。

「俺様はレオザック、デストロンの副官をしている、そして奴らは俺の部下のブレストフォースたちだ!!」

「あなたたちが未来を!!未来を返して!!」

「いいだろう返してやるさ!!ヘルバット!!」

「はい副官!!」

ヘルバットと呼ばれた蒼い機体が避けると未来が現れた。

「未来!!」

響は駆け寄ろうとしたが、彼女が持っているペンダントを見て驚いている。

「未来………何を持っているの?」

「Rei shen shou jing rei zizl」

彼女が聖詠を唱えると彼女を纏っている服がはじけていきそこから装甲が纏われていき、欠片の一つ神獣鏡である。

「み……く?」

「はっはっはっは!!見たか!!こいつはデスザラス大帝の力によつてそのシンフォギアを纏つて貴様の敵として立ちはだかるのだ!!やれ!!」

「ぐああああああああああああああああああ!!」

未来は雄たけびをあげながら響に襲い掛かる、彼女は構えるが未来と戦うことはできない。

「未来!!未来!!目を覚まして!!」

「ああああああああああああああああ!!」

未来は持っている武器で彼女を殴るが、響はガードをして攻撃をふさいでいるが。彼

女は腰部からミラーを発射させてビームを放つ。

「どあ!!」

「どえええええええ!!」

「あぶな!!」

それはブレストフォースを巻き込みながら放つため回避をしていた。

「おい!!俺達は敵じゃねってどああああああ!!」

「副官!!どあ!!」

(なんか知らないけどラツキーかな?)

響は心の中でそう思っていると、レオザックは立ちあがる。

「ちい!!仕方がないこうなったら野郎ども!!ライオカイザーに合体だ!!」

「!!」
「!!」
「!!」

『合体!!ライオカイザー!!』

「合体!?!」

「.....」

六体が合体をしていきブレストフォース合体ロボライオカイザーが誕生をした。

『くろうがいい!!』

ライオカイザーは持っている槍を振り回して響に攻撃をする、彼女は回避をしたがガ

ングニールの浸食が彼女を苦しめていた。

『馬鹿なやつだ!!お前の体は浸食されているのは知っているからこそ貴様をここに連れてきたわけだ!!さあ覚悟するがいい!!』

「未来……………」

「……………」

ライオカイザーは持っている槍を振り回して響に向かって刺そうとした。響は目を閉じて覚悟を決めていた。

どこか—————ん!!

『ぐあ!!』

「え?」

響は目を開けるとライオカイザーが吹き飛ばされていた、どこから飛んできたのかと上の方を見ると戦闘機が飛んでいた。

「戦闘機?」

『ま、まさか!!』

『トランスフォーム!!』

戦闘機が分離をして人型に変形をしていく。

『ブレインセット』

小さい人型が入り顔がスライドされて行きセイバーへと変形をする、さらにセイバーは持っているセイバーブレードを投げてVスターに刀身が現れて変形をしてセイバー自体も変形をしてVスターに合体をする。

『バトルアップ!!』

頭部がヘルメットに変わりサイバトロンの最強の戦士スターセイバーが着地をする。

『す、スターセイバー!?!なぜ貴様がここに!!』

『ライオカイザー!?!まさかデストロンがこの世界にもいるとは思わなかった……大丈夫か?』

「あ、あなたは?」

『話は後だ、ぬ!!』

ビームが飛んできたがスターセイバーは持っている剣、セイバーブレードではじかせる。

「駄目です!!未来を傷つけないでください!!」

『君の友達か!!ぬ!!』

未来は後ろのコードを使いスターセイバーに攻撃をしてきた、彼はシールドを出してガードをしていくが、そこにライオカイザーが攻撃をしてきた。

『ぐ!!卑怯な。』

宙パトロールをしている時に次元に吸い込まれてここへやってきた。』

（なるほど、次元ホールが発生をして彼を吸い込まれてしまったわけか、いずれにしても敵はスターセイバーが知っている人物で間違いないってことか。）

カイザーは考えながら倒れている二人を見つけて回収をして撤退をする。

デスザラスの新たな作戦

カイザー side

俺達は響ちゃんたちを発見をした、そこにはサイバトロンの戦士スターセイバーと名乗った戦士が立っていた、彼は宇宙でパトロールをしている時に次元ホールを通りこの世界へとやってきたと言っていた。

彼はかつて自身が相手をしたライオカイザーというロボットがいたということはデスザラスという敵も存在をしていると言った。現在は響ちゃんの検査をしていた。

『……………ふむこれは……………』

「どうなの?」

クリスが聞いてきたので俺は現在の彼女の体をうつしたレントゲン写真を彼女たちに見せる、そう彼女の中にあつたガングニールの欠片などがなくなっていた。おそらく未来ちゃんが装着をしていた神鏡獣の力によって彼女の中にあつたガングニールが消滅をしたがそれは彼女は戦えなくなるという意味だ。

ほかのみんなはシンフォギアを使うにはそのペンダントを使って聖詠を歌っていたが彼女はその特殊的で歌っていたのでそれが消えたことによつて戦闘不能になる。

『……どうしたらいいものかな?』

両手を組んで考えていると警報が鳴りだした、俺は医務室から走り司令室の方へと行く。そこには全員が集合をして映像が流れていた、何かの昔の遺跡のようなものが浮いていた。

『なんだありや!!』

『見たことがないものだ。』

『フロンティア……』

ブラックドラゴンが放った単語が気になり俺達は振り返る、彼は映像に映っているのを見てつぶやいている。

『あれは俺がネフィリムの時に強大なエネルギーを変換させるほどの場所と言っていた、俺もあの場所で蘇りあの体を得ることができた。』

『となるとデスザラスはあの中で強大なエネルギーを蓄えているということか……何としてでも阻止しなければならぬ!!』

スターセイバーの言葉を聞いて俺達は出撃の準備をする、今回は大きいため巨大サイズでも大丈夫だと判断をした弦十郎に俺達は本来の大きさに出撃することになった。クリスたちを手に乗せて俺達は準備を完了をして空へと飛び立つ。

カイザー side 終了

一方で早乙女は真ドラゴンを見ていた、早乙女博士はひそかにフロンティアのエネルギーを真ドラゴンの方に回していた。彼は真ドラゴンの姿を見てあと少しとつぶやいている。

「ふっはっはっは!!真ドラゴンはゲッターエネルギーとこのフロンティアのエネルギーによって最終進化へと突入を開始をした!!もう少して完成をする!!私の目的である真ドラゴンがふっはっはっはっは!!」

早乙女博士が笑っている頃、凰牙は自身の部屋にいた。

『……………私がやっていることは正しいことなのか?』

心配をして彼の周りをデータワーエポンたちが現れて彼の周りを飛んでいる。

『……………すまないな、お前たち。』

凰牙は警報が鳴ったのでデータワーエポンたちも中へ戻り出撃をする、浮上をしているフロンティアに向かってカイザーたちは飛んでいた。カイザーとエンペラーG、真ゲッターとブラックドラゴンの手にはシンフォギア奏者たちが乗っている。

前からビームなどが飛んできて全員が散開をする、現れたのは量産型のゲッターロボ軍団だ。

『……っら!!』

『駄目だ!!俺たちの手には彼女たちがいる、戦闘はできない!!』

『スペースサンダー!!』

スパイザー装備したグレンダイザーが放つスペースサンダーが命中をしてゲッターが一部破壊される。

『ここは僕たちが引きうける!!』

『お前たちはフロンティアへ行くんだ!!』

グレートマシンガーさす方向へカイザーたちは向かっていくが邪魔をされる。

『お前らじゃまだ!!大車輪ロケットパンチ!!』

『ビックウエツプ!!』

マシンガーZのロケットパンチとダイターン3が投げつけたビックウエツプが命中をしてゲッター軍団は破壊される。カイザーたちはその隙についてフロンティアの方へと向かう。

『デスザラス……何が目的だ!!』

スターセイバーも彼らと一緒に突撃をしていく、マシンガーたちは彼らが中へ入ったのを確認をして周りを囲んでいるゲッター軍団を見ている。

『ドラゴン大丈夫か?』

『ああ彼らに対してのことなら心配いらん!!俺達がすることはただ一つ!!奴らをこれ以上あばれさせないようにするためだ!!いくぞ!!ダブルトマホークブーメラン!!』

ドラゴンが投げたダブルトマホークブーメランが命中をして爆発をしてから全員が散開をしてゲッター軍団に攻撃を開始をする。

響side

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は GANG ニールの力を無くしてしまい戦えない、皆は必死になって戦っているのに・・・・・・・・私だけ。

「はあ・・・・・・・・」

ため息をしていると突然衝撃波が飛んできた。私はすぐに聖詠を唱えようとしたけど・・・・・・・・

(そうだった!!今の私は GANG ニールを纏うことさえできない!!)

ノイズたちが現れた、私には今何もできない!!どうしたらってあれは!!

「ママーーーーー怖いよーーーー!!」

子どもがあんなところにいる!!ノイズが気づいて迫っている!!私は必死に走り抱えて逃げる、ノイズたちが追いかけてきた、私は絶対に離したりしない!!

『はあああああああああああ!!』

上空から現れた黒い機体が私の前に現れた、あれは!!風牙!?どうしてあなたが!!

『ファイナルロード!!データウエポン!!』

彼の指示で馬？ライオン？イノシシ？ドラゴン？蛇？牛？が現れてノイズたちを次々に撃破していく。

ノイズたちがいなくなったのを見て彼は私たちに近づいてきた。

『どうやら無事みたいだな、よくやったデータウエポンたち。』

『どうして助けたのですか？』

『……わからん、自分でもどうして助けたのか……な。』

『……』

『だが、お前たちを見ているとほっとけなくなった、だから助けた。』

『……あなたは。いったい何がしたいのですか!!』

『俺は記憶がない、覚えているのは戦い方とこいつらのことだけだ。』

風牙さんがそういうと中から先ほどの馬たちが出てきた、え？なんか私の方を見ているのですけど。

『……そういうことか、立花響と聞いたな。』

『えつとはい。』

『力がほしくないか？』

『え!?!』

『お前に戦う力を与える、手を出すんだ。』

力、私は意を決して鳳牙さんの手をつかむ。そして私たちは光に包まれる。

響side終了

カイザーたちはクリスタたちと同じ大きさになり中へ突入をしていた、襲い掛かってノイズたちはカイザー達によって撃破されて行き彼らは扉を壊して中へ入る。

「よく来たな、貴様たち。」

『デスザラス!!』

「まさか貴様まで来るとは想定外だスターセイバー!!だがわしの邪魔はさせん!!うおりやああああああああああああ!!」

デスザラスは鉄球を発生させてスターセイバーに投げつける、セイバーブレードを出してそれを切り裂き彼は構える。

『どうしたデスザラス!!君達はこの先に向かうんだ!!デスザラスは私が相手をする!!』
『わかった!!いくぞ!!』

カイザーの号令と共に全員が先に向かう、さらに奥では扉をゲッターが破壊して中へ突入をすると早乙女博士がいた。

『お前は!!早乙女博士!!』

「あなたがここで何をしているのですか!!」

「ふっはっはっは!!このフロンティアのエネルギーを利用して真ドラゴンを覚醒

をさせるためにだよ!! 奴らをりようをさせてもらったわけさ。」

『なるほどな、つまりお前はデスザラスたちを利用して真ドラゴンに力を使ったわけか。』

『なるほどな、そいつがいるところはかつての俺がいたところだな。』

『なんだ貴様……わしはお前のようなゲッターは作っていないがな?』

『姿は変わっちゃまったが、前はネフィリム……今の俺はブラックドラゴンだ!! 覚えておけ!! 先手必勝!! ゲッターレーザーキャノン!!』

『っておい!!』

ブラックドラゴンが放った砲撃が機械に命中をして爆発をする、するとそれに連動をしてほかのところも爆発が起こっていく。

「貴様!! 機械を破壊したのか!? ぬおああああ!! 真ドラゴンが!!』

「とにかく脱出を!!』

「だがどこから!!』

彼らはあたりを見ていると。

『ファイナルアタック!!』

ドアが破壊されて誰かが壊してきた、その姿は凰牙に姿が似ているが青い機体に顔が出ているのを見て全員が叫ぶ。

『「響!?! (立花) !?!」』

「皆さん!! 話は後で!! とりあえず!! ユニコーンドライブインストール!!」

彼女の右手にユニコーンドリルが装着されて彼女は一気に力を解放させる。

「ユニコーンドリルファイナルアタック!!」

彼女が放った一撃は壁などをつき抜けていき破壊して全員が脱出をする。カイザーが気になっていたのは響が装備をしている姿だ。ガングニールみたいな感じだが凰牙が使っていたのと一緒の感じだ。

彼らは脱出をするとデスザラスたちも脱出をしていた。

「おのれスターセイバー!! これで勝った気になるなよ!! ひきあげだ!! 次元ホール作動!!」

ライオカイザーとダイノキングは外でマジンガーたちと戦っていたみたいでデスザラスが撤退をしたのを見て引く。

『逃がさんぞデスザラス!!』

スターセイバーは発生をした次元ホールを通り彼らを追いかけていった、次元ホールはやがて消失をした。

「立花・・・その姿は。」

『待て。』

カイザーたちは海の方を見ていた、真ドラゴンがフロンティアと共に落ちていったあの場所だ。

真ゲッターたちは何かを感じていた。

『なんだ!!すごいゲッター畑を感じる!!』

『ああものすごい倍だ!!』

「ふっはっはっはっはっは!!」

「その声は!!早乙女博士!!」

クリスが言うと早乙女博士は一体のゲッタードラゴンの手に乗っていた、彼は笑いながら説明をした。

「ついに真ドラゴンが覚醒をしたぞ!!みるがいい!!真ドラゴンを!!」

全員が光りが発生をしてそこから真ドラゴンが覚醒をした、だがその姿は普通のゲッタードラゴンと姿が似ている。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「おお真ドラゴンよ!!さあお前の敵はあつちにいる奴らだ!!ゲッタービームを使うのじゃ!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「どうした真ドラゴン!!何をしている!!『黙れ!!』なに!？」

全員が真ドラゴンがしゃべったことに驚いている、しかも彼は早乙女博士に黙れと言った。

『俺は誰にも支配されない!!この意思是俺自身の物だ!!ゲッタービーム!!』

真ドラゴンの頭部から放たれたゲッタービームが早乙女博士を乗せているドラゴンに命中をして爆発をする。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

早乙女博士は落下をするがレイアースたちがキャッチをして拘束をした。

『………お前は味方なのか?』

『ああ俺はお前たちの味方だ、フロンティアは俺が覚醒をする際に吸収をした、俺はこの力を悪のためには使わずにお前たちと共に戦おう。』

真ドラゴンが右手を出してきたのでカイザーも同じように右手を出してお互いに握手をした。

全員は戦いを終えて帰投をした、全員がまず聞くことは響のことだった。

「立花!!正直答えろ!!その姿はなんだ!!」

『それは俺が答えよう。』

響の姿が解除されて左手のプレスレットへと変わり話される。

「その声はあなたは!!」

『そう私は凰牙だ、彼女は俺の力を使って新たな姿となった……名前は電童だ。』
「電童……」

「でもあなたは敵だったのにどうして？」

『俺にもわからない、だがひとつわかってることがあった。それは奴らから人々を守るといふ思いだ。彼女と一体化をする影響で俺はこの姿をとらないといけなくなったわけだ。』

彼が変身をしたブレスレットが光り説明をした。こうしてデスザラスが起こした戦いは真ドラゴンと凰牙が仲間になることで終結を迎えた。

だが新たな敵は動いていた、一人の女の子は笑っていた、その手にはソロモンの杖を持ちながら。

「ついに完成をした!!待っているがいいシンフォギア……お前たちの希望……マジンカイザーは俺が壊す!!」

響の新たな力。

カイザー side

ここは模擬ルーム、ここでは奏者たちや俺達の訓練などをやる場所だ。現在その場所に立っているのは響ちゃんとブラックドラゴンだ。

ブラックドラゴンは自分の体を詳しく知りたいため響ちゃんも今回得た新たな力を試すためにお互いに模擬ルームに立っていた。

『それじゃあ二人ともシュミレーションスタートをする。』

俺はシュミレーターのスイッチを押すと景色が変わっていき街中が変わっていく、響ちゃんは左手のブレスレットを掲げている。

「行きます!!インストール電童!!」

ブレスレットが光りだして響ちゃんの服がはじけていきそこからギアのインナーが現れて彼女の両手両足にハイパープラスマドライブというのが装着されて行き、さらに頭部バイザーなどが彼女を覆っていき、最後は頭部のバイザーが開いて響ちゃんの顔が現れる。

『いくぞ立花響!!ダブルトマホーク!!』

「いきます!!」

二人が走りだすが彼女は両ひざをつけて両足に装備されているハイパープラズマドライブを回転させて高速移動をしている。そういえば凰牙もその方法で移動をしていたな。ブラックドラゴンが放ったダブルトマホークをかわして彼女は立ちあがり右足を回転させてブラックドラゴンに攻撃をする。

『ぐ!!』

ブラックドラゴンはモーフィングつまりゲッタードラゴンや真ゲッターのように変形をしないで姿を変えることが可能というわけだ、彼の姿がゲッターライガーの姿へと変わると左手を開いてライガーマシールを彼女に放つ。

『飛翔裂風波!!』

両手のタービンをまわして竜巻を発生させてライガーマシールを撃破している、その様子を全員が見ていた。

「ふむあの形態は立花の格闘のレベルをあげているな。」

「ええ、私もそう思います。響の格闘をあげているのはあの両手足のタービンだと思われる。」

クリスの言葉に全員が納得をしていると、響ちゃんの右足にライオンが装着されている。

『確かあれは……。カイザーにかみついていたライオンだな?』

真ゲッターの問いに俺は黙っていた、まさか超合金ニューZαを噛みつく威力を持っているからなあ。レオサークルは……。今は傷がふさがっているがその前までは噛んだ後が残っていた。

俺は右手を見ているとクリスが近づいてきた。

「どうしたのカイザー?」

『ああ奴にかまれた後を見ていた、今はふさがっているがああ時は驚いたさ。』

俺はモニターの方を見ていると彼女の右足についているレオサークルが回転をして蹴りつけているが、ブラックライガーは回避をして姿をモーフイングさせている。

『やるじゃねーか!!くらえ!!ゲッターサイクロン!!』

ブラックポセイドンの装甲のカバーが開いて強力な風が響ちゃんに襲い掛かる、彼女は両手を前だしてガード形態をとり吹き飛ばされる。ブラックポセイドンは背中のミサイルを放つ。

『ストロングストーム!!』

ストロングミサイルを放つとさらに中から小型ミサイルがたくさん発生をして響ちゃんに襲い掛かる、彼女は何かを思いついたのか構えている。

「イリュージョンフラッシュ!!」

彼女は光りだすとストロングストームを分身をして回避をしてブラックポセイドンに攻撃をしていた。

『どあ!!だが!!』

攻撃をくらいながらもドラゴン形態に戻してダブルトマホークを出して回転をして響ちちゃんたちを吹き飛ばす。彼女は右手にユニコーンドリルを装着をして左手にブルホーンを装備をしていた。

「はああああああああああ!!」

彼女は右手のドリルホーンと左手のブルブレイカーを使いブラックドラゴンに攻撃をしていたがブラックドラゴンはダブルトマホークを使い彼女が放つ攻撃をふさいでいる。

『やるじゃんあいつ!!』

『俺も戦ってみたいぜ。』

セレスが言うとはかの魔神達も同じ反応をしていた、まあ彼らも戦いたい気持ちは俺も同じだ。響ちちゃんは二つの武器を解除をして胸部にガトリングボアを装着をしていた。

「ブラックさん!!これで勝負をします!!」

『いいだろう!!俺も最大出力で放つ!!』

「ちよつと!!大丈夫なの!？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

おそらく二人が放つ技なら限界があるが・・・・・・・・・・てか二人ともエネルギーをためているよね?まずいと思うぞ魔神皇帝的に・・・・・・・・駄目だ。

「ガトリングボア!!ファイナルアタック!!」

『ゲッタービィィィム!!』

二人の技が激突をして衝撃が発生をして二人は吹き飛ばされる、シユミレーターを切り俺達は急いで二人の方へと走っていく。

『おい大丈夫か!!』

『無事なら返事をしてくれ!!』

「はーいーい。」

『おうよ・・・・・・・・いてててて。』

二人は返事をして出てきた、まああれだけの技を使つて無事だったのがびっくりだよ、響ちゃんの方も調べてみたがやはり俺達みたいに特別な力が加わっていた、ノイズたちも倒せると結果が出ていた。しかし気になっていたことがある。

『ソロモンの杖はいつたどこに消えてしまったのか・・・・・・・・』

デスザラスとの戦いの時も思ったがウエル博士はネフィリムに殺されてしまいソロ

モンの杖も俺達は搜索をしたが見つからなかった。何者かが俺達が敵と戦っている時にソロモンの杖を奪取をしたのか？いずれにしてもまた大きな戦いが始まるうとしているのか。

『……………今はそのことは考えないほうがいいな？だがいずれにしても……………ソロモンの杖を奪ったやつらの目的が気になるな。』

カイザー side 終了

ある場所にて

「……………」

一人の女の子が人形たちを見ていた、それから何かの魔術を使いあるものを探していた。

「ツ！外したか……………だがその力を手に入れるためにな!!ムーの巨人……………ライディーンの力をな!!」

一人の少女の目的はある遺跡を探していることが判明をした、その名前はライディーン……………戦いはいつ行われるのかわからない。

そして彼女が言うライディーンとは!!

翼の卒業式

それは数日前に戻るとしよう、カイザー達は模擬ルームを使い訓練をしていた、自分たちの技などを確認をしつつターゲットのノイズたちを倒していく。

そこに一人の女の子が走ってきた。

「あ、カイザーさん達!!」

『響ちゃん?』

カイザー達も一旦休憩をするために着地をして武器などを収納をする、彼女は走ってきたのか息をぜえぜえといいながら落ち着くまで彼らは待つことにした、数分後彼女は落ち着いたのか話をする。

「皆さんは翼さんがリディアン学園を卒業を知っていますよね?」

『ああ現在は三月だからな、卒業ということは風鳴翼は卒業後はやはり外国の方へ飛ぶのか?』

『そうだろうな、あの子は歌を歌うのが好きと言っていた、まあそういう俺も彼女についていく形になるが……』

カイザーは素晴らしいながら理由を話した、緒川さんの都合で彼は護衛及びマネー

ジャーとして動くことになるそうさ。彼の存在はすでに知られておりほかのメンバーも同じような感じで現在は街に出ると子どもたちから魔神皇帝だああああとやってくるほどだ。

ドラゴンたちも同じようにサインをしている姿を見ている。そのため彼らが普通に歩いて買い物をしている姿を見ることがあるそうさ。

ちなみに翼たちの方に行くのはカイザーだけじゃなく、ダイターンにエンペラー、ブラックドラゴンがついていく。

『それで俺達に何か用なのか?』

「はい!!実は………」

響の話は翼たちの卒業式にカイザー達にもお祝いをしてほしいということなのだ。

『なるほどな、どうしようかカイザー?』

『いいじゃないか?なら俺達の最大のお祝いをしようとするかな?というわけで全員集合!!』

カイザーが集めてごによごによと話をしている。

『あれをするのか?』

『まあおいら的には面白いから賛成だけだな。』

『そうだな!!』

全員が納得をした後にカイザーは響の方を振り向いて話をした。

『とういわけで本番を楽しみにしておいてくれ!!』

「えつとはい。」

カイザーたちは頑張るぞーおーっつと張り切っているのであった。

響 side

えつと響です、カイザーさん達に話をしてから数日が立ちいよいよ翼さんの卒業式となりました。

『あれが卒業式という奴だな?』

『すごいですね・・・』

あーちなみに話したのは左手のブレスレットになつている凰牙さんとデータウエポ
ンたちです、なんでもか知らないですけどどうやら凰牙さんの力なのかわからないですけ
ど話がわかるみたいです。

『おいら始めてみたよー』

『いや誰だつてそうだと思えますけど?』

ボアの言葉にドラゴンがそういうと。

『響もいつかはこういう風になるのかな?』

『おそらくそうだろうな。』

ブルの言葉にレオが答える。

『それにはまず響さんには勉強などを頑張ってもらうことですね。』

『『『『『そうだな。』』』』』

データウエポンの皆!!ひどいよおおおおおお!!アリスちゃんたちが私たちの方へやってきた。

「ねえカイザーたちには言ったの?」

「うんクリスちゃん、カイザーさんたちにも言ったたら任せろと言っていたよ?」

「まじかよ!!」

『ではここであるゲストをお呼びいたします!!どうぞ!!』

私たちはステージ上を見るとそこに立っていたのはカイザーさんだった!!

「え?!あれって!!」

「魔神皇帝だよね!!」

「うそ本物!?!」

カイザーさんまさかステージ上に立つなんて思ってもなかったですよ……

『ええああ、ごほん。こうして皆様の前に立つのははじめましてですね、私はマジンカイザーと申します、私がこのステージに立っているのはある生徒の一人が私たちに彼女たちを言わってほしいといわれまして我々はここへとやってきました。三年生の諸君、君

達はこのリディアン学園を卒業をしてそれぞれの道を走っていく、だがそれはまだ始まったばかりの道だ。これからの道はつらいことや悲しいことがあるかもしれない、だが忘れてはいけないのは友達という存在だ。だが忘れてはいけないのは君達がこの生徒だったことを忘れないでほしい。以上です。では外に皆さま出てください。今から私たちのプレゼントをお見せしましょう。』

カイザーさんの言葉に全員が外のグラウンドの方を見ると上空にエンペラーさん達が待機をしていた。

地上ではブラックポセイドンさんとポセイドンさんがいた。

『ストロングミサイル!! 発射!!』

二人が放つとグレートマジンガーさんとマジンエンペラーさん、グレンダイザーさんが雷を放つ。

『サンダーブレーク!!』

『サンダーボルトブレイカー!!』

『スペースサンダー!!』

三人が放つ雷がきれいになり、あちらではダイターンさんがファンを開いてまわしている。トライダーさんとザンボットさんがお互いのカタターなどをよいしょといいたがらまわしていた。

『いくぞ!!』

『おう!!』

三人の魔神達は炎や水、風などを出しながら回転をしてイリユージュンって奴を見せ
てくれた。

『これで終わりだ!!ファイヤーブラスター!!』

上空にカイザーさんが放ったファイヤーブラスターが放たれると同時に真ゲッター
さんが3形態になっていた。

『ついでにミサイルストーム!!』

カイザーさんが放っているファイヤーブラスターにミサイルが爆発をして昼間なの
に火花がどーんとなっている。

『さて改めてリディアン学園を卒業生の諸君。』

『『『『『卒業おめでとう!!』』』』』

『お前たちがこれから将来を楽しみにしておくぜ?』

『そのために俺達は戦っていくさ。』

『君達を守るためにね。』

『夢をつかんでいくんだ!!』

そういつてカイザーさん達はそれぞれの方角へ飛んで行く、最後には綺麗なラインが

出されている。

響side終了

翼side

「カイザー達、やってくれたな……」

私はリディアン学園の卒業式にカイザー達が来るとは思ってもなかったが、おそらく立花あたりがやってくれたんだらうなと思った。そして彼らの言葉を胸に秘めて私はここを旅たつ。

卒業式も終わり私は立花たちがいる場所へ行く。

「やってくれたな立花、あれはお前だな？」

「えへへばれましたか、カイザーさん達もノリノリで引き受けてくれたのでつい。」

だが感謝をするぞカイザー、雪音たちも先輩として吹かせていくことになるからな……暁や月読が新しくこのリディアン学園に入るようになってい

「頼むぞ雪音たち。」

「分かっていますよ先輩。」

「おうさあたしたちに任せてくれ!!」

「頼もしい限りだ。」

私はリディアン学園の門を見ていた、ここを三年間通っていたことを思いだす。カイ

ます。」

『やむを得まい撤退をしろ。』

「了解、ガリイ撤退をする。」

「それを早くしてほしかった………がく」

ガリイは気絶をしてそのまま転移魔石を砕いて撤退をした、ライディーンも武器を収めて空を飛ぶ。

『ゴッドバードチェンジ!!』

ライディーンはゴッドバードにチェンジをして空を飛んで行く。ガリイたちのマスタ―が狙うライディーンは彼のことだろう。だがその目的は!!

第三章 GX編

襲い掛かってきた人形

カイザー side

皆さんこんばんはマジンカイザーです、今俺達はイギリスへと来ております、一緒に来ているのは俺、エンペラー、ブラックドラゴンにダイターンと少ないメンバーです。

まあさすがに大人数で動くわけにはいかなないので俺達だけが一緒に来ております。

「いっておくけどあたしやセレナも一緒だからな?」

『わかっているさ、ツヴァイウイング海外進出おめでとうと言っておくぜ?』

「ありがとうカイザー、それにマリアも一緒だからな問題ないさ。」

『だが油断をするなよ? デスザラスたちは撤退をしたが真ドラゴンが偵察にでている
『ちよつと悪いな、突然だがいきなり敵に襲われている』まじか。』

俺達はライブが丁度終わったのでいいと思い、外へ向かっていき俺とエンペラーとダイターンとブラックドラゴンは空を飛び奏たちはギアを纏っている。

『真ドラゴン!!』

『おー来てくれたか!!おらああああああ!!』

真ドラゴンが振り回したゲッタートマホークがノイズたちを吹き飛ばす、やはりソロモンの杖は盗まれていたか。

『気を付けろ!!こいつら……ノイズじゃないみたいだ!!』

「なに!？」

「どういうことだ!!」

奏ちゃんと言うが真ドラゴンがトマホークを投げ飛ばすと奴らの一体の武士型が武器を光らせるとトマホークが炭化した。

「嘘だろ!!」

『そういうことだ。』

『光子力ビーム!!』

俺は両目を光らせてビームを放ち改良型のノイズたちを撃破していく、エンペラーたちもそれぞれで戦っており改良型を倒していると突然風を纏った刃が飛んできた。

『翼!!』

俺は彼女の前に立ちその攻撃を受けるが、ダメージは比較的到低いな……超合金ニューZαありがとうだぜ。

「やはりあなたには私の剣は通じませんか。」

『誰だ?』

ブラックドラゴンはゲッタービームを放ち改良型ノイズを撃破した。俺は彼女の姿を見たことがある。確かオートスコアラ一の一人だ。

「私の名前はフアラ、まずは挨拶代わりです行きなさい。」

「カイザーここは私に任せろ!!」

武士型のノイズが現れて翼は攻撃をする、だが次の瞬間奴の剣が光りだしてギアのクリスタル部分に当たると彼女が覆っていたギアが分解を始めていた。

「な!!」

『シンフォギアが……』

『ちい!!』

おれは胸部のファイナルカイザーブレードを抜いて武士型ノイズの剣をはじかせて切り裂く。

『ここは引くぞ!!サンダーボルトブレイカー!!』

「だな翼大丈夫か!!」

「ああ……けどアメノハバキリが……」

「カイザーさん……」

『今は引くしかない。』

エンペラーが放ったサンダーボルトブレイカーを煙にして俺達は撤退をした。

カイザー side 終了

一方で日本の方では残っているメンバーたちが戦っていた。

「こいつらはいったい!!」

『気を付けろ響!!』

凰牙の言葉を聞いて響は回避をしてザンボットはアームパンチを放ち倒す。

『なんだよこいつら!!』

『ノイズだけど何かが違う気がする!!』

『ブレストファイヤー!!』

『ブレストバーン!!』

二体の機体が放ったダブルバーニングファイヤーが命中をしてノイズたちを撃破する。

『くそ!!スピнкаッター!!』

ゲッタードラゴンはスピнкаッターを使い撃破していく、一方でクリスとアリスはイチバルとアサルトギアをつかい攻撃をしている中、オートスコアラアの一人レイアが現れた。

「私には派手が一番、はあああああああ!!」

突然としてコインが投げつけられて大量にレイアースたちが盾になった。

『どあ!!』

「レイアース大丈夫か!!」

『問題ない。』

『この!!水の龍!!』

セレスが放った水の龍はレイアに向かって放たれるが彼女は素早く回避をした。

『な!!』

『セレスの技を回避したのか?』

「ギアが!!」

「あたしのも!!」

『な!!』

『シンフォギアが解除されて行くのか!?!』

「クリス先輩!!」

「アリス先輩!!」

「はあああああああああああああ!!」

響は彼女たちを守るためにバイパーウィップを振り回して攻撃をした。

『まずい!!スペースサンダー!!』

グレンダイザーはスペースサンダーを放ち彼らの方も撤退をした。

「まあいいか、撤退をしよう．．．だがライダーはいなかったか．．．」
レイラはそういつて石を割り撤退をした。

カイザースide

俺達は今巨大化をして基地の方へと戻っていた、翼のシンフォギアが解除されたことを言うために俺は連絡をしていた。

『そうかそっちにも現れたのか、こっちはクリス君とアリス君のがやられてしまったな。』

『俺達も今は基地の方へと戻っています、合流をしましょう。』

俺は通信を切り手にいる翼に声をかける。

『大丈夫か風鳴翼。』

「ええ心配をかけてすまない、だが．．．何も聞こえないのが怖いな．．．」
彼女はアメノハバキリのペンダントを握りしめていた、俺たちは無言で基地の方へと戻っていく。

迫りくる新たな敵、復活のガングニール!!

カイザー達がSONG基地に帰投をして響達の方では少女を保護をしていた、現在アメノハバキリ、イチイバル、ネフシユタンは敵の攻撃を受けて機能が停止の状態になっている。

だが彼女は眠ったまままで起きる様子がない、一方で響は未来と一緒に街を散歩をしていた。

「……………」

「響どうしたの?」

「いや、昨日現れた敵にクリスちゃんたちのギアがやられちゃって。翼さんの方も襲われたって聞いたから。」

「なるほどね……………ってあれは?」

「え?」

未来の言葉に響が前の方を見ると一人の女の子がたっていた。

「女の子?」

彼女の目の前に現れた少女、すると左手のブレスレットこと凰牙が声をかける。

『響気を付けろ!! 奴は敵だ!!』

「え!？」

彼女が魔法陣を出すとそこから砲撃が飛んできた、響は未来を避難させるために凰牙を纏い彼女をお姫様抱っこをして回避をした。

「どうして攻撃をするの!!」

「………問答無用!!」

彼女は襲い掛かってきた、響はガードをして後ろの方へと吹き飛ばされながらレオサークルを装着をしてレオ旋風脚を使い彼女が放った攻撃をふさいでいる。

だが爆発をした瞬間に彼女に蹴りが命中をして吹き飛ばされる。

「が!!」

一方でカイザー達は響が襲われていると連絡を受けて現場へとやってきた、だが彼の前に現れた謎のアルカノイズたちが襲い掛かってきた。

『時間稼ぎか!!』

カイザーたちはアルカノイズたちを倒す為にルストトルネードを発動させてアルカノイズたちを吹き飛ばしていく。

一方で中では少女の攻撃を受けて響はダメージを受けてしまい凰牙が解除されてしまふ。

「響!!」

「未来……」

「貴様、あいつが大事なんだろ?」

「まさか!!」

彼女は未来に向かって魔法陣を出して鎖が発生をして彼女を捕まえた。

「未来!! (このままじゃ!!でも私にはガングニールがない……でも!!) 未来を殺させはしない!! Balwisyal Nescell gungnir torn」
SONG基地では奏とマリアのガングニールのペンダントが突然光り出した。

「なんだ!?!」

「私たちのペンダントが!!」

その光が放たれて行きキャロルが張った結界を破り響に当たる、彼女にギアインナーが装着されて行き、ハイパープラズマドライブなどが装着されて行きそこにガングニールの装甲がプラスされていき頭部のバイザーはなくなりガングニールがしていたギアが装着されてマフラーなどが装着されていく。

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

未来のところに行き鎖を壊していく、ガングニールの力も入っており彼女の鎖を引きちぎっていく。

「響・・・・・・・・・・」

「ちい・・・・・・・・・・まさか復活をさせてしまうとはな!!」

彼女は魔法陣を出して撤退をしていく。カイザー達も響が電童にガングニールが纏われていることに気づいた。

『おいおいまさかガングニールが復活をしたのか?』

『みたいだな、しかもかなりパワーアップをしているだな。』

彼らはその様子を見ながら新たなガングニールを纏った響の姿を見るのであった。

一方で

「はああああああああああああ!!」

フアラは一体の巨人と戦っていた。捕獲命令を受けているフアラはライディーンを捕獲するために切っていた。

だがライディーンは右手のゴットブレイカーで彼女が放った攻撃をはじめて蹴りを入れて吹き飛ばす。

『ゴッドミサイル!!』

彼が放ったミサイルを受けてフアラの右手吹き飛ばされる。

「ぐ!!なんて威力ですか・・・・・・・・撤退をします。」

フアラは撤退をしてライディーンもゴッドバードにチェンジをして飛んで行く。一

方でSONG基地ではクリスたちが保護をした少女が目を覚ましたと聞いて弦十郎たちが話を聞きに行っている。

カイザーたちは響が装備をした新たなペンダントを解析をしていた。

『ふーむ。』

「どうなのかしら?」

『おそらくこれは奏とマリアのガングニールの力を得て響ちゃんの体内で生成された新たなガングニールだ。奇跡としか言えないよ。』

カイザーも両手をあげてお手上げ状態になっていた。さすがの彼もこのガングニールについては謎を秘めているしか答えられなかった。詳しく調べないといけないとかのみんなにも言うことにした。

一方で宇宙。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

一体の機体が宇宙から大気圏を突破をしていた、その目標が落ちていく場所は北極だ。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

その胸部にはライオンがついており肩部はイルカ、背中は鳥、足部はモグラなどが見える。彼は冷静を取り戻したのかあたりを見ていた。

『()は?』

彼は空を飛び日本があるであろう場所へと向かうのであった。

勇者復活!!

カイザー side

今現在 スタッフたちはクリスたちが保護をした女の子エルフナインの指示の元響のガングニール、アメノハバキリ、ネフシユタン、イチイバルの改修作業に入っていた。彼女が持ってきたものはイグナイトモジュールと呼ばれるダインスレイフの欠片を使い追加搭載の改良をするために現在は動いている。

マリアのガングニールは現在は使用不可になっていた、おそらく響のガングニールにすべてを託したのか割れていた。

現在はナスターシャ教授が持っていた予備のアガートラムを改良をしているところだ。

『ふーむ。』

『どうしたカイザー?』

『乙か、敵が動かないといいのだが……俺達は念のために待機をしているからな。』
『だな。』

二人で話していると警報が鳴りだした。

『！！！！』

全員で司令室の方へ向かうと弦十郎が立っていた。

カイザー side 終了

「先ほど発電所に敵が現れた。」

『まずいぞ！！発電所がやられたら、今改良作業がストップをしてしまう。』

その様子を二人は見ていた。

「調！！」

「急ごう切ちゃん！！」

「デース！！」

二人はカイザーが改良をしたLINKERを持ち発電所へと向かっていく。

一方で発電所にはガリイ以外にももう一体がいた。

「ねえガリイ破壊してもいいのかぞ？」

「待ちなさいな、確かに簡単に破壊してもいいけどそろそろ来るじゃない？」

ガリイが言う空から鎌などが降ってきた。

「みたいだぞ！！」

もう一体が言う調と切歌が着地をした。司令室の方では二人が出撃をしてることに驚いている。

「まずい!!二人ともすぐに戻るんだ!!」

『大丈夫デース!!時間稼ぎは必ずするデース!!』

『その間に改良作業をお願いします!!切ちゃん!!』

『了解デース!!』

二人は通信を切りカイザーたちも彼女たちを助けるために出撃をしようとしたが……

「待ってください!!何かが日本へ接近をしております!!」

「なんだと!!その物体はどこに向かっている!!」

「えっと……発電所です!!」

「なんだと!!」

弦十郎たちは驚くが一体何者が発電所に向かっているのか。

一方で切歌と調はアルカノイズたちと戦ってガリイともう一体とも戦っていた。

「このミカ相手にどこまで戦えるぞー?」

「強いデース!!でも負けない!!」

「はああああああああああ!!」

調のユニットからたくさんのノコギリが発生をしてガリイに向けて放たれる。

「そんなものガリイちゃんに当たるとでも思ったのかごら!!」

ガリイは冷気の刃で彼女が放った鋸を凍らせていく。

「きやああああああああああ!!」

「切ちゃん!!」

「余所見厳禁!!」

「きやああああああああ!!」

二人は攻撃を受けてギアも破壊されてしまい全裸となってしまう。

「さーてまずはこいつからやってしまいなさい。」

アルカノイズに指示を出して調に迫ってきた、切歌は彼女を助けようとしたが……
ボロボロの体が言うことを聞かない。アルカノイズの触手などが調に向かっていく。

「誰か……調を……私の友達を助けて!!」

調は目を閉じた、だが奇跡が起きた!!

『ぐおおおおおおおおおおお!!』

ざしゅという音が聞こえて調は目を開けた、そこには白いライオンがアルカノイズを切り裂いていた。次々にアルカノイズたちを切っていく白きライオン……

「ライオン?」

「なんだお前!!」

『チェンジ ガイガー!!』

白きライオンが変形をしてヒューマンロイド型ロボットジエネシツクガイガーへと変身をとげた!!

「あなたは？」

『もう大丈夫だ、あとは俺に任せろ!!』

「なんだお前は？」

『俺はガイガー!!お前たちのような奴らを倒すものだ!!』

「へえーならやってやろうじゃない!!アルカノイズ!!やっちゃまえ!!」

ガリイはアルカノイズに指示を出してガイガーに攻撃をしてきた、ガイガーも走りだして腕のクローを展開する。

『ジエネシツククロー!!』

ジエネシツククローが発動をしてアルカノイズを一瞬で切り裂いていく、ほかのアルカノイズも蹴りやクローで撃破していき、ガリイが出したアルカノイズたちは消滅をした。

「おのれ!!ミカ!!」

「分かっているぞくらうんだぞ!!」

ミカの手が伸びてガイガーに命中をして彼は吹き飛ばされる。

『なんて力をしている!!』

「はっはっは!! お前弱いぞ!!」

『なら見せてやる!! 俺の勇気をジェネシクマシン!!』

彼の言葉に空中と地面から五基のジェネシクマシンが現れた。現れたジェネシクマシンはガイガーの周りを飛んでおり、現れたのに二人は驚いている。

「なによこれ!!」

「なんだぞ!？」

『ファイナルフュージョン!!』

ガイガーの脚部が反転をして両足にストレイトガオーとスパイラルガオーが装着される。ガイガーの両手が後ろに行つたところにブロウクンガオーとプロテクトガオーがガイガーの両肩部に合体して両腕となり、背中にガジェットガオーが合体をして彼のライオンの部分に羽部分が、さらに両手部分が接続、そこから手が発生をして最後のヘルメットをかぶり、彼の両目が再び光りだす。

『ガオー! ガイ! ガー!!』

今再び勇者が復活をした。それは最強の破壊神!!

それは、勇気の究極の姿!!

我々がたどり着いた、大いなる遺産。復活をした勇者の名は勇者王! ジェネシク!

ガオー! ガイ! ガー!!

「合体をした……」

「かつこいいデース!!」

「何がジエネシツクよ!!くらいな!!」

ガリイは右手の氷の刃でジエネシツクのボディを切りつける、だが彼のジエネシツクアーマーにはガリイの氷の刃は効かず逆に彼女の氷の刃が砕け散る。

「うそだろ!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

ジエネシツクガオガイガーの拳がガリイのボディを殴る、だがその威力は。

「があああああああああああああ!!」

彼女のボディに大ダメージを与えるほどの威力を持っていた。

「ガリイ大丈夫かだぞ?」

「これは……大丈夫に……見せるか……この馬鹿……」

『さあどうする!!撤退をするというなら俺は追撃はしない!!』

「ガリイどうするだぞ!!」

「ちい……ミカ!!」

「分かったぞ!!お前覚えたぞ次は絶対に倒すぞ!!」

ミカは転移石を壊して撤退をした、ジエネシツクガオガイガーは彼女たちの方を振り

返り膝をついた。

『大丈夫か？今傷を治してやる。ジエネシツクオーラー。』

彼の右手から優しい光が発生をして調と切歌の傷が治っていく。

「傷が治った………」

「ありがとうデース!!」

『なーに気にするな、勇気があれば何でもできるからな!!はっはっはっはっは。』

「あなたは？」

『俺はジエネシツクガオガイガー!!勇気で踏ん張る戦士だ!!』

「勇気？」

『そう俺の中にあるGストーンは勇気で起動をするものだ。といつても俺自身もなんでも子の宇宙で目を覚ましたのかわからないけどな。だが君達が無事でよかった。』

そこにカイザーや改修作業が終わった翼とクリスとアリスが駆けつけた。

「すまない!!作業が遅れてしまったって……あれ？」

「なんだよ敵いねーじゃん!!」

「えつと」

「ジエネシツクガオガイガーが倒したデース。」

「まじですか。」

クリスは彼の方を見る。カイザー達もジエシツクガオガイガーの方を見ていた。
『とりあえずよろしくな!!』

新たな仲間ジエシツクガオガイガーを仲間に加わった。

イグナイトモジュール抜剣!!

新たな仲間に加わったジエネシツクガオガイガー、その間にイグナイトモジュールの追加搭載が完了をして現在はそのために戦士たちは立っていた。

その対戦相手は響の相手はマジンガーZが、翼をグレートマジンガー、クリスをマジンカイザーが引きうけており、アリスはグレンダイザーが、調はゲッタードラゴン、切歌はレイアースが引きうける。

奏はダイターン3がマリアはマジンエンペラーが引きうけており、セレナはブラックドラゴンが引きうける。

真ゲッターたちはもしもカイザー達でも止められなかったら際の保険として待機をしている。

弦十郎は全員の準備が完了をしたのを見て指示を出す。

『それではこれよりイグナイトモジュールを発動訓練をする!!』

『お前ら!!遠慮はするなよ?』

『僕たちは君達が暴走をしても全力で相手をする!!』

「ええその時はお願ひします。」

全員が構えておりイグナイトモジュールが追加されたペンダントを触る。

「「「「「「イグナイトモジュール抜剣!!」「」「」「」」」」」」

全身が黒くなっていき成功をしたのかと思ったが……

「がああああああああああああ!!」

『どあ!!』

突然響がマジンガーに襲い掛かってきた、それだけじゃないほかの人物たちも相手を攻撃してきたのだ。

『マジンガーブレード!!ぐ!!』

グレートはマジンガーブレードを出して翼が放つ斬撃を受け止めていた。

(なんて威力をしている……カラダにダメージが与えられている!?)

一方でカイザーはクリスが放った攻撃を体で受け止めていた。

『ぐううううううううう!!』

威力が上がっているクリスの攻撃をマジンカイザーはダメージを受けていた、ほかの人物たちも暴走しており抑えたりしていたが。

『お前ら!!そんなんで守れると思うのか!!』

『力を制御をするんだ!!イグナイトに負けるな!!』

『クリス!!』

「か……カイザー……私は……」

『クリス、力を制御をするんだ……自分の思いを強く持て!!』

全員が止まり光りだしていく、するとギアが安定をしていき彼女たちは再び目を開ける、そこには黒いギアとなったイグナイトモジュールを発動をさせることに成功をしたシンフォギア奏者たちが立っていた。

『どうやら成功をしたみたいだな?』

『だな、だがイグナイトモジュールの力……強大だな……』

全員は体を触っているがダメージを受けており機能的には問題ぐらいだと判断をしている、一方でキャロルは大ダメージを受けているガリイの修理をしていた。

「まさかガリイをここまで痛めつけるとはな……仕方がないフアラ悪いが貴様にはガリイがやる予定だった仕事をしてもらうぞ。」

「わかりました、マスター量産型ゲッターの方は?」

「何機か連れていくがいい。」

「では。」

フアラは転移石を使い量産型ゲッターたちと共に移動をする。

一方でグレートマジンガーとマジンエンペラーGは翼とマリアと共に風鳴の家に来ていた、彼らは普通の家に入る自体が初めてなのであつちこつちを見ている。

『ほーう。』

グレートは飾ってある絵を見たりしていた、外ではエンペラーがエンペラーブレードを振るっており素振りをしていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「どうしたのかしらエンペラー？」

『・・・・・・・・来るぞ!!』

「!!」

転移魔法が発動をして中からファアラが出てきた、彼女は剣を構えて何かをしようとしたとき腕部が回転をしてファアラめがけて飛んできた。

「な!!」

ファアラは右手の剣ではじかせようとしたが逆にその剣をおれてしまう、その手はグレートマジンガーが放ったドリルプレッシャーパンチだ。

『やはり何かの力を感じたか、しかも奴らは量産型ゲッターまで回収をしているわけか、翼とマリアいけるか?』

「ああ!!」

「ええ!!」

『量産型は俺達が引きうける!!』

エンペラーとグレートはグレートオレオールとスクランブルを出して空へと行く、残されたマリアと翼にファアラが立ちあがる。

「なるほど面白くなるわね。」

ファアラは右手をブレードを治して二人が放った斬撃を受け止めていた、翼とマリアは斬撃を受け止めていた。

一方で量産型ゲッターの攻撃をかわしているグレートマジンガー。

『ニーインパルスキック!!』

膝からニーインパルスが発生して量産型ゲッターを撃破して後ろからやってきたドラゴンに脚部のカッターが展開される。

『バックスピッキック!!』

バックスピッキックが頭部を蹴り飛ばして爆発させる、エンペラーの方も空を飛びルストタイプーンを放ち量産型ゲッターたちを腐食させていく。

『切り裂け!!グレートスマッシュャーパンチ!!』

両手が一気に回転をして飛びだして量産型ゲッターたちを次々に貫通をしていき爆発させていく、両手が戻ったエンペラーは地上の方を見ていた、翼とマリアがファアラ相手に奮闘をしている。

彼女が放つ風の攻撃をマリアがガードをして翼がファアラに追撃をするというコンビ

ネーションを見せている。

『グレート!!』

『なんだ!!』

『見せてやろうぜ!!俺達の合体技をな!!』

『わかった!!』

お互いに右手を上げると雷雲が発生をして彼らの右手に落ちてきた、彼らはその雷を構えて前につきだした。

『ダブルライトニングバスター!!』

二人が放ったダブルライトニングバスターが量産型ゲッターたちに命中をしていき爆発していく、地上の方でもマリアと翼はお互いに胸のペンダントをかまっていた。

「イグナイトモジュール抜剣!!」

二人のギアが黒くなっていき彼女たちは突撃をする、ファラも迎撃をするが空からブーメランが放たれて彼女の右手に命中をする。

放熱板が戻っていきグレートマジンガーが放ったグレートブーメランだ。

『今だ!!』

「これで終わりにしよう!!」

翼は二刀流にして刀身から炎を纏い全身が不死鳥のようになりファラの胴体を貫い

ていく。

「ま……まさか……ここまで上がるとは……マスター……
申し訳ございません!!がああああああああああああ!!」

フアラは爆発をして翼は着地をした、マリアも近づいてグレートたちも地上へ降りてきた。

一方でレイラはあるものと戦っていた、いや正確には2体の獣と戦っている。

「ぐ!!なんだお前たちは!!」

『それは俺の台詞だ!!くらいな!!』

もっている射撃武器を放ちレイラはコインではじかせようとするが、横からロケットパンチが飛んできてレイラに命中をする。

「く!!お前たちは何者だ!!」

『へえーあたしたちのことを知らないなんてね?いいわおしえてあげるわ!!』

『俺達は獣の怒りを超え、ひとの憎しみを超え、さらに神をも超えたその名も!!』

『『ダンクーガ!!』』

「ダンクーガ?」

『いくぜ後輩!!』

『ええ見せてやろうじゃないの!!』

『断空剣!!』

剣が交差に飛び二人は腕を交差をしてキャッチをして一気に迫りくる。レイラはコインやアルカノイズたちを出して攻撃をさせるが。

『そんなもんで!!』

『私たちが止まるとでも思っているの!!』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

2体は次々に切つていきレイラの目の前までやってきた。

『断空!!』

『双牙剣!!』

2つのダンクーガの断空剣がレイラのボディを切り裂いた。

「ああああああああああああああああ!!」

レイラは爆発をして二人は着地をした。

『やるじゃねーか!!』

『そっちもね!!』

お互いに手と手をがんとぶつけて二人は立っていた。

ある場所

「まさかレイラまでやられるとはな……ガリイとミカにすべてを任せることにな

るとはな……だがまあいい、ひそかに奴らが知らずに破壊をしていたからな。それにイグナイトモジュールもちゃんと搭載されているからな。それにライディーンが日本にいることもわかった。はっはっはっはっはっはっは!! まっているライディーン!! 貴様に倒された恨みは忘れんぞ!!」

その時のキャロルの目は何かを纏うかのような目をしていた。果たしてキャロルの正体は。

キャロルの正体。

マリアたちが戻ってきた、翼の家でファアラが現れて襲い掛かってきたがイグナイトモジュールを使つて倒したという連絡だ。

彼女たちが話していると警報が流れた、カイザー達はすでに司令室におりシンフォギア奏者たちが入ってきた。

「すみません師匠!!」

「うむ皆奴らが突然暴れだした、一人は翼が倒したがもう一体が出てこないのがわからない、だが油断をするな!!」

「「「「「了解!!」」」」」

「カイザー、彼女たちを頼む。」

『任せろ。』

弦十郎の言葉を聞いて全員が出勤をする、街ではガリイたちが暴れていた。

「マスターのご命令だからね、悪く思わないですよ!!」

ガリイの手から氷が放たれて街を攻撃をしている、ミカも両手でビルなどを破壊していた、量産型ゲッターたちも暴れていると上空から回転をした右手首がゲッター軍団を

貫いていく。

『ブロウクンマグナム!!』

ジェネシックガオガイガーが放ったブロウクンマグナムが彼の右手に合体をして彼らは着地をする。

「あちやーやっぱり来たか……でもガリイちゃんも負けれないのよ!!」

「ここは私が!!ユニコーンドライブインストール!!」

新生ガングニールを纏い、電童ギアが合体をした状態ユニコーンドライブを発動させて右手にユニコーンドリルが装着されてガリイが放つ攻撃を相殺をしている。

『ゲッタートマホーク!!』

真ゲッターは素早い動きでゲッター軍団の攻撃をかわしてトマホークで一閃をして爆発させる。

「ブラックさん!!」

『セレナ、同時にいくぞ!!』

「はい!!」

セレナは左手を砲撃形態に変えてブラックドラゴンも頭部にエネルギーをためている。

『ダブルゲッタービーム!!』

放たれた砲撃が量産型ゲッターたちに命中をしてセレナはブラックドラゴンにハイタッチをする。

『これはなんだ？』

「ハイタッチですよ？」

『そうか。これがハイタッチか。』

『いくぜ!!光子力ビーム!!』

『ハンドビーム!!』

『ネーブルミサイル!!』

『ゲッターレーザーキャノン!!』

マジンガーたちの攻撃が命中をしてアルカノイズたちを次々に撃破していく、ダイターンはジャベリンを伸ばして貫かせる。

『ザンボットバスター!!』

『トライダーカッター!!』

二人が投げた武器がアルカノイズたちに命中をして撃破する、レイアースたちは剣を持ち炎や水、風を纏わせて切りつけていく。

『くらえ!!ルストタイフーン!!』

『ルストトルネード!!』

マジエンペラーとマジンカイザーのダブルの風が吹きあがり量産型ゲッターを始めアルカノイズたちが巻き込まれて行き腐食されて行き姿がなくなる。

切歌と調はミカにリベンジをしていた、パワーアップをした二人のコンビネーションがミカを翻弄をする。

「これは私からのプレゼント!!」

腰部が開いてミサイルが大量に放たれてミカに命中をする。

「いくぜええええええ!!あたしの必殺技!!」

アリスは何かを考えたのか、アサルトギアのチェーン部分だけを発生させてエネルギーの糸を使いそれを振り回している。

『あれっっておいらが使うトライダーアールとトライダーカッターの組み合わせの奴じゃん!!』

『だなー。』

トライダーとザンボットはアリスが使った技を見てそう判断をする後ろから量産型ドラゴンがダブルトマホークを振り下ろされるが二人は回避をしてトライダーセイバーとザンボットカッターで量産型ドラゴンを切り裂いた。

一方でガリイと戦っている響に奏とマリアが参戦をしていた。

「ちい!!くらいやがれ!!」

「おっと!!」

奏が自身が持っている槍を回転させて彼女が放った氷をふさいでいる、マリアが彼女の肩を踏み台にしてたくさん創成をした短剣を飛ばしてガリイにダメージを与えた。

「今だ響!!」

「はい!!はああああああああああ!!」

彼女のハイパープラズマドライブが回転をして右手についているユニコーンドリルがさらに回転をしている。

「ユニコーンドリルファイナルアタック!!」

ユニコーンドリルの角からエネルギーが発生をしてガリイの胴体を貫いた。

「が・・・ガリイちゃんがこんなところでええええええええええええええええ!!」

ガリイは叫びながら爆発をした、一方で調たちはイグナイトモジュールを発動させていた。

「この!!」

ミカの攻撃をかわして切歌は鎌を構えて彼女の右手を切断させる。ミカは左手を使い切歌を捕まえようとしたが飛んできた刃が彼女の左手を切断させる。

「あたしの必殺技を忘れるなよ?」

イグナイトモジュールで電王ギアを纏いデンガツシャーソードモードの刃が放たれ

たのが戻った。

「これでおわりにしてやるぜ!!後輩!!」

「先輩!!」

クリスはミサイルを放ち同時に調は鋸をたくさん発生させてそれを飛ばした。ミカはそれを全身に受けて吹き飛ばされる。

「み、ミカが……ここで……終わりののかぞー?」

立ちながら爆発をしてキャロルのオートスコアラは全滅をした、アルカノイズたちもマジンカイザーたちよって倒された。そこに魔法陣が発生をしてキャロルが現れた。

「キャロルちゃん。」

「やるじゃねーか、さすがシンフォギア奏者と言ったところか、我がオートスコアラたちを倒したことは褒めてやろう、だが我が魔術を破れるかな?」

キャロルは魔術を使い彼女たちを捕まえた、シンフォギア奏者たちはそれを突破をしようとしたが脱出ができない。

「無駄だ、我が魔術は強大な力を持つ、貴様たちの力で突破ができると思うな!!」

『ジエネシツクオーラー!!』

「なに!!」

ジエネシツクガオガイガーのジエネシツクオーラとGストーンの輝きがキャロルの

魔術を破った。

「ちい!! 厄介なやつがいたな。む!!」

上空から矢が飛んできてキャロルは回避をした、そこに立っていたのはゴッドゴーガンを放ったライディーンが立っていた。

「待っていたぞ!! ライディーン!! お前が来るのをどれだけまっていたことか!!」

『お前は!!』

「俺の、いや・・・私を忘れたかライディーン!! かつて貴様に倒されたプリンス・シャーキンを!!」

プリンス・シャーキン、かつてひびき洗が戦った敵で最後は倒された。そのプリンス・シャーキンはキャロルの体の中で蘇ったのだ!!

『プリンス・シャーキン・・・』

「さあいくぞライディーン!!」

キャロルの姿のプリンス・シャーキンはかつて巨大シャーキンで使っていた剣と盾を出して切りかかる。

『ゴッドブロック!!』

ライディーンは右手のゴッドブロックを展開をしてシャーキンが放つ斬撃を受け止める、だがライディーンだけがシャーキンの敵じゃない。

『ストロングバースト!!』

「ぬ!!」

シャーキンは持っている剣ではじかせるとブラックポセイドンが放ったストロングバーストを切った。

『サンダーブレーク!!』

『スペースサンダー!!』

「ぬお!!」

『お前の敵はライディーンだけじゃないぜ!!大車輪ロケットパンチ!!』

勢いよく放たれた大車輪ロケットパンチがキャロル事プリンス・シャーキンに命中をして彼は吹き飛ばされる。

「おのれ!!」

「ドラゴンファイアー!!」

「ぐ!!」

「もらった!!」

翼は蒼ノ一閃が放たれてキャロルは吹き飛ばされた。

「ええい!!私とライディーンとの戦いを邪魔をしておつて!!覚えていろ!!」

プリンス・シャーキンは撤退をしてライディーンは着地をした。

『すまない、俺の戦いに巻き込んでしまつて。』

「きにしないでください、あなたは？」

『俺はライディーン、奴はかつて俺が倒したは凶の敵なんだ、だが奴は敵としてではなく友として再会をしたかつた。』

ライディーンは悲しそうに顔を俯いている、響たちは新たな敵プリンス・シャーキンと戦う決意を固めるのであつた。

カイザー達対メタルビーストドラゴン

カイザー side

ライディーンを仲間に加えてキャロルの正体がプリンス・シャーンキンだったのは驚いてたぜ？今シンフォギア奏者たちは訓練をしている中俺と真ゲッターとエンペラーと新ドラゴンはパトロールに出ている。

奴がおそらく先ほどのダメージなどで動けないこともあるがアルカノイズたちのこともある。

『異常はないみたいだな？』

『ああ、街も平和そのものだ。』

『……………』

『カイザー？』

『何でもない。』

そうこの平和が俺達が望んでいたかもしれない世界だ、とりあえずいつも通りにパトロールを終えて帰投をしようとしたが……………

『お客さんみたいだな？』

俺はブレストトリガーを構えてほかの全員も武器を構えて敵が現れる量産型ドラゴンたちを中心に一对だけ力が違う奴を感じた。

『ふっはっはっはっは!!早乙女改めてメタルビーストドラゴンじゃ!!』

『早乙女?!』

真ゲッターと真ドラゴンは驚いている、俺とエンペラーも同じように困っていた。確か奴は真ドラゴンが放ったゲッタービームで倒されたはずじゃ？

『確かに真ドラゴンのゲッタービームによってわしの体は消滅をした、だが近くにあったゲッタードラゴンを吸収をしてこの体を生成をしたのじゃ!!いけゲッター軍団!!』

早乙女の指示をうけて量産型が襲い掛かる、俺達は突撃をして戦闘を開始する。

カイザー side 終了

真ドラゴンは両手が変形をしてポセイドンの頭が出てくる。

『ゲッターサイクロン!!』

強力な風がゲッターサイクロンが量産型ドラゴンたちを吹き飛ばされて行く、マジンエンペラーGはエンペラーブレードを抜いて量産型ゲッターたちに攻撃をしている、数体のドラゴンがダブルトマホークブーメランを放つがエンペラーはマントですべてを叩き落としてエンペラーブレードを連結させてそれを投げつける。

『くっらえ!!』

カイザーはブレストトリガーを放ちながら空を飛び光子力ビームを放ちライガーたちを撃破する。

ポセイDONは背中のストロングミサイルを投げつけるが、トリガーを引いて弾が放ちミサイルが爆発をする。

『くらえ!!ファイヤーブラスタター!!』

胸部の放熱板が光りだして強烈な熱が量産型ゲッターたちを瞬時に溶かしていく。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

一方で真ゲッターはメタルビーストドラゴンと激突をしていた、ゲッタートマホークとダブルトマホークがぶつかり合いお互いにオープンゲットをする。

『チェンジ 真ゲッター2!!』

『チェンジ ライガー!!』

姿が変わり真ゲッター2はゲッタードリル、ライガーはドリル同士がぶつかり合う。

『チェーンアタック!!』

『ドリルミサイル!!』

お互いの武器が激突をした後にオープンゲットをして姿が変わる。

『チェンジゲッター3!!』

『チェンジポセイDON!!ゲッターサイクロン!!』

チエンジをしたポセイドンはゲッターサイクロンを放ち真ゲッター3を吹き飛ばす。
『ぬおおおお!?』

『ストロングミ사일!!』

背中のストロングミサイルを投げつけるが、真ゲッター3はすぐに態勢を立て直してミ사일ストームを放ちストロングミサイルを破壊する、その半分がポセイドンに向かつていくがすぐにオープンゲッターをしてかわしてドラゴンへと変わる。

『ゲッタービーム!!』

真ゲッター3もオープンゲッターをして真ゲッター1へとチエンジをする。

『くらえ!!ダブルトマホーク!!』

『こつちにもいることを忘れるな!!早乙女!!ダブルトマホークブーメラン!!』

真ドラゴンが放ったダブルトマホークブーメランがメタルピーストドラゴンに命中をして彼は地面に着地をする。

『すまねえ!!』

『気にするな、俺達がやらないといけないからな?』

『だな!!いくぜ!!』

『おのれええええええええ!!ゲッタービィィィム!!』

『へ!!ゲッタービームなら!!』

『俺たちも持つている!!』

真ゲッターは腹部の装甲が開いて、真ドラゴンは頭部にゲッターエネルギーをためている、二人は同時に前を向いて放つ必殺技!!その名も!!その名も!!

『ダブルゲッタービィビィビィム!!』

二人が放つゲッタービームが交差をしてメタルビーストドラゴンが放ったゲッタービームさえも吸収をして命中をした。

『ぐおおおおおおおおおおお!!』

『これで終わりだ!!ファイヤーブラスタ―!!』

『いくぞ!!燃えつきろ!!グレートブラスタ―!!』

二人の放熱板が光りだして彼らに攻撃をしようとしていた量産型ゲッターたちに命中をして体などが溶けていき爆発をする。一方でメタルビーストドラゴンの方も体が崩壊をしていき大爆発を起こした。

『決まったな。』

『だな。』

お互いにハイタッチをして勝利を喜んでいた、カイザー達も着地をして辺りに敵がないかをチェックをしている。

『エンペラーどうだ?』

『熱反応なども探知しない、敵はいないようだ。』

『みたいだな。』

「カイザー!!」

彼らは振り返るとクリスタたちがやってきた、シンフォギアなどを纏っており現場へとやってきた。

『遅かったな、敵なら俺達が倒したぜ?』

「そうみたいです、ですがどうして連絡をしなかったのですか?」

翼が睨んでいたのも四人はすこし後ろに下がってしまったのが確かに連絡はしてなかったな、いきなりの襲撃なので彼らは戦いに集中をしていたのだ。

「まさか戦いに集中をして連絡を怠ったのですか?」

『すまない。』

『面目ない。』

『悪かった。』

『すまん。』

四人はすぐに翼に謝りマジンガーたちも苦笑いをしていた。ライディーンは両手を組んで考えていた。

(しかいプリンス・シャーンキングが動いてこないところを見ると、奴の体は不完全状態とい

うわけか……憑依した体では本来の力を出すことができないというわけか。
ガオガイガーもその周りを見ていた。

『これは……』

『どうしたのだい?』

『いいえ、彼らの機械の残骸などがなくなっているので驚いているのです。』

『『『『』』』』』

真ゲッターたちもその周りを見ている。

『ない!!メタルビーストドラゴンの残骸などがなくなつてやがる!!』

彼らは驚いている中全員が空の方を見ていると、何かが立っていた。

『ぶるああああああああ!!』

若本ボイスが流れてきたので全員が空の方を見ると謎の人物がいた。

『我はオリジナルのダンクーガ。お前たちが探している残骸は私の体の一部として使わせてもらった。ぶるああああああ!!』

話している時に砲撃が飛んできてオリジナルのダンクーガが吹き飛ぶ。

『俺の前でオリジナルを名乗るなんてな!!』

『ぬうううう!!またお前たちか!!』

『あんたがどれだけよみがえろうともあたしたちはあんたを止める!!』

『まあよい、ここはプリンス・シャーキンのために撤退をしましょう。』

オリジナルダンクーガは撤退をして彼らはダンクーガ達の方を見ていた。

「あなたたちは？」

『俺はファイナルダンクーガ。』

『私はダンクーガノヴァ・マックスゴッドよ。あの敵は私たちが追っている敵なの。』

『奴はシャーキンと手を組んだわけか。』

戦士たちは基地の方へと帰還をした。

一方でオリジナルダンクーガは？

『戻ったぞシャーキンよ。』

「すまないな、私の体が完全に修復するのに時間がかかるのでな。」

シャーキンは現在体の修復をしていた、マジンガーたちのダメージが予想以上にダメージを受けてしまいパーツなども現在は量産型ゲッターたちを使い修理をしていた。

『だが奴らの戦力なども上がっているのは事実だ。』

「わかっている、だからこそ私は全力で奴らと戦うための力を蓄えているのさ、人間たちの恐怖などをな。」

シャーキンは笑いながら修理を急がしていた。

浮上をした基地　カイザー達突撃!!

カイザーたちはメタルビーストドラゴンたちを倒した、だがその残骸は現れたオリジナルダンクーガによって回収をされていた。その理由はキャロル事プリンス・シャーキンの体を治す部品として使うために撤退をした。

それから数日たちが、キャロルは目を覚ました。

「……悪く無いな。いよいよ基地を浮上をして奴らとけりをつける時が来たか!!」

『なら私の方も兵士たちを用意をしよう。』

「すまないな。」

『気にするな。』

一方でSONG基地の方では新たに加わったダンクーガたちを歓迎をしているところだった。

「なるほど、君達は敵を追ってこの世界にやってきたというわけか。」

『そういうことになる、だがそれで元の世界に戻れないのが欠点だけだな。』

『それに私たちの方にも敵が現れたわ、たしかあなたたちが戦っていた機械だったかし

ら? 撃破をしたのよ?」

「つてことはあんたたちがあたしたちが苦戦をしたオートスコアラの一体を倒したわけか、あたし的には自分で倒したかったけどな。」

アリスは悔しそうにしておりクリスは苦笑いをして彼女の頭を撫でていた。

「なんだよクリス……あたしはそんなに機嫌が直ると思うなよ?」

「いや別にそんなこと思っていないけどなんとなくな? それともカイザーにしてみたら良かった?」

「そ、そんなことねーよ!!」

『なんだ? 俺が頭に撫でてほしかったのか?』

カイザーはクリスの言葉が聞こえたので歩いていきアリスの頭を撫でていた。

(いいなーアリスさん、私もカイザーさんに頭を撫でてほしかったな……)

セレナは羨ましそうにアリスの様子を見ていた、マリアや調たちもセレナの顔を見て苦笑いをしていた。

彼らが話をしていると突然地震が発生をした、弦十郎は直ちにオペレーター二人に指しを出して発信源を探るように指示を出す。

「反応がわかりました!! 場所は!! ○○地区です!!」

『この感じはシャーキン!! 奴が動きだしたんだ!!』

それに気づいて断空剣で切り裂いた。

『お前の相手は俺達がする!!』

『あなたたちは先に行つて!!』

ファイナルダンクークガとダンクークガノヴァ・マックスゴッドがオリジナルダンクークガの前に立ちふさがる。

『おさきに!!』

『逃がすと思うのか?』

オリジナルダンクークガは彼らに迫つてこようとしたが後ろから砲撃を受けて向きかえす。

『てめえの相手は俺達がするつて言つただろうが!!』

『まあいいだろう、お前たちの相手をしてやる、来い。』

ダンクークガ同士の激突が始まる!!

一方で中へ突入をした戦士たち、カイザーは元の大きさに戻り着地をする。

『普通に入れたな、つてなんだあれ?』

前から色んな化石獣たちが現れる、それは全部かつてライディーンによつて倒されたものばかりだ。

カイザー達を見つけると化石獣たちは襲い掛かってきた。

『ダイターンキャノン!!』

ダイターンが放ったダイターンキャノンが命中をして化石獣たちは吹き飛ばされる。ダイターン、ザンボット、トライダーの三人が武器を構えていた。

『ここはおいらたちが引きうけた!!』

『カイザー達は先に行ってください!!』

『頼む!!』

カイザー達が先に進んでいく、化石獣たちは彼らを追いかけるため向かおうとする、その前にザンボットのアームパンチとトライダーのビームキャノンが放たれて彼らを撃破していく。

『俺達を無視をしていくとはいいい度胸じゃねーか!!』

『さあ行くぞ君達!!』

『おうよ!!』

化石獣たちに突撃をしていきカイザーたちは先に進んでいく、中から砲撃が飛んできた。

『プロテクトシールド!!』

ジェネシックガオガイガーが前に立ち砲撃をガードをする、真ドラゴンがゲッタービームを放ち撃破した。

アルカノイズたちが現れて彼らに襲い掛かるが……

『ゲッターサイト!!』

『エンペラーソード!!』

真ゲッターとマシンエンペラーGが放つ斬撃で切り裂いていき、アルカノイズたちを撃破する。

ライディーンはあの先から感じるといい全員が走り扉を蹴り飛ばして破壊する。

「待つていたぞ!!ライディーン……そしてシンフォギアの諸君!!」

『シャーキン!!』

「お前たちを待つていたぞ、まあだがこれで終わりにしてくれる!!見るがいい我が新たな力をうおおお!!」

キャロルことプリンス・シャーキンに力が集まっていきかつて対峙をした巨大シャー金の姿へと変わった。

彼は剣と盾を構えてこちらに武器を構える。

『さあかかつてこい!!シンフォギアそしてライディーンたちよ!!我が力で貴様たちを倒してくれるわ!!』

『いいだろう!!魔神皇帝として相手をする!!いくぞ!!』

外では

『紅い稲妻!!』

『蒼い竜巻!!』

『緑の烈風!!』

三人の魔法が放たれて襲い掛かってきたレギュラスαに命中をして破壊される。

『スクランダーカッター!!』

マジンガーZはジェットスクランダーの翼で切り裂いていく、ゲッタードラゴンはダブルマホークを投げつけてレギュラスαにダメージを与える。

『今だ!!』

『了解だ!!ダブルハーケン!!』

ダブルスペイザーを装備をしたグレンダイザーが接近をしてダブルハーケンで切り裂く。

『ブレストバーン!!』

グレートマジンガーの放熱板から熱光線が放たれてレギュラスαたちを撃破していく。レギュラスαを撃破した後には彼らは基地の外を見ていた。

『どうする?』

『俺達の技でもあんな大きさを破壊するのは難しいぞ?』

『だな、だが被害を大きくしないためにも!!』

『外側から攻撃をしようか!!』

マジンガーたちも基地の方へと向かう。

一方でファイナルダンククーガとダンククーガノヴァ・マックスゴッドはオリジナルダンククーガと戦っていた。

『ぶるああああああああああああああああ!!』

頭部からビームが放たれるが二人は回避をしてノヴァはミサイルデトネーターを放ちオリジナルダンククーガに攻撃をする。

『いくぜ!!断空砲を受けてみやがれ!!』

断空砲フォーメーションを構えて砲撃をする。

『ぬおおおおお!!』

オリジナルダンククーガはそれを受けるが、すぐに態勢を立て直す。

『おのれええええええええええ!!私があああああああ!!こんなところでええええええ!!』

『あんたは終わるのよ!!あたしたちの手で!!』

『ノヴァ!!止めは任せたぞ!!受け取れ!!俺達の断空剣を!!』

投げつけた断空剣をキャッチをして自分が持っている断空剣をとりだして刃が発生

をする。

『なんだ!!なんなのだ!!この力はああああああああああ!!うああああああああああああああ!!』

オリジナルダンククーガは触手を発射させてダンククーガノヴァに対して放つが。

『させるかよ!!ファイナル断空砲!!』

ファイナルダンククーガが放ったファイナル断空砲が触手たちを撃破してその間にダンククーガノヴァ・マックスゴッドの断空剣がオリジナルダンククーガの左手を切り裂く。

『ぬお!!』

『ダンブレードシユート!!』

主砲からダンブレードが放たれてオリジナルダンククーガの両足を切断させる。そのままブーストをして両方の断空剣を掲げる。

『ファイナル断空両断剣!!』

ダンククーガノヴァが放った断空両断剣がオリジナルダンククーガのボディを切り裂いた。

『わ・・・私があああああああああああああああああ!!ぶるああああああああああああああああ!!』

爆発をするオリジナルダンククーガを見た後に彼らはマジンガーたちが向かっている

先を見てダンクローガたちも向かっていく。

『ダイターンスナツパー!!』

ダイターンスナツパーで化石獣の一体の首をつかみ振り回してほかの化石獣たちを巻き込むようにして振り回す。

『くらえ!!ザンボットミサイル!!』

『トライダーミサイル!!』

二人が放つミサイルが化石獣たちに命中をしていき撃破されて行く、彼らはそのまま接近をしてザンボットカッターとトライダーセイバーを構えて二人は一閃をしていき化石獣たちは爆発をしていく。

『よーし!!敵いなくなっただぜ!!』

『だな!!ダイターンの兄ちゃんどうする?』

『決まっている僕たちも外に出て破壊をするよ!!』

『よっしゃ!!』

三人も外に出て破壊をするために脱出をする。

一方で中では巨大シャーキンとなったシャーキンが襲い掛かってきた、ガオガイガーはウィルナイフを構えてシャーキンが放つ斬撃を受け止める。

『ゴッドゴーガン!!』

『ぬん!!』

ガオガイガーを蹴り飛ばしてライディーンのゴッドゴーガンで盾でふさいでいく、響達も参戦をしようとしたが……

「お前たちの相手は彼女たちだ!!」

シャーキンが術を唱えると中から現れたのはオートスコアラーたちだ。

「な!!どうしてこいつらが!!」

「私の魔術で蘇らせた、ただ自我がないモルモットみたいなのだがな……だが力は以前よりもパワーアップをしているぞ!!」

『ターボスマツシャーパンチ!!』

『グレートスマツシャーパンチ!!』

二体の魔神皇帝が放ったロケットパンチが勢いよくシャーキンに向かって飛んで行く。

「甘いぞ!!」

シャーキンはかわして真ドラゴンと真ゲッターとブラックドラゴンはトマホークを構えて三方向から攻撃をする。

「ヘアーミサイル!!」

髪の毛が彼らに向かって飛んで行き命中をして爆発をする。

『『『どあ!!』』』』

三人はミサイル攻撃を受けてダメージを受けて離れる。盾から破壊光線が放たれてマシンカイザーたちに命中をする。

『ぐあ!!』』

『スパイナルドリルニー!!』

「ぐ!!」

ジェネシツクガオガイガーのスパイナルドリルニーがシャーキンが持っている盾に命中をする、盾は粉々に砕け散る。

『今だ!!ゴットバードチェンジ!!』

ライドイーンはゴッドバードに変わり照準セットをする。

『うおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「ぐ、ぐおおおおおおおおおおおお!!」

ライドイーンはゴッドバードが巨大シャーキンを貫いた。

「……まさか……私がやられるとはな……ライドイーン……」

彼は着地をする。

一方でオートスコアラと戦うシンフォギア奏者たち。

レイアが放つコインをアリサがネフシユタンギアの鞭を使いはじかせていき、クリス

は接近をしてレイアの頭部にハンドガン突き付けて。

「……………ぱーん。」

彼女はトリガーを引いてレイアの頭部に弾が命中をしてからミサイルを放ちアリスのところへ着地をする。

「……………。」

ガリイは響と奏に襲い掛かる、氷の刃を奏が受け止めている。

「確かに力は強くなってやがるな……………だがな!!パワーアップをしているのはお前たちだけじゃねーんだよ!!響!!」

「はい!!レオサークルファイナルアタック!!」

右足のハイパープラスマドライブが回転をしてレオサークルのカッター部分にエネルギーが発生をして光輪として飛ばしてガリイの胴体を真っ二つに切り裂いた。

ファアラはマリアと翼と戦う、ファアラが起こす竜巻を二人はかわして翼は小刀を投げつけた。

右手の剣で彼女が放つ小刀をはじかせるが、翼の狙いは彼女じゃない。

「?」

ファアラは自分自身が動けなくなったのに気づいた、影縫いの術を使い動けなくさせた。

「マリア!!」

「ええ!!これで終わりよ!!」

左手を砲撃形態にして一撃必殺技が命中をしてファラは壊される。

「は!!」

セレナが投げつけたナイフをミカは回避をして攻撃に移行をするが後ろから切歌の鎌が飛んできてミカがガードをするが……

「であ!!」

調が飛ばしたたくさんの鋸が放たれてミカのボディボディを切りつけていく。

「デース!!」

彼女の一閃がミカのボディを横一線で切り上半身と下半身が別れて爆発をした。

「おのれ……」

『シャーキン、お前の最後だ!!』

「ならば我が命と引き換えだ!!うぐ!!」

シャーキンは自身で剣を刺して血が流れていく。すると基地が揺れ始めている。

『脱出をするぞ!!』

カイザー達は巨大化をして彼女たちを手に乗せて脱出をする。

外でも基地が崩壊をしていくのを見ていた。

『彼らはやったのか?』

『見ろ!!』

マジンガーの言葉に全員が見るとカイザー達が見るとカイザー達が脱出をしてきた、基地の方は新たな姿に変わっていく。

『なんだよあれ!!』

ライディーンは驚いている。

『バラオ……』

『我は復活をした、ライディーン……貴様を殺すために私は地獄から舞い戻ってきたぞ!!』

『だったらまた地獄に送り返すだけだ!!』

響達は空が飛べないどうするかと考えたときカイザーは閃いた。

『響たち俺達のエネルギーを使え!!』

「え!?!」

『そういうことか!!』

『だな!!』

『戦う力は残しておけよ!!』

カイザー、エンペラー、真ゲッター、真ドラゴンが彼女たちの周りに集まりエネルギー

決戦バラオとの戦い!!

カイザー達の方でエクストライブモードに覚醒をした響達、カイザー達もバラオと決着をつけるために今決戦が始まろうとしている。

『いくぞ!!バラオの力を見せてくれるわ!!かああああああああああ!!』

バラオは口から高熱火炎をはいてきた。全員は回避をしてクリスはガトリングを放ちバラオに攻撃をするが……

『ふっはっはっは!!そんな攻撃がバラオに効くと思っただか!!これでもくらえ!!雷鳴よ!!』

頭部の角から雷を発生をさせて全員に攻撃をする。

『『『『ぐああああああああ!!』』』』

全員が雷を受けてダメージを受けるが地上に落下はしてない。

「くらいやがれ!!」

奏がガングニールの槍を投げつける分身をしてバラオに命中をする。だがバラオは効いている様子がない。

「なに!?!」

『ブレストファイヤー!!』

『サンダーブレーク!!』

『ゲッタービーム!!』

『スペースサンダー!!』

四体の機体が合体技を放ちバラオに向かって放たれる。ガオガイガーとライディーン、さらにレイアースたちは接近をする。

『かああああああああああああああああ!!』

『『『『ぐああああああああああ!!』』』』

強烈な念動力でマジンガーたちは地上へ落下をしていく。

『野郎!!』

『ブラックドラゴン!!』

マジンガーたちを落とされてブラックドラゴンは冷静になれずにダブルトマホークを出してバラオに切りかかる、彼の斧はバラオの角に命中するがあまりの堅さに効かない。

『ぐ!!』

「はああああああああああ!!」

そこに翼やマリアたちが接近をしてバラオへ攻撃をするが、バラオは剣を出して振り

払い彼女たちを吹き飛ばした。

『どああああああああああ!!』

「「「きやああああああああああ!!」」」

「先輩!!」

「野郎!!」

アリスは電王モードへと変わり攻撃をしようとしたがバラオが先に弓を構えてアリスに矢を放ってきた。

「アリス!!」

「ぐ!!」

『させん!!』

レイアースが前に立ち矢を落とす、セレスとウィンダムも駆けつける。

『レイアース!!』

『だが……あれにはマジックナイトたちの力を借りないと……』
『彼女たちではだめなのか?』

ウィンダムの言葉にレイアースは振り返る、響、クリス、アリスの三人を見ている。

『……その通りだな。響ちゃんたち君たちの力を借りたい。』

「え?」

『私たちは三体合体をすることができる。』

『だがそれにはパイロット、つまり私たちに乗りこんで戦ってもらわないといけない。』

『それであたしたちか!!』

『そうだ、頼む!!』

「……クリスちゃん、アリスちゃん!!」

「ああ私たちの答えは決まっている!!」

「だな、ウインダム!!」

『ありがとう。』

『なら時間稼ぎさせてもらうぜ!!』

「カイザー!!」

『ゴッドミサイル!!』

ライディーンはゴッドミサイルを放ちダンクローガノヴァはミサイルデトネイターを連続して放ちバラオに命中をする。

『おのれええええ!!かああああああああ!!』

バラオは両手に鎌を構えてレイアースたちに攻撃をしようとしたが……

『させるか!!』

カイザーのカイザーブレードがバラオの鎌を切り落とした、下から攻撃が与えられ

る。

『へ!!俺達もまだまだいけるぜ!!』

地上に落下をしたマジンガーたちも戦線復帰をしてレイアースたちの準備が終えるまで時間を稼ぐ。

「立花!!」

『君達も一緒に戦おう!!』

『俺たちと共に!!』

『力を!!』

三体の魔神と8人のシンフォギア奏者たちが光りだす。

『ブロウクンマグナム!!』

ジェネシックガオガイガーが放ったブロウクンマグナムがバラオの頭部の角を粉碎する。だがバラオは両手を広げて念動力で彼らの動きを止めていた。

『体が動かない!?!』

『なんて念動力だ!!』

『はっはっはっは!!これで終わりにしてくれるわ!!地獄の業火に焼かれるがいい!!』

バラオは口から火炎を放とうとしたとき蒼い竜巻がバラオの顔に命中をする。

『ぐおおおおおおおお!!』

バラオの念動力が解除されたのかマジンカイザー達は動けるようになっていた。

『一体誰が!!』

『あれを見るんだ!!』

ダイターンの言葉に全員が振り返る、そこには合体魔神レイアースが立っていた、色はエクストライブモードの明るい色に変わっており背中の翼もレインボーになっておりバラオは合体魔神レイアースに念動力を放つ。

『そんなもの効きません!!』

響の声が聞こえて合体魔神レイアースは腕を振るいバラオが放つ念動力を破った。一瞬でバラオの目の前に移動をして蹴りを入れた。

『いくぜいくぜいくぜ!!』

アリスの声と共に拳のラツシュでバラオの顔面に攻撃をする合体魔神レイアース。バラオは火炎を放つが上空に回避をして翼の音が聞こえる。

『水の龍!!』

『ぐおおおおおおおおおおお!!』

水の龍がバラオに命中をして彼はダメージを受けていた。

『おのれ!!このバラオにダメージを与えたというのか!!ありえない!!』

『これがシンフォギアの力だああああああああ!!』

『サンダーボルトブレイカー!!』

『ストナーサンシャイン!!』

『くらいやがれ!!ファイヤーブラスタター!!』

全機の技がバラオに放たれる、ガオガイガーのヘルアンドヘブンは頭部に命中をして彼はそのまま上空へとびレイアースに声をかける。

『今だ!!お前たちの勇氣を見せる時だああああああああああああああああ!!』

『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

『『『『『『バラオ!!』』』』』

合体魔神レイアースが降ろされてたエネルギーの刃がバラオを一刀両断にした。

『ぐああああああああああ!!このバラオが!!またしても人間たちに敗れるというのかああああああああ!!』

バラオは大爆発を起こしてレイアースたちは爆発が広がらないように結界を張りバラオの爆発を食い止めた。

『や．．．やったのか?』

全員が地上に着地したが、膝をつけていた。

合体魔神レイアースは光りだして響達が出てきた、さらに分離をしてレイアース太刀に戻るが、彼らも膝をついていた。

「カイザー!!」

『大丈夫だ、少しエネルギーを使い過ぎたみたいだ……』

『なんか久々にエネルギーを使い切ったみたいだ。』

『あのバラオつて奴は強い……俺達全員のエネルギーをフルに使わせるぐらいだ。だが俺達はそれに勝っただけでもいいかもしれないな。』

「はい、その通りです。」

「やりました!! 風牙さん!!」

『ああよくやったな響。本当にパワーアップをしているな。』

風牙は響を娘のように感じていた、レイアースたちもその光景を見て笑顔になった。

『彼女たちも光たちに負けないぐらいの勇気があった。』

『だな、合体魔神レイアースになれたのも彼女たちの思い……』

『そしてあきらめない心が俺達を奮い立たせることができた。』

『本当に面白いな、彼女たちは……』

魔神達は彼女たちの様子を見ながら笑っていた。

一方で病院の方では。エルフナインは元はキャロルのクローンだ、彼女の生命力は失おうとしていた。

「……これは。私? ……あなたにあげる。私の体を。」

彼女はエルフナインにキスをして二人の体が光りだした、弦十郎は病室に行くとキャロルがいたことに驚いている。

「キャロル君!?! いや君は……」

「僕です、エルフナインです……キャロルは僕に体を渡してくれました。」

「そうなのか、先ほど響君たちから連絡があつた敵を倒したそうだ。」

「そうですか、キャロルは体に乗っ取られたときから僕に情報を渡していました。」

「そうか、彼女は……」

そして彼らは彼女たちを迎えるために入口へと向かうのであつた。

第四章 コラボ小説電光戦姫シンフォギアSSSS 現れた赤と白の巨人とシンフォギア奏者

カイザースide

バラオとの戦いを終えて俺達は遺跡の方へやってきて完全聖機物を基地へと運んでいた、そして俺の中にはある人物が入っていた。

『さてキャラル、君はこれを見てどう思う？』

『そうだな、間違いなくギヤランホルンと呼ばれるものだ、俺も詳しいことはわからないが……な。』

そうキャラルが入っていた、彼女は気づいたら俺の中にいた。バラオとの戦いを終えて俺達は修復をするために全機が機能停止をして自動修復に入っていた。クリスタちは俺達の様子を度々来ていたことを弦十郎から話は伺っていた。

最初に目を覚ましたのが俺だったが、なぜか声が頭の中に聞こえていた。それがキャラルだ。

彼女は体をエルフナインに託してからは魂の状態で俺の体の中に入っており俺が見ているものからエルフナインを見たりしている。

『全くあのバカは相変わらずなのか?』

『仕方がない、彼女はそういう性格なんだ。それが彼女のいいところかもしれないがな。』

俺は両手を組んで歩いている、基地へと帰還をした俺達はエルフナインの指揮の元ギランホルンの解析が始まった。

俺達はさすがに邪魔になるので外で待機をしている。

「エルフナインちゃん大丈夫かな?」

『わからないが、彼女を信じようぜ?』

「ですね、カイザーあなたは変わりましたね?」

『変わった?』

「だな、その声になってから感情がわかりやすくなったしよ。」

『………まあ翼や奏、クリスとは長い付き合いかもしれないな………』

俺は考えていた、翼や奏とは日本に来て始めてノイズと戦ったときに出会った、それから何度か捕まえられかけたが逃げたり逃走をしたりしていたな、クリスとは南米で救った以来だが二課に入ってからは一緒にすることが多い。

そのあとに響ちゃんやアリス、未来ちゃんにマリアにセレナ、調ちゃんに切歌ちゃんが加入してここもうるさくなつたなと思うぐらいだ。

『まあ俺にとつてはこんな奴らにあいつらがやられたのかなと思うぜ？だが見ていた。ありがたいなあいつらや俺達を解放してくれてよ。』

『気にするな。』

「カイザー？」

『何でもない。』

そうキャロルの声は俺やエンペラーなどのロボットたちにしか聞こえないようにしている。

びーーーーー!!びーーーーー!!びーーーーー!!

『!!!!』

この警報は、ノイズが出た時の音だ。俺達は急いで司令室へと向かって走っていく。すでに弦十郎を始め全員が司令室に折りオペレーターのおおいさんや朔也が仕事をしていた。

「この反応は………ノイズです!!」

「なんだと!!」

『馬鹿な!!ノイズはバラオがソロモンの杖を吸収をしていたことは俺達も知っている!!だからそれで消滅をしたはずなのに!!』

「行きましよう!!」

響の言葉に全員が出勤をする。カイザー達も空から先に急行をしてノイズたちを発見をする。

『本当にノイズだな、ターボスマッシュヤーパンチ!!』

両手の下腕部が飛んで行きノイズたちを粉碎をしていく。ほかの全員も戦闘を開始をする。

『うおおおおおおおおお!!』

ジェネシツクガオガイガーはノイズの頭を握りしめて粉碎をして右手首を回転させる。

『プロウクンマグナム!!』

彼の右手首がノイズたちを次々に貫通をしていき撃破していくとミサイルが飛んできた。

『なんだ!?!』

『ぎゅあおおおおお!!』

『ひえええええ!!』

響達も到着をして上の方を見る。

『なんですかあれ!!』

『知らん!!』

「でえええええええええええええええ!!」

アリスや切歌は目をキラキラさせていた。カイザー達も上空に飛び怪獣相手に戦うことにした。

『みんなは地上の怪獣を頼む!!いくぞ!!』

『『『『おう!!』』』』

『チェンジライガー!!チェーンアタック!!』

ライガーに変わったゲッターGはブラックライガーと共にチェーンアタックを放ちその足を絡ませる。

『チェンジ真ゲッター3!!』

真ゲッターも3へと変わりライガーたちに加勢をしてこけさせようと力を入れていく。

『なら上空から!!大車輪ロケットパンチ!!』

『ドリルプレッシャーパンチ!!』

『スクリュークラッシュシャーパンチ!!』

トリプルマジンガーが放ったトリプルマジンガーパンチが命中をする、だが怪獣は口から光線を放ちマジンガーたちに向かって放つ。

『おっと!!』

『危ない!!』

マジンガーたちは回避をして、ダンクーガたちはノイズたちと戦っていた。

『くそ多すぎる!!』

『ええ!!ブーストノヴァナツクル!!』

飛ばされた拳がノイズたちを貫通をしていくが、次々に現れて彼らはまじかよと思いつつ戦っていた。

『ダイターンザンバー!!』

『この野郎!!』

『多すぎるよ!!』

ダイターンたちは切りかかりノイズを粉砕をしていく、ほかの全員も戦っている中カイザーたちは怪獣にカイザーブレードを構えて突撃をしようとしていた。

『どああああああ!!』

突然上から砲撃を受けて二体は地面に叩きつけられた。

『なんだ!?!どあ!!』

『いきなりなんだぐあ!!』

『皆!!』

マジンガーたちも攻撃を受けて地上に落下をしてダメージを受ける。

『ふっはっはっはっはっは!!』

「誰!!」

クリスたちはギアを構えて敵を見つける、上空で翼をはやした人物が彼らに向かって放たれたあろう武器を持っていた。

『貴様は………何者だ』

『我が名はゼルフィール………』

『ゼルフィール?』

『我はこの世界を支配をするためにお前たちが邪魔と判断させてもらった、さあやれガイストーン!!』

『ぐおおおおおおおお!!』

『『どああああああああ!!』』

足を絡ませていたライガーたちを無理やり力で引つ張り彼らをビルに激突させる。クリスたちも攻撃をするがガイストーンに攻撃が効いていない。カイザー達は巨大化をしようとしたが……ダメージがあり動けない。

『なんだあの攻撃を受けてから体の機器が動きづらい。』

『お前たちは機械の体みたいだから、我がウィルスを使い貴様たちの体を動けなくさせたのだ。さあ暴れるガイストーン!!』

『ぎゃおおおおおおおん!!』

ガイストーンの口から砲撃が放たれてシンフォギア奏者たちを吹き飛ばした。

「「「「「きやああああああああああああああ!!」「「「「「」

彼女たちはダメージを受けて膝をついてしまう、ガイストーンは進行をしようと進んでいく、だがカイザーは立ちあがり巨大化をした。

『させるかああああああああ!!』

ガイストーンの前に立ち蹴りを入れてガイストーンを後ろにこけさせる、彼はすぐに膝をついてしまいガイストーンはその隙を見逃さないで口から砲撃をしてカイザーを吹き飛ばす。

『どああああああああ!!』

『カイザー!!』

『くそ・・・・・・・・こまでなのか・・・・・・・・』

ガイストーンはカイザーにとどめを刺すために手を剣に変えて突撃をしてきた、体がいつものように動けないカイザーは避けることができない。

「カイザーああああああああああああああああ!!」

クリスが叫ぶ、その時!!

『グリッドビィィィム!!』

上空から光線が放たれてガイストーンは吹き飛ばされる、全員が目を開けると光が収まり赤と白の巨人が立っていた。

『巨人？』

『ティア!!』

赤と白の巨人は走りだしてガイストーンは口からビームを放つが彼はかわして空中からの蹴りをくらわせる。

『ぎゃお!!』

ガイストーンは驚きながらも右手の剣を使い攻撃をする、彼は左手についているものから光の刃を出してガイストーンの剣をはじかせていく。

『グリッドライトセイバースラッシュ!!』

彼が放つ斬撃がガイストーンを真つ二つにして爆発させる、彼は上空にいるゼルフィールを見ていた。

『まさか……ガイストーンが敗れるとは……まあいいでしょう今日は挨拶みたいなものですから。ではごきげんよう。』

ゼルフィールはマントを使い撤退をすると巨人は両手から癒しの光を出してカイザー達の体を治していく。

『なんていう光だ、先ほどの痺れがウソのようだ。』

マジンガーたちは巨人を見てみると光が収まっていき一人の青年に変わった。カイザーも元の大きさに戻り話そうとすると。

「優太!!」

カイザー達は声をしたのを見るとシンフォギア奏者たちが走ってきた、響たちも驚いている。

「ええええええええええ!!」

「私もう一人?」

「嘘だろ、あたしがもう一人いるぜ?」

「ええ私の目も翼が二人いるわ。」

「これはいったいどう言うことデース!?!」

「わからない……」

奏者たちは全員が混乱をしていた、優太と呼ばれた青年たちも彼女たちを見て驚いている。

「あたしは二人居る!?!」

「どういうことだ!?!」

「あーわけがわからないよ。」

「私もです!?!」

『とりあえずここは彼らと接触をした方がいいと思う。』

「わかつたよグリッドマン。」

左手についているのから声が聞こえて優太と呼ばれた青年がカイザー達に近づいてきた。

「すみません。」

『ああすまない、全員が混乱をしているからな。とりあえず君達を基地の方へ連れていく。マジングオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

カイザーは巨大化をして全員を手に乗せると空を飛び基地の方へ帰還をする。

新たな会合と二体の超電磁ロボ

カイザー side

俺の手には先ほどの巨人になっていた青年とシンフォギア奏者を乗せて基地の方へと帰還をするために向かっている。グリッドマン……あの姿は間違いなくアニメのグリッドマンだ。

それをまさか生で見れるとは思ってもなかった、さてそろそろ基地の方へ着地をするかな？俺はゆっくりと着地をして彼らを降ろすために膝をつく。彼らが降りたのを確認をして人間サイズになる。

「小さくなった？」

『まあさすがにあの大きさではこの基地に入ることができないからな、俺達は普段は人間サイズで過ごしているからな。』

俺らは基地の司令室の方へと行き、弦十郎たちが待っていた。

「ふーむ、確かに翼にクリス君、響君に奏だな……一応挨拶をしておこう、俺はこのSONGの総司令官をしている風鳴弦十郎だ。」

『俺はマジンカイザーだ。』

「ならこつちも挨拶をしないといけませんね、俺は翔　優太といいます。それと彼は。」
「彼とは？」

『私のことだ。』

俺達は声をした方を見る、モニターに写っていたのは俺達を助けてくれた巨人だ。赤と白のボディをしており先ほどの声は彼が話をしたのだろう。

『お前はいつたい何者だ!!』

『私の名前はグリッドマン、ハイパーエージェントだ。』

「グリッドマン、カイザー達を助けてくださった人ですね？」

クリスが言うと優太という子といたシンフォギア奏者たちは驚いている。

「クリスちゃんガガサツじゃない!？」

「雪音がありえない……」

「お前らがあたしのことどう思っているのかわかった気がするのだが？」

クリスがオーラを纏っているが、やはりあちらでは原作のように進んでいるみたいだ、うちのクリスが声をかけてきた。

「なんか私なのに違うみたい、アリスのような感じかな？」

苦笑いをしているがクリスよ、おそらく俺が助けてなかったらお前がなっていたかもしれないからね。

『さて君達はどうしてこの世界に？』

「それが、フイーネの野望を食い止めた後のことなんです、突然としてアラームがなり俺達は出撃をしたんです。」

「現れたのは私たちが知っているノイズとは違うものです。グリッドマン。」
『わかった。』

グリッドマンが光りだしてモニターに現れたのを見る、彼らが戦っている映像のようだ。だが俺はその敵を見たことがある。

『おいあれって!!』

『……ふーむ、アルカノイズとは違うものか……』

『だがノイズよりも強くないか?』

確かに彼らの力ならノイズは倒せるのに苦戦をしている、グリッドマンが放った光線が命中をして爆発をした。

『やったな優太!!』

『気を付けろ!!』

『グリッドマン?』

彼らは前を見ると爆発をしたノイズの付近から急激に穴が開いて彼らを吸い込もうとしていた。

『なんだありや!!』

『す、吸い込まれる!?!』

『『『『うああああああああああああああああ!!』』』』』

映像が途切れる、そして彼らは俺達の世界へとやってきたわけか。だが穴はいつた
い……………

「あれはギャランホルンが発生をした穴ですね。」

俺達は後ろを振り返るとエルフナインが入ってきた、彼女は研究服を着てファイルを持っている。

「実はマジンカイザーさんたちが戦っている時にギャランホルンが突然アラームが鳴りだしたんです、そこから光が発生をしてグリッドマンたちが現れました。」

『なるほどな、エルフナイン……………ギャランホルンが起動したのはそれだけか?』

「はい、グリッドマンさんたちが来てからは反応は一度も起こしていません。」

（ということは、彼らと呼ばれたのはこちらの世界で何かがあったということになる、その原因がカルマノイズだとしたら……………俺達の前に現れたあの敵はいつたい。）

俺は考えることにした。

カイザー side 終了

一方で別の場所では、ゼルフィールは何かをしていた。

「さてできたな、コマゴロン。その名の通り駒の形をしているが回転をすると強力な一撃を放つコマスピンを放つ。そういえば巨大怪獣『フタゴロン』たちが帰ってこないな。なにがあった？」

そのフタゴロンは戦っていた。二体の超電磁ロボと。

『超電磁ヨーヨー!!』

放たれたヨーヨーがフタゴロンの一体、レッドゴロンに命中をする。

『ぎゃおおおおおおおおおお!!』

『超電磁ストリングス!!』

鞭をふるいフタゴロンの一体、ブラックゴロンに攻撃をしている。

『へ!!大したことないな!!』

『油断をするなよ?』

『わかってらー!!これで決めるぜ!!超電磁タツマキ!!』

『天空剣!!』

コンバトラーが放った超電磁タツマキがフタゴロンに命中をしてボルテスは空中に飛ぶ。

『とあ!!』

『超電磁スピーン!!』

コンバトラーはその場で回転をして超電磁スピンを放つ。

『天空剣Vの字切り!!』

先にボルテスが天空剣Vの字切りでフタゴロンを切り裂いて超電磁スピんで貫かせる。

『ぎやおおおおおおおおおお!!』

二体は爆発を起こしてボルテスたちは着地をした。

『見たか!!ダブル超電磁ロボの力をな!!』

『ふーむ。』

『どうしたボルテス?』

『いや、こいつらの体をよく見てくれ。』

コンバトラーはボルテスに言われた通り体のアッチコッチを見ていた。

『なんじゃこりや!?!機械なのかこれ。』

『いや機械だが俺たちが知っているものとは違うみたいだ。しかもかなりの高度な技術が使われている。』

『つてことはよ、俺達が戦ってきた敵よりも高度な技術を使っているってことか?』

『そういうことになる。』

『ひゃああああ恐ろしいな。でどうする?』

『とりあえずは日本へ向かおう、ここがどこかわからないしな。』

二体の超電磁ロボは空を飛び日本の方へと向かうのであった。

さて日本では優太はシュミレーション室に立っていた。その相手はマジンカイザーが立っている。

『君の力を見せてもらえないだろうか？』

「わかりました。いくよグリッドマン!!」

『ああ、行こう優太。』

優太は左手のプライマルアクセプターを構える。

「アクセスフラッシュ!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

光が包み込まれて中からグリッドマンが現れる。カイザーも彼が現れたのを見て構える。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

お互いに構えながら一気に駆け寄り右手をお互いに繰り出した。

ばき!!という音がシュミレーション室に広がり、グリッドマンは蹴りを入れてカイザーのボディに命中をする。

『いい蹴りをしている、だが超合金ニューZαには効かないな、お返しをさせてもらうターボスマツシャーパンチ!!』

両手のエッジが回転をして腕下部がグリッドマンめがけて放たれる。

『グリッドマン!!』

『ああわかつているさとう!!』

彼は上空へ回避をしてターボスマツシャーパンチを回避をしてマジンカイザーに向かつて走りだす。

『であああああああああああああ!!』

『甘い!!』

『が!!』

後ろから衝撃を受けた、それは先ほどかわしたターボスマツシャーパンチが戻ってきてグリッドマンの背中に命中をした。

彼の両手が戻り、グリッドマンは態勢と立て直した。

『光子カビーム!!』

カイザーの両目が光りだして光子力のエネルギーを変換させたビームを放ってきた、グリッドマンは回避をして左手のプライマルアクセプターから光の刃が発生をした。

『グリッドライトセイバースラッシュユ!!』

『でろおおおおお!!カイザーブレード!!』

胸部のファイナルカイザーブレードを出してグリッドマンが放つ斬撃を受け止める。外ではシミュレーションの様子を全員が見ていた。

「グリッドマンってヒーローやるじゃねーか。」

「ええ………」

「なあ。」

「なに?」

異世界のクリスはカイザー側のクリスとアリスに声をかけてきた。

「あーなんというか、あたしも人のこと言えないけどよ似すぎてないか?」

「まあしょうがねーだろ、あたしはクリスのクローンだから。」

「な!!」

「え!?!」

「嘘だろ!!」

「嘘じゃねーよ、あたしはフィーネに生み出された雪音。クリスのクローンだ。今は雪音アリスと名乗ってパパやママたちと一緒に暮らしてる。」

「パパとママだと!!」

異世界のクリスは目を見開いていた、彼女の言葉からパパとママという言葉に。

「私はパパやママと一緒にカイザーに助けてもらったの……兵士たちがパパたちを殺そうとしたとき空からカイザーがやってきて私たちを助けてくれた。」

「……そうかよ。」

クリスはモニターの方を見るので二人も同じようにシュミレーションの方を見る、グリッドマンが放った超電導キックがカイザーのボディに命中をして彼は後ろの方へ後退をしていた。

だがグリッドマンの頭部のランプが光り出した。

『なるほど、活動時間があるわけか……ならば次の技でけりをつけよう!!』

カイザーは胸部の放熱板が光りだして光子力エネルギーが集まっていく、色が白くなっているグリッドマンも左手のプライマルアクセプターにエネルギーを集めていた。

『ファイヤーブラスタアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『グリッドビイイイイイム!!』

ファイヤーブラスタとグリッドビームが互いに命中をして衝撃が襲い掛かり二人は吹き飛ばされる、カイザーとグリッドマンは壁に激突をしてシュミレーションが終了をする。

グリッドマンの方は優太に戻り、カイザー自身もダメージを受けておりマジエンペラーたちが駆け寄る。

『大丈夫か？』

『ああ、彼の力は強いぞ。』

カイザーは手を貸してもらい起き上がる。

「さすが魔神皇帝だ、強いな。」

話していると警報が鳴りだした、司令室の方へと向かい集合をした。

「来てくれたか、実はノイズとはまた別の反応が発生をしている、至急現場へと向かってほしい。」

『『『『了解!!』』』』』

ジエネシツクガオガイガーの秘策

カイザーたちは全員で出撃をしていた、優太たちはカイザーが手に乗せて出動をしている、彼はジャンクと呼ばれるものが必要なのだがこの世界にはジャンクがないため現場に行き変身をしないといけない。

『なんというか不便だな?』

「仕方がないですよそれは、この世界にジャンクがないのはきついですけどね?」
『そうか。』

カイザーは話を終えて地上の方へと降りていく、彼らが見たものは何かが回転をして街を壊している。

「街が!!」

『優太!!』

「行こうグリッドマン!!」

優太は左手のプライマルアクセプターを構える。

「アクセスフラッシュ!!」

光が発生をしてその中からグリッドマンが現れる、カイザー達は空を飛びまわって

る相手を止めるために行動を開始をする。

『いくぞ!!』

カイザーは突進をして回転をしている敵に命中をするが……

『どあ!!』

カイザーが力負けをして吹き飛ばされる。エンペラーとグレードはマジンガーブレードなどを構える。

『でああああああああああ!!』

二人の斬撃は回転ではじかれる、ダンクーガたちも砲撃をするがコマ型の回転が彼らが放つ砲撃をそらしていく。

「なんて奴だ!!」

「あの回転を止めなければ被害がさらに広がってしまう!!」

「どうやって止めるのですか!!」

ジェネシックガオガイガーは考えていた、どうしたら街の被害を食い止めることができるのか……だがすぐに思いついた!!

『そうだ!!ガチエツトツール!!』

ガジェットガオの頭部部分などが分離をして彼の左手に装着される。

『ボルテイツグドライブ!!プロテクトボルト!!』

彼は地面に突き刺すとフィールドが発生をして地面が陥没をするが街は何かのフィールドに守られたかのようになっていた。

「これは!!」

『しばらくは街の被害を抑えることができる!!』

ポルティッグドライバーを戻して全員が構える。相手は回転を止めて姿を現した。

「コマ?」

奏が言う通りに相手はコマの姿をしていた、コマゴローンは彼らを見てミサイルを放ってきた。

『であ!!』

『おっと!!』

カイザー達は回避をしてクリスは小型のミサイルを放ちコマゴローンに放つ。

『ネーブルミサイル!!』

『ゴッドミサイル!!』

『ミサイルパンチ!!』

『『ライガーマサイル!!』』

ミサイルを持つ戦士たちの攻撃がコマゴローンに向かって放たれる。

『ぐおおおおおおおおおおおお!!』

コマゴローンは回転をしてグレートたちが放ったネーブルミサイルをふさいだ。グリッドマンとカイザーは同時に攻撃をするために接近をするが……コマゴローンはさらに回転を始めて竜巻を発生させた。

『なに!?!』

真ドラゴンはゲッタービームを放つが……竜巻に吸収されてしまう。ほかの全員も攻撃をするがコマゴローンの竜巻を止めることができない。

「こうなったらファイナルアタックを。」

『駄目だ!!それでは響が危険すぎる!!』

『うおおおおおおおおお!!』

ジェネシックスガオガイガーは竜巻の中へ突撃をする。ウィルナイフを構えてコマゴローンのボディを切りつける。

『ぎゃぎゃ!!』

コマゴローンは竜巻を止めてジェネシックスガオガイガーに蹴りを入れる。

『どあ!!』

『させん!!』

コマゴローンはジェネシックスガオガイガーに追撃をするために攻撃をするがグリッドマンが蹴りを入れてコマゴローンを転がせる。

『光子カビーム!!』

カイザーが放った光子カビームがコマゴローンに命中をする、だが光子カビームを受けてもコマゴローンは立ちあがる。

「カイザーの攻撃が効いてない!？」

「嘘だろ!!」

『ならば!!グリッドビィィィム!!』

グリッドマンのビームが同時に放たれてコマゴローンに命中をして爆発をする。ポルティッドドライバーの効力が切れて街が戻る。

残骸などが残っているため彼らは調べようとしたとき砲撃が飛んできた。

『どあ!!』

『ぐあ!!』

「カイザー!!」

「優太さん!!」

『誰だ!!』

緑色の機体たちがカイザーたちに攻撃をしたことがわかる、数は多くて槍を構えている。た。

『へ!!そんなので俺たちを攻撃をしたってことかよ!!くらいやがれ!!プレストファイ

『ゲッタービーム!!』

『ゲッターサイクロン!!』

次々に技を放ち撃破していくが……

『まだいるのか!!ハンドビーム!!』

『ギガントミサイル!!』

相手の数にカイザー達も苦戦をしている、グリッドマンもグリッドライトセイバースラッシュを使い切っていくが頭部のランプが鳴りだした。

『どあ!!』

『グリッドマン!!が!!』

『ブロウクンマグナム!!』

ジェネシックガオガイガーが放つブロウクンマグナムが貫通をしていき爆発する、だが彼はあきらめたりしていない。

『勇気がある限り!!俺は戦い続ける!!』

『つたく俺達もまだまだ踏ん張るぞ!!』

『その通りじゃ!!若いものよ!!』

「え?」

全員がどこから声が発生をしているのか探している。

『最後まであきらめないでよく戦った!!』

『あとは俺達が引きうけるぞ!!』

『とう!!』

一体の機体が上から降りてきた、蹴りを嘯ましながら。

『エルドラカタラータ!!』

飛び蹴りが命中をしてロボットたちに命中をして着地をした。

「ロボットさん？」

「また新しいロボット?」

『俺達はエルドラソウル!!正義に生まれ、正義に生きてきたロボットさ』

エルドラソウルと名乗った機体に敵が襲い掛かってきた、一体の機体が槍をエルドラソウルに向かって放つが彼はそれをキャッチをして投げ飛ばす。

『グランドサイクロン!!』

敵を巻き込みながら次々に撃破していき投げ飛ばして左手の盾が展開される。

『これはただの盾じゃないぜ?エルドラブロックシユート!!』

左手のエルドラブロックを投げつけて切り裂いていく、カイザー達も彼を見て奮闘をする。

『優太まだいけるな?』

(ああグリッドマン!!)

『いくぞ!!グリッドビィィィィム!!』

『ファイヤーブラスタター!!』

『エンペラーブラスタター!!』

『ゲッタービィィィィム!!』

四人の合体攻撃が命中をして敵を撃破していく、エルドラソウルも決めるために構える。

『一気にいくぞ!!エルドラファイト!!ゴー!!ア・ミーゴ!!』

エルドラソウルは金ぴかになりそのまま弾丸のように突撃をしていく、敵を次々に撃破していくそのまま一体を上空へ殴りつける。

『俺達が勇者だ!!』

その後ろで光が発生をして敵が爆発をした、全員がその爆発を見る。

『すげーな。』

『ああ………』

全員が唾然としていると敵は撤退をしてエルドラソウルが振り返る。

『大丈夫かお主ら。』

『助かりました、あなたは?』

『わしらはエルドラソウル!!』

『勇者じやな。』

『そうだな。』

一機体に三人の声が聞こえてきたので全員がどこに副音声があるだろうと探すぐら
いだ。グリッドマンはフィクサービームを放ちカイザー達の傷を治してから優太の姿
に戻る。

『この傷を治す光線は便利だな、疲れなどが治っていくよ。』

ザンポットたちはグリッドマンが放ったフィクサービームを受けて回復をしている
のを見て言葉を言う。

一方でゼルフィールはコマゴローンが破壊されたのを見ていた。

『ふむコマゴローンが破壊されるとは、仕方がない次のを送るとしましょう。』

ゼルフィールは新しい機体を作るために工房の方へと向かうのであった。

分断作戦

ここはゼルフィールがいる工場、彼は三体の機体を完成させた。今回は三体一気に投入をするために彼は作りだした。

『完成をしました、一体は獅子型のロボット『ライオネシス』もう一体は鳥型の『バードロン』そして最後は人型ロボット『パネシス』さて起動をして日本へ飛びなさい!!』

『ぎやおおおおおおお!!』

『びええええええええええん!!』

『うおおおおおおお!!』

三体は起動をしてそのまま空を飛びたち日本へと向かうのであった。

一方でSONG基地では新たな仲間エルドラソウルを加えていたが……

『いやーお酒がうめー……!!』

なんでか知らないがお酒を飲んでおりカイザー達も苦笑いをしていた、すると近くにいたザンボットやトライダー、さらにはレイアースたちを巻き込んでお酒を飲ませていた。

『なんだこれは!!』

『上手い!!』

『これがお酒というものなのか?』

レイアースたちは気にいったのかお酒を飲んでいるが、ザンボットとトライダーは一杯飲んだだけで顔を真っ赤にして倒れていた。乗っている人物が子供だけあつておそらく酔っぱらってしまったのだろう。

カイザー達は苦笑いをしながらその様子を見てみると、ジェネシックガオガイガーもなんでかつかまっていた。

『いやあの……』

『お前も勇者なら飲めるだろ?』

『じゃあ一杯だけ。』

『おい後輩!!勝負をしようじゃねーか!!』

『いいわよ先輩!!』

ダンクローガたちもお酒を飲んでおりてか見たらカイザーやエンペラー、ダイターン。真ゲッター以外が飲まされていたのだ。

ブラックドラゴンはセレナと一緒にいるため無事だったといわれている。だが彼らがお酒を飲んでいると出撃警報が鳴りだした。

『まじかよ!!お前から出撃……できないか……』

ライオネキスは彼らを睨んでいた、クリスが先手必勝と小型ミサイルを展開をしてライオネキスに放った。

『ぎやおおおおおおおおお!!』

ライオネキスは素早い動きでミサイルを回避をしていた、クリスは驚いている。

『ぐおおおおおおお!!』

『ギガントミサイル!!』

カイザーが放ったギガントミサイルが命中をしてライオネキスが吹き飛ばされるが、すぐに態勢を立て直して口から砲撃をしてきた。

『なに!? スパークビーム!!』

『させん!!』

翼の蒼ノ一閃が激突をして砲撃を相殺をした。エンペラーは接近をしてエンペラーブレードを構えてライオネキスに攻撃をする。

奏も同時に槍を構えて二人が一気にライオネキスに追撃をするが、ライオネキスは口で二人の武器を加えた。

『!!』

「だああああああああ!!」

そこに響が走っていきライオネキスの頭部に蹴りを入れて二人の武器を加えていた

口を離して二人は後ろへ下がる。

「どうするんだカイザー!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

一方で真ゲッターとダイターンの方には旧二課の全員がついていた。

真ゲッターとダイターンが空を飛び四人が地面を走っている。

『あれのようだな?』

『びええええええええええん!!』

バーゴロンは口から弾を飛ばしてきた、ダイターンが前に立ちダイターンファンを振り回して弾をはじかせていく。

『くらいやがれ!!ゲッターブラストキャノン!!』

右手に銃が発生をして真ゲッターはトリガーを引いて弾を放ちバーゴロンへ攻撃をする。

響はバイパーウィップを出して振り回してバーゴロン経攻撃をする。

『びえええええええええん!!』

バーゴロンは回避をして翼を大きく羽ばたいて竜巻を発生させて六人に攻撃をくる。

『ちい!!ゲッタービーム!!』

「当たって!!」

クリスは大型ミサイルを作り、真ゲッターが放ったゲッタービームに命中をして竜巻を相殺をした。

「はあああああああああああ!!」

ツヴァイウイングの二人がクリスが予備で作っていたミサイルに乗りバーゴロンの翼に穴を開けて地面に叩きつける。

一方でブラックドラゴンとライディーンはFISメンバーと一緒に移動をしていた。

『さて。』

「ブラッククさん？」

セレナたちは突然ブラックドラゴンが止まったことに驚いている。彼はライディーンに指をさした方向に攻撃をするように指示を出す。

『あつちだな?よしゴッドゴーガン!!』

ゴッドゴーガンが放たれる、ガキンという音が聞こえて全員がその方向を見る、ライフルを構えていた人型ロボット『パネシス』だ。

ゴッドゴーガンによってライフルを壊された彼はブラックドラゴンたちの前に現れて着地をして別の武器を出して攻撃をしてきた。

『ちい!!』

ブラックドラゴンはライガーモードへとモーフィングをしてドリルアームを構えて

突撃をする。

『ドリルアーム!!』

「はああああああああああああ!!」

「えええい!!」

マリアとセレナも同時に走りだしてパネシスに攻撃をする。彼は回避をする。

『ゴッドブローメラン!!』

「くらうデース!!」

「せい!!」

調は鋸を飛ばして切歌は鎌をブローメランとして投げつけてライディーンはゴッドブローメランを放ちパネシスに命中をする。

『.....』

パメシスはおられたライフルを捨てて腰から拳銃を出してそれを発砲をしてきた。

『ゴッドブロック!!』

ライディーンがゴッドブロックを展開をしてパネシスが放つ弾丸をガードをして調はギアから巨大な鋸を出してパネシスの持っている拳銃を切り裂いた。

『!!』

『ゲッターサイクロン!!』

ポセイドンモードへと変わりゲッターサイクロンを放ちパネシスを吹き飛ばす。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

パネシスは吹き飛ばされたが、着地をして立っていた。

一方で別で戦っているライオネキスとバーゴロンもとまりぴかぴかと光りだした。

『なんだ？』

『わからん!!』

すると三体が光りだして空の方へと向かっていく、彼らはその場所へと向かい走っていく。その場所では全員が合流をした。

『一体何をやる気だ!!』

するとライオネキスとバーゴロンが分離をしてパネキスに合体をしていく。ライオネキスが両足部に左肩に、バーゴロンが背中の翼両手の装甲に胸部と右肩に合体をした。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

合体をしたパネキスは持っている剣を振り下ろして全員に襲い掛かる。

『おっと!!』

『スパークビーム!!』

グリッドマンが放つスパークビームが命中をする。アリスはネフシユタンギアへと

変えてギアから砲身が現れて砲撃を開始する。

セレナとマリアもアガートラムの左手装甲を展開させて砲撃を放つ。

シールドを構えてガードをした。

『その盾を粉砕をする!!ターボスマツシャーパンチ!!』

『グレートスマツシャーパンチ!!』

二人の魔神皇帝が放ったダブルマジンガーパンチが合体パネシスの盾を粉砕をして後ろに倒させる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

だが倒れても合体パネシスは起き上がり槍を振り回していると。ロケットパンチが飛んできた。

『今のは!?!』

『ファイブシューター!!』

五つの飾りを投げつけて爆発させる。3体の機体が着地をする。

一体は違うがもう2体が同じ機体だが姿が違う。

『さて行くぞ後輩!!』

『おうよ先輩!!』

『ダイモスとダブルガイキングの力を見せるとするぜ!!』

3体は一気に向かい。パネキスは攻撃をするが……

『あちよおおおおおおお!!』

ダイモスの蹴りが槍を粉碎をして胴体に蹴りを入れる。

『くらえ!!カウンスタークロス!!』

『こつちもカウンスタークロス!!』

二人のガイキングが投げつけたカウンスタークロスが命中をしてパネキスのボディにダメージを与えていく。

『これで終わりだ!!ダブルブリザード!!』

ダイモスの胸部が開いて冷たい風がパネキスのボディに命中をする。

『今だ!!』

『わかった!!優太!!』

(うんグリッドマン!!)

『グリッドビイイイム!!』

『こいつで終わりだ!!ファイヤーブラスタター!!』

『くらえ!!グレートブラスタター!!』

『ストナーサンシャイン!!』

『ゲッタービイイイム!!』

『日輪の力を借りて今必殺の!!サンアタック!!』

『ゴッドアルファアラアアイ!!』

『くらえ!!』

『俺達の必殺!!』

『ダブルハイドロブレイザー!!』

巨人たちが放つ一斉攻撃が命中をして合体パネキスは爆発をする。

『やったぜ!!』

『ああ!!』

『あれ?俺達もしかして……』

『完全に遅れてしまったみたいだな。』

そこにコンバトラーVとボルテスVが到着をした、彼らも日本へと向かっていたが到着をしたのが先ほどののだ。二人は苦笑いをして合流をする。

ゼルフィールの新たな仲間

どこかにある次元、一体の巨人が目を閉じていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

彼は眠り続けていたが、突然としてその光を灯す。あたりを見て彼はその力の元へと飛んで行く。

『感ジル、俺以外ノマジンガーノ存在ヲ。』

背中ofスクランダーを変化させて彼は飛び立つ。その感じた力の元へと行くために。そんなことを知らないカイザー達の基地では？新たな仲間コンバトラーたちを迎えていた。

エルドラソウルによって出動できなかったメンバーたちも回復をして復活をしていった。カイザーは様子を見ながらここも多くなつたなど思っていた。

「どうしたのカイザー？」

『クリスか、なーにここも増えてきたなど思つてな、最初のロボットは俺だけだったのか今じゃこんなにたくさん増えているんだ。驚くばかりだ。』

「それは私も思ったよ、カイザー以外にもロボットがこんなにいるのを初めてしつたか

らね。」

『そうだな。』

カイザーは前の方を向いていたが、何か嫌な予感をしていた。胸部のZと書かれている宝玉が光っている気がして胸部を抑えている。

「カイザー？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

一方でゼルフィールたちがいる場所では新たな敵が四人が膝をついていた。

「待っていたぞ、サタラガス、ウラノスリ、プルートルス、ネプキュリアよ。」

「ははゼルフィールさま。」

「我ら四天王只今到着をいたしました。」

「ゼルフィールさまの邪魔をするシンフォギア奏者たちを倒してごらんにいれます。」

「では早速。」

「さて、お前たち幹部を出すわけにはいかない、お前たちの怪獣たちを向かわせたらどうだ？」

「そう思い、すでに我がサタガラス怪獣を向かわせました。」

「ほう。」

ゼルフィールは笑っていた量産型としてゲッター軍団も送つてるとも言った。サタ

ガラスはお礼を言いほかの三人も怪獣を作るために去っていく。

SONG基地に警報が鳴りだした、全員が敵が来たという連絡を受けて出撃をする。

『よしエルドラソウルGO!!』

エルドラソウルたちは出撃をして敵を倒す為に空を飛んで行く、優太もグリッドマンへと変身をしてシンフォギア奏者たちも出動をする。

『あれのようだな? ビックブラスト!!』

『ボルテスバズーカ!!』

コンバトラーとボルテスの先手の攻撃が量産型ゲッターに命中をして破壊する、戦闘が始まる。

『くらえ!! アイアンカッター!!』

マジンガーZの両手が飛び超合金の刃が発生をして量産型を切っていく。グレートとグレンダイザーはマジンガーブレードとダブルハーケンで次々に切っていく。

『よしお前ら!! トマホークブーメランだ!!』

ゲッタードラゴン、真ゲッター、真ドラゴン、ブラックドラゴンの四人はトマホークを投げて量産型を切っていく。

『おらああああああ!!』

ファイナルダンクーガは拳で量産型ゲッターの頭部を殴り飛ばしてダイガンを装備

をして撃ち撃破する。

『ミサイルデトネイター!!』

ダンクーガノヴァマックスゴッドはミサイルを放ち撃破する。ライダーンはゴツドアローを放ち撃破していき、その後ろを魔神達が剣で切っていく。

『何かが来る?』

全員がその方向を見ると怪獣が現れた。

『ぎゃおおおおおおおおお!!』

『ここは私に任せろ!! デュア!!』

グリッドマンがサタラガスが用意をした怪獣『グラビロン』と戦おうとしている。

『うおおおおお!! スパイナルドリル!!』

右側のドリルを量産型ゲッターに当ててからすぐに蹴りを入れてブロウクンマグナムで次々に貫通させていく。そのまま接近をしてもう一体に左側のドリルを放つ。

『ストレイトドリル!!』

左側のドリルが回転をしてそのまま撃破していく。

『ダイターンザンバー二段切り!!』

『ザンボットカッター十文字切り!!』

『トライダーセイバー!!』

三体の巨人が量産型を次々に切っていく中、ほかのシンフォギア奏者たちも戦っている。

『ぐおおおおおおおお!!』

『は!!』

グラビロンの攻撃をかわして蹴りを入れるグリッドマン、カイザー達も参戦をするためにグラビロンのところへと向かう。

『カイザー!!何かが来るぞ!!』

『なに!?!』

エンペラーの声にカイザーは後ろに下がり上空の穴が開いていく、全員がその上を見ていた。

『なんだよあれは!!』

『マジンガー?』

『だが見たことがないぞ。』

『.....』

量産型ゲッターたちは相手を謎のマジンガーの元へ行き攻撃をしようとしたとき、両目が光りだす。

『邪魔ダ。サザンクロスナイフ』

突然として周りにサザンクロスナイフが発生をして囲んでいた量産型ゲッターたちに命中をして爆発させる。

『なんて力をしている!!』

『ぐおおおおおおおおお!!』

グラビロンはグリッドマンを相手にせずに謎のマジンガーに攻撃をする、グラビロンは両手を伸ばして謎のマジンガーに体を絡ませていく。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『ぐるるるるるるる・・・・・・・・』

『フン!!』

謎のマジンガーはその力でグラビロンの両手を引きちぎった、彼は右手を前に構えると刃が一体化をする。

『アイアンカッター。』

巨大なアイアンカッターが飛びグラビロンの体を一撃で粉碎をした。くらったグラビロンの体は爆発をして全員が謎のマジンガーの力が強いことを判明をした。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

謎のマジンガーは今度はアイアンカッターを構えていた、その目標はマジンカイザーだ。

『なに?』

左手のアイアンカッターが飛ばされてカイザーはファイナルカイザーブレードを出してアイアンカッターをはじかせようと力を踏ん張らせる。

(なんて力をしてやがる!!だが!!)『マジンパワーああああああああああ!!』

マジンパワーを発動させてアイアンカッターをはじかせる。

『ヤハリ貴様達力、我ヲ呼び寄せタノハ。』

『呼び寄せた?』

『おうおうてめえは何者だ!!』

『………我はマジンガーZERO!!』

『『『マジンガーZERO?』』』』

マジンガーZEROと呼ばれたマジンガーは大きさをカイザー達に合わせた、カイザー自身は先ほどのアイアンカッターを返した際のしびれがあるのかファイナルカイザーブレードを落としていた。

(なんて威力をしてやがる、マジンパワーでなんとか跳ね返したが大きさを変えるのを忘れていた。)

グリッドマンも優太の姿に戻り、全員が駆け寄ってきた。一方でゼルフィールのいる基地。

「我がグラビゴンが……」

「ふーむマジンガーZEROか……」

ゼルフィールは両手を組んで新たな敵だと考えることにした。一方である場所にて。

『どああああああああ!! いて!!』

『ここはいつたい?』

『わかりません。』

三体の機体は起き上がり辺りを見ている。

『地球みたいだな。』

『ああ……ん?』

『どうしたのですか?』

『におうぜ?』

『におう?』

一機は自分の体をおいをかいていたが一機がツツコミを入れる。

『お前らじゃねーよ、向こうの方角から強い力がおうつてことだ。』

『向こうの方か……』

三体の機体はその方角を見て自身の体のチェックをしている。

『ソルグラヴィオンの状態は大丈夫だ。そちらは?』

『アクエリオン問題ないぜ？』

『ガンバスターの方も大丈夫です!!』

『よっしゃ!!行こうぜ!!』

アクエリオンは背中の翼を開いてソルグラヴィオンたちもアクエリオンがおったという方角の方へと飛んで行くのであった。

グリッドマン最大の危機

カイザー side

俺達は新たな仲間？でいいのか、マジンガーZ ZEROと名乗った戦士を連れて戻ってきた、姿的にはマジンガーZに似ているが彼とは違い腕の刃などが出ておりマジンガーたちも警戒をするぐらいに強いそうだ。

俺は現在はジェネシックスたちと話をしており新たに仲間になったコンバトラーたちを含めてチームを作ろうってことになった。

現在スーパードロボットの数は多い、そこで各リーダーを作りメンバーを分けることにした。

まずはカイザーチームは俺マジンカイザーを筆頭にマジンエンペラーG、真ゲッター、真ドラゴン、ブラックドラゴン、マジンガーZEROというチームだ。

次にダイターンを筆頭にザンボット、トライダー、ライデイン、ジェネシックスガオガイガー、エルドラソウルだ。

マジンガーZを筆頭にグレートマジンガー。ゲッタードラゴン、グレンダイザー、レイアース、セレス、ウインダムメンバーだ。

次はガイキングを筆頭に新ガイキング、コンバトラー、ボルテス、ダイモス、ダンクーガとダンクーガノヴァだ。

こうやって出撃をするメンバーを決めておいて俺達は準備をしていると警報が鳴り出した。

全員で司令室へ行く、弦十郎が言葉を言うのを待つのであった。

「来たか、再びノイズ反応と謎の怪獣反応が出ている、今回はシンフォギア奏者たちにカイザーチームとダイターンチームに出てもらう。」

『ちえ!!俺達は留守番か。』

『悪いな、いくぞ!!』

カイザーチームとダイターンチームは出撃準備をして俺達は発進をして敵が暴れている場所へと向かうことにした。

カイザー side 終了

優太はグリッドマンへと変身をしてカイザー達と一緒に出撃をして敵の姿を発見させる。

「来たみたいだよウラノスリ!!」

「ああ待っていたぞ戦士たちよ!!」

『お前たちは何者だ!!』

「我はゼルフィールさまの幹部、ウラノスリ!!」

「同じくプルートスルス!! お前たちを待っていたぞ。」

『我々を待っていた?』

「どういうことですか!!」

「スイツチオン!!」

プルートスルスがスイッチを押すと突然としてカイザーとグリッドマンの後ろに穴が発生をした。

『なに!?!』

「私たちが狙っていたのはカイザーとグリッドマン、あなたたちですよ……その中には私たちが共同で作りだした怪獣が待っておりますよ。」

「さーて行つてらっしゃい。」

ウラノスリが放つ光弾を足に受けて二体は穴の中へ吸い込まれてしまう。

『カイザーは俺が倒す!! ほかの奴らには手を出させん!!』

ブラックドラゴンが穴が閉じる前に飛びだして穴の中へと突入をする。アリスとクリスはカイザーにアンカーを飛ばして二人も一緒に飛び込んだ。

「アリス!! クリス!!」

『カイザー!!』

「あらあら、余計なものたちまで入ってしまったか。まあいい我らの目的は達したからな撤退をするよ。」

「了解、また会いましょう？ 戦士たち。」

ウラノスリたちは撤退をしていき、残されたエンペラーたちは吸い込まれたカイザー達を心配をするしかなかった。

一方でカイザーたちは穴に吸い込まれて地面に着地をした、さらに上からクリスとアリス、ブラックドラゴンが現れる。

『お前たちも吸い込まれたのか？』

「あたしの場合カイザーの体にアンカーを飛ばしてついてきたんだけどな。」

「ここはどこなんでしょうか？」

『わからない、ただわかっているのはここが我々が知っている場所とは違うってことだけだ。来るぞ!!』

グリッドマンの声に反応をして全員が避けると上空の方に人型が立っていた。敵は武器を構えておりグリッドマンたちも上空の方にいる敵を見ている。

『いくぞブラック!!』

『おう!!』

カイザーとブラックドラゴンは空中に飛び人型は持っている銃を放ってきた、カイ

『グリッドマン、カイザースクランダーを使い!!』

(グリッドマン!!)

『ああ!!』

カイザーの指示を受けてグリッドマンは走りだすとカイザースクランダーが変形を初めてグリッドマンの背中に装着をする。

『カイザーグリッドマン!!』

カイザースクランダーを装着をしてグリッドマンは空を飛ぶ、人型ロボット『アイアロクス』はカイザーグリッドマンを攻撃をするために銃を放つ、グリッドマンは素早い動きで回避をして蹴りを入れて銃を落とす。

「おら!!」

アリスは電王ロッドモード状態になりデンガツシャーロッドモードでイノシシ型ロボットの『イノセクロン』の体に巻き付ける。

『フィンガーネット!!』

便乗をするためにブラックポセイドンもフィンガーネットを使い動きを止めている、クリスが放った大型ミサイルと小型ミサイルがイノセクロンに命中をしてクリスは後ろを振り返る。

「カイザー止めは任せます!!」

『ああ!!受けてみる!!ファイヤーブラスター!!』

カイザーの胸部の放熱板から強烈な熱が放射されてイノセクロンのボディを溶けていき爆発する。空中でもカイザーグリッドマンはアイアロクスの攻撃をかわしてカイザースクランダーを使い接近をしている。

『くらえ!!スクランダーカッター!!』

グリッドマンは突撃をしてスクランダーカッターがアイアロクスの胴体に命中をして切り裂いて上半身と下半身が別れる、振り返りグリッドマンは必殺光線を放つ。

『グリッドビィィィム!!』

グリッドビームがアイアロクスの上半身と下半身に命中をして爆発を起こして、グリッドマンの頭部のランプが点滅を始めた。

彼は着地をしてカイザースクランダーをカイザーに返す。

「しかしよ、どうするんだ?」

アリスの言う通り敵は倒したが時空を超えることができないのだ、カイザー達が考えていると時空をこじ開けようとしているのがいた。

『なんだ!?!』

『うおおおおおおおおお!!ギャレオリアロード!!』

その正体はジエネシツクガオガイガーが使ったギャレオリアロードと呼ばれるガ

ジエツトツールなのだ、時空をこじ開けてカイザー達を救うためにジエネシツクガオガイガーが使った技なのだ。

『ガオガイガー!!』

『さあはやく!!脱出をするぞ!!』

『『おう!!』』

ジエネシツクガオガイガーの後をついていくようにカイザーたちは走りだす。ギャレオリアロードを再び使用してこちらの世界の扉を開いてジエネシツクガオガイガーたちは帰還をした。

「カイザーさん!!」

「優太!!無事だったか!!」

グリッドマンは光が収まると優太の姿に戻る。彼は疲れたのは倒れかかったがエンペラーたちがすぐに駆けつけてキヤッチをする。

「か、体が疲れて……. どうしてでしょうか?」

『あーおそらくカイザースクランダーを装着をしたからじゃないかな、グリッドマン。』
『おそらくそうだろうな、スクランダーのパワーでも俺の光子力エネルギーを帯びているからな、グリッドマンが耐えたのも光子力エネルギーを体に纏わせていたからだろうな、けどそれは優太の体の疲れを一気に出してしまうほどだな。』

カイザーは両手を組み優太が倒れた原因を話す。一方でソルグラヴィオンたちは？
『『『疲れたから休憩』』』

日本に到着まで時間がかかるみたいだ。

同時攻撃!!

ジエネシツクガオガイガーの協力でなんとか次元から脱出をしたカイザーとグリッドマンたち。一方でネプキュリアは二体の怪獣を作っていた。

「ウラノスリたちも馬鹿ね、奴らの基地に攻撃をしてみまえばいいのにね。ふふふまずは一体は奴らを引き付ける罠。そしてもう一体はふふふふふふふふ。」

ネプキュリアは笑いながら二体の怪獣たちを見ながら作戦を始めるために起動させる。

「電磁人「ウイルギア」そして囹怪獣「サギューパスシア」さーていきなさい!!」
『ぐおおおおおおおおお!!』

二体は転送されてサギューパスシアは囹になるために街の中に出現をした。SON G基地でも反応が示されており弦十郎は指示を出す。

「ガイキングチームとシンフォギア奏者たちは出撃をしてくれ!!」
『わかった!!いくぞ!!』

ガイキングたちはシンフォギア奏者たちと共に出撃をするが、優太は嫌な予感がして待機をしていた。カイザー達は前に出撃したので待機となった。全員がモニターの方

を見てサギューパスシアを見ていた。

ガイキングチームとシンフォギアチームは到着をした。

『これ以上街に被害をもらたすわけにはいかない!!くらえ!!カウンターパーンチ!!』

ガイキングの剛腕が飛びサギューパスシアに命中をして全員が戦闘態勢を撮っている。

『いくぞ!!ファイブシューター!!』

『ダイガンマキシマムシュート!!』

『ミサイルデトネイター!!』

『いくぜいくぜいくぜ!!』

『バーン!!』

五人が放つ射撃武器が命中をしてサギューパスシアは長い首を振り回して攻撃をしてきた、新ガイキングは回避をしてカウンタークロスで突き刺して響はドラゴンフレアを装着をしてドラゴンファイアを放ちサギューパスシアに命中をする。

『いくわよセレナ!!』

『うん姉さん!!』

二人は連続して短剣を投げつけて爆発させてダメージを与える、奏は分身をした槍を投げつけてサギューパスシアはダメージを受けている。

基地の方ではサギューパスシアが攻撃を受けながらもシンフォギア奏者たちにダメージを与えている姿を見ていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

カイザーは両手を組みながら様子を見ている、何かが変わたと……………

『どうしたカイザー?』

『何か変だ。あの怪獣の行動がおかしいんだ。』

『おかしい?』

突然基地の警報が鳴り出した。

「何事だ!!」

「お待ちください!!」

あおいは急いでキーボードをうつつていると基地のコンピューター回路に何者かが侵入をしている反応を示していた。

「大変です!!メイン回路に侵入してきたウイルスがいます!!」

「なんだと!!」

「まずいですファイアーフォール第一段階が突破されました!!」

（優太!!）

（グリッドマン?）

(アクセスフラッシュをするんだ、コンピューター回路に入ることができるんだ。それでコンピューターの中に侵入してきた敵と戦う!!)

(わかった!!アクセスフラッシュ!!)

優太はカイザー達にはれないようにプライマルアクセプターを構えてグリッドマンと一体化をしてコンピューター内に入っていく。

『くそ!!俺たちはコンピューターの中じゃ戦えない!!』

一方でコンピューターの中では?

『けっけっけっけさーで第二段階のファイアーウォールを突破をしようかな?馬鹿なやつらだな、ネプキュリアさまの作戦で俺がメインコンピューターを壊すようになっていいるからな、さーて!!突破をして『そうはさせないぞ!!』誰だつてぐあ!!』

赤い光がウイルギアに命中をして実体化をする。

『グリッドマン!?!お前がなぜここに!!』

『私は元はエネルギー生命体だ、この中に入ることだつて可能なわけだ!!』

『くそ!!グリッドマンめ!!これでもくらえ!!』

ウイルギアは目からビームを放つがグリッドマンはグリッドバリアーを発動させてウイルギアが放つビームをガードをしてグランアクセプターを構えている。

『スパークビーム!!』

『ぐああああああああああ!!ネプキュリアさまああああああああああ!!』

コンピューター回路の中で爆発をしてグリッドマンはフィクサービームを放ちコンピューター回路の中を回復させた。

外の方でも

『くらえ!!ダブルブリザード!!』

ダイモスの胸部が開いてシャッターが開いて凍える吹雪の竜巻が発生をしてサギューパスシアに当たり凍えていく。

上空でガイキング二人は構えていた。

『ダブルハイドロブレイザー!!』

二人が投げつけた光球が命中をしてサギューパスシアに命中をして爆発をする、そこに.....

『えつと私たち遅れた感じですか?』

ガンバスター、ソルグライヴィオン、ソーラーアクエリオンが到着をした。三人は休憩などをしながら来たためコンバトラー達みたいな感じで参上をした。

全員が苦笑いをして基地の方へと戻るのであった。

合体ロボ出現!!

現在マーキュリオスたちは合同でロボットを作っていた、ゼルフィールの命令で幹部四人で作った合同ロボットを使いマジンカイザー達を倒せという命令だ、彼らは不満だったが命令なので仕方がないといい合体ロボットを作ることにした。

「全くどうして私たちが……」

「仕方がないだろ、セルフィールの命令だ。まあ奴らを倒せてない俺達の原因だけだな……そこはそっちだろ？」

「おつとつと。」

彼らは外装などをとりつけており、カイザー達を倒すために……準備は進んでいた。

一方で基地の方では新たに加わった仲間、ガンバスター、ソーラーアクエリオン、ソルグラヴィオンの三人だ。

『初めまして、私はガンバスターといいます!!』

『僕はソルグラヴィオンです。』

『俺はソーラーアクエリオンだ!!よろしく頼むぜ!!』

カイザー達も彼らを迎え入れて新たな仲間も加わっていく、シンフォギア奏者たちも次々にロボットが増えているので驚いている。だがすぐに警報が鳴りだした。

『『『!!』』』』』

全員が警報が鳴りだしたのを聞いて、急いで現場の方へと向かっていく。シンフォギア奏者たちも一緒に出撃をする。

『あれはなんだ?』

『いつもと違うな……』

『そのとおりだ!!』

ロボットからウラノスリの声が聞こえてきたので全員が驚いている、見るとコクピットのところに四人の幹部が乗りこんでいた。

『このロボットはお前たちを倒す為に作られた合体ロボット『リアクダライザー』!!お前たちを倒す為に俺達幹部が作りだしたロボットだ!!さあいくぞリアクダライザー!!』

『……』

マジンガーZERO以外は動いてリアクダライザーに攻撃を開始をする、ゲッタードラゴンとブラックドラゴンはダブルトマホークブーメランでリアクダライザーに攻撃をする。

『甘いよ!!バリアー!!』

ネプキュリアの声と共にリアクドライバーにバリアーが発生をしてダブルトマホークがはじかれる。

『なに!?!』

『くらえ!!Vレーザー!!』

『グランドファイアー!!』

『ダイモガン!!』

コンバトラー達はVレーザーなどを放つがリアクドライバーのバリアーが発生をして三人が放った攻撃をガードをする。

『嘘だろ!!』

『なら勢いをつければいいだろ!!大車輪ロケットパンチ!!』

マジンガーZの両手が回転をして一気に放たれたロケットパンチがリアクドライバーに放たれる。

『甘いんだよ!!』

すると姿が消えて大車輪ロケットパンチが透けていく。

『な!!』

『うそ!?!』

「なんですかあれは!!」

「デース!？」

全員が透けていきリアクダライザーを見て驚いている、グリッドマンもグリッドアイを使いリアクダライザーを見ていた。

『なんてパワーをしている……』

『カイザーブレード!!』

『切り裂けエンペラーソード!!』

『断空剣!!』

四人は一気に接近をしてリアクダライザーを攻撃をするために立ち向かうが……

『甘いぜ!!リアクダライザーサンダー!!』

両手をあげて上空から雷が発生をしてカイザー達に命中をする、シンフォギアたちは回避をしたが……グリッドマンも受けてしまう。

『ぐあああああああああ!!』

『ぐ!!』

『優太!!』

『カイザー!!』

『はあああああああああ!!』

『いくぜええええええ!!』

奏と響が接近をしてリアグドライバーを殴ったり槍で攻撃をしているがリアグドライバーの装甲にダメージは通ってない。

「ここはあたしたちに任せろ!! 行けるか?」

「当たり前!!」

「行くぜお前ら!!」

ダブルクリスはミサイルや大型ミサイルなどを放ちアリスはネフシユタンギアへと変えてビームを放った。ガイキングたちは接近をしてカウンタークロスとガイキングアックスで攻撃をしていた。

『くらえ!! 無限拳!!』

ソーラーアクエリオンが放つ無限拳がリアグドライバーのボディに命中をする
が.....

『あれ?』

『動いていませんね.....』

ガンバスターの声に全員が首を縦に振った。カイザーとエンペラーは上空に飛びマジンガーZとグレートマジンガー、グレンダイザーも一緒だ。

『いくぞ五人とも!!』

『おう見せてやろうぜ!!』

『いくぞ!!』

『『『『マジンガートルネード!!』』』』』

五人の合体技がリアグダライザーへと向けられてた。

『『『リアグダービーム!!』』』』

リアグダービームがマジンガートルネードを破り五人に命中をした。

『『『『ぐああああああああああ!!』』』』』

五人は落下をしてガオガイガーとソルグラヴィオンたちは接近をして殴っていく。

『あまいあまい!!リアグダートルネード!!』

突然としてリアグダライザーが回転をして全員を吹き飛ばした。

カイザーは地面に倒れていた、最近力が入ってこないのが不思議だった……

『ドウシタマジンカイザー……』

『ZERO?』

『ナゼアノ時ノカヲ出サナイ……我ヲ倒シタ時ノカナラアンナロボット倒セルハズダ。』

『あの時の……力?』

カイザーには見覚えがない言葉だった、ZEROが言っていることが理解できない。

『アノ時ノ貴様ノカハ我ヲ倒シタ時ヨリモ下ガツテイル……ナゼ思イダセナイ。』

『いったい何のことを言っているZ E R O……俺とお前は始めてあったはずだ……それなのに思いだせとは……』

カイザーの言葉を聞いてZ E R Oは目を見開いた。

『オマエ記憶ガナイノカ?』

『ああ記憶はあんまり覚えていない……』

『ソウイウコトカ……』

Z E R Oは突然カイザーの頭に光を送りだした……。カイザーは突然頭が痛くなり抑えている。

『ぐああああああああああああああ!!』

「カイザー!？」

「Z E R Oてめえ!!」

『黙ッテイロ……』

Z E R Oのギロツとした目をみて全員がびくつと震えている、リアグダライザーはチャンスと思いつき攻撃をしようとした、だがその剛腕をZ E R Oは受け止めた。

『フン!!』

Z E R Oは思いつきリアグダライザーを投げ飛ばした。一方でカイザーは奥深くに沈んでいた。

『どこだ……ここは……あれは……俺?』

カイザーが飛んでいた、だが両手や両足は黒く無く足などは青かった。彼は異世界へと飛んでいたが突然敵に襲われた。彼はショルダースライサーなどで戦って敵を切り裂いてファイヤーブラスターで撃破した。

だが次々に襲い掛かる敵にカイザーのボディはボロボロになっていき彼は決意をして自身を爆発させて奴らを道ずれにした。そこに残された魂があった。

一人の女神はカイザーの魂を回収をしてその魂を別のカイザーの体に移植をした、そうその体こそ現在のカイザーの体だ。

彼は目を覚まして女神にお礼を言いそのまま新たなカイザースクランダーを装着してシンフォギア世界へとやってきた、その理由はかつて自身を破壊した敵の残党がシンフォギア世界を支配しようとしていた。それを阻止するために彼は彼らを追ってきた。

彼の剛腕が振るわれて殴られた敵を吹き飛ばし、ルストトルネードで相手を腐食させて倒したりしてカイザーは最後の敵と激突をした。

カイザーノヴァを発動させて最後の敵を倒した……だがカイザー自身もダメージを負ってしまいそのまま海中へ落下をして沈んでいった。

そして彼はフィーネによって回収されてアメリカの聖機物研究所の方へと送られた。

『思いだした……何もかも……俺は人間じゃなかったのか……俺自身がマジンカイザーだったんだ……あの時ピンチだった兜 甲児たちを救うために俺はあの世界へとび奴らの親玉たちを倒した後に別れを告げて世界を去ったんだ。だが強大な敵に襲われて俺は自爆をしてこの体をコアとなった。思いだした……何もかも!!うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

全員がカイザーの方を振り返った、彼は両目などが光り光子力が解放されていた。マジンガーZたちも彼の光子力が解放されているのに驚いていた。

『なんだ!?!』

『カイザー!!』

『おのれ!!くらえ!!リアグダライザーGO!!』

リアグダライザーは走りだしてカイザーに向けて剛腕をふるってきた。だが彼は回避もせずその剛腕を受けた。

『どうだ!!』

『……どうした?』

『え!?!』

四人は驚いている、リアグダライザーは彼らの戦闘データを元に作られた機体だ、そ

のためカイザーの堅さを超えているはずの剛腕がカイザーの頭部で受け止められているからだ。

『本当の拳は……こういうことを言うんだ!! うおおおおおおお!!』

カイザーの拳がリアグダライザーの右手に命中をする、すると手がピキピキと罅が入っていきそのまま粉碎をした。

『うそ!』

『カイザーブレード!!』

両肩部からグリップが出てきて彼はそれを抜いて走りだしてリアグダライザーへ切りかかる。

『ええいバリアー!!』

ネプキュリアの声でバリアー装置が作動をした、彼は気にせずそのままカイザーブレードを振り下ろしてリアグダライザーのボディを切りつけた。

『嘘!! バリアー装置を無効化した!?!』

彼はそのままカイザーブレードを捨ててリアグダライザーのボディに拳をつける。

『うなれ!! ターボスマッシュパンチ!!』

ターボスマッシュパンチがリアグダライザーのボディを貫通をした、リアグダライ

ザーのボディのあっちこちで火花が散らしていく、全員が構えている。

『くらえ!!サンダーボルトブレイカー!!』

『ゲッタービーム!!』

『グリッドビイイイイム!!』

エンペラーと真ゲッター、グリッドマンの攻撃がリアグダライザーに命中をした。

『脱出だ!!』

四人の幹部たちは脱出装置を使い彼らは脱出をした。カイザーはその様子を見ていたが彼らを見逃した。彼は振り返りクリスたちの方へ歩いていく。

「カイザー!!」

『大丈夫かクリス?』

「うん!!カイザーありがとう!!」

『.....ZERO。』

『見セテモラッタ.....マジンカイザー.....記憶が戻ツタミタイダナ?』

『.....ああ、思いだしたさ.....すべてな。』

振り返りカイザーは再び空を見るのであった。

カイザー side

俺は全てを思いだした、俺は元は人間なんかじゃない.....マジンカイザーそ

のものだった……まあ記憶が戻ったのはいいが……俺は頭部のカイザー
パイルダーを触っていた……ここに兜 甲児たちが座っていたんだな……
『敵はなんとか倒すことはできたが俺自身も体にダメージを負い眠りについた。そして
セレナの歌で目を覚ましたわけか……』

夜空を見ながら俺は今回思いだしたすべての記憶……なぜこの世界へやって
きたのかも……だがここでも敵は迫っていた。なら俺がやることは彼女たちと
一緒にこの世界を守ることだ。

ゼルフィール出撃!!

ゼルフィールたちがいる基地。

「まさかマジンカイザーたちの力があれほどだとは思ってもなかったわ……お前たちも今度ばかりは私たちが出撃をするでしょうか……幹部たち全員出撃をするぞ!!」

「「は!!」」

ゼルフィールはマントを装着をして武器を持ち全員が出撃をする。

一方でSONG基地の方ではカイザーは自身の記憶を取り戻して手などを握りしめていた、彼は集中をして光子力エネルギーを解放させていた。

『……………だいぶ元の力を解放させてきたな……………後は……………』
彼は最後の準備にかかろうとしたときに警報が鳴りだした。彼は急いで司令室の方へと走っていく、全員が集結しておりモニターが映し出される。そこに映っていたのはゼルフィールたちが出撃をしていた。

彼らは今回は全員が出撃をする。シンフォギア奏者たちも一緒に出撃をする。

『「アクセスフラッシュ!!」』

優太もグリッドマンと一体化をして一緒に飛び立つ。ZEROも一緒に移動をして彼らの後ろの方と飛んでいる。

「来たな………カイザー達!! 今日こそ決着をつけさせてもらおうぞ!!」

ゼルフィールは剣を抜いてカイザー達に向けていた。カイザー、エンペラー。真ゲッター、ブラックドラゴン、グリッドマンにシンフォギア奏者たちが相手をする。

ほかの幹部たちはマジンガーZたちが引きうけている。

ウラノスリの相手はマジンガーチームが相手だ。

「くらうがいい!! はああああああ!!」

ウラノスリは回転をして光弾を飛ばしてきた、全員は回避をして次の攻撃にうつった

!!

『くらいやがれ!! 光子力ビーム!!』

『ハンドビーム!!』

「そんなこうげきで私を倒せるか!!」

二人の攻撃をかわしていると赤い電撃が命中をした。

「ぐあ!!」

『紅い稲妻の威力はいかがかな?』

「この!!」

ウラノスリは槍をふるってレイアースに攻撃をした。その前にウインダムが前に入り込む。

『防りの風!!』

ウインダムの風がウラノスリの槍を粉碎をした。

「な!!」

『これでもくらえ!! 蒼い竜巻!!』

セレスが放った蒼い竜巻がウラノスリを空中へと上げていく。その上空でグレートマジンガーが雷鳴を轟かせていた。

『くらえ!! 必殺パワーサンダーブレーク!!』

サンダーブレークが放たれてウラノスリに命中をする、蒼い竜巻の水がサンダーブレークの威力をあげてダメージを倍にした。

「があああああああああああああああああ!!」

『今だゲッター!!』

『おう!! ゲッターシャイン!!』

上空でゲッターはゲッターエネルギーを解放させて一気に向かっていく。

『シャインスパーク!!』

シャインスパークが放たれてウラノスリに命中をした。

「まさかこの私があああああああああああああああああ!!」

ウラノスリはシャインスパークを受けて大爆発を起こした。一方でダイターン率いるチームはサタラガスと戦っていた。

新たにソルグラヴィオンとアクエリオン、ガンバスターが加わっていた。

「くらいなさい!!我がリングを!!」

サタラガスが投げつけるリングをトライダーとザンボットはザンボットブローとトライダーランサーではじかせていた。

『チェンジ アクエリオンルナ!!ルナティックアーチェリー!!』

左手の装甲が展開されてルナチックアーチェリーが放たれる、サタガラスは回避を
して次の攻撃を放つ。

「隕石落とし!!」

上空から石が降ってきた、ガンバスターは前に立った。

『バスタービーム!!ホーミンググレイザー!!』

両手と頭部からビームが放たれてサタガラスが放つ隕石落としを粉碎していく、ソル
グラヴィオンは左手のドリルを展開していた。

『ソルグラヴィトンブリンガー!!』

左手が飛びドリルがサタガラスに命中をする、そこにエルドラソウルが飛んできた。

『くらえ!!エルドラカタラータ!!』

必殺の飛び蹴りが命中をしてダイターンは必殺技を構えていた。

『いくぞ!!日輪の力を借りて今必殺の!!サン……アタック!!』

ダイターンのサンアタックが放たれるが、ジエシツクガオガイガーがボルティックドライバーを装着をしていた。

『サンアタックを増幅させる!!ブロウクンボルト!!』

右肩からブロウクンボルトが飛ばされてそれを装着をして上空に掲げるとサンアタックの威力が上がりサタガラスに命中した。

「があああああああああああああああ!!」

『これで終わりだ!!ガジェットツール!!』

ジエシツクガオガイガーの両手が伸びてガジェットツールが装着される。

『ヘルアンドヘブン!!』

彼の両手が光りだす。

『ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ!!ふん!!』

彼は両手を合わせるとそこからエネルギーが発生をしてサタガラスの動きをさらに止める。

『ヴィタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

彼の必殺技ヘルアンドヘブンがサタガラスのボディを貫通して爆散させた。彼は両手を解き全員が着地をした。

一方でマーキュリアスの相手をガイキングたちが務めていた。

「このおおおおおおおお!!」

マーキュリアスの水の攻撃を回避をしていた。

『デスパースイト!!』

ガイキングの両目が光りだしてビームが放たれる、マーキュリアスは回避をすると横にコンバトラーとボルテスが立っていた。

『ツインランサー!!』

『天空剣!!』

二人が放つ攻撃をマーキュリアスは水の力でガードをした。

『くらえ!!三龍棍!!』

ダイモスは三龍棍でマーキュリアスに命中をさせると、後ろでは新ガイキングの右手が変わっていた。

『バスターガイキング!!』

『いくぜ!!』

『こっちも行くわよ!!』

三人は準備が完了をさせていた。マーキュリアスはこれはまずいと思いかわそうとしたが………

『超電磁タツマキ!!』

『超電磁ボール!!』

『ダブルブリザード!!』

三体の機体が放った攻撃を受けてマーキュリアスは回避ができなくなってしまう。

『ファイナル断空砲!!』

『サーペントバスター!!』

三人が放った砲撃が合体をして炎が混ざった砲撃となりマーキュリアスに命中をす
る。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああ!!」

マーキュリアスは爆発をしてネプキュリアはその様子を見て逃げようとした。

「ひい!!勝てるわけないわ!!あんな奴らに!!」

『ドコニ行クツモリダ?』

ネプキュリアの頭を握りしめる人物がいた、マジンガーZEROだ。彼は逃げようとする彼女の頭部を握りしめていた。

「は、離せ!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

彼は彼女のぶん投げ、ネプキュリアは戦わないと殺されると思いマジンガーZEROへ攻撃をする。

「くらいなさい!!私の氷をね!!」

彼女が放った氷をマジンガーZEROは受けて全体が固まっていき氷の塊へと変わった。

「あつはつはつはつは!!あたしだってやる時はやるのよ!!『ドウシタ?』え?」

ネプキュリアは声をした方を見ると、氷が解けていきマジンガーZEROがギロツと彼女の方を見ていた。

「ひい!!」

『コノ俺ガ、貴様ノ氷デ倒セルトデモ思ツテイタノカ?笑ワセル・・・・・・・・』

彼は歩きながら胸部の放熱板が光りだしている、ネプキュリアは逃げようと必死に空を飛んでいるが・・・・・・・・彼の右手が飛んできて彼女のお腹に命中させてそのまま引き寄せる。

「がああああああああああああああああ!!」

そのまま残っている左手で彼女をつかんで胸部の放熱板を光らせる。

『ブレストファイヤーノヴァ!!』

彼の放熱板が光りだして彼女の体を蒸発させた。彼はつまらんといい顔でカイザー達の方を見ていた。

「はあああああああああああ!!」

「行くわよ!!」

翼とマリアの二人のコンビネーションがゼルフィールへ攻撃をしている、彼女は持っている剣で二人が放つ斬撃をガードをする。

「行くぜお前ら!!」

別次元のクリスと一緒にクリスとアリスは構えて同時攻撃を放ちゼルフィールはダメージを受けるところをエンペラーとカイザーがエンペラーブレードと牙斬刀でゼルフィールへ攻撃をする。

「甘い!!」

彼女が回避をすると上から槍を振ってきた。

「なに!?!」

「どうだ?」

「さすがあたしだけ。」

上空から奏たちが投げっていた、真ゲッターと真ドラゴンが彼女たちを空中へと運んでそこから槍を投げつけたのだ。

ゼルフィールは地上へ着地をすると二人の響が走ってきた。電童ガングニールの響は右足にレオサークルを装着をして蹴り技を主体に戦っていた。

「であとう!!」

「か!!」

ゼルフィールの目が光りだして二人の響を吹き飛ばすとグリッドマンは走りだしてブラックドラゴンとセレナと共に攻撃をしている。ゼルフィールは彼女たちの攻撃を受け流していると上空から大剣が発生をしてゼルフィールに命中をした。

「ぐ!!」

別次元の翼が蹴りを入れてゼルフィールに命中をした。

「くらいなさい!!」

『させん!!無限拳!!』

上空から放たれた無限拳がゼルフィールに命中をしてほかのロボットたちが合流をしてきた。

『大丈夫か?』

『助かったぜ!!』

「まさかほかの奴らがやられるなんてね……ならば私たちの最終兵器を……あれ?」

ゼルフィールは何かのスイッチを押したが反応を示さない……

『お前の兵器は俺様達が破壊したぜ!!』

全員が声をした方を見る、ジェネシックガオガイガーだけは笑っていた。

『待っていたぞ!!』

『システムチェンジ!!』

赤と青いクレーン車とはしご車に変形を始める、さらに緑と黄色のミキサ車とダンブカーも変形を始める。

『ブージーー! ジャオファン!!』

さらに白と黒のショベルカー型のメーザー車にタンクローリー型のミサイルコンテナトレーラーも変形をする。

『システムチェンジ!!』

『水竜!!』 『炎龍!!』

『風竜!!』 『雷竜!!』

『光竜!!』 『闇竜!!』

パトカー型も変形をする。

『システムチェンジ!! ボルフオッグ!!』

『ゴルディマーズさまのことも忘れるな!!』

『マイクも忘れないでほしいもんねー！』

そうここに勇者軍団が復活をした!! 彼らはガオガイガーの指示で彼らの基地を破壊をしていたのだ!!

『ガオガイガー機動隊長、あなたの指示で奴らの基地を破壊しおきました。これでやつらの兵器は使用不可です!!』

『よくやった!!』

「おのれ!! おのれおのれおのれ!! よくも私の基地を!!」

ゼルフィールは氷竜たちに放つが彼らは回避をした。

『いくぞ!!』

『『『おう!!』』』

「はい!!」

『『『『シンメトリカルドッキング!!』』』』

竜シリーズはさらに合体をする。シンメトリカルドッキングが発動して左右に合体をする。

『超竜神!!』

『撃竜神!!』

『天竜神!!』

『グリッドマン!!』

『おう!!』

カイザーとグリッドマンはお互いに構える。

『光子カビーム!!』

『グリッドビーム!!』

二人のビームが混ざっていき大きなビームとなりゼルフィールに放たれて命中をする。

「ぐ!!」

『くらえ!!一斉射撃!!』

『唸れ疾風!!轟け雷光!!シャントウロン!!』

『光と闇の舞!!』

三体のロボットが放つ攻撃がゼルフィールに放たれて命中をする。

『ガオガイガー!!俺を使え!!』

『よっしゃ!!』

『システムチェンジ!!』

ゴルディーマークは変形をしてゴルディオオンハンマーとマークハンドへと変わる。

本来はジエネシックガオガイガーは装着ができないが……

ガオガイガーが変わりに答える、カイザー達もあたりをスキヤニングをして敵兵力がないことを確認をした。

その時だった!!

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『黒いノイズ?』

「あれだ!!俺達が戦ったノイズだ!!」

優太の言葉を聞いて全員が黒いノイズを見ると、敵は勝手に自壊をした。すると扉が開いた。

『優太!!あの扉は私たちの世界へとつながっている!!』

「なんだって!?!」

『急いだほうがいいじゃないか?あれがもしも次元の扉だったら閉じてしまう可能性があるぞ?』

『そのとおりだ優太。』

「わかった、皆さんありがとうございます!!」

『気にするな、こちらでも助けてもらったのには変わらない・・・・・・・・もしも君達の世界に来たらよろしく頼む!!』

『ああ、今度はこちらが御持て成しをしよう。』

カイザーとグリッドマンは互いに握手をしてほかのシンフォギア奏者たちも互いの自分たちと握手をして扉の方へと向かっていく。

「皆さん!! ありがとうございました!!」

「あなたたちと一緒に戦ったことは忘れません。」

「ああ、あたしたちにとつてもいい思い出だぜ!!」

「その………そっちのパパとママにもよろしくと伝えておいてくれ。」

「まかせてクリス。」

「お前、自分もクリスだろうが………」

アリサは苦笑いをしながら向こうの人物たちの方を見てマリアたちも見ていた。

「もし私たちに会ったとしても向こうとこちらは違うってことは覚えてほしいわ、響。」

「私ですか!？」

「そうデース!!」

「うん、恐らくけど………私などが言ってくる可能性があるかもしれないから。」

「えつと覚えておくね、調ちゃんに切ちゃん!!」

『みんなそろそろ入ろう。』

グリッドマンの言葉に全員が頷いて彼らは次元の扉の中へと入っていく。カイザー達は彼らが次元の扉が消えるまで見届ける。次元の扉が消滅をして彼らは空を見る。

「ブラックさん……………」

『セレナ・カデンツヴァナ・イヴ……………私はこういつたときどう声をかけていいのかわからない……………だがまた会える気がすると俺は思うぞ?』

「私もそう思います……………」

『……………』

こうしてゼルフィール率いる敵は、別次元からやってきたグリッドマンに異世界のシンフォギア奏者たち、さらには新たな仲間たちと共に倒すことができた。

だが……………ある場所にて

「サンジェルマン、いよいよ動くワサネ?」

「ええその通りよ。私たちの計画を進めるために……………」

「あーしもやるわよ〜」

だが一方である島にて。

「ドクターヘル!! あしゆら男爵ただいま参りました。」

「来たかあしゆら男爵。いよいよ我々の世界征服を開始する時が来た!! お前に機械獣ダブラスとガマラを用意をした。」

「はは!! では早速出撃をいたします!!」

また新たな敵も復活を遂げた。果たしてカイザー達は勝てるのか!?

第五章 シンフォギアA X Z

カイザー達海外へ

カイザースide

グリッドマンたちと共に戦つてから数週間が経ち、我々SONGは現在南米でアルカ・ノイズを兵器利用している軍事政権国家・バルベルデを鎮圧するためにやってきた。今回の出撃は俺達カイザーチームだけだ。ほかのメンバーたちは日本にもし何かあつたらいけないので待機させている。

メンバーは俺とエンペラーと真ゲッターはクリスたちと共に、マリアたちの方にはブラックに真ドラゴン、ZEROのほうを組ませている。

そして現在俺達はステファンと呼ばれる少年の力を借りて村の方へとやってきた。だが村の方は占拠されており彼らは人質に取られている。

翼たちもどうすればいいのか困っていた。奴らはアルカ・ノイズたちを襲わせようとしているのか？なら俺がすることは一つだ。体を小さくして奴にはばれないようにステファンのところへ行く。

『ステファン、君の力を借りたい……俺を全力で奴に向かって投げてほしい。』

「いいのか?」

『頼む。』

俺はステファンに投げてもらい工場長に当たり、その隙に人質をステファンが引つ張り逃がそうとする。ほかの奴らも攻撃を開始してアルカ・ノイズたちを撃破していく中、ステファンたちの前にアルカ・ノイズが現れて触手を伸ばしてきた。俺はすぐに大きくなり彼に巻き付こうとしていた触手を俺の体に巻き付けさせる。

『ぐおおおおおおおおおおお!!』

「カイザー!!」

『俺に構うな!!』

俺はステファンに逃げろといい、アルカ・ノイズたちは俺を倒そうと次々に集まってきた。

「させるかあああああああああ!!」

アリスはネフシユタンギアを纏い俺にまとわりついていたアルカ・ノイズたちにビームを放ち消滅させる。俺は自由になった体で胸部に光子力エネルギーをためて一気に放つ。

『くらえ!!ファイヤーブラスタアアアアアアアアア!!』

ファイヤーブラスターを放ちアルカ・ノイズたちを撃破した。あちらの方は大丈夫だ

ろうか？

カイザー side 終了

一方でマリアたちは謎の錬金術師と呼ばれる相手と戦っていた。

『ダブルトマホークブーメラン!!』

真ドラゴンが投げつけたダブルトマホークブーメランは謎の化け物に命中するが効いていない。

『真ドラゴンの攻撃が効いていない?』

敵はアルカ・ノイズを出して朔也たちを襲おうとしていた。だがその前にブラックドラゴンと真ドラゴンが前に立ちシンフォギア奏者たちと共に迎撃している中 Z E R O は相手の化け物を見ていた。

『ぐおおおおおおおおお!!』

Z E R O に襲い掛かろうとする化け物……だが Z E R O は右手を前に向ける。

『消エロ、アイアンカッター』

Z E R O が放ったアイアンカッターが化け物を切り裂いていき、全員がやったと思っただけの化け物は光りだした。

『何?』

見ると化け物はアイアンカッターをくらいバラバラになったはずなのに突如として

再生した。全員がそれを見て驚いている。

『まさか再生能力なのか!?!』

『セレナ、ここは撤退しよう……朔也たちがいたら余計にここは危険だ……』

「姉さん!!」

「わかってているわ!!」

『ゲッタービーム!!』

ブラックドラゴンはゲッタービームを放ち化け物に命中させて撤退していく。

一方でカイザーたちは奴らを逮捕した後、負傷者たちがいないのかを探していた。

「あ、あの!!」

『ん?』

カイザーが振り返ると先ほど助けた少女が立っていた。

『どうした?』

「あの!!さつきはありがとうございました!!」

『そういうことか、気にすることは無い。俺はできる限りのことをしたただけだ、それに敬礼を言うのなら彼に言っつけてやってくれ。彼の決死の行動がなければ我々は人質がいて動けなかった……彼こそ勇者と呼んでもいい。』

「ん?」

ステファンはカイザーの言葉に反応をして一体何の話をしているんだ?と思いがら辺りを見ていた。アルカ・ノイズによる被害は0に抑えて兵士たちなどは逮捕されている。

だがカイザー自体は嫌な予感がしていた。

(ブラックドラゴンたちが言っていた錬金術師とか言うやつら……. キャロル)

(なんだ?)

(こいつらがなぜアルカ・ノイズを持っているのかお前は知っているか?)

(ああ知っているさ、奴らはパヴァリア光明結社という組織だ、以前俺のアルカ・ノイズを分けてほしいといわれたことがあってな……. おそらく奴らが使っているのは、俺が渡したのを自分たちで改良を加えたものだ……. そして奴らも俺と同様に錬金術を使うことができる。)

(そうか……. なら今回の敵も錬金術師ということか…….)

カイザーの中にいるキャロルと話をしたカイザー達は村を後にしようとしている。

一方で空港ではアルカ・ノイズたちが兵士たちを襲っていた、現場にはマリアたちのほかにマジンガーZのチームが出撃していた。

『見えてきたぜ!!マリア!!アルカ・ノイズたちは俺たちが相手をする!!』

『君達は敵を頼む!!スピンスーサー!!』

マジンガー乙たちはアルカ・ノイズたちを撃破するため攻撃を開始する。マリアたちは幹部たちを相手に奮闘する。

「はああああああああああ!!」

「行くデース!!」

「はああああああああああ!!」

三人は幹部たちを攻撃している中飛行機が一台飛ぼうとしている。

『なに?』

『あれを!!』

飛行機の後ろにはアルカ・ノイズたちがいた。

『『『させん!!』』』

レイアースたちはアルカ・ノイズたちを攻撃していた。だがアルカ・ノイズたちを切り裂いたり魔法で粉碎をしていく中で仕留め損ねた1体が突撃して飛行機のタイヤを壊した。

『させるかああああああああ!!』

マジンガー、グレート、グレンダイザー。ゲッタードラゴンは飛行機の下について調と切歌も下につく。

『はああああああああ!!』

レイアースたちもマリアの援護に入り幹部たちに攻撃をしていく。

「なるほどこいつらが……」

「そーれ!!」

『防りの風!!』

ウインダム風の風が彼女たちの攻撃をガードして、マリアは一撃を放つために左手を大きくする。

セレナも同じように構えていた。

『いっけええええええええええええ!!』

マジンガーたちは飛行機を飛ばして着地をして、マリアたちが同時に砲撃して爆発させる。彼らは全員が着地した。

『やったのか?』

『いやまだだ!!』

ゲッタードラゴンの声に全員が構えている。爆発の中敵は現れる。

「ちつつちつちおいでませ!!」

彼女の手から光が発生してZEROがバラバラにした敵を出してきた。

『嘘だろ?!』

『まずい……こちらは先ほどの……』

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

上空からガングニール電童の響が放つ剛腕が放たれて敵に命中する。

「効かないワサ。」

だが響の剛腕が相手に命中した瞬間、化け物は粉碎した!!

「もう、無敵はどこにいったのよ!!」

「だけど私はここにいます!!」

錬金術師との戦い、新たな戦士たち登場!!

響が到着をして二人の錬金術師たちは驚いている、さらにカイザー達全員が集結をしており二人の錬金術師たちは困っていた。

「どうするダワサ．．．まさかカイザー達まで全員が集まっているとは思っていなかったダワサ。」

カイザーたちが構えていると転送術が発生をした。そこから女性が現れる。

「サンジェルマン!!」

『サンジェルマン? お前が今回の首謀者なのか?』

「．．．．．と思われても仕方がないわね。撤退をするわよカリオストロにプレイヤーデイ。」
彼女たちは転移をしまい逃げられてしまう。

『つておい!! 逃げるんじゃないよ!!』

『全員で来てしまったが．．．．．大丈夫だろうか?』

グレンダイザーが言っていると基地の方から連絡が来た。

『みんな急いで戻ってくれないか!!』

「どうしたのですか司令。」

『機械のようなロボットが日本の方へ現れたんだ!!』

『なんだって!!機械獣だど!』

『まさか……奴らが蘇ったというのか……』

マジンガーZとグレートマジンガーが反応をして全員が急いで日本二向かった飛び立ち向かうことにした。

一方で日本では機械獣ダブルラスとガラダが街の方に現れていた、大きさは通常と同じ大きさなのでノイズよりも大きいのだ。

「なんて大きさだ、カイザー達の普段の大きさと同じぐらいではないか!!」

ダブルラスとガラダは街を壊そうと暴れていた。

「行け機械獣ども!!街を壊して壊しまくるのだ!!」

あしゆら男爵は持っている杖で指示を出していると突然苦無が飛んできてダブルラスのボディに命中をして爆発をした。

「なに!?!」

『どりやああああああああああああああ!!』

青い機体がガラダを殴り飛ばして着地をした。さらに女性型の機体が三機に刀を持った機体が一機も着地をした。

「何だお前たちは!!」

『おれはゴードンナーだ!!』

『私はネオオクサー』

『私はゴ—オクサーよ!!』

『我はブレイドガイナー!!』

『私はセレブレライダー!!』

『いくぞ!!』

ゴードンナーの声に会わせて全員が飛びたちダブラスはブレイドガイナーとセレブレライダーにビームを放つ。

『効かぬ!!』

『はああああああああああ!!』

セレブレライダーは両手をビームの刃へと変えてダブラスの首を切断させる。

『今よ!!』

『ヘルズウインド!!』

胸部のプラズマドライブから竜巻が発生をしてダブラスは上空へとあげられてブレイドガイナーは左手の刀を構えて突撃をする。

『デスストラッシュ!!』

ブレイドガイナーの一閃がダブラスのボディを一刀両断して爆発が起こる。一方で

ガラダと戦うゴードンナー達。

『ぐおおおおおおおおおお!!』

ガラダは両目からミサイルを放つ。

『エンジェルバレット!!』

ゴークサールの右手から放たれる弾丸がガラダのミサイルを破壊してさらに体に連続して当たる。

『はあああああ!!グラビティボンバー!!』

ネオオクサーの手から放たれたグラビティボンバーが命中をしてガラダは動きが遅くなった。

『うおおおおおおおお!!』

そこにゴードンナーが接近をして殴っていき連続したパンチがガラダを押していた。

『ぐおおおお・・・・・・』

ガラダは頭の鎌を取りゴードンナーのボディを切りつけた。

『どあ!!』

『ダンナー!!』

『こうなったら、ネオオクサー!!やるぞ!!』

『えーーーーー私じゃないの?』

『すまん、今度合体をするからさ?』

『わかった………デイメンシヨンスナイパー!!』

ゴークサーは左手からデイメンシヨンスナイパーを放ちこちらに向かつてきたガラダに命中させる。

ゴードンナーとネオオクサーは準備をする。

『ドライブチエーンジGO!!』

『ドライブチエーンジGO!!』

『ダダンナーオン!!』

ゴードンナーの中にネオオクサーが収納されてリボルバーオープンされてゴードンナーの色が青から赤くなる。

『ゴードンナーツインドライブ!!』

これこそゴードンナーの本当の意味での姿、ゴードンナーツインドライブモードだ。

『ぐお!!』

ガラダは頭部の鎌を投げつける。

『カウンターナックル!!』

左手にエネルギーが込められて鎌に当たり粉碎をした。

『ぐお!!』

『であああああああああ!!ブレイカーシュート!!』

脚部が赤くなりガラダを蹴り飛ばしていきゴードンナーは構える。

『一気に決める!!』

彼が構えると頭部から赤い炎が発生をして彼は接近をする。

『ハートブレイカー!!』

プラズマドライブが回転をして彼は右手をガラダのボディに当てて中にあるトリガーが弾かれる。そしてガラダの体は固定化した。

そしてそのままゴードンナーは上空へとび立つ。

『ソオオウル!!』

『スピנקラッシュャー!!』

回転をした蹴りがガラダのボディを貫通をして爆発させた。ゴードンナーは冷却装置が発動をして全身から溢れ出る。

『やった!!』

『だがツインドライブを使うほどだったか?』

『う．．．．．』

ツインドライブモードを解除をしたゴードンナーにブレイドガイナーは両手を組んだまま彼に言う。

『まあまあブレイドガイナー。』

セレブレイドーが止めていると、上空からマジンカイザー達が到着をした。

『なんだありや!?!』

『新しいロボットか?』

全員が着地をしてカイザーは膝をついて響達を降ろして小さくなる。ダンナーたちも体を小さくなり挨拶をする。

『初めまして俺はマジンカイザーだ。』

『俺はゴードンナーでこっちがネオオクサーにゴーオクサー。』

『我はブレイドガイナー、こっちはサポートロボットのセレブレイドーにジェットクロウだ。』

『新しい仲間ですね!!』

『だな。』

『すげー!!』

アリサと切歌はブレイドガイナーを見ていた。

『む?!』

『これこそ本物の武者デース!!』

『む、武者?』

「ちげーよ!!サムライだよ!!」

『さ、サムライ?』

二人が目を光らせているのでブレイドガイナーはどうしていいのか困っているの
あつた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「カイザー?」

『何でもない。』

クリスが声をかけたがカイザーは何かを考えているのかわからない状態であつた。

マジンカイザー対カリオストロ

カイザー side

新たな仲間、ゴードンナーたちを仲間に入れた俺達SONG組織……さらに現れた機械獣、ということはドクターヘルが率いる部隊が復活をしたということか……俺は両手を組んで考えているとクリスたちが俺のところへとやってきた。「カイザーどうしたの？」

『少しかだけ敵のことを考えていた。今回俺達が戦う敵は2組織と俺は予想ができる。』
「どういうことだ？」

『一つは錬金術師たち、あつちはアルカノイズを使った攻撃をしてくる。そしてもう一組織は……』

『ドクターヘル……』

「Zさん……」

声をした方を見るとマジンガーZが立っていた、あいつは右手を握りしめていた。

『かつてドクターヘルは俺達が倒した敵だ。それがこの世界で蘇ってるとはおもってもなかったけどよ……』

「そうだったのデース……」

「ですが問題はあの機械獣と呼ばれるものです、マジンガーさんあの機械獣というのはいったい……」

『機械獣はかつて俺が戦ったミケーネ帝国のロボット兵器をドクターヘルたちが運用をするために改良をしたのが機械獣だ。そして今回現れたのはマジンガーが初めて戦った機械獣だ。』

グレートという言葉にマジンガーは懐かしそうに見ている。彼にとって初めての戦いだからだ。

『当時俺に搭乗をしていた兜 甲児は俺に乗りこんだのはいいけど操作などは学んでいなかった。俺も今のような意思はなかったしな完全に操られるしかなかった存在だ。だがそれでも俺達は勝ってきた、色んな機械獣たちが襲ってきたがパワーアップをして戦ってきたからな……懐かしいぜ。』

乙たちは話をして俺はグリッドマンたちのことを思いだした、あいつらは今も元気になっているのだろうか？だがあいつらとはいずれ会うかもしれないと思いつつ俺達は移動をすることになった。

それは風鳴機関の護衛に向かうことになり全員で急行をしておりカイザーとブラックドラゴンはマリアたちと一緒に行動をしている。住人がいないかどうかをチェック

をするために周りを見ていた。

『異常ないな……』

「ああああああああああああ!!」

『どうした切歌?』

「人がいたデース!!」

「切歌ちゃん!!それは!!」

セレナが言ったが切歌はすでにその場所へと走っていき声をかけていた。5人は苦笑いをしていた。

「こわ!!これは人じゃないですよ!!」

「最近のかかしはよくできているね。」

「まあしようがないぜ?あたしたちはLINKERがないと動けないからな……」

『すまん……念のために今は作っているが……今回は間に合わなかった……』

「いやカイザーを責めているつもりはないけど……」

それから俺達はおばあちゃんが退去指示を受けているがトマトの収穫の時期を迎えていたので俺達はそれを見守っていると……

「あらーみーつけた。」

『!!』

俺達は声をした方を見る、確かあれは錬金術師の奴か!!

『マリア、奏たちはお祖母ちゃんを頼む。』

『姉さん私が行きます!!』

「あらあら?ここでマジンカイザーたちと会うなんてラッキーなのかしら?」

（まずいなマリアたちは今纏えない、戦えるのは俺とセレナ、ブラックドラゴンだけだ。）

「なら片付けてあげる——」

『な!!』

『アルカ・ノイズ……マリアたちは逃げる!!』

「いきます!! Seilien coffin air gett—l a m h t r o n」

セレナはシンフォギアを纏い俺とブラックドラゴンも構えてアルカ・ノイズに攻撃をする。

『ダブルトマホークブーメラン!!』

『くらえ!! ルストトルネード!!』

襲い掛かるアルカ・ノイズに対してブラックドラゴンはダブルトマホークブーメラン。俺はルストトルネードを発動させてマリアたちが避難をするのを持たせる。

「はああああああああああ!!」

セレナは持っている剣でアルカ・ノイズたちを切っていく、だが相手の数もあり俺達は畑を守りながらの戦いをしている。

『チェンジポセイドン!!ゲッターサイクロン!!』

ゲッターサイクロンでアルカ・ノイズたちを吹き飛ばしていると上空から砲撃やビームが飛んできた。

「あたし参上ううううううううううううううううう!!」

上空から電王ギアを纏ったアリスがデンガツシャーソードモードで切りながら着地をした。隣にはクリスが苦笑いをしながら現れる。

「ここは私たちが引きうけます!!」

「おうよ!!さーて前は逃げられちゃったがあたしは……最初からクライマックスなんだぜ!!いくぜいくぜいくぜ!!」

相手は俺達に向かって丸い弾を投げてきた。俺とブラックドラゴンは前に立ちクリスたちをかばうようにして前に立つ。

「カイザー!!」

『無事だ!!』

「けど。」

「え?」

セレナが奴の拳を受けて吹き飛ばされた、アリス達はすぐに攻撃をしようとしたが彼女は立ちあがれないぐらいにダメージを受けていた。

「さーてまずは一人。」

相手は弾を作りセレナに投げた。

『させるかああああああああああああああああ!!』

そこにブラックライガーが前に立ち彼女が放つ攻撃を体で受け止めた。

「ブラックさん!!」

『無事か………セレナ。』

「わたしの………せいで。」

『………悪くない、お前を守れただけでも………うぐ。』

ライガーは膝をついていた。

(私のせいで………私に力があれば………響さんのように!!)

するとセレナのアガートラムが光りだしている、それはブラックドラゴンも一緒だ。

『なんだ………体に力がみなぎってくる。』

「こ、これは!!」

すると二人の光が一つにまとまっていく。俺達は全員が目を閉じてしまうほどの光

だ。

「一体何が……」

「見ろ!!光が収まっていく!!」

俺達が見たのは彼女のギアにブラックドラゴンのパーツが合体をしているかのように
なっているギアを装備をしたセレナの姿だった。

カイザー side 終了

「何がどうなっているの!?!」

錬金術師のカリオストロは驚いている。今とどめを刺すために放った攻撃をブラッ
クドラゴンが受け止めた。そこから二人が光りだして立っていたのはセレナだからだ。

『これは……』

「力がみなぎってきます!!」

「ならいきなさい!!」

カリオストロはアルカ・ノイズをだしてきた。セレナは構えているとダブルトマホ
クを出していた。

「もしかして……これは!!」

『セレナ、俺がバックアップをする。お前は力を出すのに集中をするんだ!!』

「はい!!はああああああああ!!」

彼女は走りだしてダブルトマホークを振り回してアルカ・ノイズたちを切っていく。そのまま投げつけて彼女の装甲を解放させる。

すると今度はライガー形態へと姿を変えていた。

「チェーンアタック!!」

左手に装着されたブーツが飛びだしてアルカ・ノイズたちを次々に貫いていく。右手にはドリルアームが装備されて回転をしてアルカ・ノイズたちを次々に撃破していく。

「お待たせしましたってあれ?」

「む? あれはセレナか。」

響と翼も駆けつけてカリオストロは驚いていた。

「まさかブラックドラゴンって奴がギアと一体化をしたって言うの!? てか増えているから（私の指示を無視して遊ぶのはここまでよ?）ちい」

彼女は足元に魔法陣を出して撤退をしていく。カイザー達はセレナの方へと近づいていくと光りだしてブラックドラゴンとセレナに戻った。

「あ………れ?」

『おっと。』

倒れかけたセレナをブラックがキャッチをした。

『俺の力を使ったからな………おそらく疲れが出たんだろうな………』

彼らは基地の方へと帰還をしてカイザーはすぐにLINKERが使えるように準備をするという用意された場所へと歩いていく。

一方で今回ついてきているメンバーはカイザーチーム以外だとマジンガーチームにダイターンチームだ。

『まさかカイザー達の次はこっちかよ!!』

『来たぞ!!』

エンペラーたちは武器などを構えている。

「これは一気にやらなければならぬな。」

「よっしゃ!!あれだな!!」

「イグナイトモジュール!!」

「二三!」

4人はイグナイトモジュールを発動させて戦闘を開始をした。

『うおりやああああああああ!!』

真ゲッターは一気に加速をしてゲッタートマホークを振り回してアルカ・ノイズたちを切り裂いていく。

『くらいやがれ!!アイアンカッター!!』

『ドリルプレッシャーパンチ!!』

マジンガーZとグレートマジンガーの両手が飛びアイアンカッターとドリルプレッシャーパンチがアルカ・ノイズのボディを貫通をしていく。

『ダブルトマホーク!!』

『ダブルハーケン!!』

ドラゴンとダイザーはダブルトマホークとダブルハーケンを出して切っていく。

『ダイターンジャベリンのびろ!!』

『うおりゃああああああああ!!』

『ああああああああああ!!』

ダイターン、ザンボット、トライダーはジャベリン系の武器を持ちアルカ・ノイズを次々に刺していく。

『ゲッタービーム!!』

『紅い稲妻!!』

『蒼い竜巻!!』

『翠の烈風!!』

4人の攻撃が命中をしてアルカ・ノイズたちを吹き飛ばしていく中、イグナイトモジュールを発動させた4人も次々にアルカ・ノイズたちを殲滅させていくが……数が多い。

翼は上空へとびサンジェルマンたちに攻撃をしていく。

「ギアが!!」

彼女はそのまま吹き飛ばされるが。

『よつと!!』

グレートマジンガーがキャッチをして彼女を着地させる。

『大丈夫か?』

「す、すまない………」

「翼さん!!」

『見ろ!!』

エンペラーの声に全員が見る。

『ファーストローブだ!!』

「よくも先輩を!!」

「アリス待つて!!この!!」

アリスとクリスはミサイルとビームを彼女たちに向けて放つ、プレイヤーデイは持つて
いるけん玉を出してクリスが放ったミサイルなどをガードをしていきカリオストロが
ビームを放ち二人はガードをする。

「このぐらい!!」

「え!? ギアが!!」

「きやああああああああああ!!」

二人も吹き飛ばされて真ゲッターと真ドラゴンが受け止める。

「クリスちゃん!! アリスちゃん!!」

サンジェルマンが歩きだして響は構えているとトリガーを引いて弾を放ってきた。

彼女は回避をして弾が来ないことに驚いている。

『響!! 後ろだ!!』

「ファイアーウォール!!」

響はファイアーウォールでガードをしたが吹き飛ばされてイグナイトモジュールが解除される。

「イグナイトが………」

全員が驚くイグナイトが解除されたことに。

『はああああああああああ!!』

『!!』

上空からカイザーブレードを振り下ろしたカイザーが降りてきた。

『すまない遅れた!!』

「な!!」

『え?』

サンジェルマンはカイザーを見て目を見開いている。そのあともどうして……あなたがここに……とブツブツ言っている。

一方のカイザーの方もブレードを構えながら警戒をしていると何かが光つているのを見つけた。

「統制局長アダム・ヴァイスハウプト!! どうしてここに!!」

『アダム?』

カイザー達は驚いているが、突然奴の服が燃えだして丸出しになる。

「何を見てるわけダワサ!!」

「錬金術師だからね僕たちは!!」

カイザー達はすぐに彼女たちを守るために前に立つ。

『みんな!!』

『ああ食い止めるぞ!!』

『ファイヤーブラスター!!』

『グレートブラスター!!』

『ストナーサンシャイン!!』

『ゲッタービーム!!』

そしてその爆発は風鳴機関の本部を巻き込むほどの威力を持っていた。それはカイザー達も巻き込まれたことになる。

爆発が収まり響達は大きな穴が空いた場所へいた。

「カイザああああああああああ!!」

クリスは涙を流しながら叫ぶとガラガラという音が聞こえた。

『うぐ……』

そこには装甲から火花がバチバチといいながらも動いているカイザー達だ。

「カイザー!!大丈夫デース!」

『悪い……俺達はしばらくは眠りにつく……体の自己回復をさせないといけないぐらいに受けてしまった。』

見るとマシンガンZたちも膝をついており彼らはボロボロの状態になっていた。アダムスの強力な核融合の爆発はカイザー達に大ダメージを与えてしまうほどの威力を持つている。

果たしてどうなるのか!!

カイザー達戦闘不能!?残されたメンバーたちの思い

弦十郎 side

今回の戦いは俺達の完全敗北だ……徹底的に完封ないほどにな……さらにカイザーたちがやられてしまい彼らは機能を停止をしてしまうほどのダメージを受けている。

現れたアダムという人物が放った核融合の錬金術は風鳴本部を壊滅させるほどの威力を持っておりさらにはカイザー達の装甲までダメージを受けてしまうほどだ。

カイザーチームはブラックドラゴンとマジンガーZER0以外は機能停止。マジンガーチームはマジンガーZを始め全員が機能停止……

残されているチームはガイキングチームにゴードンナーチーム、あらたなチームとしてガオガイガーチームたちが残っているが……

『しかしイグナイトモジュールが解除されるなんてよ。いったいどういうファーストロープをつけているんだよ!!』

『いずれにしても彼女たち相手プラス、アダムと呼ばれる人物と戦うこともいれておかないといけないぞ?』

確かにそのとおりだ。パヴァリア光明結社の統制局長アダム・ヴァイスハウプトに三人の錬金術師のファーストローブを纏う三人相手だからな……

「いずれにしてもあいつらにイグナイトモジュールを使うには危険ってわけか……」
「うむ……いずれにしてもこの破棄が決定をした。各自撤収準備に入ってくれ。カイザーたちは先に本部の方へ運んでいる。」

『先行をしてガイキングたちに行かせている、俺達も合流をするぜ?』

コンバトラー達が出ていった後緒川が俺のところへやってきた。おそらく鎌倉から招集が来ると思っていたがな。

弦十郎 side 終了

一方でコンバトラー達は基地の方へ到着をしてカイザー達をセットをしていく。

『しかしカイザー達がここまでダメージを受けるほどのダメージか……』

『新震えているのか?』

『へ!! 冗談を言いますね……逆に俺の炎が燃えているよ。』

『ん?』

『どうしたボルテス?』

『……イガリマの歌?』

『イガリマって切歌だよな!!』

二人は走りだして訓練ルームの方へと走っていく。ガイキングたちも急いでレイアースたちをセットをしてコンバトラー達が向かった場所へと行く。

一方で訓練ルームでは切歌と調が訓練ルームでLINKERを使わないでギアを纏っていた。襲い掛かるアルカ・ノイズのホログラムに二人は鎌と鋸で次々に切っていく。だが彼女たちのギアからはバチバチと光っており彼女たちは苦しんでいるがそれでもギアを展開をしてアルカ・ノイズたちを切り裂いていく。

目を覚ましたマリアや奏たちは走りだしてルームの方へと向かっていく。切歌は鎌でアルカ・ノイズを止めるとどめを刺そうとしたが突然としてギアが解除されて調は切歌に気づいてその場所へ向かう。

『Vレーザー!!』

『ガトリングミサイル!!』

ビームとミサイルが飛びアルカ・ノイズたちのホログラムたちに当たりシュミレーションが止まる。

『大丈夫か!!』

『なんであんな無茶をしたんだ。』

そこにマリアたちも到着をして調たちは口を開いた。

「私たちがLINKERに頼らずに戦えれていたら……あんな……」

二人はあの時カイザーが作ったLINKERを使ってギアを纏って最後のイグナイトを使い救出をするだけだった。

それは奏とマリアも同じ気持ちだ……そのせいでカイザーたちは大ダメージを負ってしまい自己修復に入っているからだ。

『そのせいで……カイザー達が……』

『……』

全員が無言になってしまう中扉が開いた。

『そんなことはない……ぜ?』

『Z!!』

現れたのは自己修復に入っているはずのマジンガーZにグレートマジンガー……そしてグレンダイザーの三人だった。

『あなたたち!!どうして!!』

『へへ、お前らの歌を聞いていたら寝てもたつてもいれなくてよ……なあ調……お前たちは自分たちが役に立たないって言っていたな?それは違うじゃねーか?』

『え?』

『たとえ自分が戦えなくても……守る気持ちは誰にでも持っている……』

『そしてそれが……お前たちの歌となり戦えるじゃないのか?』

「歌………」

『受け取りな………』

乙たちの手から光が放たれて彼女たちのギアのペンダント集まっていく。するとギアが光りだして彼女たちに装甲が展開されて行く。

「これって………」

「セレナがしていた………」

「すごいデース………力がみなぎってきたデース!!」

すると乙たちはまるで言葉を伝えたのを確認をしたのか倒れてしまいかかるが、コンバトラー達が支える。

『無茶をしゃがって………』

『いいんだよ、さてあとは任せませ?』

そういつて乙たちの目から光が消えて再び彼らを連れて戻っていく。一方で切歌たちはギアは構えており調はマジンガーZのような形に、マリアはグレート………そして切歌はグレンダイザーのような姿をしている。

「すげー!!あたしの電王ギアじゃねーか!!」

「力がみなぎるわ!!いくわよ二人とも!!」

「うん!!」

一方でセレナは目を覚ました。

「()は？」

『目を覚ましたかセレナ。』

「ブラックさん？」

セレナは目を開けてそばにいたブラックドラゴンに声をかけた。

「()は？」

『SONG基地だ。あの後お前を連れて俺は先にSONG基地のベットにお前を運んだあと風鳴機関本部は後に現れたアダムと呼ばれる統制局長アダム・ヴァイスハウプトが現れて本部を壊滅させた……。カイザー達はその時に大ダメージを受けてしまい現在は自己修復を受けている。』

「カイザーさんが!!」

『……。そうだ。今動けるロボットはコンバトラーチームにガイキングチームにガオガイガーチームのメンバーだ。』

二人が話していると警報が鳴りだした。二人は立ちあがりその場所へと向かうことにした。

ロボットメンバーたちも全員が出動をすることになり、全員が出動をする。LINK ERはカイザーが念のために渡されているので出動をする!!

空を飛べる者たちは全員が空を飛び空中に現れたアルカ・ノイズたちを攻撃をするために行く。

『いくぜえええええええええええ!!』

アクエリオンが走りだして後ろをエルドラソウルが行く。

『若造に負けてたまるか!!エルドラカタラータ!!』

エルドラソウルの蹴りがアルカ・ノイズたちを粉碎をしていき戦闘が開始される。

『くらえ!!ソルグラヴィトンキャノン!!』

『ダイガンマキシマムシュート!!』

『ミサイルデトネイター!!』

ソルグラヴィオンに Danku ガと Danku ガノヴァの三人が砲撃をしてギアを展開をした翼たちも攻撃をしていく。ジェネシックガオガイガーは巨大化をしており切っていくメンバーたちは彼の手に着地をしていく。

一方で超龍神たちは分離をしてそれぞれで避難誘導をしていた。

『皆さん慌てずに。』

『氷竜!!』

『ええわかっていきますよ!!』

ほかの勇者ロボたちは避難誘導をしながらアルカ・ノイズたちを攻撃をしていく。

『くそ!!多すぎる!!』

雷竜は雷を放ちアルカ・ノイズたちを撃破していく。風竜は背中のフォンダオダンを放ちアルカ・ノイズを撃破する。

『ですが私たちがここで逃げるわけにはいきません!!』

『そのとおりだ!!』

一方でマリアたちはアルカ・ノイズを出している敵を発見をしていた。

「いくわよ二人とも!!」

「見せてあげる!!」

「私たちの新しい力をデース!!」

三人はギアを触る。

「マジンガーZ!!」

「グレートマジンガー!!」

「グレンダイザー!!」

「セツトアップ!!」

三人が光りだすとそれぞれのギアが変わりマジンガーZたちのような姿へと変わった!!

「それは!!」

「いくわよ!!マジンガーブレード!!」

マリアはマジンガーブレードを構えて増殖をさせているアルカ・ノイズを切っつけてく。

「いくよ!!切ちゃん!!」

「了解デース!!」

「ダブルマジンガーパンチ!!」

調と切歌の装甲が飛びだしてダブルマジンガーパンチが放たれて首を切断させていく。

「くらいなさい!!雷鳴よ轟け!!サンダーブ레이크!!」

マリアから放たれたサンダーブ레이크が増殖させていたアルカ・ノイズに命中をして爆発した。

「やったのか?」

『まだだ!!』

ジェネシックガオガイガーの言葉に煙がはれると3つに分離をしていた。

「「「!?」」」

『まさか分離をするなんて……』

『移動をしていく!!』

『逃がさん!!カウンタークロス!!』

ガイキングが投げたカウンタークロスが命中をするがアルカ・ノイズたちが次々に発生をしていき彼らは移動をしていく。

だがそれは彼女たちの狙いだった!!

「これは!!結果?!

そこにファーストロープを纏ったサンジェルマンたちが現れた。

「まさか狙いは私たち!?どうして!!」

「予想外だったのは事実だけーど。」

「狙いはお前たちだってことダワサ。」

カリオストロ達は戦闘態勢を取り攻撃を開始した。

翼と響、奏はサンジェルマン相手にカリオストロにはマリアとセレナとクリスとアリスが……プレラーデイには調と切歌が戦いを始める。

「くらうデース!!ハンドビーム!!」

「これはイグナイトではないダワサ!?

「これはマジンガーたちがくれた新しい力!!ドリルミサイル!!」

両手のロケットパンチの装甲が開いてドリルミサイルが発射される。

「こんなもの!!」

けん玉部分を振り回してドリルミサイルを破壊していくが、切歌はダブルハーケンを出して振り下ろす。

「ちい!!」

「くらいなさーい!!」

カリオストロはビームを放ち攻撃をしてきた。

「ビームならあたしに任せろ!!」

ネフシユタンギアに変えてビームを放ちクリスはミサイルを出す。

「いっけええええええええええ!!」

「あらあら!!」

防御結界を張りクリスが放ったミサイルをガードをする中、マリアはドリルプレツシャーパンチを発射させる。

「嘘……」

壊されたところをセレナがブラックポセイドン形態へと変えてゲッターアームがカリオストロの体に巻き付ける。

「あら……」

「必殺!!大雪山おろし!!」

「あ……れ……」

一方でサンジェルマンの弾丸を翼と奏がはじかせていき、響は接近をしてユニコーンドリルを装着をしてサンジェルマンに攻撃をする。

「人の命をなんだと思ってるのですか!!」

「明日のために、私の弾丸はためらわないわ!!」

放たれた弾丸をファイヤーウォールでガードをして後ろに下がる。

すると突然結界が壊された。

「なんだ!？」

一方で外で戦っていたガオガイガーたちはアルカ・ノイズたちを攻撃をしていた。

『ホーミンググレイザー!!』

『烈風ダイモスキック!!』

『ガイキングランサー!!』

次々にアルカ・ノイズたちを切っていく中、マジンガーZEROは攻撃をしながらどこかを見ていた。

『どうした?』

『………ナニカが来ル………』

すると上空から砲撃が放たれてサンジェルマンたちが張った結界を破壊した。

『結界を破壊しただ!!』

全員が砲撃をした方角を見ると白き戦艦がゆつくりと降りてきた。

『あれは!!ジエイアーク!!』

『ジエイバードプラグアウト!!ジエイダー!!』

戦艦の上部が分離してジエイダーへと変形をした。

『久しぶりだなガオガイガー、どうやら懐かしの再会は後の方がいいみたいだな?ジエイアーク変形!!メガ・フュージョン!!』

さらにジエイアークが変形をしてジエイダー自身も頭部と両手に変形をしていきジエイアークへ合体をして合体が完了をする。

『キングジエイダアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

今ここに白き戦艦が復活をした。その巨体はガオガイガー自身も超える力を持ち頭部にはJジユエルが備わっている機体の名はキングジエイダー!!

「二でかい!!!いいいいいいいい!!!」

響とアリスと切歌はキングジエイダーの大きさに驚いている中、サンジェルマンたちは撤退をしていく。

増殖するアルカ・ノイズたちを見てキングジエイダーは両手などを前に出す。

『全砲門一斉発射!!』

放たれた砲撃やミサイルがアルカ・ノイズたちに命中をしていきその威力はクリスが

使うフルバーストよりも威力が高い。三体の増殖アルカ・ノイズたちはキンググジェイダーというのを排除をするためにアルカ・ノイズたちを生み出そうとしたが……『遅い!!お前たちの命はこれで終わりだ!!ジュエルジェレネーター出力全開!!ジェイクオース!!』

右手に装備されているジェイクオースが炎のように飛びだしていき増殖するアルカ・ノイズたちを次々に貫通していき増殖するアルカ・ノイズは分裂しないでそのまま爆散をした。彼の右手にジェイクオースが戻り彼は着地をした。

「す、すごい……………」

「あああのアルカ・ノイズが一撃で……………」

翼たちはキンググジェイダーを見ながらでかい機体で強大な力を持っているのを知る。キンググジェイダーは変形をしてジェイアークへとなりさらにジェイダーへと戻る。

『改めて久しぶりだなガオガイガー。』

『ジェイダー……………お前は……………』

『お前が目覚めたように……………俺も目覚めた……………宇宙のどこかだな……………そして地球へと向かい今に至る。』

『なるほどな。』

そして彼らはジェイアークに搭乗をして基地へと戻るのであった。

石を探せ

ジエイアークが仲間に加わりシンフォギア奏者たちはエルフナインの部屋へと集まっていた。

「皆さん集まっていたありがとうございます。」

『ああだがカイザーたちはまだ目を覚ましていないが……仕方がないな……』
真ドラゴンは別任務で外れていたため機能停止を免れていた。そのためほかのメンバーたちと戦えなかったのが悔しかったのだ。

「それでエルフナインちゃんどうして部屋に集めたの？」

響の言葉に全員が首を縦に振ると彼女はパソコンから映像を流している。そこに映っているのはベットから起き上がる響の姿だ。

「これって……」

「そうです。あの早乙女事件の際に未来さんとの戦いで GANG ニールを失った後の時です。」

『あの時か……』

ブラックドラゴンが納得していると映像が流れていき、響の胸元からカサブタのよう

に石が外れた。

「これは以前響さんの中にあつたガングニールによつて錬成されたガーベツジです。」

「あああの時のカサブタ!?!」

それから説明を受けて、ガーベツジがあれば彼らのファウストロップに対抗できることが判明することとなつたが……保管されている場所が問題なのだ。

現在潜水艦にはマリア、響、翼、奏の四人が乗りこんでおりそばにはブラックポセイドンが一緒に潜っている。

『確か竜宮つていう保管場所はこの海の中にあるんだっけ?』

「ああ前の戦いで起きたシャーキンが攻めた際に沈んでしまつてな……」

現在外ではガイキングたちが守っている。外ではクリス、アリス、調、切歌、セレナの五人が外を守っていた。

すると突然としてアルカ・ノイズたちが現れて職員たちに襲い掛かつてきたが新ガイキングがデスパークサイトを放ちアルカ・ノイズに命中させていく。

『くらえ!! ハイドロブレイザー!!』

『あちよおおおおおおお!!』

ダイモスとガイキングが同時に攻撃していると上空からカリオストロが攻撃を仕掛けてきた。

『させるかよ!!』

『その通りよ!!』

ダンクラーガとダンクラーガノヴァがカリオストロの攻撃をガードする。

「行きます!!」

「援護を頼むぜ!!クリス!!」

「わかつているわ!!」

電王ギアへと変えたアリスがウイングフオームへと変える。

「降臨!!満を持して!!」

「やっぱりいんだ。」

クリスはクロスボウから矢を、ソルグラヴィオンはソルグラヴィトンキャノンを放ちアルカ・ノイズたちを攻撃していると横からけん玉が命中した。

『どあ!!』

『今の技は!!』

「ふん。」

プレラーディは戻したけん玉を構えていた。ダンクラーガとダンクラーガノヴァたちはアルカ・ノイズに攻撃しており勇者ロボたちは現在では基地の方に来ていない。

『超電磁ヨーヨー!!』

『超電磁ゴマ!!』

セレナはブラックドラゴンモードへと変えてダブルトマホークで攻撃している。調はプレラーデイと交戦しているが苦戦していた。

切歌はカリオストロの攻撃を受けてクリスのところへ飛んできて彼女の顔にお尻が命中した。

「うぐぐううううう!!」

「ご、ごめんなさいデース……クリス先輩。」

一方で海の方ではブラックポセイドンが通信を聞いていた。

『なに?海上で敵と交戦中!』

「[[[!!]]」

『お前たちはそのまま回収作業に当たってくれ、今奴らに知られるわけにはいかないからだ!!』

五人は地上に上がらずに調と切歌のコンビネーションが唯一のカギだという。

「なら!!強行突破です!!」

クリスはガトリングへとギアを変えて突撃していき、カリオストロは錬金術で水のバリアーを張り彼女が放つ弾丸をガードする。

「根性!!根性!!ど根性!!」

「な!!」

カリオストロは驚いていると。

『フルチャージ』

「我が刃の前に触れひすが良い!!」

「うそん!!」

アリスが放つロイヤルスマッシュが命中して切歌はその上を飛び調と合流する。

「さあいけるデース?」

「うん!!」

調と切歌はマジンガーZとグレンダイザーモードへと変わりプレイヤーデイに攻撃を開始する。

「行くデース!!シオルダーブーメラン!!」

投げつけたシオルダーブーメランをけん玉ではじかせてるとそこにロケットパンチが飛び命中する。

「く!!詐欺師だった私たちに完全な体と理想をくれたのはサンジェルマンなワケダ!!だから!!彼女のためにも負けられないわけだ!!」

「プレイヤーデイ!!」

『いさせるか!!』

アクエリオンがカリオストロを足止めする中、プレラーデイは立ちあがり構え直す。調と切歌の二人は同時に上空へとび構える。

「ダブルバーニングファイヤー!!」

二人が放つ攻撃をけん玉を飛ばしてはじかせようとしたとき!!突然として砲撃が飛んできて調と切歌に命中した。

「きゃああああああああああ!!」

「調ちゃん!!切歌ちゃん!!」

『誰だ!!』

すると一体の機体が現れてプレラーデイたちの前に着地する。

「お、お前は………グレートゼオライマー………なぜ?」

『サンジェルマンからお前たちを頼まれてここまで来た。』

「なんだおまえは!!」

『我が名はグレートゼオライマー!!これは挨拶代わりだ………風の力よ!!吹け!!デッ

ド・ロン・フーン!!』

グレートゼオライマーから放たれた風の攻撃がコンバトラーとボルテスの二人を吹き飛ばした。

『ぐああああああああ!!』

『二人とも!!』

『この野郎!!』

新ガイキングはグレートゼオライマーに攻撃するが彼は次元連結装置を起動させて彼が放つ攻撃をガードした。

『なに!?!』

『水の力よ!!メガサーチャービーム!!』

メガサーチャービームが新ガイキングに命中して吹き飛ばした。

『新ガイキング!!』

『遅い!!』

『ガイキング!!』

『!!』

ガイキングはグレートゼオライマーの蹴りをガードしたが彼は次に火の力を使い放った。

『マグラッシュ!!』

『ドアアアアアアアア!!』

『野郎!!』

『許さない!!』

『いくぜえええええええええ!!』

アクエリオン、ダンクラーガとダンクラーガノヴァたちが武器を構えている中グレートゼオライマーは振り返りフロントスカートを合体させていた。

『放て月の力!!Jカイザー!!』

放たれた砲撃が三人に命中をしてダメージを与えていく。ダイモスはダブルブリザードを放ちグレートゼオライマーへ攻撃する。

『甘い……』

『な!!』

ダブルブリザードが空をきり後ろに現れてダイモスを投げ飛ばしてから山の力を使う。

『くらえ!!ミサイル発射!!』

たくさんミサイルが放たれて、ダイモスはダメージを受けて地面に倒れる。

『この!!スーパーイナズマキック!!』

『超重剣!!』

二人が一気に必殺技をグレートゼオライマーに放つが彼は次元連結装置を使いバリアを張り二人が放つ技をガードして、二人を吹き飛ばして雷の力を使う。

『プロトンサンダー!!』

『うああああああああああああ!!』

「ソルグラヴィオン!!」

「ガンバスター!!」

『……………帰投するぞ。』

グレートゼオライマーは巨大化して、カリオストロとプレラーデイはが乗りこむと飛びたつた。

『……………なんて力をしているんだ……………がく。』

それから地上へ戻ったマリアたちは驚いていた。

「おい!! 一体何があった!!」

「そ、それが……………突然としてカリオストロたちを助けにロボットさんが現れて……………」

『ダイモスたちがやられている!』

『おーい!! 大丈夫か!!』

『真ドラゴン!! 皆がやられた!!』

『なに!?!』

真ドラゴンはほかのロボットたちが倒れているのを見て驚いている。急いで全員を担いで基地の方へ戻るのであった。

謎の敵グレートゼオライマー　そして魔神がついに!!

「す．．．すまないダワサゼオライマー．．．．．」

『気にすることは無い。お前は休んでいろ。』

ゼオライマーの言葉にプレラーディは眠りにつくとかリオストロが声をかける。

「どうしてあーしたちがピンチだつてわかったの？」

『お前たちに渡しておいた発信機から信号が出ていてな。生命が危機になったとき俺がすぐに駆けつけられるようにセットしておいたものだ。一応サンジェルマンには許可は得ている。』

「まったくあんたは不思議なロボットさんだことで．．．．．」

『お前たちとは長い付き合いをしているつもりだ。これからもな．．．．．』

ゼオライマーは昔のことを思いだしている。彼が目を覚ましたのはある遺跡の中だった。辺りを見て自分が異世界へ来たことはすぐにわかり歩いていくとそこで出会った小さい女の子がサンジェルマンだった。

彼女は母を失い心が壊れかけていたが、ゼオライマーとの出会いをきっかけに取り戻していった。自身が木原マサキと同等な頭脳を持っていることがわかったゼオライ

マーは、彼女の願いをかなえるために錬金術や戦い方などを教えたりして共に過ごしていった。やがて成長し不老になった彼女と共に行動する中でカリオストロやプレラーデイという仲間を得て今に至る。

「ゼオライマーそろそろじゃない？」

『すまん。』

カリオストロの声を聞いてゼオライマーは意識を戻して彼女の元へ着地した。

「おかえりなさいゼオライマー………ありがとう。」

『気にするなサンジェルマン……お前の友は俺の友でもある。だからお前が気にすることはない。』

「ええ………」

『……プレラーティを寝かせてくれないか？あいつらとの戦いでダメージを受けている。』

「も、問題ないダワサ………」

『無理をするな、あとは俺が引きうける。』

「それは駄目よゼオライマー!!もしあなたが戦って死んだら私は!!」

『心配するなって俺はそう簡単にやられないさ……俺は最強のロボットだからな。とりあえず今日は休むとしようか……なにせあいつらのロボットたちとの戦い

でかなりのエネルギーを使ってしまったているからな。』

一方でSONG本部ではガイキングたちのダメージがひどくて勇者ロボたちが様子を見ていた。

『ひどいけがです………これでは当分出動はできません………』

『なんてことだ………新たな敵が出てくるとは思ってもいなかった………』

『いったい誰が彼らを?』

『確かグレートゼオライマーと名乗っていたデース!!』

『グレートゼオライマー………』

真ドラゴンとブラックドラゴンはその名前を言って彼らの様子を見ていた。いっばうで司令室の方では

『最悪な事態になってしまったな。』

『ええ私たちが探しているうちにガイキングたちが大ダメージを受けるほどの敵が現れるなんて………』

『ああ、いきなり後輩たちが吹き飛ばされたと思つたら、プレイヤーたちの前に現れてガイキングたちを圧倒していったからな。』

『なんてことなの?』

全員が落ち込んでいた。カイザー達だけじゃなくてガイキングたちまでやられると

は………二課の皆が落ち込んでいると扉が開いた。

『随分元気がないじゃねーか?』

「「「え?」」」

声をした方を見るとそこには目を光らせている魔神皇帝が立っていた。

「「カイザー!!」」

「カイザーお前大丈夫なのか?」

『ああ修復は完全に終わっているからな……俺以外だと真ゲッターにマジンエンペラー、さらにはレイアースたちが終わっている。Zたちはなんで知らないがまだ目を覚ましていない。さて俺達が眠っている間何があったのか説明をしてくれないか?』

マジンカイザーたちに説明中「かくかくしかじかなんですよ!!」

『なるほど、新たなロボットグレートゼオライマーが現れてガイキングたちがやられてしまったわけか……』

カイザーは両手を組んで考え事をしていた。グレートゼオライマーの力は自分でも勝てるのかどうかわからないからだ。

「よし特訓をするぞ!!」

「「「「「え?」」」」」

弦十郎の言葉に全員が驚いている中カイザーはほほーという。

そして訓練ルームでは調と切歌がコンビネーションでアルカ・ノイズたちを切つていった。

「死ぬデース!! サババの鎌は切り裂いていくデース!!」

「だからといって!!」

「皆あれを!!」

クリスが指をさすとそこには弦十郎とカイザーが構えていた。

「今回は俺とカイザーが訓練をしてやる。」

『悪いな俺はリハビリみたいなものだ。遠慮はいらんぞ!!』

「こちらも遠慮なくいかせてもらう!!」

弦十郎は走りだしてマリアに連続して拳を繰り出していく。マリアはガードする。

「どうしたらいいの!!」

「であああああああ!!」

「が!!」

蹴りを受けてマリアは吹き飛ばされる中カイザーは両手を前につきだしていた。

『響来るぞ!!』

「わかっていきます!! レオドライブインストール!!」

右足にレオサークルを装着し、ターボスマッシュャーパンチをはじかせて響はカイザー

にパンチを放つが……

「うえ!？」

『そーれ!!』

「ああああああああああああああああああ!!」

戻ってきたカイザーは響を投げ飛ばした。翼と奏は剣と槍を振り回して攻撃してきたが……カイザーと弦十郎は放たれた剣と槍を指で受け止めている。

「お見事。」

「おいおい。」

『『ふん!!』』

二人のタツクルがツヴァイウイングを吹き飛ばした後クリスは小型ミサイルを二人に放った。

弦十郎はカイザーの後ろに立ちクリスが放った小型ミサイルを連続してとっていき、全部キャッチして投げ返した。

「ええええええええええええええ!!」

「嘘だろ!!」

アリスとクリスは跳ね返されたミサイルをガードしたが吹き飛ばされる。

『いくぜ新技!!カイザークラッシュャー!!』

『なんだ?』

「私たちはクリスとアリスを戦場へと送ってしまったている……」

『……………』

「それで最近怖いことがあるの……」

『怖いこと?』

「ああ二人は私たちにとつてかけがえのない大切な子どもだ。だからもし彼女達がいなくなつたらと考えてしまうことがあるんだ……」

『……………心配するな。二人は俺が守る。魔神皇帝の名においてな……それにクリスとは約束している。』

「約束ですか?」

『たとえ俺の体がボロボロになろうとも守って見せるとな……』

「偉大なる私たちを救ってくれた魔神皇帝……なら私たちとも約束をしてくれな
いか?」

『約束?』

カイザーはお茶を飲みながら二人の約束とはいったい何かと想っている。

「またこうして私たちと一緒にご飯などを食べてくれませんか?」

『……………』

カイザーはこの約束がちゃんとできるか不安だった。今回の戦いは今まで以上にやばいと思っている。だから二人の約束を守れるかわからない。だが彼は……。『わかった、その約束守って見せるさ。今度はソネット殿のご飯を食べてみたいものだ。そして聞かせてくれないか？あなたたちの音楽を魔神皇帝に……。』

「もちろんだ。」

『ええだから……。』

『わかってる。』

「カイザー……。」

『済まない、だが俺は死ぬつもりはない……お前たちを守って見せるさ。だからこそ受け取ってほしい……二人ともギアを出してくれ。』

二人はギアペンダントを出すとカイザーの手から光が放たれてギアに当たる。

「これって!!」

『クリスにはマジンカイザーつまり俺の力……アリスには別のマジンカイザー……SKLというカイザーの力を託した。』

カイザーはそういつて用意してくれた部屋で寝ることにした。

カリオストロの襲撃!!クリスとアリスの新たな力。

アダムたちが使用している隠れ家のホテルの一室。グレートゼオライマーがプレラーティの手を握りエネルギーを送っていた。

彼女の体につけられた傷が回復していく。これはグレートゼオライマーが自身のエネルギーを治療の方にまわして彼女の傷を高速で治しているからだ。

「……………カリオストロ、プレラーティの様子は？」

「ゼオライマーが自分のエネルギーを送って治療をしているわ。けど回復したとしてもゼオライマーはおそらく戦えないかも……………」

「そうね。(それにあの魔神皇帝がかつてゼオライマーと会う前に助けてくれた人物かどうか確かめないといけない……………」

サンジェルマンは考え事をしている一方、カリオストロは傷つけられたプレラーティを見て拳を握りしめる。

「あーしも今回のことで決めたわ。私に任せてちょうだい。」

「何をする気なの？」

「……………考えがあるのよ。」

そういつてカリオストロが部屋を出ていくのをゼオライマーは見ていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・（すまないプレラーティ・・・・俺のエネルギーを君に託しておく・・・・・・・・）』

彼はエネルギーを彼女の体に移していきサンジェルマンの姿を見つめる。

「ゼオライマー？」

『少しだけ外へ出る。心配するな。』

彼女の肩を叩いてちらつと彼女の方を見てから呟く。

『・・・・・・・・すまない。』

一方で基地の方では響たちが見つけた石を使いギアのパワーアップがおこなわれていた。カイザー自身も参加したので解決をする。

「あれ？翼とクリスとアリスはどうしたんだ？」

『二人なら先に渡しておいた。バルベルデ共和国で再会したあの姉弟が日本へ来ているんだ。それでクリスが会いにいきアリスと翼が護衛だ。』

カイザーは椅子に座りながら話をしていた。一方でクリスたちはホテルへと来ていた。

「ソーニャ・・・・・・・・」

「クリス、元氣そうだよかったわ・・・・・・・・」

「あのさカイザーは?」

「カイザーは基地の方で元気にしているわ。ステファンにあつたらよろしくって伝えてって頼まれていたの。」

「へへへ。」

その様子をアリスは見ていた。

「どうしたアリス?」

「……いや、クリスは楽しそうに話をしているなっと思つてな……あたしはあいつの記憶を持っている……カイザーに助けてもらったときとかのな……」

「そうだったな。」

二人が話していると突然爆発した。クリスたちはとっさにギアを装着して二人を脱出させる。

「あらあら失敗をしたわ。」

「てめえは!!」

ファーストロープを纏ったカリオストロが現れた。彼女はアルカ・ノイズを生み出し襲い掛かるうとする。クリスは二人を抱えているため戦闘ができない。

(二人を抱えた状態じゃギアを使うことができない……どうしたら!!)

「クリス!!ここはあたしたちが引きうける!!お前はそいつらを避難させる!!」

「でも!!」

「心配するな、私たちはやられたりするか!!」

『そのとおりだ!!』

「ちい!!」

どこからかカリオストロに攻撃が来たので回避すると、その場に残ったノイズたちが切り裂かれた。地面に刺さったのは斧だ。

『ち!!外しちまつたぜ・・・』

「真ゲッター!!」

『おうよ!!真ゲッターさままだ!!クリス!!ここは俺達が引きうけた!!ゲッタートマホーク!!』

真ゲッターはゲッタートマホークを出してアルカ・ノイズたちに攻撃を開始した。クリスはソーニヤたちを安全な場所へと非難させるために後ろの方へと後退していく。

『久々に暴れさせてもらうぜ!!ゲッタービィビィイム!!』

頭部から緑色のゲッタービームを放ちアルカ・ノイズたちを貫いていく。翼は持つている剣をふるいアリスはネフシユタンギアから発生させた鞭でアルカ・ノイズたちを貫通させていく。

「へへーん!!見たかこの野郎!!」

「あーらアルカ・ノイズたちがあつという間にやられちゃったわね。なら彼らならどうかしら?」

カリオストロは指を鳴らすとマシンが合体して量産型ゲッターロボたちが現れる。

「量産型……貴様たちも持っていたのか。」

「そうね。さーてやってしまい『ファイヤーブラスター!!』もうすぐにくるなんてね。」

「カイザー!!」

上空の方を見るとカイザーにエンペラー、真ドラゴンにブラックドラゴンが駆けつけた。そのそばに響達も着地してカリオストロの方を見ていた。

「まあ全員がぞろぞろとやってきたわね。まあこれがあーしの狙いだけどね!!」

「お待たせしました!!」

避難させてきたクリスも参加してギアを構えているとカリオストロは何かを投げつけた。

ぱりんと割れて翼と調、響と切歌、セレナと奏。さらにマシンカイザーとエンペラーたちも姿が消えてしまう。

『おい!!』

「これはいつたい……」

「てめえ先輩たちをどこへやった!!」

「そうね、イガリマとシャルシャガナが厄介なのはプレラーティが教えてくれたの。あの子たちのユニゾンはとても厄介だつてことにね。そして魔神皇帝の存在も厄介つてこともね!!」

カリオストロの両手の装甲が展開されてビームが放たれる。真ゲッターはオープンゲットをしてゲッター2へと姿を変える。

『ドリルハリケーン!!』

接近してドリルハリケーンを放つが彼女はかわして真ゲッターの腹の部分にエネルギーの拳で殴り飛ばした。

『ぐあ!!』

「真ゲッター!!」

「野郎!! くらいやがれ!!」

アサルトギアになったクリスの両手に銃が装備されて弾が放たれるが、カリオストロは回避する。マリアがアームドギアを使い接近して切りかかるがまたも回避して殴り飛ばした。

一方で別空間へと飛ばされたカイザー達。

『くそ!! ターボスマッシュャーパンチ!!』

襲い掛かるアルカ・ノイズたちにターボスマッシュャーパンチを飛ばして粉碎していく

が次々に現れるアルカ・ノイズに苦戦していた。

『ちい数だけが多いな!!』

響・切歌コンビも苦戦していた。

「デデデデース!!」

「このおおおおおおお!!ドラゴンファイヤー!!」

左足に装着されたドラゴンフレアから炎が飛ばされてアルカ・ノイズたちに命中する。

「助かったデース!!なら私も、グレンダイザーセットアップ!!スクリュークラツシャーパンチデース!!」

飛ばされたスクリュークラツシャーパンチがアルカ・ノイズたちに命中して撃破していく。中切歌はダブルハーケンを出して切り裂いていく。

「イガリマの鎌もいいですがこっちも便利デース!!」

翼と調の方もマジンガーZへとなっている調はバイザーが降りていた。

「光子カビーム!!」

両目の部分のバイザーが光りだして光子カビームが放たれて命中する。翼の方も二刀流を使い撃破していく。

「数が多いな……だが!!そんなもので防人の剣は止められないぞ!!」

外では!!

『ミサイルストーム!!』

真ゲッター3のミサイルがカリオストロめがけて放たれるが彼女は両手のビームで破壊していく。

「なあクリス。」

「何アリス?」

「わかってるだろう?」

「ふふもちろんだよ。だって私たちって双子みたいなものだもん。あなたが何をしようとしているのかわかるぐらいにね?」

「だったらよ見せてやろうぜ?あたしたちの新しい力をよ!!」

「新しい力?」

カリオストロは彼女が言った新しい力という言葉聞いて何をするのかしら?と首をかしげる中で、クリスとアリスはギアのペンダントを触っていた。

「マジンカイザー」

「マジンカイザーSKL」

「セットアップ!!」

二人のギアが光りだして装甲などが展開されていき、彼女たちの体に装着されてい

く。クリスはマジンカイザー……アリスはマジンカイザーSKLへと変身する。二人の背中にはカイザースクランダーとウイングクロスが装着されているが二人は外して着地した。

「さーて!!あたしの銃で撃たれたい奴は誰だ!!」

ブレストトリガーを構えてカリオストロめがけて弾丸を放った。彼女は錬金術でガードしたが、上からクリスが接近して両手の装甲が回転し始める。

「はああああああああ!!ターボスマッシュシャーパンチ!!」

クリスの右手の装甲が外れてカリオストロが張った錬金術のバリアーを破り吹き飛ばした。

「が!!」

「こっちにもいるのを忘れていないかしら!!グレートタイフーン!!」

「ぐうううううううううう!!」

強烈な風を放ちカリオストロを吹き飛ばしたアリスはブレストトリガーを合体させて大斧状態にし、振り回して攻撃していく。

「おら!!どりゃ!!」

「く!!パワーアップしているのは伊達じゃないってかしら?でも!!あーしもね、負けるわけにはいかないのよね!!」

「そうかよ!! だけどこっちもな、てめえらに負けるわけにはいかないんだよ!! おりやあ
ああああああああああああ!!」

「ぐうううううううううう!!」

「アリス!!」

「これで決めてやろうぜ!! クリス!! マリア!!」

「ええ!! 決めましょう!!」

『させん!! 地震攻撃!!』

突然として地震が発生して3人と一機はバランスを崩してしまう。カリオストロが振り返るとそこにはグレートゼオライマーが立っていた。彼は地の力を発動させて地震を発生させて彼女たちの技を阻止したのだ。

「ゼオライマーどうしてここに!!」

『お前のことだ何かをすと思うって様子を見ていた。』

「あいつだ!! ガイキングたちがやられたのは!!」

すると空間が割れてカイザー達が着地した。

『……なるほどなあれがカイザーってやつか……月の力よ!!』

フロントスカートに砲撃ユニットが合体してJカイザーを放った。

『させるか!! ファイヤーブラスター!!』

Jカイザーの砲撃を、カイザーはファイヤーブラスターで相殺しようとしているが………

(なんて力をしている!!ファイヤーブラスターの威力を上回っている!!)『グリッドマンお前の力使わせてもらおう!!』

前にカイザースクランダーを装着したグリッドマンのグリッドビームのデータがカイザー自身につけられた。彼はファイヤーブラスターのエネルギーにグリッドビームのエネルギーをまわすことにした。

『うおおおおおおおお!!マジンパワー!!ファイヤーグリッドビームブラスター!!』

『何!!Jカイザーを押ししている!?ぐ……ぐ……ぐああああああああああああああああああああああああああああ!!』

新技ファイヤーグリッドビームブラスターがグリットゼロライマーのJカイザーを破り、グリットゼロライマーのボディにダメージを与えた。

「ゼオライマー!!ここは一旦引きましょう!!」

『………すまん。』

火花を散らすグリットゼロライマーの肩を支え、彼女は転移魔法を使い撤退した。

カイザーはクリスとアリスのところへと行き彼女たちの頭を撫でていた。

『よく頑張ったなクリスにアリス．．．お前たちの力見せてもらった。その力は危険でもあるんだ。マリアに調に切歌にセレナ．．．お前たちが彼らから託された力．．．それがどういう意味か．．．平和のために使ってほしい．．．』

「カイザー．．．」

一方でホテルでは。

「．．．ゼオライマー遅いわね．．．」

扉が開いて彼女は目を見開いている。カリオストロの肩を借りて彼は戻ってきた．．．だが装甲などからは火花などがばちばちと光っていた。

『す、済まない．．．』

「ごめん、あーしのせいでゼオライマーが．．．」

「いいえ、ゼオライマーをすぐに横に。」

『大丈夫だ．．．次元連結装置作動!!』

彼が言うのと体の装甲などが回復していき、火花を散らしていた装甲は綺麗な状態へと戻った。

「．．．ゼオライマー．．．大丈夫なワケダ？」

「プレラータイ．．．あんた大丈夫なの？」

「心配かけたワケダ。ゼオライマーが私に治療のエネルギーを託していたワケダ。さて

サンジェルマン……やはりアダムは黒なワケだ。」

「……やはりそうか……」

「前々から怪しいと思っていたのよねあいつ。」

『……サンジェルマン、決めるのはお前だ……俺達はお前に従う。』

「……」

果たして彼女たちの選択は!!一方でアダムの方は計画が順調に進んでいくのを見て笑っている。

「もう少しだ。もう少しで完成する!!僕が神として降臨する日がね!!」

一方でドクターヘルたちの方は最初の襲撃以来動きを見せていない。

「ドクターヘル、我々はいつまで様子見をするのですか!!」

「その通りだ、ドクターヘル。」

「慌てるではないブロッケン伯爵、あしゆら男爵よ。今度の作戦にて必要な戦力を整える必要がある。アダムとかいう奴が言っていた神の力を我々が手に入れることで戦力拡大が可能となる!!」

「ではドクターヘルはそのために……」

「そうじゃわしの地獄大元帥ロボも完成している。お前たちの機械獣もな!!そのためにお前たちには待機命令を出していたのだ。出撃は神の力が出たとき!!」

野望を募らせるドクターヘル一味。果たしてマジンカイザー達とシンフォギア奏者たちの運命はいかに!!

ツヴァイウイング

グレートゼオライマーを新技ファイヤーグリッドビームブラスターにて撤退させたカイザー達。

それから数日がたちガイキングたちも復活した。

『カイザー達すまん。』

『気にするな、お前たちが必死に戦っている時に俺達は眠っていたのだからお互いさまだ。』

お互いに話している中コンバトラーとボルテスは訓練ルームの方を歩いていた。

『おや？あれってツヴァイウイングの二人じゃねーか？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

コンバトラーの言葉を聞いてボルテスは彼女たちの戦い方を見てみると、二人が何か焦っている感じだなと思ひ声をかけることにした。

「ぐー！」

『おいおいどうしたんだ二人とも。』

『いつもと戦い方が違うじゃないか？』

「うつせー……ほっといてくれ。」

「……情けない……後輩たちは次々にパワーアップをしているのに私たちだけは何も……しつかりしないといけないのに……」

『……』

二人は声をかけることができなかつた。一方で響はプラズマドライブを回転させていた。

「はああああああああ!! さあ切歌ちゃん!! かかっておいで!!」

「行くデース!! ハンドビームデース!!」

グレンダイザーにパワーアップした切歌はハンドビームを放ち響に攻撃するが、彼女はプラズマドライブで地面に足を付けて移動してハンドビームを回避し、旋風脚を切歌に放つた。

「ぐ!! さすが響先輩……接近では負けてしまうデース!! でもダブルハーケン!!」
彼女は肩からシヨルダーブーメランを飛びだして、ダブルハーケンを構えて彼女に切りかかる。

「ならブルドライブインストール!!」

響は右手にブルホーンを装着して切歌が放つダブルハーケンを受け止める。だが切歌はチャンスと思い頭部の角部分のギアに雷をためていた。

「スペースサンダー!!」

「あばばばばばばばばばばばばばばばばばば!!」

スペースサンダーを受けて響は体を痺れさせてしまう。切歌は今はチャンスと思いダブルハーケンを振り下ろした。

「なーんてね!!」

「デデデ!!」

響はブルホーンをしまいダブルハーケンを真剣白羽どりしたのだ。そしてそのまま投げ飛ばして拳を突き付ける。

「……………降参です……………」

「私の勝ちいいいいいい!!」

お互いに解除して切歌は悔しそうにしていた。

「悔しいデース……………あともうちよいだったのに……………」

『まあ確かに。だが響あの時痺れていた体をどうやって動かしていたんだ?』

腕輪の凰牙が不思議に思っていたのは無理もない。確かにあの時響はスペースサンダーを受けたはずなのにすぐに体の痺れがなくなり、彼女のダブルハーケンを受け止めていたのだから。

「あああれ?あの時イリユージュオンフラッシュを使って切歌ちゃんに幻を見せていた

の。」

「じゃああの時くらったのは分身だったわけデース!？」

「そういうこと!!」

一方でアダムの方は最終段階へと準備をしていた。サンジェルマンたちはその様子を見ている。

「もしあれが完成したらどうなるわけ?」

「おそらくこの辺……いや世界が吹き飛ばされるワケダ。」

『……このままでは……』

「もう少しだ……もう少して完成する!!見ろ!!」

「……始まってしまった。」

テイキを中心にエネルギー波が集まり始めていく。カイザー達も基地の方から強大な力を感じていた。

『感ジル……強大ナカヲナ。』

基地の方でもアラートが鳴り全員で出動をすることになった。

『翼!!』

『奏!!』

「何ボルテス!!」

「今は」

『これを受けとりな!!』

二人から光が放たれて彼女たちのペンダントに注ぎ込まれる。

「これは……」

『いいから行くぞ!!』

全員が現場へと到着した。カイザーチームを始めダンナーやキングジエイダーにガオガイガーも全員がテイキの方を見ていた。

「よく集まったね、シンフォギア奏者に異世界のロボットたちよ。」

『アダム!! 貴様一体何が目的だ!!』

「今にわかるさ!! どういうことになるのか!!」

アルカ・ノイズや量産型ゲッターたちが現れてテイキを守るように襲い掛かってきた。

『だったら最初から全力で行くぜ!! ロケットパンチ!!』

『グレートブーメラン!!』

マジンガーとグレートの先制攻撃がアルカ・ノイズたちに命中して破壊する。ゴードンナーは己の拳でアルカ・ノイズたちを殴っていく。ブレイドガイナーとセレブレイダーは刀とビームの刃で量産型ゲッターを切っていく。

「サンジェルマンどうするの?」

「このままじゃあいつらも……」

「……私は。」

『……行こうサンジェルマン。』

「ゼオライマー……」

『今アダムの好きにやられたらこの世界は終わってしまう……俺は戦う!! あいつのおもう通りにさせてたまるものか!!』

「……カリオストロ、プレラーティ……あなたたちは逃げてもいいのよ?」

「冗談を言わないで。」

「そんなことなら死んだほうがましなワケだ。」

「……馬鹿者どもが。」

『それは俺からも言わせてもらうぞサンジェルマン、お前も立派な馬鹿だ。』

三人はファウストローブを纏いグレートゼオライマーは浮かび上がり腕のビームをアダムに向けて放った。

「!!」

全員が、グレートゼオライマーがアダムを攻撃したのを見て驚いている。彼は顔をゆ

がませて睨んでいた。

「お前たち何の真似だ？」

『悪いが……お前の計画を破壊させてもらう!!』

「サンジェルマンさん!!」

「勘違いするな……共同の敵だからこそ戦うだけだ。」

「……全く素直じゃないワケだ。」

「はいはい行くわよ!!そーれ!!」

両手からビームが放たれてアルカ・ノイズたちを破壊する。カイザーはファイナルカイザーブレードを出してアダムに切りかかると、

「魔神皇帝が僕に勝てると思ってるのか!!」

『さあな?それに俺は一人で戦っているわけじゃないんだよ!!』

『うおおおおおおお!!』

エンペラーがエンペラーソードを振り下ろしてアダムに切りかかる。彼は回避をして帽子投げつけて二人に攻撃してきたが……

『チェーンアタック!!』

ブラックライガーのチェーンアタックが帽子を貫通して二人に放たれた攻撃を防いだ。

『ブラック!!』

『お前を倒すのは俺だ!!そのためにも貴様を倒されるわけにはいかない!!』

一方でツヴァイウイングの二人は先ほど受けた光のことを思いだしていた。

「なあ翼………あいつらにもできたんだよな?」

「ああそのとおりだ。奏………見せてやろう!!私たち二人の!!」

「ああ!!もらったこの力を!!」

二人はギアのペンダントを握っていた。

「ボルテスV!!」

「コンバトラーV!!」

「セットアップ!!」

二人のギアに装甲が合体していき翼はボルテスV、奏はコンバトラーVの姿となっていた。

「すげーこれが………」

『そういうことだ!!お前に託したのは俺の力!!色んな武器が内蔵されているぜ!!』

『そして翼の方にはこの俺ボルテスVの力を託した!!』

「力がみなぎってくる!!」

「いくぜ翼!!」

『くらいやがれ!!サウルカイザー!!』

新ガイキングの胸部から放たれた光線がアルカ・ノイズたちに命中。

『うおおおおおおお!!』

『どりゃあああああああ!!』

ダンクーガの二振りの断空剣が量産型ゲッターたちを切り裂いていく。

『もらった!!』

真ドラゴンが放ったトマホークがアダムの左手に命中した。彼の左手がバチバチと火花を散らしていた。

「な!!」

「あれは……」

「人形なワケダ!」

「人形だと……人形だとおおおおおおお!!」

『許せない!!アダムをよくもおおおおおお!!』

テイキが光り出した。

「なんだ!」

「まぶしい!!」

『生マレル……』

『ZERO?』

『気ヲ付ケロカイザー……来ルゾ。』

ZEROの言葉に上の方を全員が見るとそこには何か巨大なものが立っていた。胸部のクリスタルにはティキが装着されている。

『あれが……神の力だというのか!!』

『あんなものが神であつてたまるか!!』

『さあ見せてやろう!!ディバインウエポンの脅威を!!』

『来るぞ!!』

真ゲッターが叫ぶとディバインウエポンの肩部からビームが全員に向けて放たれた。

『危ないデース!!』

『なんて威力なの!!』

『おらああああああああ!!』

ソーラーアクエリオンは拳でディバインウエポンの顔面を殴ったが……

『な!!』

全く通用せず、そのままお返しとばかりに振るわれたディバインウエポンの腕がアクエリオンに命中してビルに吹き飛ばした。

『アクエリオン!!』

「アダムお前はいつたい!!」

「僕は作られた存在だ。彼らの代行者として」

「代行者?!」

「そうさ、彼らによって作られたけど廃棄処分を受けたのさ……試作体のままね。完全すぎるという理由でね。ありえない……完全が不完全に劣るなど!!そんな歪みは正してやる!!」

『させるかああああああああああ!!』

『カイザー!!』

『であああああああああああ!!』

ダイバインウエポンが口にエネルギーをためて放とうとしたところを、カイザーはターボスマツシャーで顔を殴り宇宙のほうへと投げざらせる。ビームは宇宙の方へと放たれて衛星が破壊される。

『どあ!!』

カイザー自身もダイバインウエポンの剛腕を受けて吹き飛ばされる。

『が!!』

『大丈夫か!!』

『何とかな……』

『くらえ!!ジエイクオース!!』

『『ファイナル断空砲!!』』

『ソルグラヴィオンアーク!!』

『バスタービーム!!』

五体の技がディバインウェポンに命中したが……再生した。

『な!!』

『まじかよ!!』

『あの竜のような感じかよ!!』

『いったいどうしたらいいの!!』

『力があれば!!』

『フェニックスの力があれば……』

『フェニックス?』

『そうだ……フェニックスドライブがあれば……いや!!ガングニールの力を信じるんだ!!立花 響!!』

『そうだ!!』

『その通りなワケダ!!』

アダムに四人が攻撃を開始する。

『お前を止める!!絶対にな!!』

「このカトンボどもが!!」

響は立ちあがると魔法陣が発生する。彼女はそれを踏んでいきプラズマドライブなどを回転させてユニコーンドリルや全データウエポンを装着した!!

『アダムを困らせるな!!』

デイベインウエポンの右手で殴りつけるが、響はユニコーンドリルを回転させて威力をぶつける。

デイベインウエポンの右手に罅が入り粉碎した。彼女は再生しようとしたが……再生能力が発動しない。

「再生しない!?!」

「あれってまさか!!神殺しの力があるってことなのか!?!」

『うがああああああああああああ!!』

響は攻撃をくらったがそれでも諦めたりしない!!その時彼女の背中に翼が生えていく!!

『これはフェニックス!!力を貸してくれるのか!!』

『さあ新たな契約者よ……その力を!!』

「はい!!うああああああああああああ!!」

繭になつた響

カイザーたちは現場に残っていた。彼らの前にあるのは神の力が彼女の体を包み込んでいき大きな繭へとなっていた。

『この中に響ちゃんがいるのか?』

『ああ……生命力的には中で活動はしているみたいだが……彼女たちの話では人に宿ることはないといわれていたが……』

『しかも響ちゃんの誕生日パーティーなどが準備されていたのに……』
彼らはその様子を見ながらサンジェルマンたちのこともあった。一方で基地の方では国連が反応兵器を使うことを聞いていた。

『……』

グレートゼオライマーはサンジェルマンたちと共にSONG基地にいた。彼女たちも今回のことを考えていた。

そこに弦十郎達が現れて話をしているとカイザー達から緊急連絡が入ってきた。

「どうした!!」

『大変だ!!国連の奴らがどあ!!』

見るとカイザー達は眉を守っていた。砲撃を自分たちの体で受け止めているが………何発かが外れて繭に命中をする。

『くそ!!こいつら!!』

『ちい!!グレートタイフーン!!』

グレートはグレートタイフーンを使い砲撃を外したりしていたが………突然として繭が光りだした。

『なんだ!?!』

『見てください!!繭が!!』

カイザー達は繭の方を見るとその中からテイキが装着をしていたデイバインウエポンのようなものが生まれた。

『おいおい………』

『ぐおおおおおおおおおおおおおおお!!』

デイバインウエポン化した響の口から砲撃が放たれてカイザー達は回避をした。

『危ない!!』

『くそ!!近づけない!!』

『ビックブラスト!!』

『ボルテスバズーカ!!』

二人が放つ攻撃を彼女は片手ですべてふさいだ。それから口から砲撃を放ち戦車隊の方へと放つ。

『させるかああああああああああ!!プロテクトシールド!!』

『はああああああ!!』

ジエネシツクガオガイガーとマリアの防御が間に合い戦車隊にダメージはないが………二人は吹き飛ばされる。特殊車たちも到着をした。

『よしこれより!!響君のバースデーパーティーの続きをするぞ!!』

『カイザー!!まずは動きをとめる!!手伝ってくれ!!』

『わかった!!』

『いくぜ!!』

『チェーンライガー!!チェーンアタック!!』

『ブラックチェーンアタック!!』

ライガーとブラックライガーは、デイベインウエポンの体に巻き付けていく。

『チェンジ真ゲッター3!!ゲッターアーム!!』

伸ばした腕で体に巻き付かせていくが無理やりでもちぎろうとしていた。

『させるか!!ボルテス!!』

『おう!!』

『『ダブル超電磁パワー!!』』

『冷凍ビーム!!』

カイザーの耳部が前面に向けてデイバインウエポンの足部に命中をして凍らせていく。

『ウオオオオオオオオオオ!!』

『大人しくしてくれ!!』

全員が彼女の体を押さえている中、アンチLINKERを投入されていく。

『くそおおおおおおおお!!』

『まだだ!!』

『俺達の勇氣は!!』

『『『不滅だ!!』』』

『ぬおおおおおおおお!!』

キンググジェイダー達も加わり全員で響の体を抑えていたが……彼女を思いつきり力が入り彼らを引きちぎった!!

『『『ぐああああああああああ!!』』』

『『『きゃああああああああ!!』』』

全員が吹き飛ばされてしまうがカイザーたちは再び立ちあがる。

『まだまだ!!俺達は倒れるわけにはいかない!!』

『響ii!!』

未来の声が届いたのかダイバインウエポンの動きがとまりだす。

「今日は……響の誕生日なんだよ?なのに……なのに響がないなんて……
おかしいよ。」

???

「……………呼んでいる?」

『響……………響!!』

「……………誰かが呼んでいる?未来?」

『そうだ……………彼女が呼んでいる……………』

「風牙さん……………」

『行こう……………あの光が君を呼んでいるんだ!!』

風牙の刺した方向に飛んで行く。

「未来……………私の陽だまり!!」

「響……………私のおひさま!!」

外ではダイバインウエポんに罅が入っていきその様子を全員で見ていた。

「どうやら成功をしたワケだ。」

「みたいね……」

サンジェルマンたちもその様子を見て喜んでいいる。グレートゼオライマーも喜んでいた。

だが……

「大変です!! 反応兵器が放たれました!! 着弾まで推定330秒!!」

その言葉をカイザー達も聞いていた。

「どうするんだ!! このままじゃ!!」

「だったらこっちで切り飛ばすデース!!」

「駄目!! もし爆発させたら辺り一面が大変なことになる!!」

『……』

カイザーはその様子を見ていた。そして背中のカイザースクランダーを装着をして起動させている。

「カイザー!？」

『この世界を……核爆発などさせない!!』

『そうだな……』

カイザーの周りにロボットたちが集結をしていく。

「カイザー……何をやる気なの?」

『……クリス、ソネットたちに謝ってほしい……約束を守れそうにないとな……』

「え？」

「ぜ、ゼオライマー？」

『……さらばだ……』

「こ、これは!!カイザー達を中心に高エネルギー反応!!」

『『『『うおおおおおおおおお!!』』』』

カイザーたちは光となり上空の方へと飛んで行く。核ミサイルをつかんだ彼らはそのまま宇宙の方へと飛んで行く!!

『……クリス、アリス……翼……奏……マリア……セレナ……切歌……調……未来……そして響……さらばだ!!』

そして宇宙で爆発が起こった。

「あ……ああああああ……」

クリスは膝をついた。それだけじゃないサンジェルマンやカリオストロ……プ
レラーデイたちも涙を流していた。

「カイ……ザー？」

司令室のほうでも全員が哑然としていた。弦十郎はすぐにはつとなり状況確認をさせる。

「状況は!!」

「……反応なくなりました……ですが……カイザー達の識別反応も……ロスト……」

「ブラック……さん？」

「嘘デース……カイザー!!」

「カイザー!!」

「私は……私は!!」

「くそ!!」

「神の力を!!」

「しなければ君達にはね。」

全員が声をした方を見ると左手が現れた。アダムが穴から現れたのだ!!

「アダム!! 貴様ああああああああ!!」

「僕の手……今度こそ!!」

「止める!!」

全員が走りだした。だがアダムは光弾を放ちシンフォギア奏者及びサンジェルマン

たちの動きを止める。

「だとしても!!」

「君だけにはいかせないぞ!!」

アダムは止めようとしたときにテイキが彼の足に抱き付いた。彼はそのままこけてしまう。

「うおおおおおおおお!! 私は歌でぶん殴る!!」

ガングニール電童の力を最大にしてアダムの神の左手を殴り粉碎をした!! 全員が動けるようになったが……響はそのまま膝をついた。

「カイザー……さん……私は……私は!! ぶん殴ることしかできなかった!!」

全員が涙を流していた。カイザーやスーパーロボットたちは日本や世界を救うためにそのいのちをちらせてしまったからだ。

「わかりあいたかった?」

全員がアダムの方を見る。

「わかりあえるものか!! バラルの呪詛がある限り……呪詛を施こしたカストリーがあるかぎり!! あのロボットたちも無駄死にをしたというわけだ!!」

「ふざけるじゃねえええええええええ!!」

「ぬ!!」

「カイザー達が無駄死に? そんなことはない!! カイザーは生きている!!」

「クリス……」

「カイザーはいつも強い!! どんな時だっていつも私たちのところへと帰ってきた!! だから……」

「そのとおりだ!! あたしたちにはあいつらからもらったこの力がある!! たとえ不完全だろうとも!!」

「いくわよ!!」

「……うん!!」

「おのれええええええええええええええええ!!」

アルカノイズを出して襲い掛かるが、全員が走りだして姿が変わった。

「行くデース!! ダブルハーケン!!」

「アイアンカッター!!」

「はあああああ!! マジンガーブレード!!」

調のアイアンカッターが放たれてアルカノイズたちを切り裂いていき、切歌とマリアは武器を出して次々に切っていく。

「いきます!! ゲッタービーム!!」

「はああああああああ!! 天空剣!!」

「いくぜ!! ツインランサー!!」

セレナのブラックドラゴン形態から放つゲッタービームが薙ぎ払っていき翼と奏のコンビネーション攻撃が次々にアルカノイズたちを切っていく。

「いくよアリス!!」

「ああクリス!!」

「ダブルバーニングファイアー!!」

カイザーとカイザーSKLの力を解放させた二人のダブルバーニングファイアーが命中してアルカノイズたちを溶かしていく。響はデータウエポンたちを装着をしてアダムに攻撃をしていく。

「くらえ!! レオ旋風脚!!」

「なんの!!」彼は右手で払うが左手のバイパーウィップを放ちアダムに命中させていき。プラスチックドライブを回転させていく。

「であああああああああああああああああああ!!」

フェニックスが装着されてアダムに追撃をしたが亡くなったはずの左手で彼女が放つ攻撃を受け止めていた。

「左手!？」

「嘘!？」

「あれはいつたいい何なワケダ!!」

「そう力を失っているのさ僕は……だから保つていられないのさ僕は……僕の完成された美形を!!」

姿が変わり化け物へと変わっていく!!

「あれが……アダムの正体だということのか!!」

「知られたくなかった、見せたくなかつたこの姿を……だけど頭に角をいただくしかないじゃないか!!僕も同じさまけるわけにいかないのは!!」

彼が放つ攻撃でダメージをガードをする。

「務まるものか端末猿無勢が……より完全な僕が支配者だということを……」
高速移動をしたアダムの攻撃に響とサンジェルマンたちは吹き飛ばされた。カリオストロたちも吹き飛ばされて行く。

「なんて力だ……」

「巨体に似合わずに……素早いワケダ……」

「くそ……体が……」

「さあこれで終わりにしようじゃないか!!ええ!!猿どもが!!」

『ソレハドウカナ?』

突然拳が放たれてアダムは吹き飛ばされる。

「ぐああああああああああああああ!!」

「あれは!! ZERO!!」

「あなたはどうして!!」

『俺ノコトハイイ、カイザー達ヲ呼び戻せ!! 才前達ノカイザー達ヲ思ウ心ガ必ズヤツラニ届クハズダ!! ソノ間ハ俺ガ食イ止メル!!』

ZEROは走りだしてアダムのところへと向かっていく。

「おのれええええ!! ロボット風情が僕の邪魔をするというのか!!」

『アア邪魔ヲサセテモラウサ。俺ハ……俺は!! 俺は!! 正義のマジンガーだからだああああああああ!!』

ZEROの目が光りだしてアダムを殴り飛ばしていく中響たちは両手を組んでいた。

(カイザー……カイザー!! 帰ってきて!! パパとママとの約束を守って!!)

???空間

そこにはボロボロの状態で浮かんでいるカイザー達がいた。彼ら目には光がなくさまよっていたが……

カイザー!!

『……聞こえる……』

彼らは目を光らせていく。次々に。

『あああいつらの声が……』

『俺たちを呼んでいる……』

『こんなところで眠っている場合じゃないってことか!!』

『そうだ!!俺達はまだ!!』

『『『『戦える!!』』』』

『サンジェルマン、カリオストロ……プレラーディ……俺は……』

俺は!!』

彼らの体が光りだしていきその場所へと向かっていく!!

一方で現実の方ではZEROが吹き飛ばされる。

『ぐ!!』

「ZEROさん!!」

「何をしたのか知らないが……お前たちはここで死ぬのだあああああああ!!」

アダムの左手にエネルギーがためられていきそれを彼女たちに向けて放たれる。全

員が目を閉じた。

『ふん!!』

「貴様たちは死んだはずだ!!」

「え？」

全員が目を開けると立っていたロボットたちを見て驚いている。

「カイ……ザー？」

カイザーは振り返り彼女たちに向ける。

『君たちの声……死にかけていた俺たちを蘇らせてくれた。さあいくぞ!! アダム……お前のおもう通りにはさせない!! 俺達スーパーロボットがいる限りな!!』
「おのれええええええええええ!!」

アダムとの決戦!!

化け物となり響たちを圧倒をしたアダム、マジンガーZERROが響たちがカイザーを思う心を信じろという言葉で彼女達が祈ったとき奇跡が起きた!!

アダムの攻撃をはじかせたのはカイザーだった。そのあとにスーパーロボットたちも集結をして復活を遂げたのだ!!

『ば、馬鹿な!!なぜお前たちが……お前たちはあの反応兵器で消滅をしたはずだ!!』

『確かにお前の言う通り俺達は反応兵器と共に消滅をした……だが彼女たちの思いが次元をさまよっていた俺達に届いた!!アダム・ヴァイスハウプト!!確かに人は不完全な存在かもしれない……だがそれでも俺達は戦い続けてきたのだ!!』

『黙れ!!こうなったら貴様たちもろとも!!』

アダムが接近をしようとしたとき攻撃が放たれた。

「なに!？」

「おいあれって!!」

現れたのは機械獣の大群だった。

「おのれええええええ!! わしの計画が貴様たちのせいであつたわ!!
こうなれば最終決戦よ!! あしゆら男爵!! ブロッケン男爵!! 皆殺しにするのだ!!」

「行け!! 機械獣ども!!」

「暴れるがいい!!」

『へ!! だつたらドクターヘルは俺達に任せやがれ!!』

マジンガー乙始めカイザーチーム以外が機械獣たちの方へと向かっていく。カイザーたちは乙たちに感謝をしながらアダムの方を向いていた。

シンフォギア奏者たちやサンジェルマンたちは彼らのそばに来た。

『さていくぞ……お前たち!!』

「はい!!」

「カイザー……」

『話は後でしてやる。いくぞ!!』

さて機械獣たちの方へ戦っているマジンガーたちを見てみよう!!

『へ!! 復活をしたところで!! このマジンガーに勝てるわけないだろうが!! くらいやがれ!! うなれ鉄拳ロケットパンチ!!』

乙から放たれたロケットパンチが機械獣のボディを貫通をしていき爆発させていく。一方でグレートとグレンダイザーは雷エネルギーを吸収していた。

『必殺。パワー!!サンダーブ레이크!!』

『スペースサンダー!!』

二人が放つ雷鳴が機械獣たちに命中していき爆発をしている中ゲッタードラゴンはダブルトマホークを振り回して切っていた。

『ゴッドゴーガン!!』

『ダイターンキャノン!!』

『バスターミサイルだ!!』

『トライダーミサイル!!』

三人のミサイルや矢が放たれて機械獣たちに当たり撃破していく中ゴードンナーとブレイドガンナーはツインドライブモードへと姿を変えていた。

『おらおら!!』

ゴードンナーはゴークサーと合体をしてツインドライブモードをフル解放させていた。ブレイドガイナーは変形をしたセブレイダーが合体をしたブレードを振り回して機械獣たちを刺していた。

『いくぞ!!炎の矢!!』

『水の龍を受けてみる!!』

『緑の疾風!!』

三体の魔神の魔法が機械獣たちに命中をしていくが機械獣の数が減っていかない。

『反中間主砲!!五連メーザー砲!!一斉発射!!』

キングジェイダーの一斉発射されて機械獣たちが次々に爆発を起こしていく。

『くらいやがれ!!無限交差!!』

『ソルグラヴィトンブリンガー!!』

『バスタービーム!!』

『ダブルハイドロボレイザー!!』

スーパーロボットたちの攻撃で機械獣たちの数が減っていく中、マジンガーZとグレートマジンガー、グレンダイザーとゲッタードラゴンは地獄大元帥ロボと対面をしていた。

「まさかマジンガーZたちがこの世界にいるとは思ってもいなかったわ……」

『へ!!また地獄に叩き落としてやるぜ!!』

『そう簡単に地獄に落ちるものか!!』

『ドクターヘル!!』

『ここは我がが!!』

『させるかああああああ!!』

あしゅら男爵とブロッケン伯爵が乗る機械獣の前にジェネシックガオガイガーに

ゴードンナーが駆けつけた。

『ここは俺達が引き上げた!!』

『ボスは任せませ!!』

『よっしゃ!!』

四体は地獄大元帥のところへと向かっていく中コンバトラー達も奮闘をしていた。

『くらいやがれ!!Vレーザー!!』

『グランドファイアー!!』

二人の超電磁ロボは着地をして背中合わせに立っていた。

『どれくらい倒した?』

『さあな、50体ほど数えてからは全然だ!!』

『俺もだ!!』

『あちよおおおおおおお!!』

上空からの敵をダイモスが蹴りで粉碎をして着地をした。

『だが俺達はこのまけるわけにはいかない!!』

『わかっているさ!!いくぞ!!天空剣!!』

『ツインランサー!!』

『三龍混!!』

三体はそれぞれの方向に武器を構えて突撃をして機械獣たちを切ったりしていく。

「おのれ!!このあしゆら男爵の邪魔をする気か!!」

「いくぞあしゆらよ!!」

『はああああああああ!!ウィルナイフ!!』

ジエネシツクガオガイガーはあしゆら男爵ロボットを縦に真つ二つにしたが……

『なに!?!』

あしゆら男爵ロボットはなんと左右に別れてジエネシツクガオガイガーの両方から

挟んできたのだ!!

『なんだこの鞭は!!』

「どうだこの鞭は貴様の力でもちぎれないほどの合金を使っているのさ!!へっへっへっ

へ!!』

(まずいなジエネシツクガオガイガーの方も挟まれてるからな……さてどうする

?)

ゴードンナーはならば!!と右手にエネルギーを込めている。

「さーてとどめを刺してくれるわ!!しねえええええええええええええええ!!」

『チャンスだ!!』

接近をしてきたブロッケン伯爵ロボにゴードンナーの拳が命中してハートブレイ

カーを発動!!

「なに!?!」

膠着をしたブロッケン伯爵ロボにゴードンナーは固まった鞭を引きちぎり青い炎が解放されて飛びたつた。

『ファイヤーソウル! ブレイカアアアアアアアアアアアアアア!!』

放たれた蹴りがブロッケン伯爵ロボを粉碎をして撃破した。

「む、無念だ!!」

「ブロッケン!!」

『今だ!! ジェネシックパワー!!』

「どあ!!」

あしゆら男爵ロボットを吹き飛ばしたガオガイガーは右手を回転させる。

『ブロウクンマグナム!!』

飛ばしたブロウクンマグナムが弾丸のように飛びたちあしゆら男爵ロボットを貫通していく。

「お、お許しをドクターヘル!! ぐああああああああああああああ!!」

「あしゆら………ブロッケン………おのれええええええ!!」

『ドクターヘル!! 後はてめえだけだ!!』

「おのれマジンガーZ!! 貴様との因縁は別の世界でも同じのようだな!!」
『俺的には迷惑な話だぜ!!』

地獄大元帥ロボから放たれる鞭を回避をして光子力ビームを放つがマントで防御される中ミサイルなどが放たれる。

『ぬお!!』

『俺たちのことを忘れてもらっては困るぜ?』

「おのれグレートマジンガーにグレンダイザー。ゲッターロボ!!』

『よし三人とも準備はいいか?』

『いつでもいけるぜ?』

『準備完了だ!!』

『一気に決めてやろうぜ!!』

「ぬ!?!」

『いくぞ!! 反重力ストーム!!』

グレンダイザーの胸部から反重力ストームが放たれて地獄大元帥ロボは上空に浮かばされた。

「なに!! だがそんなもので!!」

『Z!! グレート!!』

『よーし来た!!』

『くらえ!!』

『ダブルバーニングファイアー!!』

「ぬおおおおおおお!?」

さらにブレストファイヤーにブレストバーンのダブルバーニングファイアーの威力が混ざり地獄大元帥ロボのボディにダメージを与えていく。

『これで終わりだ!!ファイナルダイナミックスペシャル!!』

シャインスパークを纏ったドラゴンが突撃をしてシャインスパークが地獄大元帥ロボに命中をした。

「ぬおおおおお!!またわしは負けるといのか……ふっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

ファイナルダイナミックスペシャルを受けて地獄大元帥ロボは大爆発を起こしてドクターヘル一味は全滅をした。

機械獣たちも地獄大元帥ロボが爆発したのかそれぞれが爆発をしていく。一方でアダムの戦いをカイザーたちががしていた。

『いくぞ!!ゲッタートマホーク!!』

真ゲッターロボが放ったゲッタートマホークをアダムは素早く回避をして攻撃をし

ようとしたが……ネットが発生をして彼の体を覆っていく。

『フィンガーネット!!』

ブラックポセイドンと真ドラゴンがフィンガーネットでアダムに巻き付けていた。

「そんなもので僕を止めれると思うなあああああああああ!!」

アダムはフィンガーネットを破りカリオスト口とプレラーデイは拳のエネルギー弾とけん玉をアダムに向かって放つ。

「そんなこうげきが僕に効くとも思ったのかい?」

「厄介なワケだ。」

「けーれどあーしただけじゃないのよね?」

「なに?」

「はああああああああ!!」

「であああああああ!!」

サンジェルマンと翼が上空から切りかかるがアダムは右手で彼女たちの攻撃をガードをしたが、そこに奏とマリアの槍と短剣のエネルギーを纏った攻撃を受けて吹き飛ばされる。

『はああああああああ!!』

エンペラーとクリスとアリスはエンペラーブレードとカイザーブレード、牙斬刀を装

備をしてアダムへ攻撃をする。

「なめるなあああああああああ!!」

アダムから放たれる攻撃が全員をふきとばした。

『ちいなんて奴だ……』

『……マジンカイザー……力を貸してくれないか?』

『力?』

グレートゼオライマーの言葉に首をかしげる。

『俺の技烈メイオウ攻撃なら奴を倒すことができる……だがその威力は強大でな……』

『そういうことか……わかった。』

カイザーはカイザースクランダー装着をしてマジンパワーを発動させる。そのまま彼は接近してきた。

「突撃をする馬鹿か……くらうがいい!!」

アダムの攻撃を受けるが、彼の超合金ニューZαには彼の攻撃は効いていない。そのまま彼は光子力ビームを地面に向けて放った。

「何をして無駄だ僕に勝つことなど……」

『できるんだよなそれが?』

「なに!？」

彼は後ろからがしつとつかんでアダムの動きを止めてそのまま上空へとび立つ。

「カイザー何を!!」

全員が上空の方を見るとグレートゼオライマーが両手、胸部、頭部を光らせていた。彼の技烈メイオウ攻撃を放つためにカイザーはアダムを上空へと一緒に飛んだのだ。

「離せ!! 貴様も一緒に死ぬというのか!!」

「それはどうかな? ジエネシック!!」

『おう!! ヘル&ヘブン!!』

ガジェットツールを装着をして両手にエネルギーがたまっていく。

『ゲム、ギル、ガン、ゴー、グフォ!! ふん!!』

両手を組んでエネルギーが放たれてアダムの動きがとまる前にカイザーはその前にアダムから離れる。

響たちもその様子を見ていた。そしてグレートゼオライマーは両手を一気に力を解放させる!!

『くらうがいい!! 俺の必殺技を!! 烈メイオウ攻撃を!!』

放たれた烈メイオウ攻撃はアダムに命中をしていく。

「馬鹿な!! この僕がロボット如きにやられるなんて!! だがそんないつか……君達

は絶望をするだろうね……未来に……ふふふふはははは……
はははははははははははははははははははははは!!」

アダムは笑いながら烈メイオウを受けて消滅をした。カイザー達は着地をして辺り
を確認をしていた。

『敵反応ゼロだな。』

『………マジンカイザー。』

『ZERO、お前が彼女たちに声をかけたみたいだな?サンキュー』

『気にすることはない………我はそう思っただけだ。』

『あれ?お前言葉が………』

彼らは話をしていると響達が走ってきた。

「カイザーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

『ぬお!!』

ギアを纏ったままのクリスとアリスに体当たりをされたのでカイザーは地面に倒れ
てしまう。

「馬鹿馬鹿馬鹿!!カイザーの馬鹿!!」

「そうだけ!!あんなことをして………パパとママになんて報告をすればいいんだよ
!!」

『……すまん二人とも、だが反応兵器を無事に爆発させるには宇宙しかなかった。それで俺たちの全エネルギーを使い宇宙で爆発させた……。だがお前たちの声を聞いて俺達はこの世界へ戻ってこれた。ありがとうな……。』

カイザーは彼女たちの頭を撫でている中ほかのシンフォギア装者たちもほかの口ポットたちと話をしていた。

「レイアースさん達が無事でよかったです!!」

『すまない響ちゃん。』

『俺達も正直言つて死んだと思つていたよ。』

『けれど君たちの思いが聞こえて目を覚ました。』

『日輪がある限り僕は戦い続けるけどね?』

『ダイターンの兄ちゃんそれは関係ない気がするけど?』

『うんうん。』

『あはははそうかな?』

全員が話している中グレートゼオライマーたちは話をしていた。

『サンジェルマンたちこれからどうする?』

「……彼らに投降をしようと思つている……」

「そうねー。」

「私たちはサンジェルマンについていくワケだ。」

『そうか、なら俺も一緒に投降をするさ……お前たちと同じように罪を償っていかつもりだ。』

戦いは終わった。カイザー達も無事に復活をしてアダムやドクターヘルの一味を撃破した。

サンジェルマンたちは罪を償うことでSONG所属となった。グレートゼオライマーも同じで彼女たちと同じチームで活動をするようになった。

カイザー side

俺は胸部にいるキャロルに声をかけていた。

『正直言つて今回ばかりは俺もやばかったかもな……』

『ああそれは俺も同じだ。あの反応兵器を撃破したのはいいがその威力が次元を開けて俺たちを次元の中でさまようほどだったからな……。だがあいつらの声が聞こえて光が見えた。』

『これが奇跡つてやつか……。おれが奇跡という言葉を使うことになるなんて……。思つてもいなかっただけだな?』

キャロルが中で言っているが確かにその通りだな……。お前の口から奇跡という言葉を書くことになるのはな……。今中では響ちゃんの誕生日パーティーが開

かかっているが俺達ロボットたちはそれぞれのこともあり彼女の誕生日パーティーに参加をしていなかった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

これから平和になつていくのか？それとも新たな敵を呼び出すのか・・・・・・・・だがそれでも俺は・・・・いや俺達は戦い続けるだろう・・・・・・・・平和が訪れるまでな・・・・・・・・

約束を果たす為に

SONG基地

『これで終わりなのか？』

『ああ終わりだぜ？』

マジンガーZにグレートゼオライマーは聞いていた。彼はほかのロボットたちのようにリミッター機能を装着されていた。彼らは普段はシンフォギア装者たちと同様にリミッターを付けられていた。

そのため普段の出力よりも抑えられておりリミッターを解除するには弦十郎たちの承認が必要となっている。

『……………大技などは使えるが普段の威力よりは下がっているのだな？』

『まあな？だがそれでもノイズなどの相手には戦えるからいいだけだな。』

『アダムのことか？』

『そういうこった。あの時はリミッターがかかっていたから、あいつの技を相殺するどころか逆にやられてしまったぐらいだ。情けないぜ……………』

マジンガーはため息をつきながら彼の案内をするために移動をする。本来はカイ

ザーがやる任務なのだがその彼はどこにいるのか？

カイザーは現在クリスとアリス姉妹に連れられて彼女たちが住んでいる家へと連れてこられた。

その理由は戦いの前、雪音夫妻との約束を果たす為に家へと来たのだ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「どうしたのカイザー？」

『・・・・・・・・いや、あの時反応兵器を消滅させたとき・・・・・・・・俺達は確かに死んでいた。そのせいでお前たちを悲しませてしまったな・・・・・・・・』

「あの時は正直言っただけであたしたちシヨックだった・・・・・・・・カイザー達があんなこと言うなんて思ってもなかった・・・・・・・・」

「そうだね・・・・・・・・私シヨックだったよ。カイザーが死んだなんて信じられなかった。でも必ず帰ってくるかと信じていた。だから嬉しかったよ。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

カイザーは彼女たちの涙を見て申し訳ないなという気持ちになり悲しませてしまったなど彼女たちの後ろを歩きながら家に到着をしてソネットが応対してくれた。彼女の案内で家の中へと入り雅律も彼を見てホッとしていた。

「カイザー・・・・・・・・よかった無事だったのですね？」

『……………雅律とソネット……………すまなかった。お前たちの約束破ってしまった……………』

「え？」

二人はカイザーがそんなことを言うとは思ってもいなかったのでもうどうということか説明を聞くことにした。

『俺は彼女たちを守るために反応兵器を消失をするために宇宙で爆発させた。その威力は次元を開かせてしまうほど……………それに飲み込まれてしまい俺達は次元を迷ってしまった。』

「そんなことが……………」

『だがクリスたちが俺たちのことを思う心が眠っていた俺たちを再び覚ましてくれた。そして俺達はこの世界へ帰ってこれたというわけだ。』

「……………そうでしたか、ですがあなたは帰ってきて約束を果たしてくるために来たのですね？」

『ああそのとおりだ。ソネットと雅律……………聞かせてくれないか？お前たちの歌を……………このころの歌を……………』

二人は準備などをしてカイザーたちは座って待機をしている。雅律はピアノを弾きソネットが歌いだす。

(なんていい歌声なんだ．．．．俺の心が癒されていくな．．．．だが絶唱と似ているのはなんでだろうか？セレナが絶唱を歌ったとき俺は目を覚ました。まああの時の俺は記憶がなかった状態だからな。だが．．．．)

カイザーは考えていたが彼女の歌が終わったので手を叩いた。

『見事な歌だった。流石だな．．．．』

「ありがとうカイザーさん。あなたがいなくなったら私たちはあそこでクリスを残して死んでいたかもしれません。」

「そうだな．．．．改めてカイザーありがとう。」

『．．．．俺は助けてという声を聞いて飛んできただけだ。それにあの時助けられたのもクリスがいたからだ。彼女のあなたたちを助けてほしいという声が俺に届いてあの場所へ行くことができた。』

「カイザー．．．．」

彼はクリスの頭を撫でて彼女はえへへと笑っていた。カイザーも彼女の笑顔を見て守って良かったと喜ぶのであった。

そのあとにご飯などを食べてカイザーは寝ようとしたが．．．．一度試してみたと思つたことがあった。

「どうしたのカイザー？」

『いや俺ってどこまで体が小さくなるのか試したことがないからな……とりあえずクリスの肩に乗れるぐらいに小さくなるか……』

カイザーは念じると体が小さくなり彼女の肩に乗れるぐらいに小さくなっていた。

「ちっさ!!」

『なるほど……よいしよ』

カイザースクランダーを起動させてクリスの肩に乗った。

「あ、重くない。」

「いいなクリスあたしにもカイザー貸してよ!!」

『おれはおもちやじゃないのだが?アリス待っている。』

カイザーは今度はアリスの肩に乗る。

「本当だ重くないぜ?」

「本当どうなっているの?」

『わからないな、おそらく体が小さくなることで俺の重さなども軽くなっているような気がする。これなら俺もリディアン学園の中へ入ることができるってわけだ。』

「なーるほど。つておい!!」

『冗談だが実は調と切歌に頼まれてな……それで明日ついていくように言われていたんだ。』

「あいつら一体何をする気だよ．．．．．」

アリスは切歌たちが何をするのか気になってしまいがアリスはうーんと考えていた。

「カイザーは何か聞いているの?」

『残念ながら何も聞いていない。とりあえずこれでお前たちの肩などに乗れるってことが判明をしたからな．．．．．まあノイズたちが出てきてもすぐに大きくなって戦えるさ。』

カイザーはさてそろそろ寝ないとやばいじゃないかと声をかけて二人はお風呂に入っていくのをカイザーは見送った。

カイザー side

『．．．．．』

あの子たちを見送った後俺は小さい体のまま窓を見ていた。俺達が今まで守ってきたことは正しかったのかな．．．．．けどそれでも俺達は戦い続けてきた。パイロットたちと共にだからこそ今度は俺自身の意思で戦っている。

『クリスやアリスのような優しい人が世界を変えてくれることを信じて俺達は戦い続けるさ。ノイズたちとね。』

それが俺がこの世界で戦う意味なのかもしれないな．．．．．

カイザー学園へ

カイザー side

やあマジンカイザーだよ。さて今俺がいる場所は。

「すごいわこれ………まるで本物みたいだわ!!」

「どれどれ? 本当………これどこで売っているのかしら?」

現在女子生徒たちに体をべたべた触られていた。まあ俺自身は問題ないけどさ………確か調たちの家に行き体を彼女たちの肩に乗れるぐらいまで小さくなつてからカバンの中へダイブをして学校に到着。

そのあとは彼女たちのカバンの中から授業の様子を見ながら寝ている切歌にターボスマツシャーパンチを放つて起こしたりしたな………学校で寝ようとするな切歌。

昼休憩となり俺は外に出されると彼女たちのクラスの友達などが集まってきて俺の姿を見て目を見開いたりキラキラさせていたのを見たな。それで今の状況となり俺自身は困っている。

調と切歌もそろそろ返してくれないかと思つたがなかなか皆が俺に夢中になつているせいで俺自身も動くわけにはいかなかったので困ってしまった。昼休憩が終わり俺自身

は切歌のカバンの中に侵入をして授業の様子を見ていた。俺自身は機械だからこういう授業などは簡単だなどと思いつつもほかの人物たちの様子を見ていた。

学校の時間はあつという間に過ぎてしまい学校から彼女たちは遊びに行くことになり俺自身はそのまま連れて行かれる形になってしまったが……。切歌はカバンを閉めていなかっただかあるはずみで俺はそのまま落下をしてしまった。

『どあ!!マジンジャンプ!!』

脚部のロケットエンジンを始動させて俺は地面に着地をする。さてどうするか……。

『カイザースクランダーを置いてきてしまったからな……。おそらく元の状態のままだしな……。困ったものだ。』

俺は仕方がないのでSONG基地まで歩いて帰ることにした。

カイザーside終了

「ついたデース!!つてああああああああああああああああああ!!」

「どうしたの切ちゃん?」

「カイザーがいないデース!!どこに落とされたのデース!!」

「ええええええええええええええ!!」

二人は家に到着をして気づいたのであった。とりあえず二人は今日歩いた場所をも

う一度探す為に走るのであった。

一方で小さいカイザーは？

『……………普段よりも小さくなり、さらには空を飛んでないところなにも人や街がでかく感じるんだな……………もしかして響達は普段の大きさになっている俺の姿を見てこんな気分をしていたのかな？』

彼は歩いてみると猫が現れて威嚇してきた。カイザー自身は猫の相手をする事はしないで先に進もうとしたが猫が回りこんできた。

『仕方がない。』

猫は爪でカイザーへ攻撃をしてきた、彼はそのボディでガードをしてそのまま猫の手をつかんで投げ飛ばした。

『にゃあ!』

猫は投げ飛ばされたがカイザーはそのままダツシユをして逃走をした。これ以上戦う理由がないからだ。猫もカイザー相手に戦うのは不利と考えて追いかけるのをやめた。

一方で調と切歌から連絡を受けた響達もカイザー搜索を開始をした。

「カイザーさー……ん!!」

「カイザーさん!!」

『どうだ!!』

『こつちにはおらん!!』

『いったいどこにいったんだ?』

ロボットたちもカイザー搜索をしており基地の方でもカイザーを探していた。

『どうだ!!』

「駄目ですカイザーと通信が取れません。」

「うーむ……………」

その理由はカイザー自身が通信機能をOFFにしているためであった。学校で通信が鳴らせるわけにはいかないと思いかいザーはOFFにしていた。

だからこそカイザー自身はすっかり忘れていた。通信機能がOFFになっていることを……………」

そんなことは知らない装者たちは通信をしてるがカイザーからの返答はなかった。そのためどこにいるのかわからない状態なのだ。

さてそのカイザーはというと?

『……………疲れたな……………大きくなつてもいいが流石にいきなり大きくなるわけにはいかないよな……………困つたな通信機能……………あ。』

カイザーはやっと自分がここで通信機能がOFFになっていることに気づいた。

『これじゃあ彼女たちが通信をしてもつながらないわけだ。とりあえず機能ONにして……』

彼は通信機能をONにすると通信がたくさん入ってきた。

『どあ!?!』

彼は冷静に入ってきた通信を起動させた。

『カイザー!!あなたどこにいるの!!』

『その声はマリアか、悪いが今からデータを送るから来てくれないか?』

「わかったわ。」

彼女は通信を切りカイザーは座って待つことにした。それから数十分後。

「見つけたわよカイザー。」

『やあマリア。』

彼は保護された。そのあと切歌と調が涙を流しながら彼に謝るのであった。

第六章 ミケーネ帝国と恐竜帝国の襲来!! 暗黒大將軍現る。

カイザー side

いやー昨日は小さくなってしまつて色々な旅をしてしまつたな。猫と戦うは車にひかれて吹き飛ばされるなど……いやー通信機能をONにしてなかつたら俺はどこに行つていたのだろうか？

現在俺たちはシユミレーシヨン室でサンジェルマンたちと模擬戦をしていた。

「はああああああああ!!」

彼女が放つ弾丸を両手を回転させてガードをしてそのまま殴ろうとしたがその前にグレートゼオライマーが立ちふさがりカイザーナツクルを受け止めていた。

「ゼオライマー……すまない。」

『気にするな!!であ!!』

彼の両手の光球が光りだしてエネルギー波が放たれて俺は吹き飛ばされてしまう。ほかのみんなも戦っている中グレートの様子がおかしかった。

だがそれは俺も同じだ。なんだろうこの感じは……どこかで感じたような力

だ．．．．．

「グレート？」

「カイザーどうしたの？」

『いや何でもない．．．．．だが何だろうか？』

俺達は二人の共通して嫌な予感が当たらないといいが．．．．．と考えていたら警報が鳴りだした。この警報はかつてグリッドマンと共闘をしたときに強大なエネルギーが発生をしたときになる警報の方だ。

俺達は訓練をやめて司令室へと全員が集結をしていた。

「来たか．．．．．今回は強大なエネルギーが発生をした。今回は全員で出動をしてもらいたい。」

「私たちもなワケだ。」

「ああ今回は嫌な予感しかない．．．．．全員で出動だ!!」

「「「了解!!」」」

俺達ロボット軍団は空を飛び先に現場の方へと急行をした。

『あの辺じゃなかったか？』

『．．．．．』

「グレート？」

『気を付けろ来るぞ!!』

グレートマジンガーの言葉に全員が回避をすると光線が放たれて通過をした。響達も一体誰が攻撃をしてきたのかと見ていると俺とグレートは驚いている。

相手は頭部に二つの角に背中にマントが背負っており、さらには胸部には顔が装着されていて腰には剣が装備されている敵……間違いない。

『暗黒大將軍………』

かつてグレートも戦ったことがあるのか……。俺の世界でもやつはいた。暗黒大將軍が指揮するミケーネ帝国の戦闘獣の攻撃でマジンガー軍団は全滅をした。

俺自身も暗黒大將軍と戦ってなんとか勝つことができた。まさか再び暗黒大將軍と戦うことになるとはな………

すると奴の目が光りだした。

「きけーい!!我が名は暗黒大將軍!!ミケーネの將軍である!!」

『暗黒大將軍!!』

「ほほーうまさかグレートマジンガーにマジンカイザーがおるとはな……。それにわしが知らないロボットや人間がいるみたいだな……。だが!!」

奴は腰の剣を抜いて構えている。俺達も構えようとしたとき………

『暗黒大將軍!!見つけたぜ!!』

「あれって!!」

「マジンガーZ!!」

『俺!?けどなんだあの翼!!』

こっちのマジンガーZはあちらに現れたマジンガーZを見て驚いているが、俺自身もあんなマジンガーZは見たことが……いやあつたわ。あの時に乗っていた兜甲児が使っていたマジンガーZがあんなのだったな。

確かゼウス神の合金を使って作られたのがあのマジンガーZだったっけ？

「またお前か……貴様の相手にならんわ!!」

『ほざけ!!ゼウスの名において!!ビツクパンパンチ!!』

『よせ!!』

グレートマジンガーが止めようとしたがまあ名前的に真マジンガーZにしておこう。背中に装備されたスクランダーがマジンガーZが変形をしていき巨大な拳のようになり暗黒大將軍に突っ込んでいく。その輝きは黄金の拳のように……

「ふん!!」

『ぐああああああああ!!』

暗黒大將軍が持っている剣の一撃で真マジンガーZが地面に叩きつけられる。奴の力以前よりも上がっている!!

カイザーside終了

「さあかかってこい!!」

『いくぜ!!』

「どりやああああああああああああ!!」

ゴードンナーと響は接近をして拳をふるって殴るが暗黒大將軍は二人の拳を剣で受け止める。

『くらいやがれ!!ビックブラスト!!』

『ボルテスバズーカ!!』

『ファイブシューター!!』

三体の超電磁ロボは射撃武装で攻撃をした。

「甘いわ!!」

暗黒大將軍は持っている剣で三人の攻撃を斬撃で叩き落とす。そのまま衝撃刃を飛ばして後ろから迫っていたアクエリオンとソルグライヴィオンを吹き飛ばした。

『が!!』

『野郎!!ダイガンを受けてみやがれ!!』

「はああああああああ!!」

翼は周りに剣型のエネルギーを発生させて暗黒大將軍へ攻撃をするが彼はマントで

二人の攻撃をガードをした。

『くらいやがれ!!』

『『『ゲッタービーム!!』』』

四人のゲッタービームが一つになり一つの大きな砲撃になった。

「ぬおおおおお!!?」

彼は持っている剣でガードをしているが押ししていた。

「さらにセレナ!!」

「はい!!」

二人はアガートラムの短剣にエネルギーを集中させてゲッタービームに放ち威力を上昇させていく。

「少しはやるようだな?だがこのわしを倒せると思うな!!」

暗黒大將軍は放たれたゲッタービームを上空にはじかせた。

『嘘だろ!!』

「おいおいなんて奴だよ。」

『暗黒大將軍!!』

グレートマジンガーはマジンガーブレードを抜いて暗黒大將軍に振り下ろす。彼が放つ斬撃を暗黒大將軍ははじかせていく。

「ふっはっはっは!! 貴様と再び戦える時が来るのをどれだけまっていたことか!!」
『こつちとしては迷惑なのだがな!!』

『はああああああああああああああ!!』

そこにマジンカイザーとマジンエンペラーも参戦をして三体の機体が暗黒大將軍に攻撃をしている。

「わしもパワーアップをしているのだ!! くらうがいい!! 雷鳴よ!!」

上空に雷鳴が発生をして三体に命中をした。

『ぐああああああああ!!』

『が!!』

『ぐ!!』

「カイザー!!」

「切ちゃん!!」

「行くデース!!」

『待て!!』

二人にストップをかけたのはダイターンだった。彼はシンフォギア装者たちでは暗黒大將軍に勝てないと思いつめたのだ。

『くらえ!! 一斉射撃!!』

『シャントウロン!!』

『光と闇の舞!!』

『大回転魔弾!!』

「ロボット風情が!!調子に乗るな!!くらえ!!」

暗黒大將軍は剣を真上に上げると竜巻が発生をして超龍神たちに命中をして彼らのシンメトリカルドッキングを解除する威力だ。

『みんな!!ブロウクンマグナム!!』

『五連メーザー砲!!』

ジェネシックガオガイガーのブロウクンマグナムとキンググジエイダーの五連メーザー砲が放たれて暗黒大將軍を吹き飛ばした。

「ほほーう俺にダメージを……なんだゴーン……しょうがない。グレートマジンガーそしてそれに協力をする者たちよ!!これは我らミケーネ帝国と恐竜帝国の復活の日よ!!」

『なに?!恐竜帝国だ!!』

ゲッタードラゴンは暗黒大將軍が言った言葉に反応をした。かつて初代ゲッターロボが倒した恐竜帝国が復活をしたことを伝えたからだ。

「その通りよ!!さて今日のところは撤退をさせてもらうぞ!!ふっはっはっは!!」

暗黒大將軍はマントを振るい消えた。マジンカイザーたちは消えた暗黒大將軍のところを見ながら着地をした。

「新たな敵………」

「ミケーネ帝国と言っていたな……グレート……あなたはあいつらと戦ったのですか？」

『ああそのとおりだ。だが暗黒大將軍の力は以前よりも上がっていたのは事実だ……』

「とりあえず倒れているあのマジンガーZを連れて帰ろうぜ？」

アリスの言葉を聞いて倒れている真マジンガーZをガイキングと新ガイキングが抱えて帰投をする。

新たな戦いが今始まった。

真マジンガーとマジンカイザー

カイザー side

暗黒大將軍が撤退をして俺達もダメージを受けて機能停止をした真マジンガーを連れて基地の方へ帰投をした。俺は彼がいつ目を覚ますかわからないので彼が眠っている場所を訪れていた。

「カイザー。」

『クリスとアリスじゃないか……. どうした?』

「いやカイザーがこっちにマジンガーZが運ばれていたのを見ていたから知り合いかなって。」

『知り合いだな……. とある世界で共に戦った友だからな…….』

俺は自己修復されている真マジンガーZを見ながらそう思っていると目が光りだしたのを見た。

『……. あれ?ここは…….』

『目を覚ましたみたいだな?』

『……. お前はマジンカイザーか?姿があったときと違うけど…….』

やっぱりそう質問をするよな？以前あったときよりも色が黒くなったりしているからな。

『色々とおつてな、今はこの体となっている。だが久しぶりだな？』

『まあな……』

『一体どうした？なにがあつたんだ……』

俺はなぜ真マジンガーZがこの世界へ追いかけてきたのか説明を聞くことにした。突然上空からやってきたから俺も驚いたからな……

『ああ奴が突然復活をしたからな。俺は奴を追つてこの世界へ行きやられたわけ……あいつの力は以前よりもパワーアップをしてやがった。』

『やはりな……』

俺は両手を組んで暗黒大將軍の力が以前よりも上がっているのを感じていた。奴の力は俺が想像をしていた以上に厄介な相手になっていることがわかった。

それにもう一つ奴が言っていた言葉が気になった。

『恐竜帝国……』

「なあカイザー……その恐竜帝国ってのは一体何者なんだ？」

アリスが質問をしてきたので俺は知っている限りのことを彼女たちに教えておくことにした。

『恐竜帝国はかつてゲッターロボによって倒された敵だ。奴らはゲッター炉が苦手な爬虫類だからな……。奴らは早乙女研究所というところを襲撃をしてゲッター炉を破壊しようとしたがゲッターロボによって阻止されてしまったな。』

「それが復活をしたってこと？」

『おそらくな……。恐竜帝国はゲッターロボたちの出番というわけだ。彼らのゲッター炉の力は絶大だからな……。』

俺は真マシンガーZの修理状況などを確認をしていた。

『まずお前は安静をしておけ？ゴッドスクランダーもダメージを受けて修復中だ。』

『まじかよ……。』

『絶対安静だいいな？』

俺は真マシンガーにそういつてアリスとクリスを連れて司令室の方へ行くことにした。ここで情報を得るってのもあるがやはり奴らの行動はしておらんみたいだな？ほかのみんなはパトロールに出ており俺だけが残っていた。

「カイザーどうだ彼は？」

『体を動かすには時間がかかるな……。暗黒大將軍の攻撃を受けてダメージがでかいからな背中のゴッドスクランダーのダメージも大きい動かすのは無理だな。』

俺は弦十郎に現在の状況を説明をしていると警報が鳴りだした。パトロールに出て

いるブラックからだ。

『こちらブラック……マリアとセレナとパトロールをしている時に爬虫類のロボットに遭遇した。援護を頼む。』

「わかった。近くにいるのは？」

「マジンガーZにグレートです!!」

「よし二人に急行するように言ってくれ。」

弦十郎の指示でマジンガーとグレートは急行をしていく。俺も出撃準備をしておくか。

カイザーside終了

現場ではブラックドラゴンはダブルトマホークを出して恐竜帝国のメカザウルスを切っていた。

「こいつら何なのよ!!」

『おそらく暗黒大將軍が言っていた恐竜帝国のメカザウルスという奴だろう……ダブルトマホークブーメラン!!』

ダブルトマホークが命中をしてメカザウルスの首が飛ぶ。マリアとセレナもグレートとブラックドラゴンの力を解放させてメカザウルスと交戦をする。

『ゲッタービーム!!』

ブラックドラゴンはゲッタービームを放つがメカザウルスのボディはそれを遮断した。

『なに？そういうことか……』

ブラックドラゴンはゲッタービームがふさがれたので何かを考えて姿をモーフイングさせる。

『ドリルハリケーン!!』

ブラックライガー形態へと変わり背中ของブースターを起動させて空を飛びドリルハリケーンを放ちメカザウルスたちを次々に突き刺していく。

『サンダーブレーク!!』

上空から雷鳴がとどろきメカザウルス軍団を撃破していく。そこに刃が発生をした拳が飛んできてメカザウルスを次々に切り裂いていく。

『アイアンカッターの威力はどうだい!!』

救援の知らせを受けてマジンガーZとグレートマジンガーが駆けつけた。拳が戻り地上へ着地をして二人はメカザウルスたちに攻撃を開始をする。

「マジンガー!!」

「グレートさん!!」

『無事かい二人とも!!くらいやがれ!!光子力ビーム!!』

『ドリルプレツシャーパンチ!!』

両目から光子カビームが放たれてメカザウルスを撃破してグレートドリルプレツシャーパンチがメカザウルスの胴体を貫いた。

『これで終わらせる!! シャインスパーク!!』

ブラツクのシャインスパークが命中をして残りのメカザウルス軍団を撃破した。彼らは突然現れたメカザウルス軍団の残骸を見ていた。

「これがメカザウルス……」

『まさかこいつらまで活動を再会をするとはな……これからの戦い厄介だな……』
一方でマグマ創の中。

「なに!? メカザウルスが全滅をしただ!!」

「はい……ゲッターロボらしき奴らと人間にやられまして……」

「ガレリイ長官……貴様!!」

「やめんかバット將軍!!」

「は帝王ゴールさま……ですがこれからどうするのですか?」

「まだ我らは復活をしたばかり……ミケーネの奴らの様子を見ながらメカザウルスを新たに作る!! いいな!!」

「はは!!」

動きだした恐竜帝国の魔の手………カイザーたちは勝つことができるのか!!

ミケーネの総攻撃！SONG基地大苦戦

SONG基地

真マシンガーは修復のため機能停止しておりそのそばには大破したゴッドスクランダーも自己修復していた。

カイザーは定期的に真マシンガーの様子を見に来ていた。暗黒大將軍の斬撃が彼の超合金Zにダメージを与えているぐらいだからだ。

（まさか超合金Zがここまでダメージを受けるとはな．．．．俺の超合金ニューZαでもあの斬撃をどこまで防げるのかわからない状態になってきたな．．．．）

カイザーが考えていると警報が鳴り出した。急いで彼は真マシンガーがいる場所から発令所へと走っていく。

そこには全員が集結をしていた。

「良く来てくれた。七つの場所に戦闘獣と呼ばれるものが発生をした。我々も七つのチームに別れて行動を開始する!!」

「[[[了解!!]]]」

（七つの場所．．．．おそらく七つの軍団が動いているのだろうか．．．．なら

なぜ今奴らが動きだした?何か裏があるな……(…)

マジンガーチームが急行をした場所ではユリシーザーが暴れていた。

「来たかマジンガーZたち!!」

『お前はユリシーザー!!』

「ふっはっはっは!!やれ!!戦闘獣ども!!」

『来るぞ!!』

戦闘獣が襲い掛かってきたのでマジンガーたちも戦闘を開始する。

一方でダイターンチームが急行をした場所では猛獣將軍ライガンが暴れていた。

『あれだ!!』

「来たか!!俺は猛獣將軍ライガン!!やれ我が戦闘獣ども!!」

『さーて用意はいいかい君達。』

『いつでもいいぜ!!』

『よし!!』

『エルドラファイト!!』

こちらでも戦闘を開始している中ほかの場所でも七つの軍団が暴れているのでシンフォギア装者たちも出動をしており弦十郎は嫌な予感がしていた。

「司令どうしました?」

「どうもおかしい……なぜ奴らはこんなにも離れた場所に現れたのか……」
「司令!!高エネルギー反応です!!」

「なんだと!!」

SONG基地が揺れだした。弦十郎はすぐに映像が出すように指示をする。基地の前に暗黒大將軍自ら現れたからだ。彼は剣を使いSONG基地に攻撃をしてきた。

一方で現場にいたメンバーは基地が襲われていることを知り向かおうとしたが……戦闘獣の数が多く撤退ができないのだ。

「ふっはっはっは!!この基地も終わりだな!!さあこれで仕上げだ!!」

『させるか!!』

言葉と共に回転をした拳が暗黒大將軍に向かって飛んできた。

「ぬ!!」

彼はマントを使い放たれた拳をはじかせて上空から着地をした人物に両手が戻っていき構えている。

立っていたのはマジンカイザーだった。彼は嫌な予感がして基地に残っていた。両肩のグリップが出てきて彼はカイザーブレードを抜いて暗黒大將軍と戦うために構える。

「おのれマジンカイザー!!貴様は残っていたのか!!」

『ああこんなことだろうと思いついて正解だった。これ以上基地を壊されるわけにはいかない!! いくぞ暗黒大將軍!!』

「こいマジンカイザー!!」

カイザースクランダーを外して彼は走りだして暗黒大將軍にカイザーブレードを振り下ろす。だが暗黒大將軍はカイザーが振り下ろした剣で受け止めた。

「くらえ!!」

頭部の両目から破壊光線が放たれてマジンカイザーのボディに命中をして吹き飛ばされた。

『ぐ!!』

「どうしたマジンカイザー!! お前の力はこんなものか?」

(以前よりもパワーアップをしている!! なんて力をしている・・・)

カイザーは破壊光線を受けて体が痺れてきたのを感じていた。暗黒大將軍の力が自身を戦っていたよりもパワーアップをしているに驚いてしまいが暗黒大將軍は剣に竜巻を纏わせてそれを投げつけた。

『やば!! ルストトルネード!!』

彼はルストトルネードを放ち暗黒大將軍が放った竜巻を相殺しようとしたが……マジンカイザーのルストトルネードを破りその竜巻がマジンカイザーに命中をした。

『ぐああああああああああああ!!』

カイザーは竜巻でダメージを受けてしまい膝をついてしまう。

(超合金ニューZαがここまでダメージを受けるなんて……暗黒大將軍の力がやはりパワーアップをしている……一か八か……やってみるしかない!!)
「さてとどめを刺してくれるわああああああ!!」

暗黒大將軍は劍を構えて彼に振り下ろす。

『今だ!!マジンパワー!!』

彼は両手を回転させて暗黒大將軍が振り下ろした劍を回転したターボスマッシュャーで削らせていた。

「ぬお!!」

『ああああああああああああ!!』

そのまま拳を回転したまま暗黒大將軍の胴体についている顔を殴り吹き飛ばした。

「おのれ!!」

『ファイヤーブラスター!!』

マジンカイザーの胸部の放熱板が光りだしてファイヤーブラスターが暗黒大將軍に命中をする。

「ぐぐぐぐぐぐぐ!!」

カイザーは立ちあがりファイヤーブラスターを放ち続けていた。

『これで終わりにするぞ暗黒大將軍!!』

「ちい!! いけ!! ミケロス!!」

ミケロスがファイヤーブラスターを放っているマジンカイザーに突撃をして彼は吹き飛ばされてファイヤーブラスターが解除される。

『邪魔だああああああああああああああ!!』

突撃してきたミケロスをマジンカイザーはつかんで投げ飛ばした。

『ファイヤーブラスター!!』

ファイヤーブラスターを放ちミケロスを溶かした。

「やむを得まい。ゴーゴン!!」

「は!!」

「全軍に撤退命令を出せ!! 今すぐにだ!!」

「はは!!」

暗黒大將軍の指示を受けた七つの軍団たちは撤退を開始した。シンフォギア装者たちは急いで戻ってくるとカイザーが膝をついていた。

「カイザー!!」

『よう……. どうやら無事みたいだな?』

「まさか敵の狙いがこの基地だとは……」

『フィーネの奴がしていたことと同じみたいだ……。なんとか追い払ったが……。正直言つて奴の相手に苦戦をするとはな……。』

「そうだ!!カイザー今度暗黒大將軍が来たらグリッドマンが作つてくれたあのウエポンで戦おう!!」

『アシストウエポンのことか?あれは確かほかの奴らも使えるだっけ?』

「ああグリッドマンが言っていたな。あたしとクリスが合体をしてアームドギアが展開できるだっけ?」

「けどあれつてすごく疲れるんだよね?」

クリスは苦笑いをしている。彼らは恐竜帝国とミケーネが攻めてくる前に現れた謎の黒いノイズによつてあちらのグリッドマンがいる世界へと飛ばされた。

その時に生きていたゼルフィールと戦いグリッドマンが三つの力を一つにするために作つてくれたのがこのヴァリアンダガーと呼ばれる重装甲車である。

「だったら私は未来とかな?」

「私は奏とになるのかな?」

「そうだろうよ。あっちも向こうで一つのアシストウエポンつて奴に合体をしているからよ。」

「なら私は切ちゃんどだね？」

『一応慣れて置くために次の日に試してみよう。』

色々形態のカイザー。

カイザー side

暗黒大將軍の襲撃から数日がたち、俺は現在かつてグリッドマンと協力をして作ってもらったアシストウエポン「ヴァリアンダガー」が出てきた。

「これがカイザー達がいていたアシストウエポンって奴か？」

『ああそのとおりだ。かつてゼルフィールとの戦いでグリッドマンが提示をしてくれたのは俺とシンフォギア装者たちとグリッドマンの力が一つになった力を作ったのがこれだ。』

「けどこれって疲れるんだよな……合体をしている時って。」

「うん、私とアリスが合体をしたのがこの形態だって……」

「ならあたしたちも使えるってことか？」

『ああそのとおりだ。早速使ってみるとしよう。まずは誰がやる？』

「はいはい!! 私たちデース!!」

『わかった。なら二人はまずアクセスコードと伝えてくれ。』

「アクセスコード!! ヴァリアンダガー!!」

二人が入りこんでいくとアーマーが分離をされて行くが色などが変化をしていきピ
ンクと緑色の装着をしていく。

合体をした際に驚いたがどうやら装者たちによつては装備が違みたいだ。

「『装甲武装！マジンカイザー！シャルガリマ！！』」

右手には巨大な二つのヨーヨーが合体をしたのが装備され。左手には巨大な鎌が装
備されておりシャルガリマ形態へと変わる。

『すごいデース!!』

『これが……』

『いくぞ!!』

シュミレーションがスタートをしてアルカ・ノイズ達が現れて俺は右手に持っている
巨大ヨーヨーを飛ばした。弦がついておりそれを操って攻撃をしていく。後ろからア
ルカノイズが襲い掛かってきたが……

『二人とも頼む!!』

『了解!!』

『任せるデース!!』

各ハードポイントが展開されて小さい鋸がたくさん放たれて俺は左手を前につきだ
す。

『うなれ!!イガリマスマツシャーパンチ!!』』

マジンガーZが使用をするアイアンカッターのように腕部に装備されたハードポイントからイガリマの刃が発生をしてアルカ・ノイズたちを切っていく。肩部にもイガリマの刃が発生をしてそれをアルカ・ノイズたちに接近をして次々に切っていく。

『『くらえ!!サイコストーム!!』』』

胸部から放たれた莫大なエネルギーを放出させて撃破してシュミレーションをストップさせる。

俺の体が光りだして二人が分離された。

「ぜえ……ぜえ……」

『かなりの力を消耗させているな……』

『最初はこんなもんだぜ?な?』

「うん、合体をした後この世界へ戻った後は疲れて寝ちゃったもんね?」

二人は合体をした後のことを思いだしたみたいだ。俺達もあの光を受けた後起動させたら元の世界へ戻っていたからな……。黒いノイズを吸収をしていたゼルフィールを倒したから俺達があの世界での使命が終わっただな。

「さて次はあたしたちだな?」

「うんカイザーよろしく頼む。」

『ああ。二人とも頼む。』

「アクセスコード!! ヴァリアンダガー!!」

二人がヴァリンダガーの中に入り俺に合体をしていく。背中のカイザースクランダーがいつも以上に変わっているのに驚いた。

そして装甲なども装着されて行き合体をした。

「『装甲武装! ツヴァイウイングカイザー!!』」

背中のカイザースクランダーが二人の空を飛ぶような感じとなりツヴァイウイングという名前の通りになっていた。

武器も彼女達に合わせた感じになっている。左手には大剣状態のアメノハバキリ、右手にはガングニールの槍を装備していた。

『『いくぜ!! カイザー!!』』

『おう!!』

背中のウイングが展開されて俺は空を飛び空から光子力ビームを放ち右手の槍で突き刺してと左手の剣で攻撃をしていく。

この形態は空中を特化型でスピードで相手をかく乱をして接近対応の武器だな……俺は槍を投げつけて腰部から剣が発生をして合体をさせて二刀流のダブルセイバーみたいな感じになる。

『でああああああああああ!!』

回転させて周りにいたノイズ達を次々に切り裂いていく中俺はルストトルネードを使いアルカ・ノイズを酸化させていく。俺はブレードを持ったままターボスマツシャーパンチを放つ。

『ブレードスマツシャーパンチ!!』

ブレードスマツシャーパンチで切つていき戻ってきた両手でガングニールの槍を使い撃破していきシユミレーションをストップさせる。

「ぜえぜえ……………」

『やはり二人も同じようだな……………』

「これが…………アシストウエポンを使った後の…………状態かよ……………」

「これは……………相当につらいわ……………」

さて次に残っているのは響ちゃんと未来ちゃんか……………さらにカデンツアヴナ姉妹もいるが……………それは次回にしよう。

色々形態カイザーその2

『前回のシユミレーションではいけないと思ひブラックが相手をしてくれることになった。』

前回のシユミレーションでは行けないと思ひ急遽ブラックドラゴンを呼びカイザーたちはヴァリンダガーのまだしていない形態を試す。

『これはグリッドマンと共同で作ったものだったな。なるほどなら俺が相手をした方がいいな?』

『そういうことだ。早速でどっちからする?』

『はいはい!!私と未来です!!』

『えつとよろしくお願いします。』

『君の神鏡獣は前に使っていたのを俺が改良をしたものになる。ブラック相手を頼む。』
『任せろ。』

響と未来はガングニール電童と神鏡獣を装着をしてヴァリンダガーにアクセスコードをする。

「アクセスコード!!ヴァリンダガー!!」

二人がヴァリンダガーへと入っていきカイザーに装着合体していく。胸部は全員が共通の物になってているが両手などがガングニールのようなバンカーが装着されていき背部にはビットのようなものが装着されて行きカイザーの両目が光りだす。

「『親友合体!!ガングニールエンジン!!』」

ブラックは初めて合体をした姿を見たので驚いている。だが彼の闘争心が彼と戦えといっており彼はダブルトマホークを出した。

『準備はいいか?』

カイザーは両手などを動かしており確認ができたのか構えている。二人が構えたのを見てブザーが鳴りだして動き出したのはブラックドラゴンだ。

『はああああああああああ!!』

振り下ろすダブルトマホークをカイザーは両手足に装備された電童のハイパープラズマドライブを回転させて彼が放つダブルトマホークをはじめさせていく。ブラックは驚きながらも下がってゲッタービームを放った。

『いけ!!』

カイザーの背部からビットが射出されて展開された。それは鏡のようになっておりブラックドラゴンが放ったゲッタービームが鏡に反射をしていき拡散ビームのように戻ってきた。

『ちい!!ならばスピードで拡散する!!マツハスペシャル!!』

ブラックライガーへと変わりマツハスペシャルを使いカイザーに攻撃をする。

『イリユージョンフラッシュ!!』

こちらも幻影を使いブラックライガーは困惑をしている。

『なに!?!分身だ!!』

『ブルブレイカー!!』

『どあ!!』

上空から現れたカイザーの右手にブルホーンが装着されておりブラックライガーは攻撃を受けて地面に叩きつけられる。

カイザーは着地をして胸部にガトリングボアが現れてガトリングを放ちブラックライガーに攻撃をする。

『ライガーマシール!!』

ライガーマシールを放ちガトリングボアのガトリングを相殺をしたブラックライガーはブラックポセイドンへと姿を変えて両手のゲッターアームを伸ばしてカイザーの体に巻き付ける。

『ぬ!?!』

『必殺!!大雪山おろし!!』

大雪山おろしを発動させてカイザーを上空へとあげてダメージを与えていく中カイザーは離れた瞬間両手に力を込めていた。ブラックポセイドンはチャンスと思えばラックドラゴンへと変わり接近をして切りかかる。

『待っていた!!』

『なに?』

振り下ろしたダブルトマホークを両手のバンカーを使い真斧白羽どりをしたのだ。

『ぐうううううう!!』

『今だ。いくぞ二人とも!!』

『はい!!』

カイザーの胸部にエネルギーが込められて行く。

『『必殺!!サイコブラスター!!』』

『ぐああああああああああ』

ブラックはサイコブラスターを受けて吹き飛ばされて地面に激突をした。ブザーが鳴りカイザーはヴァリンダガー解除されて響達が地面に倒れる。

「これって……すっごく疲れるね。」

「はあ……はあ……」

『ブラック大丈夫か?』

行き胸部や脚部など装着されて行く。

「『姉妹合体!!アガートカイザー!!』」

アガートラームの白銀の色へとヴァリンダガーの形態へと変わっておりジエネシツクガオガイガーも驚いている。

『なるほど別世界の力ってことか……面白いわいぞ!!』

『はい。』

ジエネシツクガオガイガーは接近をしてその剛腕をふるってきたカイザーはそれを両手で塞いで後ろへ後退。左手に短剣を突き刺して砲塔から砲撃が放たれる。

『プロテクトシールド!!』

左手のプロテクトシールドが展開されてプロテクトシールドが発生をしてカイザーが放った砲撃をガードをした。

『いくわよ!!』

装甲が小太刀が発生をしてそれをジエネシツクガオガイガーにめがけて発射される。彼は空へ飛び小太刀を逃れようとしたが追撃をしているため驚いている。

『ほーう誘導付きか。』

『こっちにいますよ!!』

『なに!?』

見ると横にカイザーが現れて彼のひじ打ちを顔面に受けてジエネシツクガオガイガーは地面に落下をした。カイザーは右手の剣を蛇腹剣状にしてジエネシツクガオガイガーに襲い掛かる。

『ガジエツトツール!! ヴィルナイフ!!』

放たれるアガートラームの蛇腹剣をヴィルナイフではじかせてからカイザーは右手をつきだす。

『アガートスマッシューパーパンチ!!』

右手の装甲にアガートラームの短剣が発生をしてそれを飛ばす。

『プロウクンマグナム!!』

ガオガイガーの右手首のプロウクンマグナムが放たれてお互いの拳が激突をしてそのまま反転をして装着される。

『やるじゃねーか!!』

『ああだがそろそろいいか?』

『どうした?』

カイザーが着地をして光出すとヴァリンダガーが分離されてマリアたちが出てきた。

「はあ………はあ………」

『そういうことか。その形態は彼女達が疲れてしまうつてのが欠点ということ』

か………』

『ああ、まだ改良余地があるってことだ。みんなも協力をしてくれて感謝をする。これで状況によってヴァリンダガーを使うってことが判明をした。』

「ああ、だが私たちも鍛え直さないといけないってことが判明をしたな奏。」

「これってすげー疲れるんだよな。クリスとアリスはすげーな。」

「いやあたしたちもこの形態になって初めてなんだけどよ。あの後疲れて眠っちゃまったからよ。」

「そうだね。この形態はカイザーだけじゃなくて私たちも疲れが出てしまうんだよね。」

「ってことはカイザーさんあなたは………」

カイザーは首を横に振る。彼自身はロボットのため疲れていないのだが連続した合体は彼の体に堪えているようだ。

『心配するな。だが今はお前たちが休むのが先決だ……俺のためにすまなかった。』

「気にしないでくれカイザー、これで私たちもあなたの役に立てるといことだ。」

『そうか……だがありがとう。』

クリスたちは汗をかいたのでシャワーを浴びに行くのをカイザーは見送る。

『どうした?』

『何でもない。ミケーネ帝国……恐竜帝国……この二つの組織を誰が蘇

恐竜帝国の総攻撃。

カイザーはヴァリンダガーを使い色々な形態にチェンジをして模擬戦をした。これによりヴァリンダガーは各シンフォギア装者によって装着する場所が変わったりすることが判明をした。だがそれはシンフォギア装者たちが疲れてしまうというデメリットも発生をする。

『仕方があるまい、彼女たちは人間だからな……この形態は短期決戦用として使うしかないか……』

カイザーは考えていると警報が鳴りだした。彼は発令所に到着をしてモニターの方を見るそこにはメカザウルスが町の中を暴れていた。

「来たか今回はカイザーチーム及びマジンガーチームに出動をしよう。奴らの行動が分からない。みんな気をつけてくれ。」

司令を受けたマジンカイザーたちはシンフォギア装者をグレンダイザーに任せて暴れているメカザウルスたちを発見する。

『け!!メカの恐竜共が暴れてやがるか先手必勝!!トマホークブーメラン!!』

真ゲッターが投げたトマホークブーメランがメカザウルスたちの首を切断させてい

き奴らは気づいて襲いかかってきた。

『来たぞ!!』

『くらいやがれ、魔神皇帝の剛腕をうなれ鉄拳ターボスマッシュパンチ!!』

カイザーの回転した両手が飛び出してメカザウルの胴体を貫いていく。グレートとエンペラーは剣を抜いてメカザウルの首を次々に切断、空からはメカ戦闘機がマジンカイザーたちに襲いかかろうとしたが突然発生をした竜巻がメカ戦闘機たちを次々に破壊していく、それは真ドラゴンとブラックポセイドンが放ったゲッターサイクロンだ。

『一丁あがり。』

『まだ来るけどな。』

ブラックポセイドンが言うのと煙が晴れてメカ戦闘機たちが沢山現れる。だがそこにビームなどが放たれて撃破されていく。

二人が振り返るとシンフォギア装者たちが到着をしてマリアとセレナの姉妹がアガートラームの砲撃で撃破した。

『助かる!!』

「ええけど終わっていないわね。」

『おそらく奴らが発進させている基地みたいなものがあるはず。』

「なら皆さんは地上から上がっててもらえますか？これくらいの数ならこの技で済みます。」

響の言葉に全員が納得をして上空へ飛び彼女は構え直す。

「SP1インストール!!閃光雷迅撃!!」

彼女が放った閃光雷迅撃が地上にいたメカザウルス達を次々に撃破していきその様子をカイザーたちは見ていた。

『凄いな……』

「カイザーあれ!!」

アリスの声にカイザーが首を傾げると見えたのは巨大な恐竜の頭が見えた。全員がその方角を見つけて向かうことにした。襲いかかる戦闘機たちをカイザーたちは気にせずに突撃をして撃破していき彼らは巨大な恐竜の背中に砲塔がのっているのを見ける。

「でか!!」

『こいつは……無敵戦艦ダイだったな、初代ゲッターロボでさえも倒すことが出来なかったものだ。』

「その通りだ。我らの無敵戦艦ダイは最強だ!!行け無敵戦艦ダイ奴らを叩き潰せ!!」

ゴールは中へ入っていきダイが襲いかかってきた。マリアたちはギアをスパーロ

ボットたちの姿へと変えてダイに攻撃をする。

『紅い稲妻!!』

『水の龍!!』

『緑の疾風!!』

3体の魔人の攻撃を受けるがダイは彼らの攻撃を受けてもビクともせずにしつぽを振り回してマジンガーたちを吹き飛ばした。

彼らは瓦礫の中荷姿が消えてカイザーたちも攻撃をしているがダイに攻撃が効いている様子がない。

『まじかよ。なんて硬さをしてやがる。』

すると砲塔から弾が放たれてカイザーたちに攻撃をしていく。彼らは回避をしてダイをどうやって突破をしようか考えていた。

「どうしたスーパードボットたちよ、お前たちがどれだけ攻撃をしてもこの無敵戦艦ダイを倒すことなど不可能なのだ!!」

(確かに奴に攻撃が通らない、だがどこかに弱点はあるはずだ……・恐竜部分に攻撃をしてもビクともしていない、だがそれは外からの攻撃……・なら中なら)

カイザーは何かを思いついたのか近くにいたブラックドラゴンに声をかけていた。

『正気かカイザー、確かに俺たちの攻撃は通るかもしれないが……』

『賭けになるけどな、だがそれでも俺はいい方に賭けるさ。』

『後でクリスたちが泣いても知らないからな。チェンジブラックライガー』

ブラックライガーへと姿を変えてダイの足元をマツハスペシャルを発動させてライガーは走り出す。

カイザーは己の体を小さくしてダイが口を開いた瞬間を狙っている。そして口が開いたのを見てカイザーすくランダースラスターを前回にしてダイの口の中に侵入をしてダイの心臓部分を発見する。

『これだな!!光子力エネルギー解放!!』

『ゴール様!!大変です!!』

『何事だ!』

だがゴールが言う前に大爆発が起きた。それはカイザーがカイザーノヴァを発動して中で大暴れをしたのだ。その結果ダイは体内から爆発が起こりゴールたちを全員巻き込んで大爆発がおこったのだ。

「やったのか?」

「みたいだな。」

「カイザーは……」

クリスとアリスはキョロ（・ω・、三三・ω・）キョロしてカイザーを探していると

巨大化していくロボットがいた。マジンカイザーが火花を散らしながら立っていた。

『悪い……………』

『お前な……………無理をするなし』

『こうでもしないと倒せなかったからなへ……………』

「これで恐竜帝国は倒したわ……………あとはミケーネ帝国のみか……………」

全員は空を見ながらミケーネ帝国の襲撃を待つことにした。

ミケーネ帝国襲来

恐竜帝国を倒した戦士たち、だがマジンカイザーはダイを破壊したのはいいが火花を散らすほどのダメージを受けてしまい現在は機能停止をして自己修復を受けていた。

ソルグラヴィオンはマジンカイザーの様子を見ていた。そこにクリスとアリスがやってきたのでソルグラヴィオンは振り返る。

『やあ二人とも。』

「おつす。」

「あの、カイザーは？」

『ご覧の通りまだ機能停止の状態だよ。ダイを破壊するためとはいえ彼はカイザーノヴァを使ったからね。その影響がここまでのダメージはつせいさせてしまったみたいだよ。』

「そうですか……」

『……二人はカイザーのことが好きなのかな？』

「な!!」

ソルグラヴィオンの言葉に二人は顔を真っ赤にしていた。突然のソルグラヴィオン

の言葉に二人は反応をする。

「な、何を言ってるんだ!!」

「そ、そうですよ!!」

二人はパニック状態になっておりソルグライヴィオンはくすつと笑いながら二人の様子を見ていると警報が鳴りだした。

「『!!』」

三人は急いで発令所に到着をして全員が見ていた。モニターでは七つの場所に戦闘獣が現れたみたいだ。

カイザーはまだ修理をしておりそれ以外のメンバーが出動することが可能となり全員で出動をすることになった。

未来は行こうとしたとき、ある戦士が彼女を止める。

『待つんだ未来ちゃん。』

「え?」

振り返るとそこに立っていたのはダイターンだった。

『これを君に託すよ。僕のカダイターンの力さ。』

ダイターンの手から光が発生をして彼女の神鏡獣のギアペンダントに当たり彼女はありがとうございます!!というて現場の方へと向かっていく。

マジンガーチームは奏とセレナと共に出動をして人型の戦闘獣たちが暴れていた。

『あれは超人軍団か!!』

「来たか!! 貴様たちの相手はこの超人將軍ユリシーザーが相手をしてくれる!! 行け!!」
戦闘獣たちがマジンガーたちに襲い掛かってきた。

『いくぞお前ら!!』

「おうさ!! 見せてやるぜセレナ!!」

「はい!! ブラックさん!!」

『おう!!』

全員が武器を構えていき突撃をしていく。ほかの場所にもガイキングチームは猛獣軍団と交戦、怪鳥軍団にはカイザーチームが当たっており、大昆虫軍団はダンナーチームが交戦しており悪霊軍団にはダイターンチームが当たっていた。

魔魚軍団にはガオガイガーチームが当たっており耀は妖爬軍団にはシンフォギアチームがそれぞれで戦っていた。

「このおおおおおおお!!」

響は爬虫類戦闘獣にユニコーンドリルで突き刺した。そのそばに未来はダイターン3ギアを纏いダイターンハンマーを振り回していた。

「それそれ!!」

「おっしや!!クリス!調!切歌!マリア!いくぜ!!」

「わかったよアリス!!」

「行くデース!!」

「うん!!」

「見せてあげるわ!!」

「二二ファイブマジンガーパンチ!!」

彼女たちから放たれたロケットパンチが放たれて行き戦闘獣たちを貫いていく。翼は天空剣を構えて切り裂く。奏はツインランサーで同じように次々に切り裂いていく。

ブラックはセレナの傍にいた。彼女を守るのが今の彼の使命のため二人はダブルトマホークを構えて戦闘獣たちを切り裂いていく。

「ブラックさん!!」

『ああ!!セレナ決めるぞ!!』

二人は横に立ち頭部のビームランプが光りだす。

『ダブルゲッタービーム!!』

ダブルゲッタービームが放たれて戦闘獣たちを次々に貫いていく中基地の方では弦十郎が両手を組んで嫌な予感をしていた。

「司令どうしました?」

「嫌な予感がしてな……」

「嫌な予感？」

「そうだ、しかも場所がそれぞれ七つの場所にまるでおびき寄せせるかのようにな……」

「それって!!」

すると基地全体に警報が鳴りだした。弦十郎は何が起こったのか報告するように指示をする。

「大変です。基地前方に大きな反応です!!」

「これは……暗黒大將軍です!!」

「なんだと!!」

暗黒大將軍は謎の空間を開いて彼は出てきた。

「どうやら成功を試みたいだな、七大將軍たちを別々の場所に差し向けることでこの基地のロボットやシンフォギア装者たちは必ず向かわせる。それにマジンカイザーとマジンガーはまだ自己修復をしている状態。基地を破壊するには今が絶好というわけだ!!くらうがいい!!」

『そうはさせるか!!』

「ぬ!!」

暗黒大將軍にビームが放たれるが彼はマントを使いガードをした。基地にまだ口

ボットたちがいたのかと暗黒大將軍は見るとグレートゼオリイマーがそこには立っていた。

「なに!?なぜ貴様がここに!!」

『どうもおかしいと思つてな、俺は待機させてもらった。そしてお前が送りこんできた戦闘員たちはサンジェルマンたちが追いついてはいるはずだ。お前をここで止めて見せる!!』

「やれるものならやつてみるがいい!!くらえ!!」

暗黒大將軍は目から破壊光線を放ちゼオリイマーに向けて放つてきた。ゼオリイマーは回避をして風の力を解放させる。

『デン・ロン・フーン!!』

竜巻が発生をして暗黒大將軍に向けて放たれる。

「でええええええええええええええええい!!」

だが彼は剣でデン・ロン・フーンを打ち破りゼオリイマーは驚きながらも次の攻撃をすることにした。

『ミサイル発射!!』

大量のミサイルを発射させてさらに地震を発生させて彼の動きを止めようとした。だが暗黒大將軍は上空に飛び地震攻撃を回避をしてミサイルをかわした。

「ふん!!」

両目から光線が放たれてゼオライマーに命中をして彼は次の攻撃をすることにした。

『メガサーチャービーム!!』

腰部が展開されてメガサーチャービームが発射される。暗黒大將軍は盾でガードをしたが後ろから光弾が命中をした。

「なに!？」

『マグラツシユの威力はいかながかな?』

トウインロードを使用をして分身をしたグレートゼオライマーが現れて二人は元の一体に戻る。

一方で基地の方ではサンジェルマンたちがファウストローブを纏いミケーネ兵たちを撃破していた。

「やれやれこれで終わり?」

「まあ楽だったワケダ。」

「なら次は俺が相手をしてくれるわ!!」

「誰だ!!」

サンジェルマンは武器を構えると下半身がトラの男が現れた。

「誰?」

「俺はゴーゴン大公!!ミケーネの諜報部員だ!!くらうがいい!!」

ゴーゴンは鞭を使いサンジェルマンたちに襲い掛かってきた。彼女は銃剣を剣を使い鞭をはじかせると横からカリオストロとプレラーティが攻撃をしようとしたがゴーゴンは回避をしてトラから光線を放ち二人を吹き飛ばす。

「二人とも!!」

「大丈夫ワケダ。」

「でもさっきのあいつらよりは厄介だわ。」

「俺をあいつらと一緒にしてもらっては困る!!きてくらうがいい!!」

ゴーゴンは攻撃をしようとしたときビームが飛んできてゴーゴンに命中をした。

「どああああああああああ!!」

「今の攻撃は!!」

彼女達は振り返るとそこに立っていたのはマジンカイザーだった。彼は自己修復を受けていたが爆発の音が聞こえたのでやってきた。

「外が騒がしいなと思ったら、まさかミケーネの総攻撃だとはな。」

「お前はマジンカイザー!?!馬鹿なお前は機能停止をしていたはずだ!!」

『こんだけ大きな音がしていたら目を覚ますさ。さて無事みたいだな三人とも……さてゴーゴン貴様には色々と話してもらおうことがあるが……どうする?』

「黙れ!!俺はミケーネの戦士……戦って死ぬだけだ!!」

ブレストトリガーを構えて発砲をしたがゴーゴンは素早く回避をしてカイザーに攻撃をする。だが彼の超合金ニューZαの装甲は固くゴーゴンの攻撃をびくともしていない。

一方で外ではグレートゼオライマーは放ったプロトンサンダーを受けて暗黒大將軍が膝をついていた。

「ぬ……マジンガー以外の者たちにダメージを受けるとはな……」

『終わりにしてやるぞ暗黒大將軍!!』

ゼオライマーはとどめを刺すために烈メイオウを発動させようとしたとき突然発生をした光弾を受けて吹き飛ばされる。

『が!!』

「暗黒大將軍よここは引くといい。」

「その声は闇の皇帝!!しかし!!」

「いいから引くのだ!!」

「はは!!」

一方でほかの軍団たちも闇の帝王からの撤退命令を受けて撤退を開始した。ほかのメンバーたちも突然の敵の撤退に驚きながらも基地の方も襲撃を受けたと知り急いで

向かった。そこにはマジンカイザーの姿もあり彼はグレートゼオライマーを起こしているところだ。

「カイザー!!」

『よう二人とも、エンペラーそっちも大変だったみたいだな?』

『ああだが突然として奴らが撤退をしたからな。そっちはどうだった?』

『こちらでも暗黒大將軍が基地に攻めてきた。なんとか追い払ったがな。』

全員で話しをしている中カイザーは両手を組んで考えていた。グレートゼオライマーが聞いた声そして暗黒大將軍が言っていた闇の帝王のことを……

(闇の帝王……ミケーネの支配者でもあり暗黒大將軍たちに指示をしていた人物……だが奴の正体は俺が倒した別世界の闇の帝王と一緒になのか?ならZER Oと共に現れたときの奴はいつたい……)

それは以前戦った闇の帝王と同じ存在なのかと考えていたがそれはないなど首を横に振り別の考えることにした。

カイザーとブラツクに異変

ミケーネ帝国の襲撃から数日がたった。現在カイザーとブラツク以外のロボットたちはメンテナンスに入っていた。この間の襲撃のこともあり現在はカイザーとブラツクのみが起動をしている状態だ。

そしてそのメンバーたちはある場所と出撃をしていた。

『ある研究所で違法?』

「ああその通りだ。そのために俺たちSONGに出動命令が下された。全員で出撃をしてくれ。」

「「了解(???)」」

全員がヘリコプターに乗り込んでカイザーとブラツクは空を飛び研究所近くで着陸をして全員がギアをまとい研究所が見えてきた。

『あれか?』

「そうみたいね。それじゃあ一気に攻めるわよ。」

マリアの言葉に全員がダッシュをして研究所の中へと入り次々に抑えていく、カイザーとブラツクも彼らの放つ攻撃を装甲でガードをして響達が制圧をしていく。

「おらおら!! あたしに釣られてみるか!!」

電王ギアをまといデンガツシャーロットモードで相手をからませていく。クリスはハンドガンにして相手が持っている銃を撃ち落としていき翼は影縫いを使い相手の動きを止めて響が相手を気絶させる。

彼らは突撃をして最後の相手がいるであろう場所に到着をする。

「まさかここがバレるとは……」

「さあとはあなただけよ!!」

カイザーたちは残っている研究員に武器を突きつけて降参をするように言うが相手は何かをもって彼女たちに向けて放ってきた。

『『危ない!!』』

カイザーとブラックが前に立ち攻撃を受けてしまい倒れてしまう。その間に調と切歌が相手を捕まえた。

アリスとクリス、セレナはカイザーとブラックの所へと行き体を揺らす。

「カイザー!!」

「しつかりして!!」

「ブラックさん!!」

「いてて大丈夫か? クリスとアリス」

「無事みたいだなセレナ。」

「「え？」」

全員が声をした方を見ると男性が立っていた。彼らは不思議そうに彼女たちを見ていたが倒れているカイザーたちを見て驚いている。

「なんで俺の体が倒れているんだよ!!」

「いったい……」

「まさかカイザー?」

クリスはカイザーなのかと確認をすると彼は首を傾げていた。

「ああその通りだが……人間になっちゃったのか?」

カイザーたちが困惑をしている中、クリスとアリス、マリアとセレナは顔を真っ赤にしていた。

(カイザーがかっこいい男の人に (／＼／＼／＼))

(おいおいあたしのタイプじゃねーか (／＼／＼／＼))

(嘘、カイザーが人になるなんて……あっちの世界の私は彼に恋をしているけどカイザーが人間になったらアリよね?)

(ぶ、ブラックさんが人に!? えへへへ (*、▽、*))

と乙女になっていた。カイザーは一か八か声を上げた。

「カイザーイン!!」

すると人間になっていたカイザーが光り出して機械の体に入っていく目が光った。

『ふう戻れたぜ。』

「(・ω・)」

『えつとどうした?』

「なんで戻るのよ!!」

「そうだよカイザー!!」

「もつと人間になっていてくれよ!!」

3人に責められたカイザーは後ろに下がってしまう。元の姿に戻ったのに不評を受けたからだ。

ブラックの方も戻ったがセレナに(・ω・)されたのでこちらも困っていた。それはほかのメンバーたちも同じだったので基地へと戻ったカイザーたちは事情を話していた。

「ねえカイザー、人間態の時に体は残っているのよね?それで名前を呼べばあなたの体はやってくるのよね?」

『ああその通りだ。』

「だったらこの基地にいる時はその姿でいて外に出る時は人間態になればいいじゃない

の？それにスーパードロイドはあなただけじゃないのだから。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「カイザーお願いだ。」

「お願いよカイザー。」

「カイザー・・・・・・・・・・（；ω；）」

クリスは涙を流していたのでカイザーはため息をついた。

『わかった。彼女たちが望んでいるなら。』

カイザーは光り出して人間態が現れた。

「となると名前をどうするかだな。いや決まっている俺の名前は兜 甲児だ。」

一方ブラックは名前をどうするか考えているとセレナが近づいてきた。

「どうしたのですか？」

「ああ俺は名前をどうしよかなと思っただけ。俺は元はネフィリムだからな・・・・・・・・向こうで言うならアンチみたいになっちゃった。」

「・・・・・・・・ネフィはどうですか？」

「ネフィ・・・・・・・・かありがとうセレナ。」

彼らはまさかの人間態を手に入れることになると思っただけじゃなかった。さて現在カイザーはクリスとアリスに連れられていた。

こうして彼はドキドキしながらプリクラを撮るのであった。

果たし状

「ここはミケーネ帝国が基地にしている場所、暗黒大將軍は闇の帝王の前に膝をついておいた。」

「暗黒大將軍傷はどうだ？」

「は!!この通り傷も癒えましてでございます。」

「うむ我らミケーネ帝国のためお前には頑張ってもらおうぞ。」

「……闇の帝王、実はお願いがあります。どうか私に最後の出撃の許可をもらえないでしょうか。」

「なに最後の出撃!?!どういうことだ暗黒大將軍!!」

「は!!ご覧の通りこの間の戦いで戦闘獣は大幅に消耗させてしまいました。そのため我らミケーネ帝国の兵力も減ってきております。だからこそ責任はこの私にあります。マジンカイザーとの一騎打ちをさせてください。もし私が負けたらミケーネは別次元の方に撤退をしてください。」

「暗黒大將軍その言葉……まさか余の力をお前に授けろというのか?それは危険すぎる……この力はお前では扱えないぞ!!それでもいいのか?」

「この暗黒大將軍、ミケーネのため命などとうに捨てております。」

「……よかろう。ならお前に私の力を託す。必ずマジンカイザーに勝つのだ!!」
「はあ!!この暗黒大將軍、命にかけましてもマジンカイザーを倒してご覧にいれましょう!!」

闇の帝王から黒い力が暗黒大將軍の中へと入っていき彼は腰につけていた剣を抜いて力を試す。そしてマジンカイザーを倒す為に果たした状をかいていた。

「えつと場所はあそこでつと……よしできた!!ゴーゴン!!」

「はあ!!暗黒大將軍。どのような用件で。」

「これを直ちにマジンカイザーに渡すのだ。」

「手紙ですか?」

「そうだ。余と奴の一騎打ちの戦い……もし俺が負けたらミケーネ帝国はこの次元から撤退をするという闇の帝王との約束をしてきた。」

「なんと!!暗黒大將軍それは正気ですか!!」

「俺は正気だゴーゴン、前の戦いで多くの戦闘獣が奴らに敗れて我らミケーネ帝国の兵力はかなり減っている。今こそ俺は闇の帝王からいただいたこの力でマジンカイザーを倒してご覧に見せるだけだ!!さあゴーゴンその手紙を渡して来い!!」

「はあ!!」

ゴーゴンはSONG基地の方へ飛んで行き暗黒大將軍は出撃準備をする。一方でSONG基地ではカイザーは人間態兜 甲児になっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「カイザーじゃなくてえつと甲児さんでいいのかな?」

「あー翼か、慣れないならカイザーでもいいさ。」

「そ、それはよくないよ!!」

「お、おう。」

あまりの気迫に甲児は驚いているがすぐに真剣な顔になり彼女をかばうように立つ。

「カイザー?」

「そこにいるのはわかってる出て来い!!ゴーゴン!!」

「なに!?!」

甲児の言葉に翼はギアを展開しようとしたがゴーゴンが現れたので驚いている。

「よくわかったな、兜 甲児・・・・・・・・いやマジンカイザーといっておこう。」

「それでわざわざSONG基地まで何しに来やがった!!」

「ふっふっふっふこれを受け取れ。」

ゴーゴンは手紙を投げて甲児はキャッチをした。その手紙の中身を確認をしていた。

「では俺は果たしたので失礼する。」

「逃がすとても思ったのか!!」

「逃がせ翼!!」

「だが!!」

「……暗黒大將軍が俺と一騎打ちをしたいと書いていた。」

彼はそのまま発令所へと行き弦十郎達に話をしていた。

「暗黒大將軍が一騎打ちを……」

「ああ正々堂々と一対一でな。」

彼の言葉にシンフォギア装者たちは目を見開いている。だがクリスとアリスなどは反対の意見を出していた。

「そんなの罠だよカイザー!!」

「そうだ!! あいつはそういってお前を倒す為に戦闘獣をたくさん用意をして待っているはずだ!!」

「その通りよ!! カイザー罠に飛び込むなんて無謀よ!!」

『いや暗黒大將軍はそんな奴じゃない。』

声が出た方を見るとグレートマシンガーが立っていた。彼はそのままカイザーの隣に立つ。

「グレートさん。」

『暗黒大將軍は俺も戦ったことがあるからわかる。奴は正々堂々とした戦士だ……そんな罫を仕掛けてくるような奴じゃない。それだけは信じてくれ。』

「「「」」」」

甲児は目を閉じていたがすぐに開けて振り返って扉の方へ行く。

「カイザー……」

「奴が指定をしてきたのは俺だ。だから俺は行ってくる。」

「カイザー……」

「心配するなつてクリス、俺は魔神皇帝だぞ？安心しなつて必ず勝ってくるさ。マジン
ゴー!!」

甲児は光りだしてマジンカイザーへと戻つてから彼はカイゼースクランダーを装着
をして暗黒大將軍がまっている場所へと急行をしていく。

彼らはモニターでカイザーの様子を見ることができない。

「カイザー……」

「クリスちゃん大丈夫だよカイザーさんはきつと勝つよ!!」

「響……そうだね。カイザーはきつと勝つよ!!（そうだよねカイザー?）」

そしてある場所の草原、暗黒大將軍は目を閉じていた。彼はいつ来るかわからない魔
神皇帝を待っていると言が聞こえたので彼は目を開ける。

「来たかマジンカイザー!!」

『来たぞ暗黒大將軍、手紙に書いてあったのは本当なんだな?』

「ああそのとおりだ、もし俺が負けたらミケーネはこの次元から撤退をする。だが私が勝てばミケーネは兵力まして攻めてくるだろう。」

『なら俺は絶対に勝つ!!あいつらのためにも!!』

カイザーはスクランダーを外して構える。暗黒大將軍は腰につけている劍を抜いて構えている。

「いくぞ魔神皇帝!!」

『こい暗黒大將軍!!』

お互いに走りだして暗黒大將軍の劍がマジンカイザーに振り下ろされる、彼は回避をして腰部からミサイルが出てきた。

『ギガントミサイル!!』

ギガントミサイルが発射されて暗黒大將軍に向けて連続発射されて行く。だが暗黒大將軍はそれを劍ですべて叩き落として爆発させる。

カイザーは次の武器を選択してブレストトリガーを構えてトリガーを放つ。弾丸が暗黒大將軍に向けて放たれる。

「ふん!!そんな攻撃にやられる暗黒大將軍ではないわ!!」

素早い剣技でカイザーが放つ弾丸をすべて地面に叩き落としていきそのまま接近をして振り下ろしてきた。カイザーはブレストトリガーを持ち変えて斧形態の方で受け止めていたが暗黒大將軍の重さでブレストトリガーに罫が入っていき粉碎された。

(まさかブレストトリガーが破壊されるなんて、暗黒大將軍の威力が前以上に上がっている!?)

彼は驚きながらもエンペラーブレードを出して彼が放つ斬撃をはじかせていく。

「であああああああああああ!!」

『うおおおおおおおおお!!』

お互いの武器が激突をした。だがカイザーが暗黒大將軍に押されて後ろに吹き飛ばされる。彼はなんとか立ちあがりエンペラーブレードを連結させてそれを投げつけた。

『であ!!』

「ふん!!」

暗黒大將軍の目から破壊光線が放たれてエンペラーブレードを破壊した。驚きながらもカイザーは次の武器を選択をする。

『牙斬刀!!サンダーボルトブレイカー!!』

牙斬刀にサンダーボルトブレイカーを発動させてサンダー牙斬刀へと変えて彼は走りだして暗黒大將軍に振り下ろした。

「ぬん!!」

彼は放った斬撃を自らの剣で受け止めている。カイザーは牙斬刀のブースターを起動させてさらに斬撃の威力をあげていた。

「甘いぞ魔神皇帝!!今の俺には闇の帝王からいたただいた暗黒の力が混じっている!!」

『だからお前の力が以前よりも上がっているのか・・・厄介なことだ。』

「そうだ!!俺は負けられないのだ!!ミケーネのため!!闇の帝王のためにも!!うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

カイザーは暗黒大將軍の勢いに押されてきていた、逆に追い込まれて行き吹き飛ばされてしまう。

『ぐ!!』

「であああああああああああああ!!」

さらに接近をしてきた暗黒大將軍は目からビームを放つが彼は牙斬刀でガードをしてそのまま武器を離して後ろへ下がりがり左手を回転させる。

『ターボスマッシュャーパンチ!!』

放たれたターボスマッシュャーパンチが暗黒大將軍の顔に命中をして戻ってきた左手を接続、さらに両肩からグリップが露出させてそれを引き抜いた。

『カイザーブレード!!』

両肩のカイザーブレードで暗黒大將軍に振り下ろす。暗黒大將軍はそれをはじかせていきお互いの体は傷だらけになっていた。

「ああああああああああああああ!!」

『ぐ!!』

カイザーは後ろへ下がりが胸部の放熱板にエネルギーをためて放った。

『ファイヤーブラスター!!』

ファイヤーブラスターが暗黒大將軍に命中をした、だが彼はくらいながらも前進をしようとしていた。

それにはカイザーも驚きながらもファイヤーブラスターを放ち続けていた。

「まだまだ!!俺は負けるわけにはいかない!!ミケーネのためえええええええええええええええ!!」

『なら俺もあいつらのためにも負けるわけにはいかない!!マジンパワーフルパワー!!』

カイザーはファイヤーブラスターに全出力を全開させているが体のあつちこつちから火花が発生をしていた。暗黒大將軍との戦いで彼の体も限界を迎えていたのだ。

暗黒大將軍の方も体が解け始めていたがそれでも前に進んでいた。

『いいぞどつちが限界を迎えるのか勝負だ!!』

カイザーは火花を出しながらもファイヤーブラスターを放ち続けていた、だが胸部の

める時なのだ!!」

『いやお前たちは終わりだ。』

「なに!?!」

七つの將軍たちと闇の帝王は驚いていると次元が開いて彼らはそこに吸い込まれて行く。カイザーはもしやと思い誰がやったのだろうかと見ているとマジンガーZEROが降りてきた。

『やっぱりお前だったか。』

『後は任せろ。』

マジンガーZEROは次元を開いて彼らがいる場所へとやってきた。

「貴様は!!」

『マジンガーZERO。さて一氣にけりをつかせてもらおう。』

すると背中の中のスクランダーなどが開いてブレストファイヤーの放熱板が光り輝いていき彼は放つ。

『ダイナミックファイヤー!!』

次元の中で放つため闇の帝王及び七つの將軍たちはダイナミックファイヤーを受けて完全消滅をした。

『ただいま。』

『速かったな……』

ZEROはカイザーを連れて基地の方へと帰還をする。こうして恐竜帝国及びミケーネ帝国の戦いは終結をした。

一方で

「はあ……はあ……おのれグリッドマン、マジンカイザー達め……このゼルフィールがそう簡単にやられてたまるか……わたしのネフィリムの力を完全にコントロールすることができた。さてガルバトロン準備はいいか？」

『ああもちろんだとも、貴様に助けてもらった恩を今返すときよ。』

かつてグリッドマンと共に倒したゼルフィールは新たな仲間ガルバトロンと共にカイザーがいる世界へと帰ってきていたのだ。

果たしてどうなる!!

第七章 ゼルフィール再び たくさんのネフィリム

ミケーネ帝国及び恐竜帝国との戦いから数週間が立った。甲児は自身の体のチエックをしていた。

数週間前の暗黒大將軍との戦いで限界以上まで戦った結果自己修復に時間がかかっている状態で現在も兜 甲児の姿でいることが多くなっていた。

「やれやれやつと修理が完了をしたか、まあその間はマリアたちが俺に胸を当ててくるから大変だったよ………なんか知らないが翼まで俺に抱き付いてきたときは驚いてしまったけどな。」

甲児はそう呟きながら自身のボディを最終チェックをしていると警報が鳴りだした。「なんだ?」

彼は急いで発令所へと行くとほかのロボットたちも集結をしていた。彼らも突然の集合なので来ていたのだ。

「おじさま緊急警報とはいったい何があったのですか?」

「ああ実はネフィリム反応が発生をした。」

「俺の反応だつて?」

ブラック事ネフィが驚いているがほかのメンバーもそれには驚くばかりだ。しかもその数大量というらしい。

「それで今回は全員で出動だが別れて当たってほしい、カイザー達はシンフォギア装者たちと共に当たってほしい。」

「わかった。サンジエルマンたちもいいな?」

「もちろんワケダ。」

「いったいどういう敵なのかしら?」

甲兎とネフィはそれぞれの体に戻っていき現場の方へと全員で急行をした。彼の両手にはシンフォギア装者たちが乗っておりカイザーは通常の大きさとなっていた。

『だがネフィリムが発生をするなんてよ、いったいどうなっているんだ?』

『わからん、いずれにしても嫌な予感がするのは事実だ。』

『でもあいつはカイザーとグリッドマンによつてたおされたんだよ!!』

「クリス、話は後だ。現場に到着をしたぞ。」

カイザーは着地をして彼女達を降ろして人間の大ききさとなり辺りを見る、そこにはネフィリム達がビルなどを壊していた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・かつての俺も同じようなことをしていたんだ・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ブラックさん。」

『さっさと終わらせるぞ!!ストナーサンシャイン!!』

真ゲッターが放ったストナーサンシャインがネフィリム達に命中をして爆発をする、それを合図に全員が突撃をしていきネフィリム討伐をしていく。

「くらいなさい!!サンダーブレーク!!」

「スペースサンダーデース!!」

「ブレストファイアー。」

三人の技が命中をして撃破していき、響はブルホーンを右手にインストールをして殴ってからレオサークルを右足にインストールさせて回転刃で切り裂く。

『エンペラー!!』

『おうよ!!』

『『ダブルマシンガンパンチ!!』』

二人のターボスマッシュパンチとグレートスマッシュパンチが放たれてネフィリム達の胴体などを貫通させていく。翼と奏はそれぞれで天空剣とツインランサーで突き刺していき倒していく。

「きりがないぜ!!」

「それでも街の被害を止めないと!!」

クリスとアリスもマジンカイザーとマジンカイザーSKLモードにギアを変えて戦っている。

未来は基地で待機をしていた。その理由は彼女は正式な装者ではないからだ。あの時は緊急で使用をさせたのだが本来は見守る立場の彼女を戦わせるわけにはいかないという判断である。

さて現場に戻りカイザーたちは順調にネフィリム達を倒していた。

『何かが来る!!どあ!!』

『真ドラゴン!!』

突然として砲撃が放たれて真ドラゴンに命中をした。全員が放たれた方角を見て驚いている。

『お前は……』

「久しぶりだなマジンカイザーにシンフォギア装者ども……」

『お前は……』

「嘘だろ、だってあの時カイザーとグリッドマンの攻撃で倒したはずだぜ!!」

「『ゼルフィール!!』』

現れたのはかつてこの世界を支配しようと企みカイザーとグリッドマンによって倒されて再生能力で今度はグリッドマンの世界を支配しようと企み倒されたゼルフィー

ルが彼らの前に現れたのだ。

『てめえ!!まだしぶとく生きていたのか!!』

「けどあなたはネフィリム細胞によって支配されていたはずよ!!」

「ええ確かに私はあのにつき小娘によってネフィリム細胞を埋めつけられて自らの意識なども失っていた、だがお前たちに対しての復讐心が私という意識を復活させてそしてネフィリムどもを吸収をして今では私の新たな力として蘇ったのだ!!そして私に協力をしてくれるものと一緒にな。」

「お前は誰だ!!」

『わしの名前はガルバトロン!!この地球を支配するためにこいつと手を組んだというわけだ!!わしのカノン砲をくらえ!!』

ガルバトロンは右手のカノン砲を放ち攻撃をしてきた、彼らは回避をしてマジンカイザーはファイナルカイザーブレードを抜いてゼルフィールに振り下ろす。

だがゼルフィールの右手が変わりネフィリムの腕となっていた。

『なに?』

「甘いですよマジンカイザー!!」

左手もネフィリムの剛腕へと変わりそれをマジンカイザーを殴り吹き飛ばした。彼は地面を滑りながらビルに激突する。

「カイザー!!」

「てめえ!!よくもカイザーを!!」

「ふっふっふっふあなたたちもくらうといい!!我が砲撃を!!」

するとゼルフィールの上半身を覆うように纏われて行き砲塔が発射されて全員に攻撃される。

「「きゃああああああああああああああ!!」」

『『『ぐああああああああああああああ!!』』』

ゼルフィールの攻撃で全員がダメージを受けてしまいガルバトロンは笑っていた。

『はっはっはっはっは!!これは愉快愉快!!さてなら止めはこのわし自らとどめを刺してくれるわ!!』

ガルバトロンは構えたカノン砲はマジンカイザーに向けていた。クリスたちは立ちあがろうとしたがダメージで動けない、ほかのロボットたちの方もネフィリムの猛攻で動くことができない状態である。

『まずい.....』

『死ねええええええええ!!』

それは上空から放たれた光線が二人に命中をして吹き飛ばした。

『『どあ!!』』

『いったい何が……』

カイザーの近くに一人の巨人が降りた。カイザーはその姿を見て一瞬誰だろうと思っていた。

『久しぶりだな魔神皇帝、以前助けてもらった借りを返させてもらったよ。』

「その声……」

『グリッドマン？だがその姿は……』

『「話は後だ魔神皇帝立ちあがるか？」』

『ああなんとかな。』

差し出されたグリッドマンの手をつかんで彼は立ちあがる。

「グリッドマン……姿が変わったとしても私に勝てるかとも思っているのか!!」

『「私一人で来たかと思っているなら大間違いだゼルフィール!!」』

『であああああああああああ!!』

青いグリッドマンのような戦士がグリッドナイトキャリバーを持ちブラックドラゴンの近くのネフィリム達を振り払う。

『お前は……アンチか!!』

『俺はアンチ、だが今の姿はグリッドナイトだ!!』

『お前も進化をしたんだな?』

ブラックドラゴンは立ちあがりセレナがそばにやってきた。

さらに響達の方にも光が発生をした。

『なんだ!?!』

「どりゃあああああああああああああ!!」

上空から振ってきた少女の衝撃波がネフイリム達を吹き飛ばして着地をした。さらに7人の人物も現れて響達は驚いていた。

「あれは私たちだと!!」

「そういうことね、あなたたちはグリッドマンの私たちね?」

「ええ久しぶりね。」

「おのれグリッドマンたちのシンフォギア装者たちまでやってくるとは予想外だ。だが私の復讐ができるとは嬉しいことばかりですよ!!だがここまでしておきましよう……ガルバトロン殿撤退をしますよ。」

『ええいわしに命令をするなどいいたいが貴様の言う通りだ。今日のところはここまでにしておくわい!!覚えておけ!!』

ガルバトロンはカノン砲を地面に放ちその煙を使い撤退をしてみた。カイザーは改めてグリッドマンに握手をする。

『ありがとうグリッドマン、また助けてもらったな?』

『なに気にすることは無い、以前は私の方が助けてもらったからな。』』

彼らは握手をしてほかのメンバーたちも話しているとマジンガーたちがやってきた。

『おーい無事だったか？つてあれ誰だ？』

『グリッドマンだよ、だがその姿などは……』

『それについては君達の基地で話すとするよ。』』

グリッドマンの姿が優太の姿になり、カイザーたちは彼らを連れて基地の方へと帰還する。

グリットマンたちがやってきた理由

大量のネフィリムを出していたのはかつて倒したはずのゼルフィールだった、奴は新たな仲間ガルバトロンと共にマジンカイザー達に復讐をするために戻ってきたのだ。

カイザー達をその圧倒的な力でダメージを与えてとどめを刺そうとしたときに現れたのはかつてカイザーと共に戦ったグリッドマンたちだった。

現在カイザー達は彼らを基地へと連れて帰ってきたところだった。カイザーは人間と同じ大きさになった後体が光っていき兜 甲児の姿になった。

「え!？」

「うそ!!」

「カイザーなのか?」

優太たちは彼が突然として人間になったので驚いている。カイザー事甲児は苦笑いをしてしまう。

「まあ色々とあってこの姿を手に入れたってわけだよ。」

甲児達は中へと連れて行きサンジェルマンたちも戻ってきた。

「あらおかえりなさいマジンカイザーって立花 響達が二人?」

「いったいどういうワケダ？」

「あーしたちは夢でも見ているのかしら？」

『ふーむ……』

「彼女達は並行世界からやってきたものたちだよ。とりあえず司令室へ向かおう。」

甲児の案内で彼らを発令所へ連れて行き弦十郎たちがまっていた。

「優太君に響君、奏に翼、クリス君とグリッドマンは久しぶりだな。」

「ええ弦十郎さんも元気そうで。」

『てかまず気になっていたことがあるんだが？グリッドマンのあの姿についてだよ!!』

マジンガー乙が言うモニターにグリッドマンが現れた。その姿は以前共に戦った

姿とは違う姿になっているからだ。

『これが私の本来の姿でもあるんだ。魔法少女異変で私は本来の姿を取り戻して奴らを

倒すことができた。』

「それがグリットマンの本来の姿ってことか？」

『ああそのとおりだ。さてまず我々がどうしてこの世界へやってきたのか話さないとい

けないな?』

『またカルマノイズが現れたのか?』

「いいえ違います、ゼルフィールを追ってきたのです。」

「ゼルフイールをですか？」

カイザー世界の響が聞いてきたので彼らは答える。

「ええその通りよ、キャロルとの戦いを終えた私たちの前に突如としてゼルフイールとガルバトロンが現れたの。私たちは戦ったけど奴はマジンカイザーたちの世界を潰す為に次元の穴を開けたのよ。」

『なるほどなつまりその穴を通って俺たちの世界へやってきたということか……』
真ゲッターが答えて優太側の戦士たちは首を縦に振る。彼らはSONG基地の部屋で休ませることとなり女性陣たちは泊まり会をすることになった。

翼は部屋へ行こうとしたときブレイドガンナーが彼女に声をかけてきた。

『翼、受け取ってくれ？』

「え？」

ブレイドガンナーから光が授かれてギアのペンダントに吸収される。

「これはもしかして？」

『そうだ、お前は剣士と聞いたからな……それなら俺の力を使えると思つてな。』

「ありがとうブレイドガンナー。」

翼は彼女達がいる場所へと走って行くのであった。

クリス side

今私たちは大きな部屋に集まっていた、この間は優太さんのところでお世話になっていたが今回は私たちが逆になっているな—と思った。

「そういえばそっちは何か変わったの？」

「うん!!実はグリッドマンの力がギアとして使えるようになったの!!」

「私のガングニール電童みたいな感じかな？」

響同士は話が盛り上がっているみたいだね? マリアとセレナの姉妹同士は何を話しているのかな?

「それでカイザーが人間になったんだから何かをしているのかしら？」

「うえ!? えつとその……彼に抱きしめたりしているかな? その……カイザーが人間になるなんておもってもいなかったから。」

「そっちはブラックさんとどうなの?」

「ネフィとは普通だよ?」

「ネフィつてもしかしてブラックさんのこと?」

「そそ。」

あつちはあつちで盛り上がっているし……さてほかの人の方も見てみよう。先輩たちのほうは?」

「へーそっちはグリッドマンのアシストウエポンがギアになったのか?」

「ああそっちのあたしは何か変わっているのか？」

「もちろんだよ、コンバトラーの力をギアに変えたといえればいいかな？」

「ではそちらは二つの姿に変わることができるといいたいな？」

「ああそちらも奏と同じウェポンで戦うことができるのが羨ましいな。だが恋をするつてのはなかなか難しいな……私もカイザーに恋をしているが……」

「え!? カイザーに?」

優太さんのところの先輩が驚いているけど。てか先輩もカイザーを狙っていたなんて知らなかったな……これはライバルが増えそうだな。

「へえバスターボラーがあんたのギアを変えてねー。」

「そっちはなんか仲間が増えていたな?」

「色々あったのよこっちもよなあクリス?」

「ふえ!? うんそうだね。」

アリスいきなり振らないですよ……人間観察をしていたのにいきなり声をかけるからびつくりをしたよ。でもそっちもキャロルたちと戦ったんだね。

まあこっちは魔王級と戦ったけど疲れたな。そういえばカイザーたちは何をしているのだろうか?

クリス side 終了

一方で優太の中にグリッドマンが憑依をして甲児と話をしていた。

「なるほどな優太君の中に憑依することができるようになったのか？」

「ああだがかつて私と共に戦ってくれたアシストウエポンの方は使用できない状態だけだな。」

「……………グリッドマン頼みがある。」

「なんだ？」

「……………前に作ってくれたヴァリンダガー以外の俺用のパワーアップアイテムを作ってくれないか？ シンフォギア装者たちと共に戦えるような……………」

「彼女たちと共に戦えるものか……………確かにあの時は急遽でヴァリンダガーを作ったからな……………わかったちなみにどんなものがいい？」

「そうだな……………バスターボラーとかみたいなのがいいな？」

「ということは私が使用をしている者たちみたいなのがいいってことだな？」

「ああ決してヴァリンダガーが悪いわけじゃない。もしかしたら今まで以上の敵が現れる可能性があるからな……………」

「わかったバスターボラーをベースに君用にアレンジさせてもらうよ。」

「ありがとうグリッドマン。」

一方でネフィは空を見ているとアンチが声をかけてきた。

「おい。」

「なんだ？」

「俺ともう一度戦え。」

「……………いいぜ？お前の新しい力見せてもらおうよ。」

二人がトレーニングルームの方へ向かっていくのを見て優太と甲児も行くことにした。

お互いに人間の姿で立っており構える。

「アクセル・フラッシュ!!」

「ブラックドラゴンイン!!」

二人が光りだしてグリッドナイトとブラックドラゴンへと姿を変える。お互いに構えてから突撃をしてブラックドラゴンはダブルトマホークを出す。

『ダブルトマホークブーメラン!!』

『であ!!』

グリッドナイトは放たれたダブルトマホークを上空へとび回避をしてブラックドラゴンの上空を越えて後ろに立った。

『速い!?!』

グリッドナイトは両手に小さい手裏剣上のエネルギーを発生させてそれをブラック

ドラゴンに投げつける。

『ブラックライガー!!』

姿がブラックライガーへと姿を変えて彼が放ったのを回避をしてライガーは右手をドリルに変えて突撃をする。

『チェーンアタック!!』

ブラックライガーの左手のチェーンが飛びグリッドナイトの左手に絡まる。

『ッ!!』

ライガーは動きを止めてグリッドナイトを倒そうとしたが彼は右手を胸部に当てる。

『ナイト爆裂光波弾!!』

『どあ!!』

放たれた光弾をライガーは受けて吹き飛ばされて彼は姿をポセイドンへと変えた。

『やるじゃねーか、以前よりもパワーアップをしているみたいだな?』

『ああ俺はもう迷ったりしない・・・』

『ならこれでもくらえ!! ストロングバースト!!』

ストロングミサイルが放たれてそこから小型のミサイルがたくさん放たれる。

『グリッドナイトサーキュラー!!』

八つ裂き光輪みたいなのを飛ばしてブラックポセイドンが放ったストロングバース

トのミサイルをすべて叩き落とした。

『ゲッターサイクロン!!』

強烈な竜巻がグリッドナイトに当たり彼は空中へと吹き飛ばされる。ポセイドンからドラゴンへと姿を変えて彼は頭部と腹部にエネルギーをためていた。

『くらえ!!ゲッタースパイナルビーム!!』

頭部と腹部からゲッタービームが放たれてグリッドナイト二向かって放たれる。グリッドナイトは右手を前に構える。

『グリッドナイトストーム!!』

グリッドビームと同じような光線が放たれてブラックが放ったゲッタースパイナルビームが相殺される。

その様子を見ていた甲児と優太。

「すごいな……彼つてあの時の怪獣みたいなやつだろ?」

「ああそのとおりだ、だが今はグリッドナイトとして頼もしい仲間となった。」

「そうか……グリッドマンおそろく向こうに帰ってしまったら忘れるかもしれないがキャロルとの後の戦いは新たな敵が現れる可能性がある。」

「……やはり戦いはあるのだな?」

「……だがそれを決めるのは優太君とグリッドマン、そして君達の仲間だ……」

さてどうやらあつちは終わつたみたいだな。」

甲児が見ると煙が晴れてブラックドラゴンがダブルトマホークをグリッドナイトが左手に光の剣を発生させてお互いの首元につきつけていた。

二人はそのまま着地をして変身が解除される。

「やるじゃないかアンチ。以前より強くなつたじゃねーか？」

「だがこれでもまだだ………マリアたちを守るために。」

「それでいいじゃねーか。」

「え？」

「守るために強くなるってことだよ。お前は知っているだろ？俺がネフィリムだつてことを………その時の俺は無意識で暴れていた化物だ………そのせいでセレナに恐怖を刻み込んでしまった。マジンカイザーに敗れた俺はあいつに勝つためにこちらの量産型ゲッターたちを食べて今の姿へと変わった。知識などはそこからかな？セレナに申し訳ないことをしたな………」

「ブラック………」

「だからこそ俺は守るさ。セレナをな………セレナだけじゃないあいつらだつて仲間だ。」

ブラックことネフィは新たな決意を固めるのであった。

現れたのはグリッドマン!?

次の日カイザーはグリッドマンと共にモニターの方を見ていた。現在グリッドマンはカイザーのパワーアップアイテムことアシストウエポンを作ってもらっている。

バスターボラー バトルトラクトマックス スカイヴィッターをベースにカイザー用に作成してもらっているところだ。

「これが俺のパワーアップアシストウエポンか……」

『ああ私たちと同様にシンフォギアの皆がアクセスコードを使用することで私の合体をした状態のようになる。ただ君の体が大きいのでさらに関節なども変えているところだ。』

「すまん。」

『だが作成をしているが間に合うかどうかはわからない。一応元のアシストウエポンをベースに作成をしているからな。』

「わかったすまないグリッドマン。」

彼らは話をしていると警報が鳴りだした。甲児は発令所のところへと向かっていき到着をする。

「来たかカイザー、謎の敵が現れたそこで君達に出動を頼む。カイザーチームで出動だ!!」

「[[「了解!!」]]」

優太とアンチは構えている。

「アクセスフラッシュ!!」

「マジングオオオオオオオオオオオオ!!」

「ふん!!」

それぞれグリッドマンとグリッドナイト。マジンカイザーとブラックドラゴンへと変身をしてエンペラーと真ゲッターの手にシンフォギア装者たちが乗りこんで街の方へと出動をする。

先にカイザーとグリッドマンが先行をして暴れている敵を発見をした。

『先手必勝だ!!ターボスマッシュャーパンチ!!』

カイザーの左手前部が回転をしてターボスマッシュャーパンチが発射されて相手に向かって飛んで行く。相手はカイザーが放った拳を蹴りではじかせた。

『な!!』

カイザーはターボスマッシュャーパンチを蹴り返されるとは思ってもいなかったのだから左手が戻ってきたのでドッキングをして着地をした。

『ぐおおおおおおおおおおお!!』

だがその相手の姿を見て驚いてしまう。

『「あれは……私!?!」』

『グリッドマンだ!!』

そこにほかのメンバーたちも着地をして優太の世界のシンフォギア装者たちは驚いている。

「あれってグリッドマン!?!」

「馬鹿ななぜグリッドマンが!!」

『「気を付けろあれは私の偽物だ。」』

『ぐおおおおおおおおお!!』

黒いグリッドマンことブラックグリッドマンは左手にエネルギーをためてブラックグリッドビームを放ってきた。

『「させん!!」』

カイザーが前に立ちブラックグリッドビームをガードをして彼の肩を踏んでダブル響が先行をする。

「おりゃあああああああ!!」

バイパーウィップを装着をして振り回してブラックグリッドマンに攻撃をする。彼

は回避をするがそこに優太の世界の響が蹴りを入れてきた。

『ぐああああああああ!!』

ブラックグリッドマンは響の足を受け止めて彼女の足をつかんでそのまま投げ飛ばしてカイザー世界の響に激突させた。

「が!!」

「響!!」

「野郎!!あたしの必殺技パート……」

だがその前にブラックグリッドマンが移動をしてきてアリスとクリス、優太の世界のクリスは驚いている。

「え!?!」

「な!!」

「嘘だろ!!」

『ぐおおおおおおお!!』

そのまま三人を蹴り飛ばしてから接近をしようとするダブル調と切歌にダークスパークビームを放ちダメージを与える。

「う!!」

『この野郎!!トマホークブルーメラン!!』

『ダブルトマホークブーメラン!!』

真ゲッターと真ドラゴンがトマホークを投げてブラックグリッドマンに放つ。彼は両手から光弾を飛ばしてトマホークを叩き落としたが上からエンペラーとグリッドナイトがエンペラーソードと手に紫の剣を発生させてブラックグリッドマンのボディを切りつけた。

「そうだ!!ブレイドガイナーセットアップ!!」

翼はブレイドガイナーを装着をして優太の世界の翼は奏に声をかける。

「奏!!」

「ああ!!」

「アクセスコード スカイヴィッター!!」

二人はスカイヴィッターに入りグリッドマンは察したがブラックグリッドマンは妨害をしようとしたがそこにカイザーが前に現れてブラックグリッドマンの顔を殴った。

『今だグリッドマン!!』

『『おう!!』』

スカイヴィッターが脚部パーツ及び背中、ヘッドパーツへと合体をしていきその姿が現れる。

「『『大空合体超人!! スカイグリッドマン!!』』』」

ブラックグリッドマンはブラックグリッドビームをスカイグリッドマンに攻撃をする。だが彼は高速で回避をして高主カレーザー砲が放たれてブラックグリッドマンにダメージを与えている。

「はああああああああああ!!」

そこにブレイドガイナー形態の翼が刀でブラックグリッドマンに攻撃をしてそこにカイザーの光子カビームが放たれてブラックグリッドマンはダメージを受ける。

『今だグリッドマン!!』

「『ああ!! いくぞ二人とも!!』」

『ああ!!』

『決めよう優太!!』

スカイグリッドマンは左手にエネルギーをためていく、ブラックグリッドマンも同じようにエネルギーをためていた。

「『『スカイ! グリッドオビイイム!!』』』」

『ぐおおおおおおおおお!!』

二つのグリッドビームが激突をする、だがスカイグリッドマンは四人が合体をしている姿だ。ブラックグリッドビームが消されてスカイグリッドビームがブラックグリッド

マンに命中をする。

『ぐああああああああああああああああ!!』

ブラックグリッドマンは爆発をしてスカイグリッドマンは着地をした。そのままスカイヴィクターが解除されて優太の世界の翼と奏が現れる。

「ふう疲れたぜ。」

「ああ………」

グリッドマンは両手からフィクサービームを放ち彼女達の疲れなどを回復させていく。カイザー世界のクリスは優太の世界のクリスを見てあることを思いついた。それは以前グリッドマン世界へ行ったときにやった響同士の合体を………

カイザーとグリッドマン出動不能!?新たな武装合体!!

ゼルフィールは現在新たなロボットを完成させた。

「ふふふ完成をしましたね、ガルブリーダ。獣のように相手を襲うための怪物兵器さあ行きなさい。」

ゼルフィールの命令を聞いて出動をしていく、一方で基地の方ではカイザーの体はコードなどがつながれていた。

「これって……………」

『ああ今カイザーの体は調整を行うためにこの状態だ。』

「ああその為俺は出撃ができない状態なんだ……………」

甲児は自身の体を見ていると警報が鳴りだした。発令所にて全員が向かっていくと量産型ゲッターロボなどが暴れていた。

「グリッドマン!!」

『……………駄目だ私も出動ができない。カイザーの調整を私がいけないからだ。』

「なら私たちだけでも!!」

「弦十郎。」

「ああ今回はダンナーチームとマジンガーチームが出撃だ!!」

そういつて指示を出して優太と甲児は待機をしてアンチはグリッドナイトへと変身をして現場へと向かう。

「頼んだぜ皆………」

現場に到着をした全員がマジンガーたちがその周りを担当をすることとなり怪獣ガ
ルブリーダをシンフォギア装者たちが戦うことになった。

「ボアドライブインストール！」

響はガトリングボアを装着をして隣にダブルクリスがガトリングを構えて掃射した。
だがガルブリーダは素早く彼女達が放つ弾丸を回避をした。

「グリッドビィィィム!!」

優太世界の響はグリッドマンギアを纏いグリッドビームを放つがそれをもかわして
セレナはブラックライガー形態へと姿を変えてドリルアームを発動させて攻撃をする。

「なんて素早いのですか!!」

ライガー形態のセレナのスピードをかわしてガルブリーダは口から火炎弾を放つ。

「危ない!!」

切歌と調はグレンダイザーとマジンガーZになり異世界の二人を守る。

「大丈夫デース?」

「ふふそんな火炎放射などこのグレンダイザーには効かないデース!!」

「野郎うろちよろしやがって!!」

異世界のクリスはミサイルを放つがガルブリーダは素早く回避をしているのでクリスはどうするかと考えていた。

「せめてあいつの動きが止めれたら……」

「私に任せろ!!ヘルスウインド!!」

翼はブレイドガイナーモードへとなりヘルスウインドを発動させて竜巻がガルブリーダに襲い掛かる。

その間にクリスは異世界のクリスに話しかけていた。

「ねえ私、前に響同士がやったこと覚えている?」

「んだよ覚えてるぜ。バトルトラクトマックスでやったよなってまさか!!」

「そういうことだよ。私たちもやるってこと!!」

「……へ!面白いことを言うぜ。わかったぜ!!アクセスコードバスターボラー!!」
小さいバスターボラーが現れて異世界のクリスが一体化をしてカイザー世界のクリスに合体をしていく。

彼女の胸部に装甲が展開されて頭部ヘルメットを装着する。

『武装合唱戦士！バスターイチイバル！』

合体を完了をしたクリスはミサイルやガトリングの雨を放ちガルブリーダに向かって放たれる。

『ぐおおお?!』

ヘルスウインドによって動きを止められていたガルブリーダはその攻撃を受けてダメージを受けていた。

そこに刀を持ちガルブリーダを切った翼は声を出す。

「今だダブル雪音!!」

『ああいくぜあたし!!』

「うん!!」

ドリルが展開されてパラボラアンテナ状にエネルギーが発生をしていく。

『ツインバスターグリッドビーム!!』

放たれたビームがガルブリーダに命中をしてガルブリーダのボディが燃えていき爆発をした。

「ふい………一丁上がりかな？」

バスターボラーが分離されてクリスが現れる。彼女もだなどいいクリスはハイタツチをする。

「え?」

「ハイタッチだよ知らない?」

「知っているがなんでいましたんだ?」

「え?だって勝ったからだよ(笑)」

「つたく本当にあたしかよ……」

「私は私だよ!!」

一方で基地のほうではグリッドマンによる調整がおこなわれていた。

「どうだグリッドマン?」

『ああ今データの構成を行っている。これを完成をすればアシストウエポン装着が可能となる。四つの機体は完成をしているがな。』

グリッドマンが提示をしたのを見て甲児は驚いている。

「これが俺のアシストウエポン……」

『私のアシストウエポンとほぼ同じ形態になっている。名前はカイザータンク、カイザードリラー。カイザージェットにカイザーシールドだ。』

「一体は盾になるのか……そこから剣が抜ける感じだな?」

『そのとおりだ。まだ完成をしていないがジェット機が君の装甲に合体をするように改良をしているところだ。』

「ほーう。ヴァリンダガーみたいなものか？」

『そのとおりだ。とりあえず今君の体にインストールをしている状態だ。それでシンフォギア装者たちにこれを装着させてみてくれ。』

「わかった。」

甲児は自身の新たな力を得ることに對して喜んでいるが……なぜゼルフイー
ルが蘇ったのか不思議に思ってしまう。

カイザーウエポン

カイザー事甲児 side

現在俺達は優太君ことグリッドマンの後をついていきシユミレーション室へとやってきた。それはカイザーウエポンシステムが完成をしたってことでお披露目なのだ。

「なあカイザーいったい何を見せてくれるの？」

「なーに今にわかるよ。」

ほかのロボットたちも何が始まるのだろうかと気になっている中俺達はシユミレーション室に到着をしてグリッドマンこと優太君が立っていた。

「皆呼んですまない。」

「今はグリッドマンか？」

「ああそのとおりだ天羽 奏。今回君たちを呼んだのはほかでもない。カイザーのアシストウエポン『カイザーウエポン』が完成をしたことを報告するためだ。」

「……カイザーウエポン？」

「そう、以前作ってくれたヴァリンダガーもあるのだが……あれだけではだめだと思っただけグリッドマンに彼が使っているアシストウエポンをベースに俺の体格に合

うように作ってくれたことさ。」

「カイザー早速。」

「わかつているさ。カイザーイン!!」

俺は元の体へと戻り目が光りだす。

『カイザーウエポン!!』

すると俺の周りに四機のウエポンたちが現れた。カイザータンク、カイザードリラー、カイザージェット、カイザーシールドだ。

俺達の世界のシンフォギア装者たちは驚いている中ほかのロボットたちも驚いている。

『これがカイザーが言っていた新兵器って奴か?』

『ああそのとおりだ。俺の剛腕力をあげたり飛行能力を上げたりとかな?カイザースクランダーが使えないときとかもあるからな……胸部装甲に装着をしたりと……』

『なるほどな。それでヴァリンダガーはクリスとアリス用にすることか?』

『そういうわけじゃないさ。』

『しかしグリッドマンが使うアシストウエポンと微妙に違いが出ているな……後
は色もお前用に合わせているのか黒いしよ。』

『そうだな。』

「それでカイザー誰が装着をするのかって決まっているのか？」

『いやこれから決めるところだ。』

こちらの世界のシンフォギア装者たちはカイザータンクなどを見ていた。ほぼグリッドマンが使用をするアシストウェポンをベースにしているがカイザータンクはビームカノンが二門になっているなど一部一部で違いがある。

カイザージェットも翼にはビームセイバーがついておりビーム刃で相手を切り裂くことができるものだ。ビームカノンなどが装着されているなど改良をされている。

カイザードリラーはドリルが大きくっておりパラボラアンテナ状にはならずそこからビームを出すようにしておりドリルが大きくなっている。

カイザーシールドは分離をしてブレードとシールドに変形をして装着をすることが可能となっているなど改良を加えられている。

「ってことはあたしたちがこれを決めていいってことか？」

『その通りだが、決まっているのはあるのだよな……。響ちゃんにはカイザータンク、翼と奏にはカイザージェット、調と切歌はカイザードリラー。マリアとセレナにはカイザーシールドと決めていた。』

「ちよつとあたしたちは!!」

『君達にはヴァリンドガーを頼みたい。元々あれはグリッドマンが主に君達用につと決

めていたみたいだ。』

「そうだったんだ知らなかった。」

「あたしもだぜ。」

『さてまずは……カイザータンクから試すかな？響ちゃんコードはカイザータンクだ。』

「わかりました!!カイザータンクドライブ!」

響ちゃんが光りだしてカイザータンクに合体をして俺は走りだしてカイザータンクが分割されて俺の両腕に合体をしていく。

『剛腕戦士!タンクカイザー!』

剛腕の如く俺の両手にカイザータンクが合体をしてターボスマッシュヤーパンチなどは使えなくなるがその剛腕で相手を粉碎することが可能となった。さらには両肩につけているカイザーキャノンが武器となる、ほかの俺の武装などは使用できる。分離をして響ちゃんが出てきた。

「ほえーこれが合体なんだね。異世界の私はすごいよ……」

「ならば私たちデース!!」

「カイザーよろしく。」

『了解だ。二人ともコールは。』

「カイザードリラー!!」

カイザードリラーが現れてカイザー二向かって飛んで行き胸部装甲に装着されて行く。背中の上部にドリルがセットされてキヤタピラなどが展開されている。

『『武装合体!ドリラーカイザー!!』』

武装としてはバスターグリッドマンと同等だがドリルミサイルを飛ばすことが可能でさらにドリルを両手に装着をして戦うことが可能となっている。さらにはミサイルやガトリングなども装備されており胸部はファイヤーブラスターを放つためのバスターノヴァという必殺技が可能である。

その代わりファイナルカイザーブレードが使用不能になる。

分離をして切歌と調が現れるが二人は座りこんでいた。

「っ、疲れた……」

「あたしたちも最初はあるな感じだったよな?」

異世界のクリスの言葉に異世界ののシンフォギア装者たちは首を縦に振る。次にカイザージェットを試すためにツヴァイウィングの二人が立っている。

「さーて次はあたしたちだ!!」

「行くよ!!」

「コードカイザージェット!!」

黒き戦闘機カイザージェットが現れて俺は走りだして脚部の光子力ジェットで空を飛びカイザージェットが分離をして脚部と背中に合体をしていく。なお頭部ヘルメットははまらないため背中に装着されている。

『『『天空合体！ジェットカイザー!!』』』

背中に脚部と背中にカイザージェットが合体をして脚部にはミサイルが発射可能となっている武器があり背中にはビームキャノン、さらに翼にはビームセイバーが装備されているなどより戦闘に向いている形態だ。

さらにほかの二つとは違い俺の武器全部が使えるため俺は着地をして分離をされて二人が出てきた。

最後のマリアとセレナのカイザーシールドとカイザーブレードは言えばプロペラ機のシールドにグリッドマンが使うサムライギャリバーにプロペラ機が装着された感じである。

そのプロペラ機がシールドとなりグリットマンギャリバー部分が剣となる。プロペラ機が回転をして竜巻を発生させて相手の動きを止めてからギャリバーで切る感じだな？

それから分離されてマリアたちも座りこんでいた。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

『やっぱり疲れるみたいだな?』

『向こうでクリスたちがやったときみたいな感じだな?』

ブラックドラゴンたちがセレナたちの様子を見て俺も確かになという。ほかのみんなもカイザーウェポンたちをじーつと見ているが残念ながら俺しか装着できないようになつているからな……

「どうだカイザー?」

『ありがとうグリッドマン装着をしても大丈夫みたいだ。』

「なら安心をしてそれを託せるな……次の戦いで使うのかい?」

『まあ状況を見てだな……』

新たな兵器 カイザーウェポンが完成をしたカイザー、果たしてゼルフィールたちとの戦いは始まったばかりだ。

ガルバトロン出撃

ゼルフィールたちの基地。

『ええい!!いつまでこうしているのだゼルフィール!!』

「落ち着いてくださいガルバトロン殿、今の我々は兵力が減っている状況……今のまま出撃をすれば奴らにやられるだけですぞ?」

『ふんそれは貴様は奴らに二度も敗れて臆病になっているだけだ。もういいわしは出撃をする!!』

ガルバトロンはゼルフィールの部屋を出ていき彼はいなくなった後呟いた。

「単細胞が……まあいいあいつはそろそろ用済みだと思っていたし我がネフィリム達のえきになってもらうとしよう。量産型ゲッターロボ発進せよ!!」

ガルバトロンの後を追うように量産型ゲッターロボたちは出撃をしていく。一方で基地の方ではゼオライマーが外を見ていた。

「どうしたのゼオライマー?」

『サンジェルマンたちか……青空を見ていたさ。だが奴らはいつ攻めてきてもおかしくないからな……』

「その通りねってどうやらあなたが言った通りになったわね？」

警報が鳴りだして二人は発令所へ行くとカイザー達ですでに待機をしていた。ガルバトロンが街で暴れているという情報をキャッチをして出動をしようとしたが量産型ゲッターロボたちも出現をしたという。

「カイザーチームとシンフィギア諸君、さらにサンジェルマンさんたちに出撃をお願いします。ほかのチームは量産型ゲッターロボたちを排除を頼む!!」

『わかった!!』

一方で街ではガルバトロンがカノン砲を放って街を壊していた。

『ふっはっはっは!!最初からこうすればいいものをゼルフィールめ……来たか。わしのカノン砲を受けてみる!!』

ガルバトロンは変形をして砲台へと変わり放ってきた。

『おっと!!』

『いきなり攻撃か!!ゲッターブラストキャノン!!』

右手に銃を発生させてトリガーを引き弾が放たれる。ガルバトロンは変形をして着地をする。

グリッドマンとグリッドナイト、カイザー達が着地をした。

『えっはっはっは!!罠にかかったな!!』

『何?』

ガルバトロンはスイッチを押すと突然として電撃が発生をした。

『ぐあああああああああ!!』

『「きゃあああああああ!!」』

突然として電撃が彼らに襲い掛かり膝をついていく。

『わしはただ暴れているだけだと思っただか愚か者!!これは貴様たちを倒す為に仕掛けておいた罠なのだよ!!これでもくらえ!!』

カノン砲が放たれてエンペラーたちに命中をする。

『どあ!!』

『くそ……体が動かねえ……』

(どこかに罠を発生させている装置があるはずだ……だがどこにあるんだ?)

カイザーはスキヤンを使って装置を探していた。だが痺れの方もきておりいつたいどこにあるのか急いで探している。

『ふっはっはっは!!』

『くそ!!』

『グリッドマン!!』

『駄目だ……私の方も動くことができない。』

（仕方がない、この電撃を上回る力を解放させるしかない……その方法はマジンパワーだ!!）

『うおおおおおおおおおおおおおおお!!』

カイザーは立ちあがりガルバトロンは驚いていた。

『馬鹿な!!なぜその電撃の中を立つことができるのだ!!』

『マジンパワーアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

カイザーの体が光りだして仕掛けていた装置が火花を散らして爆発をしていく。すると電撃がなくなり彼女達は立ちあがったがカイザーは膝をついた。

「カイザー!!」

『悪い……少し力を使い過ぎたみたいだ……』

『おのれ!!』

ガルバトロンはカノン砲を放とうとしたが先に光弾が飛んできて彼は吹き飛ばされる。

『どあ!!』

放ったのはグレートゼオライマード。彼の左手の光球から光の弾が放たれてガルバトロンに命中をした。

ガルバトロンは立ちあがり攻撃をしようとしたがそこにスカイヴィッターやバス

ターボラーにバトルトラクトマックスなどが砲撃やミサイル攻撃で攻撃をしていた。

「おのれ!!」

『えい!!』

セレナが合体をしたグリッドマンギャリバーの突撃をした斬撃が命中をしてグリッドマンの周りに集まる。

「今こそ私たちの真の力を見せる時!!」

『『『『『はい!!』』』』』

バトルドラフトマックスが分割をしてバスターボラーも変形を開始、スカイヴィクターも足部と背中へと分離状態へとなり合体をしていく。

がしんがしんと次々にグリッドマンに装着されてバスターボラーのヘッドギアが装着されて角が立つ。

『『『『超合体超人!フルパワーグリッドマン!!』』』』』

フルパワーグリッドマンに合体をしたグリッドマンにガルバトロンが驚いている。

『なんじゃその姿は!!わしのカノン砲を受けてみる!!』

カノン砲を放つがフルパワーグリッドマンはそれを正面で受け止めている。そこに響とセレナが接近をして拳と短剣で切りつける。

『ぬお!!』

「私からプレゼントです!!」

「おら!! あたしの必殺技だ!!」

クリスはバスターライフルを放ちアリスはワイルドショットを同時発射させてガルバトロンに命中させる。

『おのれ!!』

『はああああああああ!!』

グリッドナイトは接近をして右手に紫の剣を創成をしてガルバトロンに切りつける。さらに異世界のマリアと調と切歌が接近をしてガルバトロンに攻撃をした後カリオストロが両手から光弾を飛ばしてガルバトロンに命中をする。

『おのれ!!』

『チエンジ真ゲッター3!!』

オーブンゲットをして真ゲッター3へと変わり両手が伸びてガルバトロンの体を巻き付ける。

『なに!?!』

『必殺大雪山おろし!!』

『ぬおおおおおおお!!?』

「くらいやがれ!! ビックブラスト!!」

「ヘルスウインド!!」

翼と奏が同時に放ちガルバトロンに命中をして吹き飛ばす。さらにフルパワーグリッドマンが接近をして右手に装備されたグリッドギャリバーを振り下ろしガルバトロンをボデイに大ダメージを与えていく。

『おのれ!!』

『まだまだいくぞ!!マリア、調、切歌!!同時攻撃だ!!』

「ええ行くわよ!!」

「「おう!!(デース!!)」」

真ドラゴンとブラックドラゴンも参戦をして六人は攻撃をする。

『サンダーボルトブレイカー!』

『真ゲッタービーム!』

『ゲッタービーム!』

『ブレストバーン!!』

『ブレストファイヤー。』

『反重力ストームデース!!』

六人の技が重なりガルバトロンに命中をして吹き飛んで行き彼の体から火花が発生をしていた。

『おのれ……このわしが!!』

「今だグリッドマン!!」

『ああ!!』

グリッドマンはグリッドギャリバーを構えて上空に掲げると体が黄金に光りだしていく。

『おのれおのれ!!』

ガルバトロンはカノン砲を放っているがフルパワーグリッドマンに攻撃は通じない。

『いくぞ皆!!』

「援護をするぞ!!」

サンジェルマンは銃剣のトリガーを引き弾を発射させてガルバトロンのボディに命中させてプレラータイがけん玉を振り下ろす。

「これでもくらうワケダ!!」

振り下ろしたけん玉の玉がガルバトロンのカノン砲に命中をしてカノン砲が吹き飛ばぶ。

『わしのカノン砲が!!』

『『『『『グリッドおおおフルパワーフィニッシュ!!』』』』』

振り下ろされた斬撃がガルバトロンに命中をした。

!!
!!

全員が目をつぶって最後に残っていたのはネジなど一部分だけが残るだけだった。

『なんてことを……』

「はっはっはっは!! ガルバトロン殿感謝をしますよ。あなたのおかげで私のネフィリム達はパワーアップをしたのですから。さて今日のところは引かせてもらいます。マジンカイザーはカルバトロン殿のダメージで動けないみたいですね。あつはっはっはっは!!」

『さて!!』

フルパワーグリッドマンはツインドリラーを発射させたがゼルフィールに当たることはなく回避される。

分離をしてアシストウエポンから異世界のシンフォギア装者たちが現れた。カイザーは考えていた。

（奴は最初からガルバトロンを利用をしていた。俺たちと戦わせることで奴は疲労をすることを知りそしてネフィリム達に食べさせた。おそらくあのネフィリムはブラックが変貌をしたように……嫌な予感がする。）

「カイザー?」

『……考え事をしていた。ブラック、かつてお前は量産型ゲッターロボたちを食

べて今の状態に変化をしたな?』

『ああその通りだが……まさか!?!』

「ブラックさんのようにあのネフィリム達が変わるといいますかカイザーさん!!」

『可能性とだけ言っておく。なぜガルバトロンを食べさせたのか不思議に思ったからだ。』

「確かに……いずれにしてもまずカイザーあなたの体を。」

『……忘れていた。』

彼はそのまま膝をついてグリッドマンたちに抱えられながら戻るのであった。

ゼルフィールの笑い。

ガルバトロンが街で暴れカイザー達は出撃をした。だがそれはガルバトロンがマジンカイザー達を倒すため罨を仕掛けていたのだ。

カイザーはマジンパワーを発動させてガルバトロンの罨を破壊をしてガルバトロンもグリッドマンが彼の世界のシンフォギアたちが合体をしたアシストウエポンたちとの合体姿フルパワーグリッドマンに合体をしてガルバトロンを吹き飛ばして大ダメージを与えた。

ガルバトロンは大ダメージを受けても立ちあがりカイザー達に向かってきたがゼルフィールが突き刺してネフィリムがガルバトロンを食べていきゼルフィールは笑って撤退をした。

カイザーは罨を突破する際にダメージを受けてしまい現在は兜 甲兎の姿になっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「カイザー体の方は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

甲児は首を横に振った、ガルバトロンの罾を脱出をする際に何かの回路がショートをしてしまった影響で治るのが遅い感じになっていた。

「ならフィクサービームで直してみようか？」

「いやグリッドマン、君にエネルギーを使わせるわけにはいかん。」

「だが……」

「俺がいなくてもエンペラーたちがいるからな……それにシンフォギア装者たちだっている。だから心配いらぬ。(と言いたいがゼルフィールの奴の最後の笑いが気になる。ガルバトロンを食べたことでネフィリムは何かに変わろうとしているのか?)」

甲児はゼルフィールが何を考えるのか考える。とても嫌な予感が……

一方でゼルフィールは笑っていた。

「ふふふふふふはははははははははは!!ガルバトロンを食べることで奴のカノン砲を装着されてパワーアップをした!!さーてカイザーもガルバトロンの罾でダメージを受けていたな。ふっはっはっはっはっは!!さーて暴れるがいいガルバトロンネフィリム!!」

「ぐおおおおおおおおお!!」

街では響達装者たちが街で買い物などをしていた。翼たちも休みだったので全員で街を探索をしていた。

「(こちらにも同じようなものがあるのね?)」

「そりゃああんたらと同じ街だからな、ほぼ変わらんたる?」

奏同士が話をしており全員で歩いていると突然警報が鳴りだした。いったい何があったのかと見ているとガルバトロンネフィリムが現れて暴れていた。

全員はギアを装着をして暴れているガルバトロンネフィリムに攻撃をする。

「ぐおおおおおおお!!」

「なんだよこいつ!!」

優太の世界のクリスがガルバトロンネフィリムに驚いていると彼らは右手についている砲塔をこちらに向けて放ってきた。

全員が回避をして響はドラゴンフレアを装着をする。

「ドラゴンファイア!!」

火炎放射が放たれてガルバトロンネフィリムに当たる。その間にカイザー世界のシンフォギア装者たちはパワーアップをしていた。

「でもどうするアリス?」

「ああいくらあたしたちでもこの数を相手をするのはちとえらいぞ?」

雪音姉妹が言っていると上空から光線が放たれて巨人が着地をした。

「グリッドマン!!」

「『無事か皆!!』」

『あれはネフィリム!?!』

グリッドナイトが驚いているとゼルフィールが現れた。

「驚きましたか? ガルバトロンを食べることでネフィリムはパワーアップをしたのですよ、名付けるとしたらガルバトロンネフィリムと……さあやりなさい。」

「『ぐおおおおおおおおお!!』」

ゼルフィールの言葉にガルバトロンネフィリムが襲い掛かってきた。だがそこに拳が飛んできた。

『メルディックサイレン!!』

パトカーのサイレンが聞こえてガルバトロンネフィリムたちは耳を抑えていた。

『うおおおおおおお!!』

ジェネシックガオガイガーとゴードンナーが蹴りを入れて着地をした。勇者ロボチームとゴードンナーチームが駆けつけた。

『君達は、ほかのところにもあいつらが現れたはずだぞ?!』

『それならほかのチームの皆さんが当たっております。』

『俺達はお前たちを援護をするためにやってきたということだ!!』

超龍神と撃龍神がそういつて構える。天竜神たちも同じように武器を構えていた。

「まさか仲間に託したというのか?」

『そうだ!!お前たちの野望を止めるために仲間たちはガルバトロンネフィリムに立ち向かった!!』

『いくぞ!!ゼルフィール!!』

「まあいいでしょう、ガルバトロンネフィリムの攻撃を受けなさい!!」

『ぐおおおおおおおおお!!』

一体のガルバトロンネフィリムが口から砲撃を放ってきた。

『プロテクトシールド!』

ジェネシックガオガイガーの左手が展開されてプロテクトシールドが発動をしてガードする。

『スパークビーム!!』

グリッドマンの左拳からスパークビームが連続して放たれてガルバトロンネフィリムに命中をする。

「くらいやがれ!!超電磁スパーク!!」

「グラウンドファイアー!!」

『ダブルガン!!』

『うなれ疾風!!』

四人が放った攻撃がガルバトロンネフィリムに命中をするがさらに襲い掛かろうと

していた。

『させん!!』

『デイメンションスナイパー!!』

『グラビティボンバー!!』

ブレードガンナーとゴーオクサー、ネオオクサーがこちらにやってこようとしたガルバトロンネフィリムを抑え込んでいた。

「くらいやがれ!!」

『はああああああああああ!!』

グリッドナイトがセレナが融合をしたグリッド・ギャリバーを持ちクリスが援護をして放ったガトリングの後に切り裂いた。

「グリッドマン!!」

『ああグリッドビィィィム!!』

グリッドマンが放ったグリッドビームがガルバトロンネフィリムたちに命中をして爆発を起こした。

「やったのか?」

全員がその様子を見てるとゼルフィールが笑っていた。

「見るがいい、ガルバトロンネフィリムはまだ生きてるぞ!!」

「なんだと!？」

燃え盛る炎の中に立つガルバトロンネフィリム、だが様子がおかしい……
『なんだ……この感じは……』

するとガルバトロンネフィリムが右手の砲塔をゼルフィールに向かって放った。

「どあ!!」

ゼルフィール自身も一体何があったのか驚いているとガルバトロンネフィリムの周りにはネフィリムが現れて彼に合体をしていき人型へと変形をしていく。

その姿はかつてのガルバトロンのような姿になっていた。だがその姿はスーパリーンクに搭乗をするガルバトロンの姿にへと変貌をしていた。

「貴様は!!」

「我が名はガルバトロン、ゼルフィール……この私をとりこんだつもりだが大間違いだな。私はこんなこともあるのかとネフィリムの中に私の細胞を入れておいた。そのため浸食するのに時間がかかったがまあいい……これは貴様に騙された私の砲撃だ!!メガランチャーファイア!!」

右手に装着された砲塔から砲撃が放たれてゼルフィールを吹き飛ばした。

「おのれガルバトロン!!」

「ふん貴様がやったことだろうが、まあいい貴様のおかげで私もネフィリムの力を手に

いれることができた。ハイパーアップ!!」

すると背部の背中からネフィリムの頭部が発生をして足部などにアーマーのように装着されて行く。

「ハイパーアップ!ガルバトロンネフィリム!!」

「なんだと!?!」

「くらえ!!ハイパーメガランチャー!!」

現れた頭部のネフィリムの口と右手に装備されているメガランチャーからビームが放たれてゼルフィールに放った。

「ちい!!」

ゼルフィールは左手をネフィリム化させて放ったハイパーメガランチャーをガードをする。

「ちい……まだ出力的に足りないか……まあいいここは撤退をするわ!!
トランスフォーム!!」

ガルバトロンネフィリムは変形をして飛び去った。

「おのれガルバトロン……グリッドマン、そして貴様たちは必ず私が倒す覚えて
おけ!!」

『待て!!』

ジエネシツクガオガイガーたちが攻撃をしようとしたが逃げられてしまう。

「まさかガルバトロンが新たな姿になってパワーアップをするとは……………」

「ええしかもそれ以上にパワーアップをしていたわ。」

「ひええええデース。」

二人の切歌が同じ台詞を言ったので全員が苦笑いをしていた。一方でSONG基地でも甲児はモニターでパワーアップをしたガルバトロンネフィリムを見ていた。

「……………」

彼自身は両手を組んでそろそろ治るはずの自身の体を様子を見て調整をしようと思意を固める。

これからの課題。

甲児 side

まさかガルバトロンがネフィリムをとりこんで新たな姿になるなんて思ってもいなかったな。今SONGでは新たな敵となったガルバトロンネフィリムに対しての会議が行われていた。

『まさかガルバトロンがパワーアップをするとは思ってもいなかった。』

「ええ僕もそれは予想ができませんでした。」

「いや誰もできないだろ？」

優太君の世界のクリスが言うがそのとおりだ、俺達もモニターで見ていたがまさかネフィリムがガルバトロンの姿になったときは驚いた……。だがいずれにしてもゼルフイールもそうだがガルバトロンのことも気になる。

俺の体の調整が完了をするからな、なら次の戦いでは俺も出撃をしよう……。改良をして出力なども上げているマジンカイザーがな。

「甲児どうしたのかしら？」

「マリアか何でもないさ。」

「そうこの姿の時は皆が俺のことを甲児と呼ぶようになった。まあカイザーと呼ん
だら大変なことになるからな……」

「でもあなたの顔いつもよりもきつい顔をしているわよ？」

「そんなものだ、ガルバトロンが新たな敵として増えたんだからな……」

「やはりあなたでも？」

「わからない……何か嫌な予感がするんだ。」

「嫌な予感……」

今は何ともないがさつきから嫌な予感がして気分が悪い……一体なんだ？

甲児 side 終了

一方でゼルフィールは怒っていた。

「おのれガルバトロン!!まさかパワーアップをして私に逆らうか!!オノレマジンカイ
ザー!!グリッドマン!!」

彼は右手に持っている銃で部屋を乱射を攻撃をして破壊つくす中、ガルバトロンの方
は冷静になっていた。

「……俺も年をとったな……この姿になって今更地球征服なんて馬鹿げ
たことをするな……」

なんでか知らないがこちらは冷静になり過ぎてなぜ自分が世界征服をするように

なったのかとなつてしまつていた。

「このまま戦つても意味がないしな、だが俺の姿は奴らに見られているからな……
どうしようかな？」

彼はなんとかして彼らの仲間になる方法を考えているとピンポーンと閃いた。

「やむを得まい、奴の姿になるのは嫌だが……そうも言つてられない。ネフィリムたちよ今からいう物になつてくれ？」

「……？」

ガルバトロンはそういつて彼らに何かになるように指示をしてしやべれるように改造をしていたのだ。

『あのーこの姿は？』

「お前の名前はファイヤー1だ」

『それであつしは？』

「お前はジャイロ2だ。」

『えつとドリル？』

「お前はデイガー3だ」

『潜水艦ですよね？』

「お前はサブマリン4だ。そして俺はガルバトロンという名前を捨てる!!トランス

フォーム!!」

彼の姿が変わりグランドコンボイに変身をした。

「今日から俺はグランドコンボイとして生きることにした。そしてお前たちは俺の仲間グランドフォースだ!!」

『『『おとおおおおおおお!!』』』』

「さらに!!ウイングセイバー!!」

「はいコンボイ司令官!!」

そうもう一人ネフィリム一体がウイングセイバーと呼ばれる形態へと変わり彼の隣に立つ。

「さてお前たちゼルフイールは我々にとっても敵だ。だからこそ私たちは新たな組織を作る!!ネフィリム達にもその姿に変身をしてもらうぞ!!」

『『はは!!』』

「私たちはサイバトロンの!!それが我々の組織の名前だ!!」

『『『おとおおおおおお!!』』』』

こうしてガルバトロンの改めてグランドコンボイと名を変えて新たな組織サイバトロンを結成させて彼らのマジンカイザーたちの力になると決めるのであった。

一方でそんなことを知らないマジンカイザーたち世界のシンフォギア装者たちは自

分たち同士で模擬戦を行っていた。その様子をエンペラーとグリッドマンが憑依をした優太とマジンカイザーに戻った甲児がいた。

「マジンカイザーどう思う?」

『あの子たちの連携は以前よりも増している。だからコンビネーションで戦ったら大丈夫だと思う。だが問題はガルバトロンの方だ……奴があゼルフィールを吹き飛ばすほどだ。それがどういう意味かわかるだろ?』

『確かにな……俺達はお前の世界でも戦っている、あいつの執念にはめんどくさいってのがあるが……俺達の攻撃をあれだけ受けたのにビクともしていなかったからな……』

「ああ最後はフルパワーグリッドマンそしてカイザーのヴァリンダガーと合体をしたあの姿で戦って奴を消滅させたと思っていたが……ん?」

警報が鳴りだしてカイザーチームとグリッドマンたちが出撃をするとゼルフィールが暴れていた。

『ゼルフィール!?!』

『なぜ奴が!!』

「待っていたぞグリッドマン、そしてマジンカイザー!!」

彼はそのまま両手をネフィリムの頭部に変えて砲撃を放ってきた。

『「ぐあ!!」』

「カイザー!!」

「野郎!!」

アリスは鋸がついた銃を構えて攻撃をする。ゼルフィールはネフィリムを出してガードをする。

『うなれ!!サンダーボルトブレイカー!!』

『くらいやがれ!!ミサイルストーム!!』

『ライガーミサイル!!』

『くらえ!!ゲッターサイクロン!!』

エンペラーを筆頭に真ゲッター3、ブラックライガー、真ドラゴンが攻撃をする。

「あまいぞ!!」

『「そこだ!!スパークビーム!!」』

「ぐ!!」

交わしたところをグリッドマンがスパークビームを放ちゼルフィールに命中をしてさらにマリア姉妹たちが攻撃をしてゼルフィールにダメージを与える。

ゼルフィールはふふふと笑っていた。彼は傷ついた体が再生をしていく。

「再生能力があつたの忘れていたあああああああああ!!」

「そうだったああああああああ!!」

ダブル響が叫んでいると突然ネフィリムが現れて彼女達の体に抱き付いた。

「なんだこいつら!!」

「ふふふふ。」

彼は指をぱちんと鳴らすとネフィリム達が光りだして爆発をする。

「」「」「きやああああああああああああ!!」「」「」「」

『ぐあ!!』

『が!!』

全員が爆発に巻き込まれて地面に倒れていた。

『自爆だと……』

「そのとおりだよ、貴様たちを倒すためなら奴らを自爆させるのさ。ふふふふ恐ろしい爆発だろ? させてまは……」

彼はマジンカイザーに接近をして剣を構えていた。

「カイザー!!」

（駄目だ体が動かすことができない……先ほどの爆発が影響をしているみたいだ……）

「さてマジンカイザー、まずは貴様から倒させてもらいますよ? あっはっはっはっは!!」

そしてその次はグリッドマン!!そしてこの世界を破壊する!!」

彼は笑いながらカイザーに剣を振り下ろした。

「カイザああああああああああああああああ!!」

だがクリスの声を聞いてビームが放たれてゼルフィールに命中をする。

「ぐあ!!」

『なんだ?!』

『いったいどこから……………』

「あれを見ろ!!」

並行世界のクリス声に全員がビルの方を見るとビームを放ったであろうロボットが立っていた。

「き、貴様は誰だああああああああああああああ!!」

「教えてやる!!私の名前を……………私の名前はグランドコンボイ!!」

『グランド……………』

「コンボイ?」

「グランドコンボイだ……………私の邪魔をするというのか!!」

「ああそのとおりだ。サイバトロン戦士たちアタック!!」

「いくぞインフェルノ!!」

「おう!!」

「俺達も行くぞロードバスター!!」

「はいっす!!」

二体はなんと上下に合体をしてスーパーリンクをしたのだ!!さらにグランドコンボイはグランドフォースを呼び出した。

「グランドコンボイスーパーモード!!」

グランドフォースがグランドコンボイの両手両足に合体をして胸部のマトリクスが開いて構える。

「グランドコンボイスーパーモード!!」

カイザー達も立ちあがりゼルフィールに構える。

「さあ共に戦おうマジンカイザー、そしてグリッドマン!!」

『「なぜ我々の名前を？」』

「詳しい話は後だ。」

構えるグランドコンボイにマジンカイザーとグリッドマンたちは構えてゼルフィールと戦うために構える。

サイバトロンとの共闘

ゼルフィールが現れて暴れていると聞いて出動をするカイザー達とグリッドマン達、ゼルフィールはネフィリムをカイザー達に絡ませて自爆をして彼らにダメージを与えた。

彼はカイザーにとどめを刺そうとした時にグランドコンボイ率いるサイバトロン軍団が現れてゼルフィールの前に立ちふさがる。

「おのれええええええええええ!!グランドコンボイ!!」

「二人とも立てるか?」

『あなんとかな。』

『「ああこちらもだ。」』

「やれネフィリムども!!」

「カイザー!!ネフィリムはあたしたちに任せてくれ!!」

『頼むアリス、いくぞグリッドマン!!グランドコンボイ!!』

『『おう!!』』

三機はゼルフィールに攻撃をするために突撃をする。彼は腕をネフィリムの頭部に

変えて砲撃をしてきた。

『光子カビーム!!』

カイザーが放った光子カビームが相殺をしてグリッドマンとグラウンドコンボイが同時に蹴りを入れる。

「ぐううううううう!!」

『サンダーボルトブレイカー!!』

「くらいなさい!!サンダーブレード!!」

「ブレストファイアー」

「スペースサンダーデース!!びりびり!!」

四機が放つ攻撃がネフィリム達に命中をして爆発をする。翼はボルテスVモードへとなり天空剣を構えてクリスはカイザーモードになりカイザーブレードを構える。

「翼先輩!!」

「いくぞクリス!!」

「はい!!」

アリスはマジンカイザーSKLモードへと変えてブレストトリガーを構えて援護をする。

「おら!!超電磁タツマキ!!」

奏が放った超電磁タツマキが相手の動きを止めてダブル響が走り貫通させる。グリッドナイトはグリッドナイトサーキュラーを放ちネフィリム達を次々に切断させていく。

『マツハスペシャル。』

彼の隣にブラックライガーがたち爆発をする。ほかのメンバーもホットショットとロードバスターと共に撃破していき、ゼルフィールはさすがに焦っていた。

「まさかあの数を片付けたというのか!？」

『ゼルフィール!!』

上空からカイザーがファイナルカイザーブレードを抜いてゼルフィールの右手を切断させる。

「ぐ!!」

『グリッドマン!! グランドコンボイ!!』

『フルバースト!!』

『「グリッドビイイイイム!!」』

二人が放った一斉射撃がゼルフィールのボディに命中をして爆発をして全員が近づいていく。

「やったのか?」

「いえまだみたいだわ!!」

グリッドマン側のマリアが叫ぶと右手がなくなっているゼルフィールの姿があった。彼はぐおおおといながらネフィリム達が右手に合体をして新たな右手になった。

『おいおいまじかよ……』

『奴はネフィリムを取りこむことで切断された腕などを再生をするってことなのか!?!』

「ふっふっふっ残念でしたねマジンカイザー……私はすでに貴様たちによって二度も倒されているのですよ? 二回目の際に発生をしたネフィリム細胞がある限り私は不死身なのですよ!!」

『不死身……そんなことがありえるのか?』

『それはないだろうなゼルフィール、貴様のネフィリム細胞には限界があるはずだが?』

「何!?!」

『ファイヤーブラスター!!』

カイザーはゼルフィールに向かってファイヤーブラスターを放ちゼルフィールのボディにダメージを与えた。

彼はファイヤーブラスターをくらい横にそれたがダメージを受けていた。全員がその様子を見ていたが彼の再生能力が発動をする。

「うぐ……………」

突然として彼は苦しみだしたのを見てグリッドマンは様子を見ている。

『「そうか、ネフィリム細胞にも限界があるってことか……………」』

「なら倒すなら今しかありません!!」

「おのれグランドコンボイ!!なぜ貴様がネフィリム細胞を知っているのだ!!」

『……………それは俺も貴様と同じ存在だと言っておく。』

「まさか貴様ガルバトロンか!!」

『『な!!』』

ゼルフィールが言った言葉に全員がグランドコンボイの方を見る。グランドコンボイはふと笑いその通りだといい、彼らは啞然とする。

「なぜ貴様が奴らに手を貸す!!貴様も地球を支配をしようと舌ではないか!!」

『……………貴様によって倒された俺は新たな姿になった際に何もかもやな感じになったのだ。だからこそ俺はグランドコンボイとなりこの星を守るために戦う決意をしたのだ!!』

グランドコンボイの言葉を聞いてカイザーとグリッドマンは隣に立つ。

『お前の言葉が本当みたいだな。信じているぞグランドコンボイ!!』

『ああ共に戦ってくれグリッドマン、マジンカイザー!!』

『おう!!』

「おのれええええええええ!!ネフィリムども私の体に集まれええええええええええええええええ!!」

すると戦っていたネフィリム達が次々にゼルフィールの体に集まっていく。するとゼルフィールの体が変わっていき四つん這いの巨大なネフィリムへと姿が変わる。

『グへへへカクゴハイイカ!!キサマタチヲジゴクニオクツテヤル!!』

『それはこちらの台詞だ!!皆!!』

「はい!!」

『こちらもいくぞ!!』

「おう!!」

するとアシストウエポン及びカイザーウエポンたちが現れて響達がその中へ入りグリッドマン及びマジンカイザーに合体をしていく。

「[[[[[[最強魔神!!マジンカイザーエボリューション!!]]]]]]」

「[[[[[[超合体超人!フルパワーグリッドマン!!]]]]]]」

合体をしたマジンカイザー達が着地をしてエンペラーたちが隣に立つ。

『いくぞ・・・・・・ゼルフィール!!』

「コイ!!マジンカイザードモ!!」

暴走ゼルフィールを打ち砕け!!マジンパワー!!

ゼルフィールがネフィリム達を吸収をして異形な姿へと変わりマジンカイザーもマジンカイザーヴァルグルスにグリッドマンもフルパワーグリッドマンへと変わりマジンカイザーたちの周りにエンペラーたちが立つ。ほかのエリアにもネフィリムが現れたと情報が出たがマジンガーZを始め全機が当たっておりそこに真マジンガーZが現れる。

『やつと傷を治すことができた!!さあ俺も共に戦うぞ!!』

『クラエ!!』

ゼルフィールはビームを放ってきた。異世界の方のマリアと調、切歌は鋸や鎌、短剣でゼルフィールに攻撃をする。

「くらいやがれ!!ファイヤーインフェルノ!!」

「ターボスマツシャーパンチ!!」

アリスとクリスの双子が技を放ちゼルフィールに攻撃をする。そこにホットショットとロードバスターが攻撃をする。

「オノレ!!」

再生能力を使いゼルフィールは攻撃をされた場所が回復される。カイザー達はその様子を見て真ゲッターはオープンゲットをして真ゲッター3になり真ドラゴンは両手をゲッターポセイダンの頭部を出す。

『ゲッターサイクロン!!』

強力な風が放たれてゼルフィールは吹き飛ばされる。そこに真ゲッター3のミサイルストームが命中をする。

「オノレ!!」

「くらえ!! デイガドリルキック!!」

グランドコンボイの右足のドリルキックがゼルフィールのボディを攻撃をする。ブラックドラゴンとグリッドナイトは同時に飛び構える。

『行くぞ!! グリッドナイト!!』

『おう!!』

『ゲッタービーム!!』

『グリッドナイトストリーム!!』

二人が同時に放った光線がゼルフィールのボディに命中、ゼルフィールは再生能力を発動させようとしたがそこにマジンカイザーとグリッドマンが同時に武器を振り下ろす。

「やったか？」

クリスたちもマジンカイザー達の隣に立ちその様子を見ていると爆発をした場所から動いているものがいた。

「オ、オノレ……」

そこにはボロボロのゼルフィールの姿があつた。右手などが消滅をしており残っている部分もえぐい状態でこちらに歩いていった。

「ひい!!」

クリスは青ざめていたのでカイザーは前にたち真マジンガーZがビツクパンパンチ形態へと変形をする。

『……ゼルフィール、これで終わらせる!!ビツクパンパンチ!!』

右手に装着されたビツクパンパンチが放たれてゼルフィールの胴体が貫いていく。だがそれでもゼルフィールはマジンカイザーの方へと向かっている。

「マジンカイザーアアア!!」

するとカイザーは突然としてカイザーウエポンたちを解除をして中から響達が現れる。

「うわ!!」

「カイザー?」

『離れている』

『何をやる気だ』

『奴の細胞をすべて焼き尽くすだけだ。マジン……パワーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

するとカイザー自身が高熱を帯びるかのように体全身を燃やしている。そしてそのまま突撃をしてゼルフィールを抑え込んでいる。

「オノレエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

『お前は言っていたな?細胞が一つでも残ってれば貴様は再生をすると……ジエネシツクガオガイガーがゴルディオンハンマーを使ってわずかに残されたお前の細胞が再生をしたのなら……二度と再生をしないほどに燃やし尽くせばいい!!』

カイザーはさらに全身を燃やしていきクリスタちは止めようとするがエンペラーたちが止める。

「離して!!」

『駄目だ!!』

「カイザーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

アリスが涙を流しながら叫ぶ中カイザーは両目を光らせる。

『来るな!!』

ぴたつとクリスたちは止まった。奏はモシカシテと思い聞く。

「もしかしてカイザーライブ事件のようにオーバーヒートをしているから来るなつてことか?」

『そうだ奏、カイザーノヴァを引用させた技がカイザーダイナマイトだ。奴の細胞一つ一つ残らない方法がこれだ。』

「だがそれを使えば君は死んでいたかもしれないだろう?」

優太に憑依をしたグリッドマンが彼に声をかける。カイザーもさあなといいながらオーバーヒートが治ったので立ちあがる。

それから数日後、エルフラインから次元に穴が発生をしたと連絡を聞いて全員で来ていた。おそらくその穴から優太の世界へとつながっていると……カイザーは甲児となり優太と握手をする。

「また助けてもらったな」

「きにしないでください。」

「もし困っていたら俺も力を貸すぜ?」

「ありがとうございます!!」

「時間がないのだから? 優太君、グリッドマンと仲間たちと共にこれから戦い続けるん

だ!!」

「はい!!」

優太たちは次元の穴の中へと入っていき、彼らが入ったのを最後に穴は消滅をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「カイザー」

「また会えるさ、俺達と一緒に戦った仲間だからな・・・」

「そうだね」

クリスと共に穴があった場所を見ているとアリスがさてといい彼を後ろから抱き付く。

「アリスどうした?」

「気にするなよーほらいくぞー」

「おい待て!!どこに連れて行くんだああああああああああ!!」

「待つてよアリス!!」

クリスたちは移動をしたのを見てマリアたちはやられたと思ひ悔しがつているのをエンペラーたちは見ている。

『なあ真ゲッター』

『なんだ?』

『誰がカイザーの嫁さんになるんだか?』

『さあな?それを決めるのはカイザーだ』

『だな』

カイザーこと甲児を見ながらエンペラーたちは笑っていた。

平和な一日

甲児 side

ゼルフィルの奴を新必殺技カイザーダイナマイトで倒したのはいいがエルフナイン曰く俺の体のメンテナンスが必要になってしまい俺は甲児の姿になりアリスとクリスに連れられて移動をしていたが買物に付き合わされるとはな．．．．やれやれ．．．．

「どうしたのカイザー？」

「何でもねーよ、ゼルフィルを倒したのはいいが今度こそあいつは成仏で来たのかなってな」

「あーそういうことか、大丈夫だろ？カイザーがカイザーダイナマイトで燃やし尽くしたんだからよ!!」

「アリスはそう言っているが俺もハッキリと首を縦に振れないんだよな．．．．ゼルフィルのことだから何も無いと思うが．．．．わずかに残っていてもあいつは再生をするんだよな。」

まあ考えていても仕方がなねーな、俺は彼女達と買物を楽しむことにした。

甲児 side 終了

一方でエルフナインはカイザーの体をチェックをしていた。カイザーダイナマイトを使用した後のチェックをするために彼女は出力などを見ていた。

「以前よりも出力が上がっている気がします。前の出力よりもかなり……でもどうしてカイザーだけ？」

彼女は呟きながらカイザーの体をチェックをしてから修理の方は自己修復されているので必要ない。さて場所が変わり甲児は二人の買ったものを手に持っていた。

彼は人間の姿をしているが元のカイザーとしての力はそのままのため軽々に持っていた。

「ごめんねカイザー……」

「気にすることはない、俺にとっては普通だ」

「けどよかなり持たせてしまっているし」

二人は申し訳ないと思いがあつたがカイザー自身は気にしていないため彼らは歩いてみるとビルが燃えているのを発見する。

「ビルが!!」

「助けてください!!子どもが子どもが!!」

「……俺が行こう!!」

「カイザー!？」

彼は燃えているビルの中へと入っていきカイザーの呼びだしてカイザーへとなる。彼は走りながら邪魔な瓦礫を殴っていき壊して子どもの生命反応を探知をしている。

『どこだ?どこにいる!?!』

「助けてええええええええええええええ!!」

『あつちからだな!!』

彼は急いで走っていき瓦礫を撤去をしながら泣いている子どもを見つける。彼は膝をついて子どもを見ていた。

『大丈夫か?』

「ま、マジン………カイザー?」

『しっかりつかまっている脱出をする。』

子どもはカイザーに抱き付いたのを確認をして彼は壁にタックルをして脱出をしてビルからカイザーが現れたのを見て全員が驚いているが彼は脚部のジェット噴射器を作動させて着地をする。

そして子どもを降ろして母親が子どものところへと走っていく。

「ありがとうございますありがとうございます!!」

「ありがとうございます!!」

『気にすることはない。さて後はあの火事を消せばいいのだな？消化液発射!!』

スリット部分から消化液が発射されてビルの炎はカイザーの消化液によって鎮火されて彼はカイザースクランダーを呼び飛んで行きクリスとアリスもこっそりとSON G基地の方へと走っていく。

基地へと戻ったカイザーはそのまま基地の中を歩いていく。コンバトラーとボルテスが彼の方を見ていた。

『お前メンテナンス中じゃなかったっけ?』

『ああだが必要になったので呼んだ』

『この火事のことか?』

ボルテスがテレビをつけると丁度カイザーがタツクルで壁を壊して子どもを抱えながら脱出をするところが映し出されていた。

『だがよなんで火事が発生をしたんだ?』

『それがわからないな。俺も言ったときは火事になっているのを見たからな……』

『犯人はわからないか……』

三機はテレビを消してから移動をする。だが裏では動いている組織がいた。

ある屋敷の中

「魔神皇帝か……ふん下らん……ロボットごときに守ってもらうとは笑

止千万……」

白い髪をした男性は読んでいた本をしまい色々と考えてある三人組と接触をすることにした。

そして動きだす新たな組織……果たしてマジンカイザー達はどうなるのか!!

第八章 シンフオギアXV編 謎の棺

甲児 side

現在俺達は装者たちが搭乗をしているヘリコプターと共に南極を飛んでいた。てか寒い………

『つたくなんで俺達が南極まで来ないとダメなんだよ!!』

『仕方がないだろ? 日本を開けるわけにはいかないから俺達カイザーチーム及び、マジンガーチームが出撃をしているんだろ?』

『だからといって寒いぜ!!』

マジンガーZの言う通り、俺達は南極まで飛んできたのはいいがってなんだ!? 赤いビームだと!?

「なんだ!?!」

「カイザー!!」

クリスの声を聞いて俺達は下の方を見ると棺つてのが上昇してきた。シンフオギア装者たちはヘリコプターから飛び降りてパワーアップをしたギアを纏い俺達も戦闘

態勢をとる。

甲児 side 事カイザー side 終了

装者たちは装着をして響がブーストをして右手にユニコーンドリルを装着をして棺を殴るが棺は左側の手で響が放った攻撃を相殺をした。

彼女は着地をして装者たちの傍に行く。

「互角か……」

「だとしても!!」

棺はビームを放ち装者たちに攻撃をするが彼女たちは回避をして上空からカイザー達が攻撃をする。

『くらいやがれ!!光子力ビーム!!』

『ハンドビーム!!』

『ダブルトマホークブーメラン!!』

『ネーブルミサイル!!』

棺に向かってマジンガーたちが攻撃をするが上空へと回避をする。

『させるか!!』

カイザーがつかんで投げ飛ばした。

「これでもくらって!!」

「こつちからもプレゼントだ!!」

クリスとアリスが同時攻撃をして爆発をする。だが煙がはれると無傷のままビームを放ってきた。

「攻撃が効いていない!？」

「そんなのありかよ!!」

『待て何か変だ!!』

「ああ!？」

奏たちが見ると棺に棘が発生をしていた。

「棘?」

「棘デース!!」

すると棘が発射されて兵器に変身をする。

「変態した!?(デース!!)」

『だったらスピードでかく乱だ!!オープンゲット!!』

真ゲッターは分離をして姿をチェンジさせる。ブラックドラゴンはモーフイングしてブラックライガーに変わる。

『チェンジ真ゲッター2!!ドリルテンペスト!!』

『ドリルアーム!!』

二機が突撃をして兵器たちを爆発させていく。

『くらいやがれ!!ターボスマッシュャーパンチ!!』

『放て!!グレートスマッシュャーパンチ!!』

『ダブルトマホークブーメラン!!』

エンペラー、カイザー、真ドラゴンの三機が同時に放ち兵器たちを破壊をしていく

「なら突破口はあたしたちが開くぞ!!」

「うん奏!!」

二人は千ノ落涙とガングニールの槍の放口が開いて放たれてセレナもブラックポセイドン形態へと変わり構える。

「ゲッターサイクロン!!」

放たれた強烈な風が放たれて兵器たちを吹き飛ばして爆発させる。マリアと響が走りだして上空へとびユニコーンドリルをマリアは左手のアームドギアが展開されてドリル状へと変わり二人は突撃をしていきカイザー達も援護をするために攻撃をする。

『今だ響!!マリア!!』

「いくわよ!!」

「はい!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

二人は突撃をして棺に命中をしてビームを放っていた宝石が割れる。

「効いている!!」

だが棺は左手で二人をばしんと叩いて地面に叩きつけた。全員が集まりビームを放とうとしていた。

「間に合って!!」

『させるかああああああああああああああああああああああああああ!!』

カイザー達が彼女達の前に立ちガードをする。クリスたちは目を見開いていた。

「カイザー!!」

『くそ………なんて冷気なんだよ………』

『俺たちはいい!!お前たちは速く攻撃をするんだ!!』

「わかりました!!」

「こうなれば行くわよ!!」

「!!」「おう!!」「!!」

全員がマジンカイザー達の姿へと変わりカイザー達がくらっている間にクリスとアリスが構える。

「ダブルマジンガーパンチ!!」

四つの拳が飛ばされて棺に命中をして上空の方へと行きカイザー達は凍る寸前で済

んだがそれを溶かすまでに時間がかかるようだ。

「くらいなさい!!偉大なる勇者の雷鳴を!!」

びしゃーんと雷が鳴りマリアの右手に集められる。

「サンダーブ레이크!!」

ばちばちとサンダーブ레이크を受けて棺の動きが止まる。だが飛ばした兵器が彼女達に襲い掛かる。

「おっとさせないぜ!!超電磁スパーク!!」

「ガトリングミサイルを受けてみる!!」

「こっちからもプレゼントデース!!ショルダーブーメラン!!」

「私もプレゼント!!ルストハリケーン!!」

四人の技が命中をして爆発させていきセレナは上空へとび響はフェニックスドライブを装着をする。

「響ちゃん止めは任せるね!!」

「はいセレナさん!!」

「ゲッターシャイン!!」

セレナが光りだして響は構える。

「はあああああ……フェニックスエールファイナルアタック!!」

「シャインスパーク!!」

セレナが放ったシャインスパーク及びフェニックスエールのファイナルアタックが命中をして棺は爆発をする。

「やりましたよセレナさん!!」

「う、うん……」

ふらつと倒れようとしていたセレナをブラックドラゴンが支えた。

「ネファイ……」

『よくやったなセレナ』

一方でカイザー達の方はクリスやアリスたちの力で溶かされていき彼らはなんとか出れた。

『うう寒い』

『マイナス5100度なんて普通の人だったら死んでいるぜ……』

彼らはそういいながら氷を壊していき南極の基地を守ること成功をした。カイザーは膝について棺の方を見ていた。

(だがあの棺はいつたいなんだろう？技術的にも今の世界じゃ作ることもなんて無理なものだ……いずれにしてもあの棺自体はなんだろうか……棺つてことは何かの遺体が置いてあるのは確実だな)

カイザーはそう思いながら両手を組んでおり嫌な予感がするな．．．と

コンサート会場を守れ!!

ここはあるコンサート会場、ツヴァイウイングが行われる場所でもありサプライズとしてマリアと一緒に歌うことになっているが彼女の内緒になっており実際に観客たちはツヴァイウイングだけがやる大コンサートと誤っているさらにこのコンサート準備にはカイザー達スーパーロボットたちも手伝ってくれたおかげで予定よりもはやくギミックなどが完成をしている。

現在カイザーはそのままの姿で両手を組んでいた。

「カイザーどうした？」

『奏か、何切歌と調を襲った謎の敵のことを考えていた。』

「あー確か棺の中にあっただのは謎の腕輪と遺体を狙った敵だったな？それを切歌と調が撃退をしたって言うていたな」

『ああそのとおりだ。それでもしにも備えて俺やガオガイガーチームとダイターンチームがこの周りを守るためにいるからな』

「それであんたも念のためにいるのかい？」

『ああ………何事もなければいいが………』

彼はステージの方を見ながら両手を組み奏が隣に立ち一緒のポーズをしているのをスタツフたちは笑いながら準備を進めていた。

一方で響達は車に乗りながらツヴァイウイング及びマリアのコンサートを聞くために車に乗り向かっていた。ブラックドラゴンことネフィも人間態へとなりセレナが乗る車と一緒に乗っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ネフィどうしたの？」

「・・・・・・・・・・嫌な予感がする」

ステージの方ではガオガイガーたちやダイターンチームがコンサート会場を見ながら辺りを確認をしていた。

『すげー』』

『ああ!!盛り上がっているぜ!!』

『こら二人とも仕事をしないか!!』

ダイターンがザンボット及びトライダーを怒っていた。アクエリオンやソルグラヴィオンにガンバスターたちも体を小さくして見ている。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『アクエリオンどうした?』

『来る!!』

彼は空の方を見ていた。コンサートの方は盛り上がっておりカイザー自身も無事で終わりそうだなと見ていると空に魔法陣が発生をしているのを見つける。

『まさか!!アルカノイズを出そうとしているのか!!』

ステージの方でも翼や奏、マリアの三人もアルカ・ノイズが現れたのを見て目を見開いている。

「嘘だろ………あんなのがここに現れたら………」

すると魔法陣からアルカ・ノイズが現れようとしたとき!!

『ボルティックドライバー!!ジエネシツクボルト!!』

ボルティックドライバーにジエネシツクボルトを装着をしたジエネシツクガオガイガーが現れてコウモリの翼をはやした女性は驚いている。

「何?!

すると落下をしようとしていたアルカ・ノイズたちはボルティックドライバーが発生をした内部分解を起こさせた。地上に降りたち人々に襲い掛かろうとしていたノイズは

『ターボスマッシュャーパンチ!!』

偉大なる魔神皇帝が放った剛腕によって粉碎されてライブを見に来た人たちはカイ

ザーの姿を見て目を見開いている。

「あ、あれは!!」

「魔神皇帝だ!!」

「すげー本物だ!!」

『……はやく逃げてほしいのだが?』

彼は戦いながらアルカ・ノイズに攻撃をする中翼たちはギアを纏いアルカ・ノイズたちと交戦をしていた。

すると光弾が飛んできて三人に命中をする。

「てめえは!!」

「あたし?あたしはね今回のライブ襲撃犯だよ!!」

「貴様があああああああああああ!!」

「待ちなさい翼!!」

マリアの言葉を聞かずに翼はライブ襲撃犯である人物に攻撃をする。彼女は振り下ろされた翼の剣を翼を右手にまとめて受け止める。

「受け止めた!?!」

「おら!!」

「ぐ!!」

ダイターンたちが戦っている中カイザーは翼の様子を見ていた。相手をしている人物は翼をはやした女の子だからだ。

そして翼はボルテスVモードへと変わり超電磁ゴマを使い彼女を吹き飛ばす。

「ぐ!! スーパーロボットの力恐れを言った。」

翼は接近をして彼女に切りかかろうとしたがその前に女の子を前に出した。

「ッ!!」

彼女は天空剣をふるおうとしたが女の子を人質に取られてしまい攻撃ができない。

「弱いからな!! こんなことをしたって恥ずかしいないんだぜ!!」

彼女は少女を殺そうとしたとき何かの手がミラアルクに当たり少女が解放されたのを確認をして翼は超電磁ストリングですぐに少女を回収をして降ろす。

「はやく逃げるんだ!!」

「うん!!」

「好きアリだ!!」

「な!!」

彼女の両目が光りだして翼はその刻印を受けてしまう。ミラアルクはニヤリと笑いアルカ・ノイズたちをさらに投下させる。

「おらおらおら!!」

アルカ・ノイズたちがステージなどを破壊をしていきカイザー達も奮闘をしているが数の多さに苦戦をしていた。

『仕方がない!! 一気にけりをつける!! カイザーノヴァ!!』

『日輪の力を借りて!! 今必殺の!! サンアタック!!』

『ザンボットムーンアタック!!』

『トライダーバードアタック!!』

『ソルグラヴィトンアーク!!』

『無限交差!!』

『バスタービィィィム!!』

放たれた攻撃がアルカ・ノイズ達を撃破した。カイザーはカイザーノヴァを使った影響でオーバーヒート状態になってしまい膝をついていた。

『隊長!!』

『お客さんたちの避難完了させたぜ!!』

『ご苦労だな皆!!』

『カイザー!!』

『おい大丈夫か!!』

『来るな!! オーバーヒートをしているから高温状態になっている。だが………ステ-

ジの方は壊されてしまったな』

彼らはステージの方を見ていた、観客の方は逃がすことができたが．．．．せつかく作ったステージはアルカ・ノイズたちのよって会場ごと壊されていた。ガオガイガー達も辺りを見てステージの方が壊されたのは残念だったが人々を守れただけでも良かったと思っている。

「．．．．．」

『翼どうした?』

「何でもない（なんだ奴が放ったあの感覚は．．．．そして奴らはいつたい．．．．）」
一方で襲った会場から撤退をした彼女。着地をすると女の子が現れる。

「お帰りでありますミラアルク」

「エルザ」

エルザと呼ばれた少女は笑顔になっていた。彼女こそ調と切歌が交戦をした少女であり腕輪の奪取には失敗をしてしまった。

「まあヴァネッサが上手くやってくれます」

「そうだな．．．．だが問題は血液が少なくなってきたことだ。」

「そうでありますな．．．．次の取引の際には」

「わかっている」

二人は話しをしていると一体のロボットが近づいてきた。

『どうやら動いたようだぞ？』

「そうか、んであんたはついてくるのかレガリア？」

『もちろんだ。』

コウモリみたいな翼を持ち悪魔のような姿をしたレガリアが彼女の言葉に首を縦に振る。そして魔神たちは動きだす。

魔神対魔神

S・O・N・G基地にある格納庫。甲児は自身の体をチェックをしている。コンサート会場にて現れたアルカ・ノイズたちを倒す為にカイザーノヴァを使用したため体がオーバーヒートを起こしてしまいマリアとセレナが近づいてきた。

「カイザーどう?」

「駄目だな、まだオーバーヒートプラスパーツ消耗が激しいこともあり修理だな……カイザーノヴァを使ったのが影響だな」

「そこまででしたか……」

「これで敵が現れたら……っっておいおい」

甲児は警報が鳴ったので何事かと司令室の方へと向かう。そこにはアルカ・ノイズたちに襲われている男性の姿がある。甲児は出動はできないのだった。

「すでに響君、クリス君、アリス君、ウインダム、セレス、レイアースが出動をしてきている。」

「そうか……なら俺は今のうちに体の調整をしておかないとな」

一方でレイアース達は先に先行をしてアルカ・ノイズたちを切り裂いて着地をする。

「ちい!!まさか魔神が出てくるとはな」

『そこまでだ。さあ逃げるんだ!!』

「おーーーーー魔神さまーーーーー」

『はやく逃げろ!!』

そこに響達も着地をしてミラアルクは舌打ちをする。

「ちいこいつらまで来たのかよ……」

「悪いが今のあたしは最初からクライマックスなんだよ!!」

電王ギアを装着をしてクリスはイチイバルのギアをガトリングに変えて攻撃をする。

ミラアルクは回避をするとそこにセレスが剣を構えて切りかかる。

「くそ!!」

『そこだ!!戒めの風!!』

ウインダムが放った戒めの風が命中をしてミラアルクの動きを止める。

「か、体が動かない!?!」

『これだとどめだ!!紅』

『そうはさせないぞ?』

突然としてレイアースが蹴られて吹き飛ばされる。

『ぐあ!!』

『レイアース!!』

セレス達も剣を構えて姿を現した敵を見て驚いている。

『お、お前は!!』

『久しぶりだな魔神たちよ……』

『まさかお前もこちらに来ていたとはな……レガリア……』

レイアースも立ちあがりレガリアの姿を見て驚いている。

『……』

『大丈夫かミラアルクよ』

『お前……なんでここに』

『お前とエルザを迎えに来た。ここは俺が引きうける二人は撤退をしろ』

レガリアは駒を出してそれを発射させて全員に命中をする。

『うわ!!』

『ぐ!!』

『が!!』

『くそ!!』

『どあ!!』

『く!!』

「ミリアルクここは撤退をします!!」
「ちい……」

二人はレガリアに任せて撤退をする。響達は逃がさないために攻撃をしようとしたがそこにレガリアが現れて三人は回避をする。

『お前たちの相手は俺だ!!紅い稲妻!!』

「「きやああああああああ!!」」

レガリアが放った紅い稲津が命中をして三人はダメージを受けてしまう。レイアもスたちも攻撃をするがレガリアは二刀流で三体の魔人の攻撃をふさいでいる。

『こいつ、以前よりも強くなっている!?!』

『くらうがいい!!水の龍!!』

『『ぐああああああああ!!』』

水の龍を受けて三体の魔人も吹き飛ばされてダメージを受けてしまう。レガリアはとどめを刺すために剣を構えていると右手に何か絡まりその相手の方を見る。

『どうやら間に合ったみたいだね?』

『貴様は……』

『世のため人のため!お前たちのような奴を倒すダイターン3さ』

ダイターンはダイターンスナッパーを使いレガリアの右手に絡ませてそのまま着地

をして右手にもう一つダイターンスナッパ―を出して攻撃をする。

『ちい………』

『そーれ!!ダイターンミサイル!』

ダイターンミサイルが命中をしてレガリアはダメージを受ける。ダイターンはスナッパ―を戻した後ダイターンジャベリンを出して構える。

『さーてどうする?』

『俺の任務は完了をした撤退をする。』

レガリアは駒を出してそれを投げてダイターンはダイターンファンでガードをして爆発が起こる。

『………逃げられたか大丈夫かい君達?』

『ダイターンさん』

『悪い………』

『気にすることはないよ。しかしあの魔人はレイアース達に似ているが気のせいかい?』

『いや似ているのは間違っていないな』

『そうだな、あいつは俺達をベースに作られたものだから………』

『私たちに似ているのはそれが原因さ』

ダイターン達は基地の方へと撤退をしてミラアルク達は隠れ家へと戻ってきた。

「なんとか戻ってこれたのであります」

「だな無事にトランクの中身も無事だしな」

すると魔法陣が現れてレガリアが現れる。

「レガリア殿大丈夫でありますか？」

『問題ない。奴らを翻弄させておいた』

「ならいいさ。目的の物は手に入ったしな」

「あらどうやらそっちも終わったみたいね？」

「ヴァネッサ」

『そっちは手に入れたみたいだな？』

「ええアメリカにあるシエム・ハの腕輪簡単だったわ」

ふふと笑いながらヴァネッサは腕輪を持ちながら見ている。

激突

甲児 side

「やっと終わったー」

やっと俺の体の強化及び修理が完了をした。カイザーノヴァを使用したのでオーバーヒートをしてしまいこの間の戦いに参加をすることができなかった。しかしレイアース達がかつて戦った敵が復活をしてライブ会場を襲ったやつらと一緒にいるとはな……俺は元の体へと入り動作確認をしていると扉が開いて響が入ってきた。

「あれカイザーさん？」

『よう響』

「もしかして治ったんですか!!」

『ああ次回は俺も出撃……ん?』

警報が鳴りだしてカイザーと響は司令室へと到着をする。

「カイザー体が治ったのか？」

『ああこの通りな、何がおこった?』

「今アルカ・ノイズが攻撃をしている。いけるのはマリア君と響君だけになる。」

『わかった。なら俺も共に行こう』

俺は外へ出てから大きくなり二人を手に乗せてカイザースクランダーを装着をして出動をする。

カイザー side 終了

一方でヴァネッサはアルカ・ノイズ達を使い攻撃をしていた。彼女はふふと笑っているとレガリアが現れる。

「あら早い到着ね？」

『俺の相手が来たみたいだからな．．．．．』

「そのようね」

二人が上空を見ていると光が発生をしてアルカ・ノイズ達が消滅をする。それはカイザーが放った光子カビームだ。カイザーの手から響とマリアが降りたち二人はギアを纏いカイザーは大きさを彼女達と同じぐらいになり着地をして両手を構える。

『ターボスマツシャーパンチ!!』

ターボスマツシャーパンチが放たれてアルカ・ノイズ達を貫通させていき彼の両手が戻ってくるとレガリアが駒を放ちマジンカイザーに攻撃をしてきた。

『!!』

彼は両手を前で組んでガードをする。そのまま振り下ろしてきた剣を交わして両肩

部からカイザーブレードを抜いて構える。

『お前がレイアース達が言っていたレガリアって奴だな？』

『魔神皇帝……悪いがここで倒させてもらおう』

『あいにくだな……俺は倒させるわけにいかないだよ!!』

マジンカイザーは走ってカイザーブレードをふるう。レガリアは二刀流でカイザーが振り下ろしたのをガードをしていき後ろへと下がり剣を十字に構えてブーメランにして投げつける。

カイザーはスクランダーを起動させて上空へと上がり回避をする。カイザーの腰部が開いて発射される。

『ギガントミサイル!!』

そこから連続したギガントミサイルが発射をしてレガリアは回避をして構える。カイザーはその技を見たことがある。

『紅い稲妻!!』

レガリアの両手から紅い稲妻が放たれてカイザーに命中をする。

『ぐああああああああああああああ!!』

『カイザー!!』

『カイザーさん!!』

「よそ見をする余裕があるのかしら？」

「うわ!!」

ヴァネツサの左手が伸びてワイヤーアームが響に当たり吹き飛ばされる。だがカイザーも負けていない。両腕部が上がり穴がある。

『なんだ?』

『くらいな!!改良をして付けた武器!!ドリルミサイル!!』

肘部の穴部から発射されたドリルミサイルがレガリアに当たり爆発させる。

『ぐあ!!』

解放されたカイザーは着地をしてヴァネツサに苦戦をする響を助けるためにカイザースクランダーを外して構える。

『スクランダーブーメラン!!』

『!!』

ヴァネツサはスクランダーブーメランを交わしてレガリアの方を見る。

「どうやらここまでのようね……………レガリア大丈夫?」

『まだいける……………』

『無理は禁物よ』

『……………』

二人は撤退をしたのを見てカイザーの背部にカイザースクランダーが装着されてカイザーは立ちあがり二人の元へと行く。

『大丈夫か?』

「ありがとうございますカイザーさん!!」

「あなたも苦戦をしたのねカイザー」

『少しな……レイアースと同じ技を使ってきたときは驚いてしまったが……だがなぜ?』

カイザーは大きくなり彼の手に彼女達が乗りこんで大空を飛び経つ。だがマジンカイザーを見るものがある……

『マジン……カイザー……貴様だけは……俺さまが倒す……』
果たしてマジンカイザーを狙う人物は一体何者なのか?彼を狙う理由は……動きだすヴァネッサ達の野望……そして……

『……?』

『どうした真ドラゴン?』

『……何でもない、何事もなければいいが……』

真ドラゴンを感じた力とは……

ラゴウ襲来。

カイザースide

俺達カイザーチームはシンフォギア装者たちと共に出動をしている。前の戦いの時にマリアが発信機を彼女に取りつけてその場所へ急行をしていた。彼女達を乗せて俺は飛びたち彼女が設置された場所に到着をする。ギアを纏い彼女達は降りていく。

だが着地をした瞬間爆発が発生をして彼女達が吹き飛ばされてしまう。

「「「「「きやああああああああああああ!!」「」」」」

『皆!!』

俺達は着地をして彼女達に近づこうとしたが何かが形成されて彼女達は閉じ込められてしまう。救出をしようと接近をしようとしたがコマが放たれてダメージを受けてしまう。

『お前は・・・・・・・・』

『魔神皇帝、貴様らは俺が相手をする。』

『カイザー、こいつは俺達が相手をする。お前はその間に彼女達を助けろいいな?』

『エンペラー。頼む!!』

エンペラーに奴を任せて俺は彼女たちを救うために走る。

『させるか!!』

『グレートスマッシュヤーパンチ!!』

『ぐ!!』

『お前の相手は俺達がするって言っただろ!!』

『ゲッタートマホーク!!』

エンペラーたちが止めている間に、俺は形成されているキューブにマジンパワーを込めた技を放つ。

『うなれ!!ファイヤーブラスタター!!』

放たれたファイヤーブラスタターが形成をされていたキューブに当たり破壊した。彼女達は中から着地をして俺は近づいた。

『大丈夫か?』

「ああすまねえカイザー、やってくれたぜあいつら!!」

アリスが舌打ちをしながら見ていると奴らが現れて俺達は戦闘態勢をとろうとしたときに何かの獣のような声が聞こえてきた。

「今の音はいったいなんなのでありますか!?!」

「みやがれ!!」

全員が見ると赤い体に翼がはやした何かがそこに現れた。だがあれを見ていると嫌な予感がしていた。

「え!?!ちよつと皆どうしたの!?!」

「響、どうしたの?」

「データウエポンたちが……」

『響、絶対にそいつらを出さないな!!』

俺は奴に対抗をするためにカイザースクランダーを装着をして飛びたつ。嫌な予感をしながら……

カイザー side 終了

カイザーが嫌な予感をしていたのは間違いない、彼が相手をしているのは別の世界に電童のデータウエポンの二つユニコーンドリル、レオサークルを瀕死の重傷を負わせた宇宙怪物「ラゴウ」である。

『ぐおおおおおおおおおおおおお!!』

『光子カビーム!!』

カイザーが放った光子カビームをラゴウは翼で飛び回避をして突進してきた。

『ぐあ!!』

彼は吹き飛ばされたが態勢を立て直してラゴウに攻撃をする。トマホークが飛んで

きてラゴウは回避をした。

『ブラック?』

『援護をする。いくぞ!!』

『おう!!』

二体はラゴウに接近をしてダブルトマホークとカイザーブレードを出して接近をして振り下ろす。ラゴウは回避をして爪で受け止める。

だがラゴウは突然として方向を変えてカイザーとブラックドラゴンは見失ってしまった。クリスは気づいて声を出す。

「カイザー!!後ろ!!」

『ぐああああああああああ!!』

ラゴウはカイザーに噛みついた後棘を出してカイザーに突き刺した。そのままカイザーは墜落をしていく。ブラックドラゴンはラゴウに攻撃をしようとしたがラゴウはブラックドラゴンにも噛みついて棘を突き刺した。

『ああああああああああああ!!』

「ブラックさん!!」

ブラックドラゴンも墜落をしていき全員が近づいていく。彼らは体を動かそうとしたが……

『な、なんだ……これは……』

『か、体に何かが流し込まれて……動けない……』

『とりあえず基地に運ぼう!!』

ラグウはすでに撤退をしており彼らはカイザーとブラックドラゴンを担いで基地の方へと帰還をした。

ラゴウウイルス

SONG基地に運ばれたカイザーとブラックドラゴン、だが二体はいつも以上に苦しうにしておりクリスとセレナは涙目で二体を見ていた。

「カイザー……………」

「ネファイ……………」

一方でSONGではカイザーとブラックドラゴンから検出された謎のウイルスが感知されたので調べていたが地球上には存在しないものなので響は凰牙に聞くことになった。

「凰牙さんあの時逃げろといっていましたでしたがカイザーさんとブラックさんがこのような状態になっているのを知っているのですか!!ぜひ教えてください!!」

『わかった。二人に襲った敵「ラゴウ」だ』

「ラゴウ?」

『ラゴウとはかつてガルファ皇帝のペットだ。電気機器や機獣を餌にしている。さらに肉体を復元をさせる能力を持っている厄介なやつ。だが一番にやばいのがコンピューターウイルス通称ラゴウウイルスだ……………今カイザー達はラゴウウイルスで苦し

んでいるんだ。』

「治す方法は……ないのか？」

『あるが……危険すぎる。データウエポン達は使えない、さらにいえばマジンガーZ達も同じようになるかもしれない。』

「だけど苦しんでいるカイザーを見ているだけなんてできない!!」

「そうだ! あたしたちだつてやれるんだ!!」

『……ラゴウからデータを抜き取りそこからサンプルデータをとりワクチンを作ること。それがカイザー達を助ける方法だ。だがラゴウ自体危険だ……』

『だけど仲間を見捨てることなんてできるかよ!!』

『そうだ!』

「真ゲッター達。」

『どんなに苦しいことがあつても最後は勇気で補うことだつてできる!! だから俺達はどんなことでもあきらめたりしない!!』

全員が立ちあがり協力をしてくれることとなりシンフォギア装者達はカイザーとブラックを回復させるためにラゴウ捕獲作戦を実行をする。

「カイザー……」

『話は聞いていた。俺たちのためにすまない……』

「うんカイザー達はいつも助けてくれた。今度は私達が助ける番!!」

『……セレナ、気を付けろよ?』

「うんネフィも負けないで?」

『ああ……』

二人が出ていったあと、二体はお互いを見てウィルスに耐えることにした。さて一方でラゴウの場所が判明をしてロボットたち全機が出撃をした。

その中にシンフォギア装者たちもおり彼らはラゴウからワクチンをとるために捕獲をしないと行けない。その場所には勇者ロボット軍団がすでに罠を設置しておりその場所まで誘導をすることにした。

(待っていてカイザー! 必ずラゴウからワクチンをとってみせるからね!!)

ラグオウのデータをとれ

カイザーとブラックドラゴンを治すためにシンフォギア装者とマジンエンペラー達はラグオウを捕まえるために色々と準備を進めていく中、格納庫の中で横たわっているマジンカイザーとブラックゲッタードラゴン、二機は体の中にいるラグオウウイルスが強力なので体を動かすことができなかつた。

『なあカイザー』

『なんだドラゴン？』

『セレナ達大丈夫だろうか？』

『彼女達を信じよう、俺も心配だがあの子達だつて強くなっているんだ。(だが本当にピッチの時は………無理をしても行くさ。)』

カイザーは心の中で彼女達の作戦が成功をするのを祈りながら格納庫で横になりながらウイルスに耐えるのであつた。

一方でラグオウの進んでいる方角がわかりSONGメンバーはラグオウを捕獲をするために電磁ネットの設置をする工事をしており氷竜達がセットをしたこともあり準備が完了をして待機をしている。

「さて作戦を言うぞ？今マジンエンペラー達が囷になりラゴウをこちらの方へと誘導をしている。そしてこの電磁ネット付近に入りスイッチを押す。電磁ネットでとまったラゴウに対して奴に接近をしてこれを刺す。カイザーがもしものために作ったものだ。これにラゴウの抗体を生成するためのデータが必要だ。」

「いずれにしても素早くしないと電磁ネットが壊れてしまうってことだろおっさん？」
「そういうことだ。」

「カイザーを早く治さないと……」

「だな。頑張ろうぜクリス!!」

「うん!!」

そして彼女達はギアを纏い隠れておりエンペラーと真ゲッターがラゴウを連れて飛んできた。

「よし今だ！電磁ネット起動!!」

エンペラーと真ゲッターが通過をしてラゴウが上を飛んだ時に電磁ネットが起動をしてラゴウは地面に叩き落とされる。

「行くぜ!!」

奏たちが飛びだしてラゴウに接近をしてカプセルを突き刺そうとしたがラゴウは無理やり電磁ネットをつき破る。

「な!？」

「まじかよ!!」

全員が止まりラゴウは咆哮をして襲い掛かろうとした。

『野郎!!ゲッタービーム!!』

『サンダーボルトブレイカー!!』

二体の攻撃がラゴウに命中をするがそのままシンフォギア装者達に襲い掛かろうとした。

「おっとー!」

「く!!」

奏とマリアは回避をすると翼がボルテスの力を解放させて構える。

「ボルテスバズーカ!!」

「ライガーマイスイルです!!」

二人が同時に攻撃をするがラゴウは気にせず突撃してきた。響がガングニール電童形態で回転させてラゴウを殴るがやはりデータウエポンが使えないので攻撃点に難があった。

ラゴウは響を攻撃をしようとしたが砲撃が放たれて彼女は後ろの方へと下がると未
来が神鏡獣を纏っており驚いている。

「未来!？」

「お待たせ響、ダイターンさんの力を解放させたからダイターンキャノン!!」

放たれたダイターンキャノンが命中をしてラゴウは雄たけびをあげる。ほかのロボットたちはエンペラー達が戦っているが自分たちが行くとカイザー達のようになってしまうので参加をすることができない。

『くそ俺達は見ているだけしかできないのか!!』

『だが我々も参加したら奴が……』

「いくよ切ちゃん！」

「了解デース!!」

「ダブルロケットパンチ!!」

二人が放ったダブルロケットパンチがラゴウの顔面に命中をしてクリスはチャンスと判断をしてカイザーの力を解放させてカイザースクランダーを装備をして接近をする。

「はああああああああああああああ!!」

だがラゴウはチャンスかのようにその口を開いてクリスを噛みつきこうとした。

「クリス!!」

だが何かが当たりラゴウは顔面に命中をした、その間にクリスはラゴウの体を突き刺

してラゴウのウイルスを回収をして着地をする。一体誰がと見ていると全員が驚いている。

『一発……お見舞いさせたぜ?』

「カイザー!!」

『俺もいる。』

「ネファイ!!」

そうラゴウに当たてたのはカイザーだった。二体は着地をするとラゴウは起き上がり二体に襲い掛かろうとした。だがそれをマリア達がサンダーブレークや超電磁スパークなどで動きを止めていた。

クリスは走り二人のほうへと行きラゴウから取ったのを二体に突き刺すと二体の体はまるでウイルスがなくなったかのように軽くなる。

『抗体が……ラゴウのウイルスを消していく?』

『俺たちのゲッター線と光子力エネルギーがラゴウの抗体を変化させてラゴウウイルスを排除したんだ。これならいける!!』

カイザーとブラックドラゴンは立ちあがりラゴウに対してお返しをするために光子カビームとゲッタービームを放ちラゴウを吹き飛ばす。

「カイザー!大丈夫なの?」

『心配かけたな！もう大丈夫だ!!』

『セレナ………心配をかけたなもう大丈夫だ。』

「ねふい………」

ラゴウは二体の攻撃を受けたが立ちあがり怒りの咆哮をするがカイザーとブラックは拳をゴキゴキと鳴らしている。

『おうブラック、奴にはたつぷりとお返しをしないと？』

『ああ、動けなくなつた分やそれ以外のこと以上に返してやるさ。』

ラゴウは二体がこちらに来ているのを見て………動きを止めた後

『ガオ』

土下座をした。

『は?』

彼らの気迫などに本能が怖がってしまい逆らったら自分が殺されると判断をして土下座をした。

『どうする?』

『おい』

『が、ガオ………』

『俺達を襲つたりしないだろうな?』

首を激しく振ったのでカイザー達は許すことにした。こうしてラゴウはカイザー達のペットという扱いになりさらに体が小さくなれることも判明をした。

『苦しんだ俺達の意味は?』』

「まあまあカイザー、治ったんだからいいでしょ?」

『そうか?.....いいのだな。』

兜甲児達危機!!

甲児side

ラグウとの戦いで抗体を手に入れて、いざ戦おうとしたがあいつが降参をしてしまい、俺とブラック倒そうとしていた気分が削ぐれてしまい、仕方が無いので許すことにした。

もし逆らったらどうなるのか、どうやらやつは野生の本能で分かったみたいで逆らうことは無かった。

そんな俺たちは今何をしているのか？響、未来、エルフナイン、翼と共にカラオケへと来ていた。しかもジャンケンでクリス達は負けてしまい落ち込んでいたのを思い出すが、このメンバーってのは初めてか？

「次は甲児さんです!!」

響がマイクを渡してきたのはいいが、何を歌えばいいのだろうか？うーうーんやっぱり俺が歌う歌はマジンカイザーの歌があつたの歌うことにした。

甲児side 終了

やがてカラオケの時間が来てしまい五人は外へ出ると、突然として自分たちを囲むよ

うにアルカノイズが現れた。

「な!？」

「未来達は逃げて!!翼さん!!」

二人はギアをまとい、甲児は二人を連れて逃げることにした。マジンカイザーを纏うことで彼は戦うことが出来るが、二人を先に逃がすために一緒に逃げていると前の方からミラアルクが現れる。

「まさか、魔神皇帝も一緒とは思ってもいなかっただぜ?」

(まずいな、今の俺は普通の人間と一緒だ。やつは戦闘力を考えると甲児の姿では不利だ、何より二人を守りながらの戦いだ。マジンカイザーのボディが来る前にやられてしまふ。なんでこんな時に置いてきたのかな・・・俺は)

厄介なことになってしまったなと思いつつながら、甲児達はミラアルクが何かの指示を受けたのか、三人を連れ去ることにした。

アルカ・ノイズを倒して響と翼は未来たちに合流しようとして電話をするが、甲児と未来が出てくれないので一体何がと思ひ現場の方へと行くと、そこには壊されたスマホがあり、未来たちは誰かに連れ去られてしまったと当たりを見る。

「おい!!」

二人は振り返るとアリスたちがギアを纏い到着をした。壊されたスマホは未来ので

間違いない。だが血などがないのを見るとマジンカイザーこと甲児と未来、エルフナインの三人は誰かに連れ去られてしまったのかと判断をする中、ロボットたちの方でもカイザーの体がここにあるので、ブラックは両手を組んでいた。

『いずれにしても、カイザーがいるから問題ないと思うが……』

『だが、敵の目的はいったいなんだ？カイザーを使い何かをするつもりなのだろうか？』
彼らがそんな話をする中、クリスはじーつと何か嫌な予感がしていた。

カイザーのことだから無事だとしても、何か嫌な感じがしてたまらない。

（大丈夫だよな？カイザーが死んだりするってことはないよね？でもこの感じ嫌な感じがして気持ちが悪い……カイザー……）

どこかの場所

甲児 side

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は起き上がり、辺りを見ているが残骸のような場所で俺は目を覚ます。だがこの場所どこかで見覚えがあるぞ？

『甲児！目を覚ましたな？』

キャロル？ここがどこかわかるのか？

『当たり前だ、この場所はチフオージュ・シャトーの中だからな。』

チフオージュ・シャトーだ?!この場所は確かパラオとの戦いで残骸として残されていたな。だがなぜ俺達はここに連れてこられたんだ？

『簡単だ、エルフナインを使いここの起動認証を解除をするためだろ。あいつの体は俺のだぞ？認証コードを持っているからな。』

「おいおいまじかよ。ちいー!」

俺は走りだした。普通の体よりは堅いので問題ないが・・・・・・・・いずれにしても未
来やエルフナインが危ない!急がないとな!!

「来やがれカイザー!!」

俺はカイザーを呼ぶことにした。未来、エルフナイン無事にいろよ!!

甲児 side 終了

一方SONG潜水艦ではカイザーの体が動きだして、そのまま潜水艦を後にしていくのを見て装者達は甲児が無事だったことはわかった。

だがマジンカイザーの体はいったいどこへ向かっているのだろうか? と思いながら追跡を行うことにした。

「カイザー………」

一方でチフォージュ・シャトーではエルフナインの起動認証により次々に機能が起動をしていくのを見て、もう彼女は用済みと判断をしてヴァネッサはエルザ、ミラアルクに命じてエルフナインを殺すように指示を出そうとした時、突然としてチフォージュ・シャトーが揺れたのでいったい何かと見ていた。

「何!?!」

「なんだ?」

「なんでありますか!?!」

すると扉が破壊されて何かが入りこんできたので何かと見ていると、声を出してきた。

『無事かエルフナイン……』

「カイザーさん！」

『ここは俺に任せろ！』

現れたのはマジンカイザーだ、甲兎が中を走っているとマジンカイザーがすぐに現れて光だしてマジンカイザーの姿になりそのままエルフナインがいると思われる場所へと走って扉に蹴りを入れてエルフナインを見つけて今に至る。

彼は振り返りヴァネッサ、エルザ、ミラアルクの三人を見ている。

「まさか目を覚ましたってことか？」

「流石魔神皇帝と呼ばれるだけあるわね。」

『お前らが何のためにこのチフォージュ・シャトーを起動させたかはわからない、だが大事な仲間を殺すとなればちよいつと問題だな？ 全力がかかってきやがれええええええええええええええええ!!』

カイザーは咆哮をしてヴァネッサは両手の指からマシンガンのカイザーに放つが、彼の装甲には効かずにミラアルク、エルザの二人がカイザーに攻撃をしてきたが彼は交わすと構える。

『光子カビーム!!』

「!!」

三人は光子カビームを交わすが、チフォージュ・シャトーの壁を貫通をして爆発が起こつてしまう。

『やべ!?!』

『おい馬鹿!何をしているんだ!!』

中でキャロルが吠えており、カイザー自身も武装を考えないとエルザのコンテナから放たれた連続した拳を受け止めると投げ飛ばして腕をつきつける。

『ターボスマツシャーってなんだ!?!』

外で音が聞こえてきたのでいったい何かと思いついて見ると未来が浮いているのを見てカイザーは彼女達の相手をしないことになって向かう頃、シンフォギア装者達も到着してほかのロボットたちが支えて降りたつ。

カイザーは壁を壊してエルフラインと共に出ると未来が浮いているのを見て驚いている。

『未来?.....違うな.....カイザースクランダー!!』

カイザーはスクランダーを装着をして飛びあがると未来はシエンシヨウジンのファウストローブを纏い全員が驚いている。

「なんだあれは!?!」

「デデデデース!?!」

『てめえ……何者だ?』

「我はシエム・ハ……貴様は魔神皇帝だな?」

『そうといったらなんだ?』

全員が見ているとシエム・ハは彼に近づいていく。マジンカイザー自身もなぜか体を動かすことができない状態になっている。

(な、体が動かすことができない!?)

するとシエム・ハは未来の体に乗っ取っており、マジンカイザー自身は突然として解除されて甲児の姿に戻ってしまふ。

すると彼女は彼に近づいてキスをした。

「は?」

「あ?」

「何?」

「なん……だと……」

彼のが好きな人物達は目から光を消していき、クリスとアリスがギアを構えている。

「「コロス!!」」

「わーわー二人とも待って!!カイザーさんがやられちゃうよ!!」

響は止めるが、すると翼が突然として甲児、未来を抱えたのを見て全員が驚いている。

「おい翼!!」

「あなた何を!!」

「これが私の務めだ!!」

ボルテスの力を解放させて浮上をして二人を抱えながら、甲児はぽけーと連れ去られてしまう。

「あーーーーーたーーーーすーーーーけーーーーてーーーーー」

「カイザー!!」

「野郎!!」

「だから待ちなさい!!」

響はカイザーの体が見えないのでどこにいったんだろうと考えているとエンペラー達が駆けつける。

『悪い!カイザーは?』

「それが……」

マリア説明中

『何!?!未来がシエム・ハと名乗ったりキスをして、翼が連れ去っていっただど!?!』

『まじかよ……それでクリス達が切れているわけか……』

『だかなぜ翼か？』

「……まさかあの時かしら？」

　　マリアはミラアルクとの戦いで翼が何かをされたのを感じていた。いずれにしてもカイザー達がどこかへまた連れて行かれたのは間違いない。果たして彼らはどこに！

甲児再び目を覚ます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目を覚ましたか？ 魔神皇帝・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

甲児は目を覚まして驚いてしまっていることがあった。その理由はシエム・ハは未来の体に乗っ取っている。

だが彼は驚いているのは、未来が裸になっていることだ。それ以外に隣の方でも眠っている人物がいるので見ると青い髪をした人物がいた。

「・・・・・・・・ちよつと待て、おいシエム・ハ・・・・・・・・何をした？」

「何を？ わかっていることを聞くな。子作りをするのに服を着ては邪魔だろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はあああああああああああああああああ!!」

甲児はやってしまったことにもシヨックだが、まさかの気絶をしているのに二人相手をしたことにシヨックを受けてしまう。

「その・・・・・・・・気持ち・・・・・・・・良かったよ？」

「てか、お前の意識ってどこにいるんだよ？」

「この腕輪だ。貴様達が回収をしたミイラの私から回収をしたのだろう。それで……えっとなんだっけ？そうそうあいつらだ。」

「どいつだよ。」

「あの甲児？私が言うのもあれだけど……なんで普通に敵と話をしているの？」

「「なんでだ？」」

甲児とシエム・ハの二人は首をかしげており何かを話していると翼は突然として立ちあがりギアを纏いどこかへと出ていったので、甲児は気になりマジンカイザーの姿に変身をして向かうことにした。

一方で風鳴屋敷、突然としてアルカ・ノイズが出現をして襲い掛かろうとしてきたのでエンペラーとブラックゲッターが前に立ち黒服の人たちを守るため攻撃をして撃破した。

『なんでアルカ・ノイズが!?!』

『わからん! いずれにしてもここに奴が……ってあれは!』

全員が見ると翼が立っているのを見て、マリアが前に立つ。

「そうよね……あなたがいるなら当たり前ね? 会いたかったわ翼。」

翼はギアを纏い全員の前に立っており、エンペラー達もどうしたらいいのかと構えて

いる中カイザーは屋敷の中で迷子になっていた。

『あれ？ここどこだ？』

カイザーは仕方がなく、シエム・ハのところへと戻ると……丁度彼女が三人を殺していたのを見てしまう。

『お前……』

「カイザーか？何、我の力を使えば……ふん!!」

すると死体であつた彼女達は蘇つたが、何か違和感を感じてカイザーはまさかと人間ではなく化け物として復活をさせたのかとカイザーは思った。

だが突然としてカイザーは膝をついた。まるで力が抜けていくかのように……

『な、何をした……』

「悪いが、お前を利用してもらう。少しだけな？ふっふっふっふ」

『ぐうう……』

操られしカイザー。

風鳴屋敷、翼とマリアはそれぞれグレートマジンガー、ブレイドガンナーの力を解放させて激突をしていた。

ほかのメンバーは見ていた。苦無をマリアはグレートタイフーンで吹き飛ばした後、アトミックパンチを放つ。

「ぐー」

翼はバランスを崩して、マリアはチャンスを彼女に近づいて蹴りを入れて地面に叩きつけると近くに立ちビンタをして翼の自縛を解いた。

「………私は………」

「おのれええええええええ!!」

「!!」

銃を構えたのを見てブラックが前に立ち弾丸をはじかせて、訃堂に刀を構えた時………エンペラーが叫ぶ。

『全員よけろ!!』

全員が避けると何かの物体が地面などをえぐり戻っていく。全員が上の方を見て目

を見開いた。

「嘘……」

「あたしたちに攻撃をしたのが……」

「カイザーさん？」

『ぐううううああああああああああああああああああああ!!』

カイザーは咆哮をしながら突撃をしてエンペラーが前に立ちカイザーのパンチを受け止める。

『やめろカイザー！何をしている!!』

『ぐうううああああああああああああああああああああ!!』

エンペラーをそのまま投げ飛ばすとマリア達に向かって光子カビームを放とうとしているのを見てブラックゲッターがゲッタービームを放ちカイザーはブラックの方を向いて光子カビームを放った。

ブラックは交わすとブラックライガーに変身をして雷河―ミサイルを連続で発射させる。

『ぐううううううううう!!うああああああああああああああ!!』

胸部のエネルギーがたまっているのを見てエンペラーとブラックも相殺をするため放つ。

『グレートブラスタ―!!』

『ゲッターズパイナルビーム!!』

『ぐおおおおおおおおお!!』

ファイヤーブラスタ―とグレートブラスタ―、ゲッターズパイナルビームが激突をして全員が衝撃波に備える。

一方本部でもクリス達がカイザーがエンペラーとブラックゲッターと戦っているのを見てクリスが向かおうとしていた。

「待てクリス！」

「離してアリス！」

「駄目だ！今のあたしたちが言っても……邪魔になるだけだ!!」

「でも……!!」

『おりやああああああ!!』

『ぐおおおおおおお!!』

エンペラーとブラックのダブルキックが命中をしてカイザーは地面に激突をする。だがすぐに起き上がり攻撃をしようとしたが……突然として両目が消灯をして倒れたので、全員がカイザーに何かがあつたのと判断をする。

「とりあえずカイザーを運びましょう。」

『おう任せろ。』

エンペラー達に担がれてカイザーは基地の方へと帰還をした。

カイザー再起動

『………ここは？』

『目を覚ましたかカイザー？』

再起動をしたカイザーは辺りを見て確認をしているとマジンエンペラーが傍に立っており、彼は機能停止をする前のことを思い出した。

彼は何もかも思い出して、エンペラーの方を見た。

『思いだしたようだな？お前が機能停止をして2日は経っている。何かあった？』

カイザーはシエム・ハの強大な力に操られたことなどもすべて話をした。エンペラーの方も納得をして両手を組んだまま立っていた。

『なるほどな、シエム・ハの力は俺達が想像をしていた以上の力を持っていることになるな。お前が操られるとなるとほかの奴らも操られる可能性が高いな。』

『ああ、奴を正面からやるのは難しい、それに奴は未来ちゃんのを使っている。あの子を傷つけるわけにはいかない。』

『………まあ俺はいいとして、ほかの奴らはな。』

『ほかの奴ら？』

カイザーは扉の方を見るとクリス、アリス、マリアが立っていた。だが彼女達の目から光がないことに気づいた。

「カイザー………」

「目を覚ましたのだな？」

「ええ、ならいいじゃないかしら？」

「そうだね。」

三人はゆつくりとカイザーの方へと近づいてこようとしているので、彼は嫌な予感がしていた。

エンペラーはすでに退室をされており、彼は逃げたのか!!と叫ぼうとしたが、クリス達がじーっと見ている。

「カイザー。」

『な、なんででしょうか?』

「翼を抱いたのは本当かしら?」

『ぶふうううううううううう!!』

突然とした質問にカイザーは噴いてしまい、それを見た三人の目はさらに光りだした。

「やっぱりそうだったのか、先輩を脅して……じやなかった。聞いてみて正解だっ

たぜ。」

『さて、今脅した「言つてねえよ！」あ、はい。』

「ええあなたが捕まった時にまさか翼に先を越されるとは思わなかつたわ。」

『性格にはシエム・ハだな。未来の体だけど。』

「そう未来ちゃん……」

「ならもういいよな？なあ？なあ？」

彼女達の目はまるで獲物を狙おうとしている目をしているので、ちらつと扉の方はロックされており彼は観念をしたのか立ちあがると甲兎に戻り、クリス達はまるで獲物が現れたかのように襲い掛かるのであった。

『……』

『おうやつているのか？』

『ああ。』

エンペラーは扉の前におり、そこに真ゲッターがやつてきた。

『いやーあの時は恐ろしかったな。』

『ああ、翼がああ三人に光のない目で質問をされていたのを思いだしたな。』

回想

『ねえ先輩……』

『な、なんだ!?!』

『なんで先輩から、カイザーの匂いつてか、男の何かの匂いがするんだ?』

『ええ、まるで抱かれたかのような感じがするわね。』

『いや・・・あの・・・』

『『これは色々と聞きたいことができたみたいだね。』』

三人は翼に近づいていき、彼女は全てを白状をして彼女達はカイザーが眠っている部屋の方へと向かっていく。真ゲッター達は無言で見しており、調と切歌は抱きしめあい、響、奏の二人は苦笑いをしていた。

回想終わり

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・?!?!」

『おい、ここつてそんなに防音対策をしていないのか?』

『盛! たり前だろうが・・・・・・・・』

『!!!』

『!! っ! っ! っ! クリスだな?』

二人は今の声がクリスだと判断をしてため息をついて前で立ちながら、マリア、アリスの喘ぎ声を聴きながらとんだだけやっているのだらうと思いなながら前を向くのであつ

た。